平成 30 年度　博士論文

日本占領時期（1941-1945）上海における女性をめぐる言説

――『女聲』を中心に

（The Discourse of Women in Shanghai during Japanese Occupied Era（1941-1945）:The Analysis of the "Female Voice"　Magazine）

横浜国立大学都市イノベーション学府都市イノベーション専攻博士課程後期

学籍番号：14WA906

氏　　名：段毅琳

目　次

第一章　はじめに 1
1.1　問題意識..... 1
1.2　先行研究..... 1
第二章　『女聲』の創刊以前の佐藤俊子と関露 6
2.1　『女聲』創刊以前の佐藤俊子の動き――「支那趣味の魅力」から見る中国観..... 6
2.1.1　「支那趣味の魅力」の執筆背景..... 20
2.1.2　「距離感」から「情熱」へ..... 20
2.1.3　「卑俗」から「楽しみ」へ..... 22
2.1.4　「反省」と「慰め」..... 23
2.2　『女聲』創刊前後の関露..... 25
2.3　『女聲』について..... 28
2.4　劉王立明『女聲』の踏襲..... 31
2.5　雑誌名にこめられたメッセージ..... 32
2.6　小結..... 36
第三章『女聲』の体裁及びその中心思想について 38
3.1　『女聲』の出版背景..... 38
3.2『女聲』の内容..... 44
3.2.1　発刊主旨と執筆者..... 44
3.2.2　紙面構成――常設欄、各欄の変遷..... 46
3.2.3　『女聲』各欄の内容について..... 54
3.3 特集号 57
3.4 日本文学の翻訳 65
3.5 小結 70
第四章「女聲」雑誌にみる女性解放の主張 72
4.1 共産党地下工作員及び進歩青年の女性をめぐる言説..... 72
4.2　「読者の声」（信箱欄）から見る『女聲』の女性観..... 83
4.3　『女聲』の良妻賢母をめぐる言説..... 90
4.3.1　周作人の女性観と『女聲』..... 91
4.3.2　「女子与読書」に対する反響と関露の女性観..... 95
4.4　小結..... 100
第五章　日本占領時期（1941-1945）の上海における女性に関する多様な言説――関露と蘇青を中心に 102
5.1　蘇青と雑誌『天地』について..... 105
5.2　蘇青の関露、佐藤俊子に対する見解..... 106
5.3　上海在住作家の交流..... 108

5.4　女性作家座談会――作家・作品の評価をめぐって.....110
5.5　「女性、家庭、婚姻などの問題」をめぐって.....128
5.6　「詹周氏夫殺害事件」をめぐって.....139
5.7　小結.....150
第六章　結論 152
参考文献 155
附録　翻訳「蘇青、張愛玲対談記――女性、家庭、婚姻などの問題」 ...161
謝　　辞 172

第一章　はじめに

1.1　問題意識

本研究は、1942 年から 1945 年まで日本占領時期の上海で刊行された中国語雑誌『女聲』を中心に、当時の上海における女性をめぐる言説を多角的に考察していくものである。

1940年代の上海では、厳しい言論統制が行われており、これまでは当時の上海において女性解放運動や女性啓蒙活動はほとんど出現しなかったと考えられてきた。しかし、実際には当時の女性をめぐる言説を考察していく中で、日本占領下の上海では、張愛玲や蘇青など有名な女性作家が出現し、いくつかの雑誌にはしばしば女性に関する議論が掲載されていたことが分かってきた。一方、本研究の対象である『女聲』は、明治大正期に日本文壇で活躍し、後に女子労働問題に強い関心を示した女性作家の佐藤（田村）俊子を編集長とし、それを陰で支えた共産党地下党員で、女性解放運動に積極的に取り組んでいた関露によって終戦まで刊行された女性雑誌である。日本海軍報道部と日本大使館の出資による複雑な背景を持つ雑誌であり、そこには編集者たちと軍部との複雑なやり取りが存在しただろうことが想像されるが、雑誌の内容は意外にも日本を宣揚するものはほとんどない。むしろ女性に関する問題が中心に置かれ、他雑誌と女性問題に関する論争も繰り広げるなど、当時の上海における女性をめぐる言説をよく表していた雑誌であった。

よって本研究は、中国女性史研究の一環として、1942年から1945年まで刊行された雑誌『女聲』における女性に関する言説を整理・分析することを通して、『女聲』が発信した女性解放思想の時代的特色を明らかにすると同時に、周辺の雑誌や女性作家たちの動きも視野にいれて、日本占領下の上海で展開された女性をめぐる言説を多角的にとらえようとするものである。

1.2　先行研究

本研究が対象とする日本占領時期（1942～45）の上海における雑誌研究についての先行研究は、文学、文化関連の雑誌を対象とする出版研究がほとんどであり、近年では例えば木田隆文は、武田泰淳を中心に当時の上海で対中政策としてどのような日本の文学作品が中国で翻訳出版されてきたかを明らかにし[1]、また李相銀は『古

[1]堀井弘一郎、木田隆文（2017）『戦時上海グレーゾーン』、勉誠出版、152-166 頁

今』、『雑誌』、『万象』を中心に論じ、掲載論文およびそれらの作者を通して、それぞれの雑誌の論調をまとめている[2]。徐静波（2013）は1920年代から1945年まで上海で活動していた日本人を取り上げ、個々の動きや関連する出版状況等について詳細に追っている[3]。一方、女性雑誌の研究は90年代以降、徐々にみられるようになり、例えば『婦女雑誌』（月刊誌、1915～1931、上海商務印書館発行）[4]、『婦女評論』（週刊、1921-23年、上海、民国日報副刊）[5]、『中国婦女』（39～41年、延安中国婦女社編）[6]など、20年代から30年代にかけて上海や延安地区で発行された雑誌の研究が始まったが、太平洋戦争時期（42～45年）の女性雑誌に関してはほとんど触れられることはなかった。このような流れの中で、『女聲』に関する研究は、特に近年日本と中国で増加しており、田村俊子研究[7]の先駆者である吉屋信子（1962）「上海から帰らぬ人　田村俊子と私　『自伝的女流文壇史』」は最も早く『女聲』に触れたものである。また当時『女聲』に多数の文章を発表した丁景唐（1989）は、関露についての伝記を娘の丁言昭とともに著し[8]、その中で関露と『女聲』との関わりを明らかにした。そして同年に渡辺澄子（1989）は佐藤俊子と『女聲』の紹介を行っており、これは日本において『女聲』研究の嚆矢となる論文であった。[9]その後、関露と佐藤俊子との関係が注目を浴び始め、呉佩珍（2003）は『女聲』評論欄における佐藤俊子、関露の女性解放論について記し[10]、渡辺澄子[11]、岸陽子、王紅（2005）等が佐藤俊子の上海時代について論じている。なかでも岸陽子（2001）[12]は1930年発行の『女聲』と1942年発行の『女聲』との関連について論じ、近年では、

---

[2]李相銀（2009）『上海淪陥時期文学期刊研究』、上海三聯書店

[3]徐静波（2013）『近代日本文学人与上海（1923-1946）』、上海人民出版社

[4]『婦女雑誌』の研究論文には西槇偉「一九二〇年代中国における新性道徳論――『婦女雑誌』を中心に」（『比較文学研究』第 64 号、1993 年）、白水紀子（1995）「『婦女雑誌』における新性道徳論――エレン・ケイを中心に」（『横浜国立大学人文紀要第二類』第 42 号）、村田雄二郎編（2005）「『婦女雑誌』からみる近代中国女性」（研文出版社）、羽田朝子（2006）「『婦女雑誌』の研究史をふりかえって-「『婦女雑誌』にみる近代中国女性」の意義-」（『人間文化研究科年報』21）等がある。

[5]『婦女評論』の研究論文には、桑島由美子「『婦女雑誌』『民国日報・婦女評論』における沈雁冰(茅盾)の女性主義観(フェミニズム)」（『言語文化論集』38、1994 年）、前山加奈子、Wang Mi「日中両国間の女性論の伝播と受容--『婦女評論』における堺利彦〔付　『婦女評論』目録-期号順・欄名順・著者順〕」（中国女性史研究（9）、1999 年）がある。

[6]『中国婦女』の研究論文には、藤井敦子の「日中戦争期延安における「婦女問題」：雑誌『中国婦女』を中心として」（『史学』73(1)、2004 年）、「日中戦争期延安における女性言説――雑誌『中国婦女』を中心に」（『芸文研究』（90）、2006 年）などがある。

[7]吉屋信子（1962）「上海から帰らぬ人　田村俊子と私」、『自伝的女流文壇史』、中央公論社

[8]丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社

[9]渡辺澄子（1989）「資料紹介　続佐藤（田村）俊子と『女声』（「昭和文学研究」第 18 集）

[10]「上海時代（1942-45）佐藤（田村）俊子と中国女性作家関露――中国語女性雑誌『女聲』をめぐって――」（呉佩珍　筑波大学博士論文　第 7 章 125-137）

[11]渡辺澄子（2005）『俊子新論：今という時代の田村俊子』、至文堂

[12]岸陽子（2001）「日本占領下の上海文学――華文女性月刊誌『女声』をめぐって――」『深まる侵略　屈折する抵抗　一九三〇年―四〇年代の日・中のはざま』研文出版

王紅（2013）[13]、劉建輝（2013）[14]、徐静波（2015）[15]等が佐藤俊子が『女聲』にかかわるようになった背景などを論じている。

また、塗暁華は単著『上海淪陥時期「女聲」雑誌研究』（2014）において、丁景唐の著作を底本にしながら[16]『女聲』に関係した人々にインタビューを行って当時の実態に迫っている[17]。山崎眞紀子（2016）は『女聲』の人気欄であった「信箱」（読者の声）欄に注目し、当時の読者からの質問とその回答から、『女聲』の思想方向を論じている[18]。

資料としては、小平麻衣子（2014）が佐藤俊子の北京時代の未発表作品の存在を明らかにし[19]、黒澤亜里子等（2017）は田村俊子が北京時代に発表した作品を印影出版し[20]、これまでほとんど知られていなかった作品を公にした。

このようにこれまでに『女聲』については多くの研究が行われ、ほぼその全体像が見えてきたと言える。しかしながらこれらの先行研究は、当然のこととはいえ『女聲』だけに内容を絞ったものであるため、これらの内容と当時の上海で展開されていたほかの女性をめぐる言説との関連を論じたものは皆無に等しい。つまり、『女聲』に関する出版研究としてはかなりの蓄積がなされてきたものの、肝心の『女聲』の記事内容に関してはまだ整理の段階にあると言える。当時の女性をめぐる言説の中でそれらの記事がどのような意味をもったのか、またその位置づけを明らかにしなければ、『女聲』の女性解放論の特色を論じることはできないだろう。たとえば、『女聲』は女性の社会参加・就労を奨励する記事を多数掲載しているが、単にその事実を指摘するだけでは、『女聲』の女性解放の言説の特色を説明したことにはならない。なぜなら、女性の仕事と家庭の問題は、当時だけでなく、また中国だけでなく、時代と空間を越えた普遍的なテーマであり、女性の社会参加の奨励は常に一つの流れとして存在してきたものである。よって女性解放に関わる

---

[13]王紅（2013）「佐藤俊子の一九三九――日本から中国へ」『上海一〇〇年』勉誠出版
[14]劉建輝（2013）「日本占領下の上海文壇――田村俊子の足跡を中心に」、『上海一〇〇年』勉誠出版
[15]徐静波（2015）「作家佐藤俊子的上海歳月」（復旦大学日本研究中心「日語学習與研究」第五期総 180 号）
[16]丁景唐の著作には娘の丁言昭と共同執筆した『諜海才女』（北方婦女児童出版社、1989 年）があり、その中で当時『女聲』雑誌をめぐる人々の状況について明らかにしている。
[17]塗暁華（2013）『上海淪陥時期「女聲」雑誌研究』、中国傳媒大学出版社
[18]山崎眞紀子（2016）「田村俊子から左俊芝へ――『女声』における信箱から見えてくるもの」（日本上海史研究会（ワークショップ『戦時・上海・グレーゾーン―抵抗と協力のはざまで――』）、中日文化協会研究会主催、2016 年 5 月 7 日発表）
[19]小平麻衣子（2014）「佐藤（田村）俊子「中支で私の観た部分（警備、治安、文化）」について」（『研究紀要』第八十七号、日本大学文理学部人文科学研究所）
[20]黒澤亜里子、長谷川啓（2017）、『田村俊子全集』第九巻、ゆまに書房

様々なテーマについて、当時どのような言説空間の中で、どのような意味をもって論じられたのかをおさえて初めて、それらの主張の意味や特色が明らかになると考える。

また、中国女性史関連の著作の中で、1940年代の上海における女性をめぐる言説についての記述は皆無であり、これらについては現在までほとんど注目されてこなかった。

よって、本研究では『女聲』研究を軸に据えながら、当時上海で話題となったいくつかの議論をとりあげることで、より多角的に当時の女性をめぐる言説を考察し、日本占領時期の上海の女性史研究の空白を埋めていきたいと思う。

本論の第二章「『女聲』創刊以前の佐藤俊子、関露の動き」では、佐藤俊子が1938年に渡中してから1942年に『女聲』が創刊されるまでの中国観を満州日日新聞に掲載された『支那趣味の魅力』から読み取り、その変遷を辿る。また関露については1930年代に共産党入党後、1942年、共産党の任務として女聲社に入社し『女聲』の編集者となるまでの動きを整理し、佐藤俊子と関露の二人が『女聲』創刊以前にどのような立場、どのような女性観を持っていたかを考察し、それがどのように『女聲』に反映されたのかを論じる。

第三章「『女聲』の体裁及びその中心思想について」では、誌面構成について、その特色を論じる。また具体的に日本文学の翻訳作品、特集号を取り上げて、日本軍の出資でありながらも、その内容は日本の宣伝をほとんどせず、逆に大胆に帝国主義を風刺するような文章や中国共産党と通じる記事を掲載していた理由や、雑誌の体裁におけるカモフラージュの方法等について考察を加えていく。

第四章「『女聲』にみる女性解放の主張」では、『女聲』に掲載された記事の内容を分析する。『女聲』上で展開された論争、交流等に分け『女聲』に投稿された共産党地下工作員及び進歩青年の女性をめぐる言説を中心に、『女聲』が女性に関する問題についてどのような主張を発信していたのか、その背景を補足しながら『女聲』の女性解放思想の特徴を明らかにしていく。

第五章「日本占領時期（1941-1945）の上海における女性に関する多様な言説——関露と蘇青を中心に」では、当時の上海で著名な作家が参加して話題となった二度の座談会と一度の書面インタビューを取り上げる。特にその中で話題となった「夫殺しについての書面インタビュー」、「女性作家の語らい」、「女性、家

庭、婚姻などの問題」、パール・バック「大地」をめぐる議論などの検討を通して、『女聲』の「横のつながり」を明らかにする。

第六章は結論として、日本占領時期の上海における女性に関する言説が、同時期の他の地域とどのような点が異なっており、またどのような点が共通していたのかをおさえ、中国における女性解放の流れを総括する。

第二章　『女聲』の創刊以前の佐藤俊子と関露

2.1　『女聲』創刊以前の佐藤俊子の動き――「支那趣味の魅力」から見る中国観
2.1.1　「支那趣味の魅力」の執筆背景
2.1.2　「距離感」から「情熱」へ
2.1.3　「卑俗」から「楽しみ」へ
2.1.4　「反省」と「慰め」
2.2　『女聲』創刊前後の関露
2.3　『女聲』について
2.4　劉王立明『女聲』の踏襲
2.5　雑誌名にこめられたメッセージ
2.6　小結

本章では本研究の中心となる『女聲』創刊以前における、『女聲』編集長であった佐藤俊子、そして主要編集者（後に編集長）となる関露の動きを考察し、『女聲』創刊以前の彼女たちの女性観について検討を加えていく。

2.1　『女聲』創刊以前の佐藤俊子の動き[21]――「支那趣味の魅力」から見る中国観

佐藤（田村）俊子は明治末から大正初期にかけて日本の文壇で活躍した新女性作家を代表する一人である。佐藤俊子は1901年、日本女子大学国文学部に入学したが、病気で中退したのち小説家を目指して、1902年幸田露伴に師事する。1909年、同門の田村松魚と結婚（事実婚）し、1911年、婦人解放運動に積極的であった平塚らいてうの青鞜社に入社。1911年1月から3月まで『大阪朝日新聞』に連載した『あきらめ』が朝日新聞の懸賞小説に当選し、田村俊子の名は日本文壇で注目を浴びたが、[22]1918年に愛人の鈴木悦を追ってカナダへ行き、帰国後は名前を佐藤俊子に戻した。

[21]段毅琳論文「佐藤俊子的中国観（1938-1941）研究――来華早期的「距離」和「反思」」（佐藤俊子の中国観（1938-1941）研究――訪中早期の「距離」と「反省」）（『名作欣賞』、2019 年 1 月号に掲載予定）、本論 2.1 はこれに一部修正加筆したものである。

[22]渡辺澄子はあきらめの執筆について田村松魚の言葉を引用して、「貧の打開策として俊子に賞金稼ぎをさせたのだ。自発の創作ではなく暴力による強制によって泣きながらいやいや書いた『あきらめ』が当選し、多額の多額の賞金を得ることになった」と指摘している。（渡辺澄子（2005）『俊子新論：今という時代の田村俊子』、至文堂、14 頁）

1、カナダ時代（1918年10月～1936年2月）

カナダ時代の佐藤俊子の動きは、次の四つの時期に分けることができる（表１）

表１　カナダ時代の佐藤俊子の動き

時期	場所	期間	佐藤俊子の動き
カナダ時代初期	バンクーバー	1918.10.～1924.3	①「鳥の子」のペンネームで、『大陸新報』にいくつかのエッセイや詩歌を発表。渡米後発表した文章はエッセイや感想が多い。移民地の劣悪な生活環境に対する不平不満を表した。 ②同地の日本人女性たちに呼び掛ける一連の文章を書き、日本の婦人問題を歴史的に振り返る。 ③鈴木悦は日系移民の地位向上のための社会運動の指導者であった。 しかし、佐藤俊子はこの時期、移民地の人々の交渉や組合運動とは一定の距離を置いていた。 ④英国やカナダの婦人参政運動や女性の労働問題への関心を深めた。
『新世界』時代	サンフランシスコ	1924.3～1924.6	①俊子は単身『新世界新聞』に入社。1923年3月9日、悦と俊子は正式に結婚。 ②「私一個の上に芽を出した問題は全婦人への参考として解決しなくちやならない責任を感じています」（湯浅芳子宛書簡、1922年10月31日） ③夫婦間の「女性の自立」問題：単身赴任、「一個の独立した人間として見ず、男子の奴隷物としてみる旧慣」（「婦人部設立について」）への抵抗。
『民衆』社時代	バンクーバー	1924.6～1933.11	①『民衆社』はキャンプ・ミル労働組合設立の新聞社である。 ②組合運動との関わり：労働組合における「婦人会」の設立の提起、後の組合婦人部の初代部長に就任し、婦人問題の解決を実現するための一歩を踏み出した。 ③実際の運動に参加した。「移民・女性・労働者」という新しい主体が選び取られた。
『羅府新報』時代	ロサンゼルス	1934.11～1936.12	鈴木悦急死。傷心のあまり、バンクーバーを引き払い、ロサンゼルスへ。羅府新報紙上で「ある友人」「人に逢う」などを連載。米国再入国のビザが下りないまま、バンクーバーを発ち日本に帰国。

『田村俊子全集　第八巻』（2015年、ゆまに書房）「解題」に基づき筆者作成

カナダ時代の佐藤について、「かつて『青鞜』の「新しい女」の一人と言われた俊子だが、それはあくまで夫と妻という私的な関係の中での抵抗だった。しかし、俊子は「移民・人種・労働・ジェンダー」といった多くの問題が交錯する新しい環境の中で、自己の生活と思考を鍛え直すことになった」[23]。その思想は「悦はいわゆるマルキストや社会主義者というより一種の理想主義者であって、カナダ移民の窮状を見逃せず、また助けを求められれば義をもって報いる気質から、社会主義をベースにした独立の理念と見通しにもとづいて行動した」（田村俊子「一つの夢」『文藝春秋』1936年6月）とされる鈴木悦に強い影響を受けた。

佐藤は社会主義者の「求められれば義をもって報いる」という考え方に同感し、自らもこの理念をベースとして行動していたと考えられる。呂元明はのちの中国時代の佐藤についての研究の中で、佐藤を「人道的社会主義者」[24]と記しているが、佐藤のこのような思想的ベースはカナダ時代に形成されたと考えられる。

当時の佐藤の動きを見ていくと、カナダ時代の初期、愛人の鈴木悦は大陸日報社の記者として働くかたわら、地元の若い労働者たちと出会い、1920年7月、青年たちの力によって、最初の日本人労働組合（通称キャンプ・ミル労組）が誕生した[25]。佐藤は鈴木悦と異なり、移民たちとの交渉や労働組合運動とは距離をとっていたが、同時期の女性参政運動や女性の労働問題の宣伝の影響で、女性問題に関心を持ち学んでいた。『新世界』に単身赴任していた時も、依然として女性問題に対する関心は強く、特に夫婦間の「女性の自立」問題について注目している。20年代の半ばの『民衆』社時代から、組合運動に関わり始め、労働組合の労働婦人部の初代部長にも就任し、このころから労働、職業婦人、「移民・女性・労働者」という新しい主体が選び取られた[26]。

『民衆』社時代の佐藤の経験について述べると、1927年、日本人労働組合（キャンプ・ミル労組）はカナダ労働会議に加入し、「ローカル31」と改称した[27]。その機関紙が『日刊民衆』であり、佐藤の「日常の仕事は、編集や翻訳だったとされるが、具体的にはこうした各種のニュース・ソースを駆使し、その中から優先度を確定、紙面を構成する。単に語学力だけではなく、そうした選別の眼が必要で、紙媒

[23]黒澤亜里子、長谷川啓「解題」(2017)『田村俊子全集』第九巻、ゆまに書房、934 頁
[24]呂元明（著)、西田勝（訳）(2001)「田村俊子の中国での足跡――人道的社会主義者の悲愴な歩み」、『中国語で残された日本文学――日中戦争のなかで』、法政大学出版局
[25]黒澤亜里子、長谷川啓「解題」(2017)『田村俊子全集』第九巻、ゆまに書房、926 頁
[26]同上 934 頁
[27]同上 934 頁

体だけでなく外務省や領事館からの情報なども含め、内外の様々な情勢に通じていなくてはならない。また、紙面のグレードを追及するプロ意識の高い悦は、印刷機、紙の質から活字、段組み、見出しの立て方等々、細かく俊子にアドバイスしている。悦も俊子の見識を尊重し、信頼して紙面批評を求めた」[28]とあり、佐藤は『日刊民衆』を一人で切り盛りした。この民衆社の編集者として、紙面編集、外部とのやりとりまで、これらの経験は「俊子を鍛え、後に中国で女声社を主宰するトレーニングの役割をもっていた」[29]のであり、編集者としての能力、そして情報選別や紙面における表現方法もこの時期に鍛えられたと考えられる。

２、帰国後（1936年3月28日～1939年12月）

1932年に佐藤より先に一時帰国した鈴木悦は、翌年の9月11日、盲腸炎のため急死した。佐藤俊子も1936年にカナダより帰国し、「帰国当日は、俊子を乗せた郵船日枝丸は横浜に入港し、記者や長谷川時雨らの友人、知人らの賑やかな出迎えを受けた」[30]。

佐藤が1936年3月28日に帰国すると、3月29日の『読売新聞』では「若い“女浦島” 田村俊子さん帰る　廿年ぶり“故国を見に”」の見出しで報道し、「女史は廿年前当時カナダバンクーバー在留邦人の労働組合機関紙カナダ民衆新聞を発行して無産運動に携わつていた愛人鈴木悦を訪ねて渡米し鈴木氏のよきヘルパー（編輯助手）として働いていたが四年前鈴木悦氏が亡く」なったので帰国した。佐藤は日本の「女流作家は却々進んでいますね、今後の方針といつても今の所何も定つていません、いまさら文壇に返り咲きする気にもなれません。まあ最近の日本の姿を覗きに来た譯です」[31]と語った。また同日の他紙の報道もほぼ同内容で「田村俊子さん十七年ぶり歸る　創作慾はないと語る」の一文が掲載され、カナダでの仕事は「鈴木を助けて邦字新聞『民衆』の編輯をして」[32]いたことしか語らなかった。ここからも佐藤が雑誌編集者の仕事に多く関心を寄せていたことがわかる。また創作活動に関しては、「植民地（筆者注：カナダ）などは文化的に貧窮地帯で今は創作慾などは全然ありません、然し食べる為めには何か仕事をしなければなりません」 と述

[28]同上 935-936 頁
[29]同上 936 頁
[30]黒澤亜里子、長谷川啓「解題」（2017）『田村俊子全集』第九巻、ゆまに書房、938 頁
[31]「若い“女浦島”田村俊子さん帰る　廿年ぶり“故国を見に”」『読売新聞』1936 年 3 月 29 日夕刊 3 頁
[32]「田村俊子さん　十七年ぶり歸る　創作慾はないと語る」『東京朝日新聞』、1936 年夕刊 2 頁

べ、カナダでは文化的に貧しい環境にあったこと、帰国後の「今」も創作意欲はないこと、しかし食べるためには働かねばならないことを語った。

続いて3月20日の『読売新聞』の「文壇“女浦島” 流離廿年の哀傷　帰る田村俊子さん 閨秀作家に　母国の温かい手」では、「彼女と文学的時代を同じくした徳田秋声、上司小剣、長谷川時雨の諸氏は田村俊子女史の文壇復活に（徳田たちも）努力するといつているさうだが彼女は文学的にももはや今様浦島の憂鬱をもつているのではなかろうか？」[33]と日本文壇の佐藤に対する支持と期待、そして長期間日本を離れていたブランクについて報じている。

『田村俊子全集』第九巻の「解題」で指摘されているように、従来、佐藤帰国時期のテキストは、文壇の「今浦島」として「遅れて来た社会主義者」、或いは窪川鶴次郎とのゴシップなどの私生活を中心に語られてきた[34]。また、この時期について、先行研究の佐藤に対する評価としては、塗暁華は「すでに日本の社会現実に適応することが難しくなっていた、そして創作の上でも知音はおらず、かつての風采を回復することは難しかった」と、日本の生活には一種の「閉塞感」があったとしている[35]。また、呂元明は「期待されたほどの力をもった作品」がなく、国内の「社会的な現実に適応できず、また昔日の風采を恢復することもできなかったようだ」[36]との見解を記している。

しかし、帰国してから佐藤の言説や動きを詳しく見ていくと、日本の社会や政治、女性問題について積極的に意見を述べていたことがわかる。佐藤は帰国後に文壇の友人たちから盛大な歓迎を受け、『中央公論』、『改造』等の雑誌から相次いで原稿依頼を受けた。このような文壇との接触の中で、佐藤は再び創作を開始し、エッセイ、短編小説を少なくとも18篇以上発表し、座談会にも参加している。

佐藤が帰国したのは日中全面戦争の前夜であった。1931年の九一八事変から、1932年の満州国建国宣言と上海事変は日本が侵略戦争を開始するきっかけとなった。佐藤が帰国した翌年の1937年に日中全面戦争が始まり、1938年4月には国家総動

---

[33]「流離廿年の哀傷　帰る田村俊子さん　うらぶれの閨秀作家に　母国の温かい手」（『読売新聞』、1936年3月20日）
[34]黒澤亜里子、長谷川啓「解題」（2017）『田村俊子全集』第八巻、ゆまに書房、938頁
[35]塗暁華（2014）上海淪陥時期『女聲』雑誌研究、中国伝媒大学出版社、82頁
[36]呂元明（著）、西田勝（訳）（2001）「田村俊子の中国での足跡――人道的社会主義者の悲愴な歩み」、『中国語で残された日本文学――日中戦争のなかで』、法政大学出版局、234頁

員法[37]が公布され、国民精神の総動員の気運をもたらした。日本婦人団体連盟[38]も知識女性たちに戦時体制に参与することを呼びかけた。

佐藤俊子は帰国後、名前を田村から旧姓の佐藤に戻して作品を発表した。帰国当初のエッセイで「積極的に日本の政治、社会、文化の状況」に対し、「言論統治制下の日本に対する辛口の社会批評」[39]を行ない、また座談会や講演会にも積極的に出席している。特に、当時産業組合中央調査部に勤務していた丸岡秀子は佐藤の励ましで『日本農村婦人問題』（高揚書院、1937年3月）を刊行することになる[40]。これはカナダ時期の労働者とくに女性労働者への関心と関連し、カナダ時期の経験と政治立場を日本で実践していたことを証明している。

また「同性を保護」[41]の中で、第一次世界大戦後に、世界の職業女性は夥しく増加し、日本でも同様に夥しい職業女性が進出してきたと記し、しかし「日本婦人は欧米婦人のやうに同性を保護する武器としての政治的権利を持つていない。男子對の隷属的な低い地位にあることは、勤労婦人であつても有閑婦人であつても一般的である」と日本でも欧米のように職業女性が進出してきたが、どの階級の女性であっても普遍的に男性に隷属する低い地位におかれていると指摘している。また職業女性については「家庭と職場として二重或は三重の奴隷的圧迫を受ける」と日本の女性は政治権力を持っておらず、特に職業女性がさらに多くの奴隷的な圧迫を受けている現状を訴え、「日本に於て最も劣悪な労働条件のもとに労役する婦人たちの状態を救ふために、又、彼女たちに希望と明るさと慰めとを齎らすところの義務、愛、協同の観念を基礎として、健全なる活動」である女性解放運動を呼びかけている。この時期の佐藤俊子の労働女性に対する訴えや要求は、後の上海時代の『女聲』創刊へとつながっていくのである。

カナダ時代に鈴木悦の社会主義労働者運動の影響を受け、佐藤は帰国後に宮本百合子、窪川鶴次郎等の左翼文学者と近い関係にあった。しかし、当時の日本ではメーデー禁止法等各種の法律が続々と公布され「言論、出版、思想及び社会運動に対

---

[37]国家総動員法は 1938 年、第 1 次近衛内閣によって制定された法律。総力戦遂行のため国家のすべての人的・物的資源を政府が統制運用できる（総動員）旨を規定した。
[38]日本婦人団体連盟とは 1937 年 9 月 28 日、東京に本拠を置く 8 団体（日本キリスト教婦人矯風会・日本女医会・キリスト教女子青年会日本同盟・婦人平和協会・婦選獲得同盟・婦人同志会・『婦人之友』友の会・日本消費組合婦人協会）によって設立された。会長はガントレット恒子。市川房枝・金子しげりなどが中心メンバーであった。
[39]黒澤亜里子、長谷川啓「解題」（2017）『田村俊子全集』第八巻、ゆまに書房、938 頁
[40]丸岡秀子（1973）『田村俊子とわたし』中央公論社
[41]佐藤俊子、「同性を護る」、『婦人公論』、1937 年 1 月、92-93 頁

する抑圧が一層強化」[42]された時期であり、このような厳しい言論と思想の統治のもとでプロレタリア文学運動は重い打撃を受け、社会主義思想を放棄した左翼作家たちは次々と転向を余儀なくされた。

佐藤は社会に対する批判を行いながら、自身の政治的立場を保っていた。1938年には「婦人の能力　文壇部隊中の紅二点」（署名　佐藤俊子）[43]の中で、従軍した女性作家の林芙美子と吉屋信子に対して、「最初の婦人作家として、嘗て南北戦争の戦場に活躍した愛の権化のクララのやうな愛の眼と愛の精神で、戦場を縦横に観察して頂きたい」と、南北戦争時期の女性人道主義者クララ・バートンに言及し、従軍した女性作家に対して、人道的な「愛の眼と愛の精神」を持つべきであると提言した。

「婦人の能力　貧弱な廃物利用の智慧」[44]では国家精神総動員の中で戦時経済への婦人参加が頻繁に呼びかけられ、政府との協力の下に、「頭脳の良い賢明な婦人リーダーが活動しているはずであるのに、せいぜいこれだけの智慧しか出ないといふのは不思議だと思ふ」と述べている。女性はなぜより多くの力を発揮することができないのだろうか。それは、「社会的事業的な経験があつても政治的な訓練を持たず、政治的な行動に全く無経験な日本婦人が俄仕立ての政府委員になつても、知識は唯頭の中で空廻りしてゐるだけで」あるからと、女性は知識があっても政治的な訓練をしていないためにその能力を発揮できていないとし、国民精神総動員についても、それは男子だけのものではなく、「婦人も必ずその一端を擔ふべきもので」あると、女性の社会的責任について指摘している。またその一方で、「戦時下にある婦人たちは家庭と社会の両面を担なつて活動しなければならないし、非常時局のあらゆる社会政策は婦人だからといつて、これ（筆者注：家庭と社会）を一つでも等閑にしていたら、国民精神総動員の一端を担ふことは出来ない」と婦人たちの家庭と社会という二重負担の問題にも目配せをしながらも、その上で両方を疎かにすることはできないと指摘している。また、佐藤は「国民再組織と婦人の問題」[45]で、日本の女性が置かれた現状を、「その社会的地位としては、あらゆる生活機構に従属する微弱な寄生虫的分子でありながら、人の妻であり、母である婦人は国家の為に愛する夫、愛する子息を誠心にもつて戦場に捧げ、労働するものは出征男子の労

[42]王紅（2005）「渡中前の田村俊子」、渡辺澄子『俊子新論：今という時代の田村俊子』、至文堂、237 頁
[43]佐藤俊子「婦人の能力　文壇部隊中の紅二点」、『東京日日新聞』、1938 年 9 月 15 日
[44]佐藤俊子「婦人の能力　貧弱な廃物利用の智慧」『東京日日新聞』、1938 年 9 月 16 日
[45]佐藤俊子「国民再組織と婦人の問題」、『婦人公論』、1939 年 4 頁

働者に代わつて奔命する」と記し、寄生虫的な低下な身分でありながら、更に戦時には愛する夫や子供を戦場へと送り、男性がするべき仕事まで負担しなければならなくなっていると述べている。佐藤は戦時下の主流言説に同調した文章の中でも、戦争が女性にもたらした精神的、肉体的負担に深く同情を表しており、女性の身分の低さや戦時の負担等に対して、暗に国家の政策批判ともとれる見解を滑り込ませていた。

このような日本社会に対する批評や労働女性の問題に注目していた俊子であったが、友人の窪川稲子の夫窪川鶴次郎との不倫に加え、生活の逼迫により佐藤は現実社会と自身の生活、創作と思想の変革について考えざるを得なくなっていた。「盧溝橋事件後、日本のマスメディアは競って「事変特集」を組んだり、戦地ルポルタージュを出したりした。そのため、各社は次々に中国戦地へ特派員を派遣し現地報告等を寄せさせた」[46]。このような背景の下で、1938年12月に佐藤俊子は『中央公論』の特派員として林芙美子や吉屋信子達の後を追うように中国へ渡った。

３、中国滞在時期（1938年12月～1945年4月）

中央公論社の特派員として二か月間の滞在予定で訪中した佐藤は、中国を広く遊歴し、1938年12月18日に上海から列車で南京に入り、領事館にある官邸に住んだ。1939年1月には蕪湖、揚州、鎮江、蘇州、杭州に遊び、同月20日に南京から上海へ戻った。そして同月末には北京へ出発し、その途中で、青島、天津に立ち寄っている。もともとは同年２月末に任務を終えて帰国する予定であったが、佐藤は特派員任期終了後も中国に残り、1945年4月16日に上海で脳溢血で逝去するまで帰国することはなく、中国で最後の六年余りを過ごした。

佐藤俊子の中国滞在時期に関する研究は佐藤が編集長を務めた『女聲』（1942-1945）雑誌の時期に集中しており、佐藤の訪中初期の思想については未だあまり研究が進んでいない。しかし、『田村俊子全集』第九巻（2017年5月、ゆまに書房）の出版にともない、訪中初期の文献資料が発見、整理され、この時期の佐藤の動きや思想意識を窺えるようになってきた。

佐藤俊子が中国時代に発表した文章は、王紅（2013）の分類に従うと三期に分けることができ、以下の表２のようになる[47]。なお、この表には『田村俊子全集』九巻

[46]王紅（2013）「渡中前の田村俊子」、『上海一〇〇年』、勉誠出版、192 頁
[47]佐藤俊子の中国時代については、王紅の分類を参照にした。しかし王紅が論文を執筆した時にはまだ『田村俊子全集』９巻は出版されておらず、これには佐藤俊子の訪中から『女聲』創刊までに発表され

収録の文章及び未出版の別巻に収録予定のものの他に、さらに筆者が発見した文章（アンダーラインを付した）も加えた。

表２　佐藤俊子が中国時代に発表した文章一覧

期間・場所	発表日時	文章名	掲載雑誌名
一期 1938.12～1939秋 ・北京	1938.12	愛憐と躾への反省	『愛育』
		侮蔑	『文芸春秋』
	1939.1	未亡人と銃後婦人の協同	『婦人公論』
		お雪さん	『週刊朝日』
	1939.2.1	上海に於ける支那の働く婦人	『婦人公論』
	1939.2.2	婦人時局研究会	『東京日日新聞』
	1939.3.4 ～3.6	支那の子供（一）～（三）	『東京日日新聞』
	1939.3.20	寸感	『塔影』
	1939.3.1	知識層の婦人に望む　日支婦人の真の親和	『婦人公論』
	1939.4.1	国民再組織と婦人の問題	『婦人公論』
	1939.4.8～ 4.9、4.13～ 4.15	北京通信　俳優学校と程硯秋（1―５）	『東京日日新聞』
	1939.5.1	婦人の大陸進出とその進歩性	『婦人公論』
	1939.6.1	婦人の歩む　民族協和の道	『婦人公論』
	1939.6.1	雪の京包線	『改造』
	1939.8.1	新しき母性教育とは？	『婦人公論』
	1939.8.10	座談会：北京と北京人を語る座談会	『文芸春秋』
	1939.9.1	日本の婦人を嗤ふ支那の婦人　（本誌特派　在北京）	『婦人公論』
二期 1939秋～1942春 ・北京	1940.1.1	茉莉花	『北支那』
	1940.2.1	汪精衛氏と洪秀全を語る	『改造』
		以心伝心	『新命（南京）』
	1940.4	陳璧君女士印象記	『華文大阪毎日』

た文章 38 篇のうち、12 篇を確認しただけである。（王紅（2013）「田村俊子の一九三九年――日本から中国へ」『上海一〇〇年』、勉誠出版社、187-194 頁）

	1940.5.1	南京の感情	『改造』
	1940.5.28、5.29、5.31	「汪精衛氏への贈り物　押花をおくる日本の女性」 「汪精衛氏への贈り物（中）　心なき若い女性の行為」 「汪精衛氏への贈り物（下）心なき若い女性の行為」	『読売新聞』
	1940.9.1	大陸通信一束	『女性展望』
	1940.10	日本婦女的職業[48]	『婦女雑誌』
	1941.8.1	変つた北京	『現地報告』
	1941.9.26～28、9.30	「座談会」：北京の秋を語る座談会： ①　「立秋すぎて十日前後」 ②　「風で判る北京の秋　もう一つ物賣りの聲」 ③　「中秋節と梅蘭芳　恐ろしい月餅の謂れ」 ④　「流行は春秋何れが先」	『満州日日新聞』
	1941.9.30～10.5	支那趣味の魅力（一）－（六）	『満州日日新聞』
	1942.1.30 1942.2.1 1942.2.3	北京から南京まで　微笑ましい日華提携 北京から南京まで　中北支文化交流を冀求 北京から南京まで　宗教的社会政策の浸潤	『満州日日新聞』
三期 1942春～1945年4月6日・上海	1944.2.1～2.4	「対談」：日華の演劇に就て　久保田万太郎　佐藤俊子 対談（上）、（二）、（三）、（完）	『大陸新報』
	1944.2.	中支で私の観た部分（警備、治安、文化）	（未発表原稿）
	1942～1945	雑誌『女聲』の編集長として各欄に文章を発表（無署名が多い）	『女聲』

『田村俊子全集』第九巻及び全国報刊索引（http://www.cnbksy.com/）収録資料に基づき筆者作成

[48] 羽田朝子「『婦女雑誌』に見える梅娘の女性観――近代的主婦像と『国民の母』」（『現代中国』92号、日本現代中国学会、2018年）99頁掲載の資料より。筆者未見。

上記の表のように、佐藤俊子が中国滞在時期に発表した文章は、「上海に於ける支那の働く婦人」から始まり、合計で38篇発表された。そのうち「支那の子供」3篇、「北京通信　俳優学校と程硯秋」5篇、「汪精衛氏への贈り物　押花をおくる日本の女性」3篇、「支那趣味の魅力」6篇は連載であるので、それぞれを一篇とすると、中国滞在時期には24篇の文章が書かれたことになる。その中には未発表原稿の「中支で私の観た部分（警備、治安、文化）」や筆者が発見した「以心伝心」（『新命（南京）』月刊、1940年第2巻第2期）、「陳璧君女士印象記」（『華文大阪毎日』）の3篇と筆者未見だが「日本婦女的職業」（『婦女雑誌』、1940年10月）の1篇が含まれる。また、これらの文章以外に、中国滞在時期に佐藤が参加した研究会での発言を報道した「婦人時局研究会」（『東京日日新聞』、1939年2月2日）や座談会「北京と北京人を語る座談会」（『文芸春秋』、1939年8月）、「北京の秋を語る座談会」（『満洲日日新聞）1941年9月）、対談「日華の演劇に就て　久保田万太郎　佐藤俊子対談」（1944年2月）などの報道記事もある。

佐藤俊子の中国滞在時期は三期に分けることができる。第一期は1938年12月から1939年秋までで、この間の1939年2月から9月まで、佐藤俊子は中央公論社の特派員として毎月『婦人公論』等に寄稿した。俊子の当時の女性解放思想は中国に赴く前の思想の継続であり、主に労働女性の生活、生存問題に注目している。例えば『婦人公論』に寄稿した「上海に於ける支那の働く婦人」[49]には蘇州の川で船上生活をする中国の女性を「これらの支那女性が日本における一部の勤労層の女性と同様に、食を得る為に凡ゆる勤労の線に犇めきつつある生活様態」であると記した。1937年8月13日に第二次上海事変が発生した後、多くの中国人は船でフランス租界へと避難をし、難民たちは「人家の軒の下に寝たり、道路に群れ棲んだりした」と記している。このような社会の中で、生きるために労働する女性が増加した原因は「夫を失ひ、子を失つた婦人たちも、数の多少を論せず、事変前よりは増加しているのである」と戦争による被害であるとして、戦時下の貧しい中国女性に焦点をあてて報道した。当時の上海に富裕層の女性がいたとしても、「何か知ら就職の口を求めて働きに出る婦人たちについて書くのである」と、特派員として最初に発表した文章の中で、まずは労働女性の生活問題に関心を寄せている。

[49]佐藤俊子（1939）「上海に於ける支那の働く婦人」、『婦人公論』、中央公論社

また、近代的な職業婦人については、日本の百貨店で働いている「支那婦人の売子たちは、然うした態度と比較して遥に自由な態度を持している。これは境遇の如何に拘はらず、革命以降一時に解放された近代支那婦人たち」である、と佐藤は中国女性が辛亥革命以降、社会に出るようになったことを「生活的に自己を持する習慣的な態度の一つの現はれであらう」と好意的に記しながら、現実の女性たちの境遇を労働環境や賃金問題、職業女性の職種や勤務条件、収入等について細かく記している。

「云う迄もなく日本の経営する商店やオフィスには絶対に支那婦人は働いていない。唯日本人の家庭には婢女（アマ）が働いている。又日本人経営の大工場に就働するものは勿論支那女工だけである」と中国の労働女性が職種において差別を受けていることから語り始める。日本の大工場で働いている労働女性は「昼夜交代で昼は十二時間、夜は十二時間の不連休的作業を続けている」と労働が長時間にわたることに触れ、また「就働女工は未婚の娘たちばかりではない。亭主持ちの中年の婦人も居る」、賃金は「殆ど日本の紡績女工と同じであるが、唯就働時間が長い。戦争直後工場を再開した当時、復帰したこれ等の女工は全く飢餓状態で、会社で焚き出しする飯を一人で何椀も重ねた」、と中国の労働女性は年齢層は広く、中年の既婚女性も働いており、戦時下にあって生活と生存を脅かされていると記している。

また中国の「嬌艶媚態を盡してダンサアたち」は、実は「戦争で家を失ひ路頭に迷ふ難民たちの為に、客に切符を売つて救助の金を集め」ていると記し、戦争によって難民となってしまった人々への同情と、彼らに対して同情心を持っていた女性ダンサアに敬意を払っている。また、中国人女性は日本人を避けると記して、中日両国の当時の政治的現実を指摘しながら、「支那の婦人はもう戦争はしたくないのである」、そのためにも日本女性が「何卒支那の女性を導き、共に平和確立の道へ歩まして頂きたいと思ふ」と述べて、戦時下で日本の女性が中国の女性を導き中日両国の女性が共に遭遇している問題を解決することを希望し、日本人女性が中国人女性と協力して、戦争を止め女性のこれらの苦痛を解決するべきだと主張した。

佐藤俊子は政治の上では中国人女性が日本人を避けていると指摘したが、中国女性の自身に対する友好的な態度に接することもあった。揚州で熱烈な歓待を受けた佐藤は、「私は支那婦人に逢ふ時は、油然として一つの親愛感が必ず私の胸にいつばいになつてくるのである。（中略）支那婦人と云ふものは私の會つた限りにおい

て、どの婦人も日本婦人よりも実に率直な感情を感じさせる」[50] と日本の女性よりも中国女性の方が率直であることを指摘し、「何処からこんな親愛感が湧いてくるのか、私は自分の斯ふ云ふ気持ちを強ひて自から分析したことはないが」と、自身が中国女性に対して親近感が湧いて来ることを感じている。また、百貨店の女性の売り子に対しては「男子の店員からマスタアされている控え目な内気な態度で、支那婦人の売り子たちは、然うした態度と比較して遥かに自由な態度を持している」のは、「これは境遇の如何に拘はらず、革命以後一時に解放された近代支那婦人たちが、生活的に自己を持する習慣的な態度の一つの現れたであらうと思ふ」[51] とし、女性労働者運動が盛んであったカナダで18年間滞在した佐藤にとっては、五四文化運動と革命を行っている最中の中国女性、特に労働女性に対してより多くの親近感を得たのであった。

長谷川啓が「俊子のこうした対象への視線や態度は、前年のペン部隊の「従軍作家」が書いた「従軍報告」や「文学的な紀行文」というより、むしろカナダ時代の婦人労働問題の取材や社会調査の手法を思わせる」[52]と指摘しているように、佐藤俊子の中国での文章は政府が期待したような戦争の宣伝や士気を高めるというものではなく、自身の思想立場を保ちながら、戦争勃発後の中国社会の現実、特に女性の現実を理解することだったと考えられる。

中国滞在時期の第二期は1939年秋から1942年春までである。この時期は特派員としての仕事が終了した後も日本占領下の北京に残り、上海、南京を度々訪れながら雑誌に寄稿していた時にあたる。

佐藤のこの時期の生活について、当時中国に留学していた日本人で、知人の田村総の回想によると、1939年2月初旬には北京で超一流の六国飯店に住んでいたが、費用が払えないため、田村総の勧めにより、佐藤が比較的満足できた韓記飯店へ移り、費用はすべて田村総が負担した。韓記飯店には当時多くの日本人記者、文化人、作家等が滞在しており、佐藤俊子とも多くの交流があった。「北京時代の俊子は、眉を描き、口紅をさして薄化粧をした顔で、縁なしのしゃれた眼鏡をかけ、紫地に花模様を散らした絹のチャイナドレスを着こなしていた。その艶姿は、どう見ても四十歳そこそこにしか見えなかった。」[53]（筆者注：当時の佐藤はすでに五十五

[50]佐藤俊子（1939）「知識層の婦人の望む　日支婦人の真の親和」、『婦人公論』24 巻 3 号
[51]佐藤俊子(1939)「上海に於ける支那の働く婦人」、『婦人公論』24 巻 2 号
[52]黒澤亜里子、長谷川啓「解題」(2017)「田村俊子全集」第九巻、ゆまに書房、782 頁
[53]田村総（1990）『いきいき老青春』、学習研究社、73 頁

歳であった）と記しており、この時の佐藤俊子は化粧をし、チャイナドレスを身にまとって現地の文化人と活発な交際をしたことが窺える。しかし、佐藤俊子の北京生活は一方では「俊子は天性の浪費家で借金上手、しかも放浪癖」[54]があったため、その後は田村聡も佐藤の生活費を負担しなくなり、西城城辟才胡同にあった平等俊成宅に居を移した[55]。田村総が佐藤を訪ねた際、月下の佐藤は 「白い顔が妙に淋しく見えた」[56]という。田村総によると、北京時代の佐藤は派手な生活をしていたが、平等俊成宅に移ってからの生活は寂寞の感があったようだ。しかし、このような状態の中でも佐藤は帰国することはなく、北京で「借金」と「放浪」をする生活の中で、「私はこゝで若しかすると中国婦人の間に新文化運動を起こすかも知れません。たった一人でです。いづれは南京とも聯繫を持たなくてはならないと思ひますが、何しろたつた一人で自分の頭の中で考へてゐるだけの話だから、はつきりした事も云へないけれ共、この計畫が自分の頭の中で何うやら物になれば（中略）もう少しゐるつもり」[57]だと、中国人女性の間に何かの文化運動を起こすことを示唆している。この言葉は明確に『女聲』の創刊を指している訳ではないが、このような思いが最終的には『女聲』の発刊へとつながっていったのではないかと考えられる。

北京にいたころの佐藤の動向については諸説あるが、佐藤と当時面識のあった周作人はこの頃の佐藤について、「彼女はまるで何もすることがなくつまらないようだった。かつては西太后の物語を書きたい、教師になりたいとも言った。しかしどれも実現しなかった。これは確か民国三十年（1941年　筆者注）のことであったろう」[58]と回想している。また研究者の劉建輝は「表面的に在住邦人との付き合いが楽しく、一緒にパーティーに出たり、ビアホールに通ったりして陽気に振舞っていたが、実際は、創作上かなり行き詰っていて、思うように作品が書けなかったのではないかと想像される」[59]とも述べている。佐藤がこの時期に、「故宮的秋」（故宮の秋）や「西太后」等の歴史を題材にした作品を創作したかったのは、中国の文化や歴史にも関心があることが窺えるが、しかし「この時代は検閲制度が厳しく、上等

---

[54]同上、75 頁

[55]田村総によると平等俊成は東京大学卒業後左翼活動家となり、日本共産党の地下工作員であった。しかし平等の身分が佐藤俊子にどのようなあったのか、二人の間にどのような交流があったのかはわかっていない。

[56]田村総（1990）『いきいき老青春』、学習研究社、75 頁

[57]佐藤俊子「大陸通信一束」、『女性展望』、1940 年 9 月

[58]原文「她似乎没有什麽事做覺得無聊、曽説想寫西太后的故事、又想教書、却都没有成功、這大抵是民國三十年的是吧」（知堂（1945）「佐藤女士的事」、『女声』第 4 巻第 2 期、女聲雑誌社）

[59]劉建輝（2013）「日本占領下の上海文壇―田村俊子の足跡を中心に」、『上海一〇〇年』勉誠出版、174 頁

兵上りの中尉などには、この名作が理解されよう筈もなく、いつも報道部で没にされ」[60]るという状況にあり、日本占領下の北京で政治参加や文学創作、或いは自身の思想の実践方法を探っていたと考えられる。

三年余りの北京での生活を経て、佐藤は北京から南京へと向かい、1942年、上海で『女聲』の編集長となった。『田村俊子全集』第九巻「解題」によると北京を離れる際、「この時期の俊子の動静は不明」[61]とあり、「南京へ向かった動機もよく分かっていない」[62]とされているが、全集に収録されていない「支那趣味の魅力」（1941.9.30〜10.5）を読むと、佐藤の北京における日常生活や意識の変化を伺うことができる。彼女がどのように生活と創作上の寂しさの中で、中国での生活を選択し、さらに『女聲』創刊へと入っていったのか。以下、佐藤俊子が北京時代に発表した「支那趣味の魅力」をテクストにして、後の『女聲』へとつながる彼女の中国に対する認識の変化について考察を加えていく。

2.1.1　「支那趣味の魅力」の執筆背景

佐藤俊子の北京時代（第二期）は、第一期と比較して、中国社会に関する文章をより多く発表しており、第一期のような民族、国家に関する言論は少ない。この内容の変化は、一つには特派員の任務が終了して、中央公論社から求められていたであろう戦争宣揚の必要が減少したこと。二つには作家として、文化面から中国社会を理解したいと考えていたのではないかと思われる。第二期の「支那趣味の魅力」は1941年9月30日から10月5日まで、日本語新聞『満州日日新聞』に連載された六篇の随筆であり、これらには北京時代（第二期）の佐藤俊子の中国伝統社会に対する認識を伺うことができる。

2.1.2　「距離感」から「情熱」へ

「支那趣味の魅力（一）」[63]では、中国文化に対する最初の印象が記されている。「中支那の方面を歩いていた時はさうも感じなかったが、北京へ来てしみじみと感じたことは、支那は骨董と迷信の国だということだ」。このような「骨董と迷信」の雰囲気は、佐藤のように新しい創作を人生の目標に掲げてきた明治大正期の日本

[60]黒澤亜里子、長谷川啓「解題」（2017）『田村俊子全集』第九巻、ゆまに書房、740 頁
[61]同上、741 頁
[62]同上、741 頁
[63]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（一）」、満州日日新聞、9 月 30 日版

人からすると、「その古い美から新しい美を創造するのでなければ意味がない」と捉えられた。

佐藤は骨董を日本の伝統芸術である絵画と歌舞伎を例に、革新時代における芸術の追及との比較で述べながら、「骨董趣味などは全く時代から取り残された、古ぼけた人々の時間つぶしの玩弄に過ぎない」と、骨董が時代から取り残されたもので、それを楽しむ人々も骨董と同じように遅れた人々だと述べている。骨董は古いものであり、中国人は陳腐であり、こうした変化のない伝統に対して佐藤は距離を感じている。そのような態度は「支那趣味の魅力（二）」[64]でも変わらず骨董の雰囲気に包まれている中国が「支那民族の生活の地となっている、見るものは総てが骨董的で聴くものすべてが古玩的なものである」と、北京の文化雰囲気が示しているように、中国は骨董で構築されており、中国人の生活も全て骨董的であると述べている。

ところがそのような骨董に包まれた雰囲気の影響を受けてか、佐藤の骨董に対する認識に変化が見られ始める。かつて骨董は金を費やす娯楽であり、鑑賞の眼が必要であると考えていた佐藤は、「封建的な礼儀作法にも骨董趣味があるし、支那老人の長い白髯にも骨董趣味がある。大きなホテルへ行けば必ず古玩の品々を賣ってゐる。街頭を歩けば道傍にまで、小さい布を敷いてその上で数個の古玩の品を賣つてゐる。底下人の食べる器にも骨董趣味があるし、底下人そのものがもう骨董のやうでもある。支那音楽の楽器の音にも、物賣りの■を■き、■を鳴らす音にも、物賣りの賣聲までが、悉く骨董趣味である」[65]であり、「斯うした雰囲氣の中にゐれば、從つてその思想までが骨董的とならざるを得ないに違ひないと、最初は私はそれを恐ろしくさへ思つた」と一定の距離を感じていたのが、北京における二年半の生活の中で、「ところが不思議なことに私は二年半を北京に生活するうち、だんだんにこの骨董趣味が好きなってきた」と思うようになったのである。この描写から、佐藤の中で、徐々に中国の伝統文化「骨董」に対する興味と情熱が湧き上がって来たことが分かる。

[64]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（二）」、満州日日新聞、10 月 1 日版
[65]印刷不鮮明のため読み取れない個所を■で記した。

2.1.3　「卑俗」から「楽しみ」へ

「支那趣味の魅力（三）」[66]では、「理由なしに唯好きになると云ふことなども、単なる支那趣味の魅惑だと思ふ」と、京劇を取り上げて、そのセリフや演技の良し悪しがわからなくても、面白く感じていると記している。歌舞伎等の伝統芸能に理解があった佐藤俊子は、京劇と歌舞伎を比較して、京劇には多く幼稚なところがあり、その原因は舞台装置の制約と荒唐無稽な演出であるとし、京劇のすべてを高級な芸術として鑑賞することはできないが、このように舞台の条件が限られている中でも、やはり京劇の魅力を感じることができ、その独特な演技と表現形式に魅力を感じているとしている。また、京劇鑑賞における人々の掛け声を「低級な情景」としながらも、それについては意外にも嫌悪は感じていない。高雅と低俗の比較の中で、佐藤は徐々に当地の文化に影響され、人々の情熱と生活の息吹を感じ、「低俗」で荒削りな芸術の中にも自然な洒落た感じと真実を見出したのである。このように、日本の言論統制の下では本音を語ることはできなかったが、文化趣味の中で、中国への親しみを漏らすことができたと考えられる。

京劇は民間から興り、西太后により宮廷に引き上げられ、その社会地位を高めた。しかし近代的息吹の中でも、京劇の本質は変わらず、低俗な芸術趣味を保ち続けた。よって、京劇自身は非芸術的あったが、佐藤はその「卑俗趣味」をも好んだのであった。

また、「支那趣味の魅力（五）」[67]ではガラス画の中国への流入について語っており、ガラス画は一つには西洋画の中国の大衆芸術における体現、一つにはイスラム教の侵入とともに普及したものと記しているものの、「自分の見つけてきた硝子繪から、たゞ卑俗な趣味のおもしろさを味わふだけで足りるやうな氣がする」と、それらを歴史的に考察することには意味を見いださず、これらを味わうだけで足りるとしている。そして学問的なことよりも「文人藝術の高級な骨董趣味はその段階の頂上に達するまでが困難だし、一夜漬の研究などで到底深い理解が得られるものでもないけれども、容易な鑑識で、卑俗ではあってもどこかに綺麗な味わひを持つ支那趣味の通俗さのなかに遊ぶことには、云ひ難いおもしろさがある」と、ただそれらを味わうことに楽しみを見出している。

---

[66]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（三）」、満州日日新聞、10 月 2 日版
[67]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（五）」、満州日日新聞、10 月 4 日版

2.1.4　「反省」と「慰め」

佐藤はまた「支那趣味の魅力（六）」[68]で、周作人と骨董について話し合った時のことを「周作人先生と骨董の話をしたことがあったが、先生は支那の骨董については解らないと云はれた」と記している。佐藤俊子と周作人がいつどこで会ったのかはまだ明らかになっていない。しかし、『周作人日記』、『女聲』等からその時の様子を少し伺うことができる。周作人は『女聲』に二度寄稿している。一つは1943年10月に掲載された「女子と読書」であり、これは佐藤に依頼されて執筆した女性問題に関する文章である。もう一篇は1945年2月に掲載された「佐藤女士の事」であり、佐藤の逝去後、『女聲』の編集長を引き継いだ関露から依頼された佐藤俊子の追悼文である。

「佐藤女士の事」の中で、周作人は佐藤に会った時のことを、「民国二十八、九年（筆者補：1939、1940年）頃彼女は中国へ来た。最初は南京、上海で、その間に北京にしばらく住んでいた時に私は彼女に会った」[69]と記している。佐藤が北京に滞在したのは1939年2月から1942年2月までであり「支那趣味の魅力（六）」が1941年10月に発表されたことから考えると、周作人と佐藤は1939年2月から1941年10月の間に出会ったと考えられる。当時、親日政権であった汪精衛政府の華北政務委員会委員、常務委員兼教育総薯督になっていた周作人は、同年から、東亜文化協会会長も兼任している。しかし、佐藤は「支那趣味の魅力（六）」の中では、周作人の政治的立場等には一切触れていない。

「支那趣味の魅力（六）」では「支那の骨董については解らない」と述べている周作人であるが、陶器等の鑑賞知識については当時日本で東洋美術研究として著名であった柳宗悦に学んでいる。そして、周作人自身も骨董や、書法等についての考証文を多く記している。よって、中国の骨董が解らないと述べたのは、まだそれほど親しくなかった佐藤と距離をとるためであったのか、それとも謙虚であったのか理由は不明である。

周作人には散文「古董小記」[70]がある。この文章は自身の書棚に飾っている骨董を紹介したものであり、文中で骨董について、「骨董をもともとただの古器物というなら、おしなべて古い時代の器物は皆骨董である。骨董の時代考証の問題もまた面

---

[68]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（六）」、満州日日新聞、10 月 5 日版

[69]原文「民國二十八九年（1939、1940）左右她来到中國来、最初是在南京上海、中間来北京住過些時、我看見她就在那時候」（知堂（1945）「佐藤女士的事」、『女聲』第四巻第二期）

[70]知堂「古董小記」『水星』月刊、1934 年 11 月 10 日刊一卷二期

倒ではあるけれども」[71]と述べて、骨董は「古器物」であり、時代を鑑別することも簡単なことではないとしている。そして骨董の面白さについては「古玩の趣は普通の玩物の上に更にいくつかの要素が加わる。その一つが古さ」[72]、「古玩の価値の二つ目はその珍しさ」[73]、「三つはその値段の高さ」[74]と述べ、骨董を趣味とするための条件として「その人が極めて古い考えの人間であったら、表裏が一致しており精神を養うことができるであろう。或いはその人が極めて新しい考え方を持っていたならば、世間は彼の考えを察するであろう。よって、考え方の新旧とその良し悪しをむやみに判断してはならない」[75]とし、「極めて古い考え方」の人は自身の精神を養い、また近代的な新思想を有していている人が骨董を好んでいたとしても、社会はその新思想を察し理解するであろうと述べている。それに対して、佐藤は中国に来た当初、骨董は「古く」、「値段が高く」、資金と特別な鑑賞能力が必要だとし、それらを嫌い、骨董を趣味とする中国人をも時代遅れだと見下していたこともあった。それは「卑俗」の「骨董趣味」を持つ中国に対してでもあった。しかし、北京での生活と中国人に対する理解が深まるにつれて、佐藤の骨董に対する考えや中国文化に対する認識は大きく変化していった。

骨董に対して佐藤は、ただそれが中国で作られたものであれば、年代や真偽はともかくとして全て中国骨董の趣きがあり、皆鑑賞に値する。「さうまでむつかしく考へなくとも、路傍の骨董の露店の店から、なんとなく支那趣味を感じさせる皿を取上げて、それを二、三圓で買ひ求めて來て愛玩する氣持――その氣持に既に支那趣味があるとさへ思ふのである」[76]と述べている。

以上のように佐藤俊子は当初、中国趣味に対してはかなりの距離を感じていたが、徐々に「卑俗」趣味への理解へと進み、最後には中国趣味の中に精神的な同感を得るに至った。「二年半も支那にいれば、所謂支那の味が身にしみて」[77]、最後には「支那が好きになつてきた」[78]と言うまでになったのである。

---

[71]原文「據説古董原來只是説古器物、那麽凡是古時的器都得變、雖然這時間問題也還有點麻煩」
[72]原文「古玩的趣味、在普通玩物之上又加上幾種分子。其一是古」
[73]原文「再説古玩的價値其二是稀」
[74]原文「其三是貴」
[75]原文「其人應極舊、如是則表裏統一、可以養性。或曰、其人須極新、如是則世間諒解、不妄不能速斷」（知堂「古董小記」『水星』月刊、1934 年 11 月 10 日刊一卷二期）
[76]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（六）」、満州日日新聞、10 月 5 日版
[77]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（一）」、満州日日新聞、9 月 30 日版
[78]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（三）」、満州日日新聞、10 月 2 日版

「支那趣味の魅力（六）」の最後に、佐藤はこの純粋な文化趣味から戦時下の現実へと目を移し、「政治性を含んだ日華文化交流問題などについて考へたりすることは、全くいやになる」と述べている[79]。ここには佐藤の戦争という特殊な時代に対する嫌悪が表れているが、佐藤はこのような状況に対して絶望や沈黙したりはしなかった。北京の日常生活の中で中国文化の精神に触れ、至る所に見ることができる「卑俗」趣味に民衆の生活の息吹を感じとり、人々が生活と芸術の上に日常的に中国趣味を楽しんでいることを知ったことは、佐藤には慰めとなったのではないだろうか。佐藤は中国文化への認識を改めるとともに、中国における生活に新たな情熱を得て、訪中以前の作品創作に対する苦悩が一時的に緩和されたのかもしれない。佐藤は「支那趣味の魅力」発表後、二度と傍観者になることはなく、より積極的に中国社会に溶け込み、遂には中国において『女聲』の創刊へと向うのであった。

2.2 『女聲』創刊前後の関露

関露は本研究の中心となる『女聲』の重要な編集者の一人である。関露は編集者として女聲社に入社し、佐藤俊子とともに『女聲』の編集に携わった。共産党地下工作員であり、女聲社入社も共産党の任務を負っていたが、一説には、関露は佐藤俊子を通じて日本の共産党と連絡を取るという「友達作り作戦」の一環であったとも言われている。関露が1942年にどのような経緯で女聲社に入社したのかを考えるために、関露が共産党に入党してから『女聲』に参加するまでの足取りを記しておきたい。

関露研究の嚆矢としては丁言昭（1989）『諜海才女』が挙げられる。同書では関露の地下共産党員としての一面が大きく取り上げられており、戦後に漢奸（売国奴）の汚名を負い、十年という長期わたり投獄された関露が、名誉を回復した直後に自殺したことやその後に開催された関露の追悼会の模様が収録されている。その後、柯興（1999）『魂は都に帰る―関露伝』（『魂帰京都―関露伝』）、丁言昭（2001）『関露、関露』（『関露啊関露』）等の伝記が出版され、近年では王茜妮（2011）「関露の『女聲』における言論研究」（「関露在『女聲』中的言論研究」）、劉人鋒（2012）「関露作品における女性意識を論じる」（「論関露作品中的女性意識」）、丁暁萍（2015）「女性・革命と文学―女性作家関露の生命の軌跡

[79]佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力（六）」、満州日日新聞、10 月 5 日版

について」（「女性・革命與文學―女作家関露的生命軌跡浅議」）等では関露の女性解放に対する考えに注目した研究がある。

まず、女聲社入社以前の関露の大まかな動きを、各伝記、論考からまとめていくと次のようになる。関露（1907-1982）、本名は胡寿楣、胡楣、山西省右玉県出身。1927年から1928年にかけて、上海法学院、南京中央大学文学系（現南京大学文学院）にて学ぶ。1930年に処女作「彼女の故郷」（「她的故鄉」）を南京の『幼稚週刊』に発表。中国詩歌会刊行の雑誌『新詩歌』の編集者として活躍し、詩作「太平洋上の歌声」（1936年）（「太平洋上的歌声」）で脚光を浴びた。

1932年に中国共産党入党、左翼作家連盟に加入。1933年、左翼作家の丁玲[80]、潘梓年が国民党に秘密裏に拉致監禁されると、関露は丁玲の後を継ぎ、左翼作家連盟創作委員会で働く。関露は丁玲に対して尊敬の念を抱いており、南京の学生時代に『小説月報』に発表された丁玲の「阿毛姑娘」を読んだのがきっかけで、その後、上海の「文芸作家会」にて丁玲本人と面識を持った[81]と述べている。

1940年当時の関露は自伝的小説『新旧時代』（1940年）の「後記」の中で、「自由と解放を夢見て追及する女性が、どのように自身の希望を叶えたのか、古い伝統社会の生活から、新しい生活に至った彼女はその過程をどのように過ごしたのか。これらを私は読者に伝えるのである」[82]と記しており、『新旧時代』の中では自身の政治身分を隠しながら、積極的に女性解放を提唱した。このことは後に『女聲』編集者となった後も、一貫して継続された思想である。

1942年に共産党地下工作員の身分で、女聲社に入社、雑誌『女聲』の編集に携わり、後に編集長を務めた。1943年8月に中国代表者の一人として大東亜文学者大会[83]に参加。この大会が大々的に報道されたため、関露は地下工作員としての身分を人々に知られないまま、漢奸（売国奴）のレッテルを張られ、それまで交流のあった中国の抗日作家たちとも疎遠になっていった。

---

[80]丁玲（1904-1986）、本名は蒋偉、丁冰之等。ペンネームは彬芷、従喧等。湖南省の人。上海大学中国文学系卒業。共産党党員、著名作家、社会活動家。代表作は『夢珂』、『太陽照上干河上』等。

[81]関露「女作家印象記――女戦士丁玲」『上海婦女』、1939 年第 2 巻第 8 期、27-28 頁

[82]原文「一個一向都夢想與追求著自由跟解放的女性、要怎麽樣才能獲得自己底希望。一個如何從舊的封建生活走向新生活的她底生活過程、這些都是我要告訴讀者的」（関露『新舊時代』後記。初出は 1940 年、光明文芸叢書社。引用のテキストは『海上文學百家文庫』収録のものを使用した、499 頁）

[83]第二次世界大戦中に戦争協力を目的として、日本文学報国会などが中心となり 1942 年から 1944 年まで三度開催された文学者の交流大会。

戦争が終結したのち、『女聲』も 1945 年 7 月に第四巻第二期を以て幕を閉じた。戦後、「関露自身は新四軍の地下工作員だと称した」[84]が、「新四軍に文化関係者は多かったが、彼らは関露が地下工作員だと認めなかった」[85]。そのため、関露は「漢奸となった後は、ついには『女聲』を編集し、日本の作家佐藤俊子を持ち上げた。この変節は彼女の友人たちを驚かせ、内地の作家たちは強く彼女を恨んだ」[86]と多くの批判、誤解に晒されることになった。佐藤俊子や『女聲』についても「太平洋戦争とともに、関露はすぐに平和を謳い、（中略）ついには日本の女性作家である老婆俊芝（補注：佐藤俊子を指す）のもとで親日雑誌『女聲』を創刊した。売れ行きは良くなかったが、「報道部」の出資を受けたため、女聲社は門構えは豪華で、関露は時には車をチャーターしていた」[87]等、批判的な記事が多い。[88]しかし、烏珠「女作家關露二三事」のように、「関露は落水した後、わずかしか文章を発表しておらず、『女聲』月刊にて短文を記しているのみである。文章には「京派」の雰囲気があり、海派の張愛玲、蘇青とは明らかに異なる」と関露の文学面の評価のみ記している記事も中にはある[89]。また、ある記事では関露の身分について「抗日戦争に勝利したのち、関露は蘇北へと赴いた。この知らせが出た後に、関露は共産党で上海に残った地下工作員であり、夏衍により送り込まれたという噂が立った」。（中略）「仮に夏衍の口がもう少し上手かったとしても、それを証明することはできず、ただ関露は共産党当局が上海に派遣し、共産党に多くの情報をもたらしたとしか言わなかった」[90]とある。また別の文章では「抗日戦争勝利の後、一度は姿を消したが、後に中国共産党は関露が党から日本に対する諜報活動の命を受けて延安が派

---

[84]原文「勝利後、關露自稱爲新四軍之地下工作者」（陳榮臻「關露不是蘇北人物」『快活林』、1946 年第 14 期、3 頁）

[85]原文「但新四軍方面文人甚多、均不承認關露有地下人物」（陳榮臻「關露不是蘇北人物」『快活林』、1946 年第 14 期、3 頁）

[86]原文「附逆後、竟主編『女聲』、大捧日本作家佐藤俊子。這一轉變、真使她的好友為之驚異、就是内地的作家、也個個咬牙切齒表示恨透！」（唐青「上海一代附逆女漢奸、關露香港報上出現」『上海灘』、1946 年第 13 期、11 頁）

[87]原文「太平洋戰爭一起、關露馬上轉向為和平歌頌、（中略）竟與日本女作家古俊芝痔流往返、辦起冒牌『女聲』、銷路不靈、但是拿著「報道部」津貼、所以社址門面富麗堂、關露有時也坐了包車往返」（陳榮臻「關露不是蘇北人物」『快活林』、1946 年第 14 期、3 頁）

[88]その他にも関露の鼻を風刺した珊子「關露的鼻梁」（『東南風』、1946 年第 2 期、8 頁）や小君平「女作家關露追求李之華」（『海花』、1946 年第 3 期、9 頁）、菲菲「關露熱戀劉少奇：女作家蘇北豔事」（『海晶』、1946 年第 17 期、2 頁）といったゴシップ的な記事も数多く書かれていた。

[89]原文「關露落水後、甚少文章發表、僅在其主編女聲月刊寫些短篇、文字中頗帶「京派」氣息、與海派女作家張愛玲、蘇青輩、顯然不同」（烏珠「女作家關露二三事」、『海潮周報』、1946 年第 23 期、5 頁）

[90]原文「等到抗戰勝利、關露却冒然赴蘇北、這個消息傳出後、接着又是一個謠言攻勢、説關露是共産黨的留滬地下工作者、據説保送她的是夏衍。（中略）夏衍即口才再好一點、也無從辯白、祇説關露是共産黨當局叫她在上海的、並且給共黨做了不少情報」（盧鳳「敵僞時期走紅「女作家」夏衍力保她到蘇北去！「塌鼻」關露是共産黨的地下工作者？ 」、『説話』、1946 年第 1 卷 第 1 期 、5 頁）

遣した親日文人組織の「地下工作員」であったと証明した」[91]と関露が共産党地下工作員だとするものもあった。関露自身は戦時中も「南北女性作家交換書簡:(北京)寄璇玲」[92]の中で「私は毎日私の目の前にある生活の雑事に対応しなければならず、もっとも困難な時にも、私の生活の敵と戦わなければならない」と、暗に自身が敵の中で働いていることをほのめかしていた。自身も地下党員であった丁景唐は、「敵占領地区における党の工作方針に則り、自身は刊行物を創刊せず、敵の刊行物やその他の刊行物に投稿し、敵地での宣伝をしていく」という任務を黙々と遂行していたと証言している[93]。

しかし、真実が証明されないまま投獄され、1982 年 3 月 23 日になってようやく身の潔白が証明されて出獄したが、同年 12 月 5 日に 76 歳で自殺という形でこの世を去った。また日本においても戦後しばらくは、佐藤俊子や『女聲』について語られることはなかった。

関露逝去八日後の 12 月 18 日には文化部と中国作家協会の主催で関露座談会が開催され、「当時関露同志の公的身分は『女聲』の編集者であったが、実際は党の極めて重要な秘密工作任務を負っていた。（中略）『女聲』は日本占領時期の上海で影響力のある女性雑誌であった」[94]と、ようやく関露は正当な評価を受け、また『女聲』に対しても改めて注目され始めたのであった。

2.3 『女聲』について

『女聲』は1942年5月15日に創刊され計38期を刊行、1945年8月15日に停刊した。その内訳は1942年第１巻（1期～12期）、1943年第2巻（1期～12期）、1944年第3巻（1期～12期）、1945年第四巻（1～2期）である。編集長は左俊芝（佐藤俊子）、編集者には関露等がいた。第3巻12期の編集を終えた後、佐藤俊子が脳溢血により急逝すると、関露が編集長となり、第4巻1期、2期を編集した後に停刊した。

1937 年 8 月、盧溝橋事件の勃発後まもなくして、戦火は上海へ伸びた。日本は軍事攻勢を強める一方、日本と協調する対日政権を相次いで樹立させた。例えば 1938

[91]原文「勝利以後、一度銷聲匿跡、但後來中共方面證明她是奉命參加僞方作諜報工作、是延安派遣參加僞文人組織的「地下工作者」」（「女作家關露潛赴延安」、『國際新聞畫報』、1946 年第 58 期、3 頁）
[92]原文「我每天必需要去應付横在我面前的生活瑣事、到了最困難的時候、我還要去跟我生活底仇敵戰鬥一番」（関露「「南北女性作家交換書簡:(北京)寄璇玲」『中国文学』、1944 年第 1 巻 第 5 期、62 頁」
[93]原文「根據黨的關於敵占區工作方針、自己不能辦刊物、就像敵僞辦的刊物或別的刊物投稿、楔入敵人宣傳陣地」（丁景唐「關露同志與『女聲』」、丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社、237-238 頁）
[94]丁景唐「關露同志與『女聲』」、丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社、237-238 頁

年 3 月華中・南京に中華民国維新政府を、40 年 3 月には国民党右派の汪兆銘を行政院長（首相）に擁立した中華民国国民政府（日本は南京国民政府と呼んだ）が成立した。1937 年 8 月 13 日午後 4 時、上海虹口、楊樹浦などの地に集結していた日本軍は、中国保衛軍へ向けて進撃を行い、いわゆる「八・一三事変」が勃発した。11 月 11 日、租界以外の上海市を日本軍が占領する。戦況は引き続き上海から南京、更に奥地へと展開していき、上海では欧米の支配下にある租界地区が「陸の孤島」として、取り残される状態が続く。上海はこの時期を「孤島時期」（1939.11～1941.12）と呼んでいる。1941 年 12 月 8 日、真珠湾奇襲成功の報を受けた日本軍が、黄浦江に停泊中のイギリス砲艦ペトレル号を撃沈、同時に蘇州河にかかる各橋を渡り公共租界地区に侵攻し、公共租界を全面占拠してから、上海は「大東亜共栄圏」に名を借りた日本植民地政策のもとで、日本敗戦の 1945 年までの 3 年 9 ヶ月あまり日本の完全占領下にあった[95]、上海ではこの時期を「淪陥期」（1941.12～1945.8）と呼び、また上海は「淪陥区」と呼ばれた。

軍事占領以外にも、日本は思想や文学についての統治も始めた。中支那派遣軍の報道部、後の支那派遣軍の報道部は親日諸政権に働きかけて、民心の獲得、民衆の教化動員を謀った。その中で、重要な工作の一つとして中国側メディアの管理、統制が挙げられる。映画、演劇、ラジオ、雑誌を始めとしたメディア、その中でも中国語新聞（華文紙）を特に厳しく検閲し、言論の自由を大幅に制限した。[96]

1939 年の中支那派遣軍報道部の文書「対於報館要求事項」（アジア歴史資料、原文中国語）によると「同盟社」および中聯社のニュースは、毎日少なくとも各二本を、三号以上の活字で載せねばならない。同盟社及び中聯社の記事は、第一頁の主要な位置に載せねばならない」。「反戦平和の記事論調、及び反共反国民党反欧米の記事論調は毎日少なくとも各一本は載せねばならない」、「各項に違反したときは、給与やボーナスから二〇元から百元を減じる」[97]と規定していた。

また、堀井は支那派遣軍報道部『中支ニ於ケル華字新聞、通信及ビ雑誌ヲ以テスル宣伝戦ノ概況』（1941 年）を引用し、「表面上は之を（汪の―引用者注）国府宣伝部が行うこととし、軍報道部は日本系華字紙を除き、各社に対する直接指導を勉

[95]桜庭ゆみ子「蘇青論序説　―『結婚十年』が書かれるまで」、『東洋文化研究所紀要』、129 号、1996 年、163-240 頁
[96]堀井広一郎「「親日」派華字紙『中華日報』の日本批判」、『戦時上海グレーゾーン』、勉誠出版、2017 年 185 頁
[97]堀井広一郎「「親日」派華字紙『中華日報』の日本批判」（『戦時上海グレーゾーン』勉誠出版 2017 年 189 頁）

めて避け、寧ろ其の本体たる宣伝部を掌握指導」[98]したと、新聞、雑誌の統制は日本軍による直接的なものではなく、具体的には親日政権の汪精衛政府や報道部が行っていたことを明らかにしたが、このような日本側による統制や検閲の下に、上海の新聞は「どの記事も金太郎飴のように変わり映えのしない親日的な論調となり」、「外国籍に替えた抗日華字紙のほう」が多くの読者を得ていたとある。

一方『女聲』はこのような言論統制の矛盾の中で企画され、上海の日本領事館は政治色の濃い雑誌にすることを要求したが、佐藤俊子は日中戦争勃発前上海の主な華字紙、当時の日本軍に接収された『申報』が、「上海の中国人たちに見向きもされないのを例に引いてその要求を拒んだ。上海の領事館も発行部数の減少を恐れて、各期に必ず時局を論じた文章を載せること、「抗日」やソ連、共産主義を讃える文章は掲載しないことを条件」として提示した。この条件は前の新聞統制の規定より、「かなり自由に誌面を作ることを許した」[99]。一方、佐藤俊子は雑誌創刊の当初から当時のメディア統制の矛盾をよく見通し、積極的に政治色の強い言論を避けるように努力していた。

このような統治下にあった淪陥区上海の文壇状況について、「この三年間、上海の文壇は静まりかえっていた。気骨のある文化人で、係累の負担が重く、上海を離れることができなかったものは皆一様に筆を折って原稿書から遠ざかり、門を閉ざして引きこもっていた」[100]と多くの文化人たちは日本占領地区を脱出したが、占領地区を離れなかった文化人たちも多く、彼らは敵が支配する活字市場で働くのを拒否し、「淪陥区という特殊な環境に生きざるをえなかった作家たちは、自分が語りたいのに語れない言葉は何か、他人（権力）が語らせようとするが語りたくない言葉は何か、自分が語りたい、そして語れる言葉は何か、それをどうのように語るか、ということをよく具体的に考えなければならなかった」[101]。地下党員としての使命を負った関露は、佐藤俊子とともに女性解放を追求するとともに、各自の身分と形式で植民支配にも対抗したのである。

---

[98]同上、188 頁
[99]岸陽子「『女聲』雑誌創刊号に秘められたメッセージ」、『植民地文化研究』第 6 号、2007 年、55 頁
[100]趙景深「上海文芸界のある盛会」（1945 年 9 月『文壇憶旧』）櫻庭ゆみ子「蘇青論序説　―『結婚十年』が書かれるまで」（『東洋文化研究所紀要』、129 号、1996 年、の翻訳引用 167 頁）
[101]錢理群「言与不言之間」『中国淪陥区文学大系』総序（広西教育出版）1999 年、岸陽子『『女聲』創刊号に秘められたメッセージ』（『植民地文化研究』第 6 号、2007 年）からの翻訳引用（54 頁）

2.4　劉王立明『女聲』の踏襲

『女聲』という雑誌は、佐藤俊子編集長の『女聲』の前に、女性活動家で婦女節制会の劉王立明（1896-1970）の支援を受けて創刊されたもう一つの『女聲』（1932創刊～1937停刊）が存在する。佐藤の『女聲』は表紙の体裁など劉王立明の『女聲』を継承している部分があるので触れておきたい。劉王立明の『女聲』については、陳雁（2014）『性別与戦争　上海　1932～1945』や塗暁華（2014）「上海淪陥時期『女聲』研究」の中でも触れられているので、それを参考に記していく。劉王立明は、1920～1930年代に上海婦女参政連合会のリーダーとして活動した人物である。1920年に中華婦女節制会会長を任じ、特に出産の節制・婦女幼児の衛生、女性の職業等を提唱した。1924年には、数名の共産党員とともに上海女界国民会議促成会を発足させ、「女権を取り戻し、国政に参与する」ことを唱導している[102]。

1932年に創刊された劉王立明『女聲』の発刊の辞及び刊行主旨には「これは私たち婦女界の同人が唯一文字により発表する場である。本誌には背景、党派、政治的な作用と目的は無い。本誌の唯一の使命は暗黒に沈んだ女性の世界を呼び覚ますことである」、「女性を虐げているものを掃き出すことで女性の解放を行い、そうした後で私たちはようやく中華民族と人類を明るい新世紀へと推進させることができる」[103]とし、劉王立明『女聲』の編集長であった王伊蔚は、創刊号の評論で「『女聲』の歴史的使命は、労働女性を動員し、すべての愛国者を偉大なる民族解放運動へと加えることだ」と表明している。その二年後に劉王立明との思想の違いから、王伊蔚の『女聲』は独立し、その後「共産主義思想を宣伝し、国民政府を批判し」たため、1935年に停刊に追い込まれた。

1942年に発刊された佐藤俊子編集長の『女聲』が、この劉王立明の『女聲』の名前を踏襲した理由は、当時の編集長だった王伊蔚の晩年の回想から知ることができる。

王伊蔚の「回憶『女聲』」[104]によると、創刊から二年後の1934年、「『女聲』が独立したとき、女性詩人の関露が受け継ごうとした……当時私は彼女が共産党員とは知らなかった。彼女は私たちの会議に参加し、雑誌の支配権を得ようとしたの

---

[102]陳雁（2014）『性別与戦争　上海　1932～1945』、社会科学文献出版社、71 頁

[103]原文「要通過掃除欺淩婦女自身的解放、而後我們才能把中華民族與人類推向一個光明的新世紀」劉王立明（1932）『女聲』創刊号。陳雁（2014）『性別与戦争　上海　1932～1945』71 頁の引用を使用した。

[104]王伊蔚「回憶『女聲』雑誌」原載は上海市文史館、上海市人民政府参事室編『上海地方史資料』（五）、上海社会科学院出版社 1986 年版）。陳雁（2014）『性別与戦争　上海　1932～1945』（社会科学文献出版社）から引用

で、私は彼女を拒絶した。40年代初期に上海が日本人の手に落ちた後、ある雑誌が出てきた。それは私たちの雑誌と似ており、雑誌名も『女聲』であった。しかしこの『女聲』は投降と大東亜共栄圏を鼓吹していた。……彼女は『女聲』を侮辱し、雑誌は売国雑誌となり、『女聲』の体面を汚した」[105]と語っている。

王伊蔚の回想から、本研究の中心となる佐藤俊子編集長の『女聲』の雑誌名は、劉王立明の『女聲』を継承することを望んでいた関露の提案による可能性が高かったとわかる。それは関露が王伊蔚の「『女聲』の歴史的な使命は、労働女性とすべての愛国者を動員し偉大なる民族解放運動に加えること」[106]という思想的立場に賛同した上で、雑誌創刊の際に佐藤俊子に提案したのではないだろうか。

2.5　雑誌名にこめられたメッセージ

岸陽子は『女聲』について「三つの『女聲』　戦時下上海に生きた女たちの軌跡」（2005 年）[107]と「『女聲』創刊号に秘められたメッセージ」（2007 年）[108]の二つの論文を書いている。前者の三つの『女聲』とは王伊蔚編集長の『女聲』（1932-1935）、佐藤俊子編集長の『女聲』（1942-1945）、王伊蔚編集長の復刊した『女聲』（1945-1948）を指し、佐藤俊子の『女聲』と、十年前に同じく上海において創刊された王伊蔚編集長の『女聲』との関連性や誌名の「盗用」について次のように分析した。

「王伊蔚については詳細は不明であるが、一九三二年（ママ）、上海の名門大学である復旦大学の新聞学科を卒業し、『晨報』の外勤記者であったこと。取材で知り合っであったキリスト教民間婦人団体、中華婦女節制会のリーダーであった劉王立明と意気投合し、彼女とともに『女聲』を創刊し、編集長として『女聲』の激動の歴史とともにあったこと」など創刊のいきさつについて王伊蔚の回想記に基づいて詳しく記し、佐藤俊子編集長の『女聲』との関連について、「俊子の『女声』はこの雑誌の誌名を「盗用」したことになるが、誌名だけではなく、表紙に刷られた『女声』という文字の書体、版型、割付けにいたるまでそっくりで、王伊蔚らの創刊した『女声』の「盗用」であることは明らかである」と述べている。

---

[105]陳雁（2014）『性別与戦争　上海　1932～1945』、社会科学文献出版社、71 頁
[106]原文「『女聲』的歴史使命就是動員勞動婦女與所有愛國者加入到偉大的民族解放運動中去」）
[107]渡辺澄子（2005）『俊子新論：今という時代の田村俊子』、至文堂（至文堂）所収、22―31 頁
[108]岸陽子（2007）「『女声』創刊号に秘められたメッセージ」、『植民地文化研究』(6) 52―62、65 頁

王伊蔚の『女聲』は上海で「抗日」の声が高まる中で創刊され、「「発刊詞」において、女性の解放と自立を民族の解放と独立の結びつけていく方向をはっきりと打ち出している」、「しかし、女性たちに、家庭から社会に眼を向けさせ、激動の社会に身を投じようと呼びかける王伊蔚らの主張と、家庭を守り、良妻賢母たることを女性の理想とする劉王立明らの婦女節制会の思想的対立」が原因で、「一九三四年（ママ）下半期には袂を分かつこととな」り、「その後は経費の調達に苦労しながらも、創刊の志を貫き、女性解放を中国社会全体の変革及び民族解放運動の一環として位置づけ、日本の侵略に対する救亡運動を積極的に推し進める立場を堅持した」。

当時の日本は中国に対して懐柔政策を打ち出して、1935 年 1 月 22 日「日華親善論」を帝国会議で展開、10 月 7 日に中国大使の蒋作賓との間に「日華親善」の前提となる三条件（一）、排日運動の取り締まり、（二）、「満州国」の黙認、（三）、日中両国共同の赤化防止に合意した。こういった日本の対華政策に応じて、蒋介石の重慶国民政府は 6 月 10 日、「敦睦邦交令」を発布、「抗日」団体を組織することを禁じ、「抗日」の言論を弾圧した。

この状況の中で王伊蔚の「女声」雑誌は日本の侵略に抵抗したため、1935 年 11 月刊の第 4 巻第 1 期に停刊に追い込まれてしまった。

関露が女性解放と民族の解放・独立とを結びつけて戦った王伊蔚の「女声」の名前をわざわざ「盗用」したのも、彼女の志を引き継ごうとしたのだと考えられる。

佐藤俊子の『女聲』は王伊蔚らからずっと売国雑誌と見なされ、関露の動きも理解されることはなかったが、以上のような経緯をみると、『女聲』という雑誌名には王伊蔚『女聲』を貫く抵抗の精神が引き継がれていたと言えるのである。

岸陽子は「『女声』創刊号に秘められたメッセージ」で、『女聲』創刊号に掲載された「奇妙」な文章について指摘している。この文章は B4 紙 1 頁の散文で、題名は「虚妄の幻想」、作者は「諦」[109]である。岸は、「打ちひしがれて命たえだえになっても、なお野薊は小さな花を咲かせようとする。草木が乾燥した砂漠のまん中で懸命に根を張り」[110]から始まるこの散文の大部分が魯迅の『野草』であることを

[109]諦が誰のペンネームであるかは明確にされていないが、岸陽子（2007）は『女聲』に魯迅の「野草」が引用されていることから、「魯迅の文章をすべりこませたのは関露であるとしか考えられない」と指摘している。（「『女聲』創刊号に秘められたメッセージ」『植民地文化研究』植民地文化研究会 6 、61 頁）

[110]岸陽子（2007）「『女聲』創刊号に秘められたメッセージ」『植民地文化研究』植民地文化研究会 6 、60 頁

指摘し、「中国のインテリ青年なら一眼みて、これが魯迅の主として「野草」の中の文章をつぎはぎしたものであることを見ぬくにちがいない」、「関露が編集している雑誌の創刊号にこのような剽窃の文章がまぎれこむことは考えられない。とすればこの雑誌の創刊号に魯迅の文章をすべりこませたのは関露であることしか考えられない。しかもその文章の中心が『野草』の中の「希望」であることに注目したい」と述べて、関露が魯迅の散文詩に含まれる精神を同時期の上海の若者たちに伝えたいと考えていたのではないかと述べている。

魯迅の散文詩集『野草』（1924～1926）は、魯迅が北洋軍閥が統治する北京で生活していたときに、極度の苦悶にあったが理想を追求することをやめなかったという、作者の闘争心、そして孤独や寂寞、彷徨の中で前進していく精神を記述したものである。関露が『女聲』に魯迅の文章を「まぎれこませた」のは、魯迅の戦いの精神を読者に伝えると同時に、当時の関露が身分を隠して孤独に抗日活動を行っているのだという心情をよく反映しているとも考えられる。

そのことを示すように、この「散文」はジャンルから見れば「文藝」に相当するが、わざわざ目立たない最後の「戯劇」欄の中に載せている。これは当時の言論環境や「抗日」のことを伝えないという出版の条件の下で、慎重な「作為」だったと考えらる。

関露は『女聲』第 1 巻第 7 期（1942 年 11 月）の文藝欄に「秋夜」を発表した。署名は関露。「秋夜」は『女聲』の中で「もっともすばらしい散文」[111]とも評されている。

「秋夜」はある秋の夜、一人で夜 10 時半に劇場から帰宅途中に遭遇した出来事について描写したものである。ほの暗い雨の夜、孤独は「私」を恐れさせ軟弱にする。この時一人の若い乞食に会い、後に彼が失業して食うや食わずの貧困に陥ったことを知る。彼は風雨に晒され貧しかったが、卑屈でも弱くもなかった。帰宅後長い間眠りに付けずにいた「私」は多くのことを考えた。「暗い夜の街角での恐怖と孤独を思う。悲哀と涙を思う。あの乞食の青年を思う。乞食から私は彼の奇妙な勇敢さと安寧を思う。そして私はまた突然彼を理解した。彼の行為と態度は奇妙なものではない。彼には多くの生活経験があるから、彼の態度はあのように静かなのだ。彼はずっと落ち着いて眠れる場所を求めていたから、あのように勇敢なのだ。

[111]原文「寫的最好的一篇散文」（塗曉華『上海淪陷時期「女聲」雑誌研究』、中国傳媒大学出版社、2017 年、124 頁）

彼は暗黒の風雨の中にいたが、彼には一つの希望があった。彼は遠くの明かりと明日の太陽を見ることができるように望んでいる。だから彼の顔には笑みがあり、彼の眼は安らかな光を放っていたのだ」[112]と、傷ついた乞食の青年の肉体を通して勇敢な精神の追求をみたのである。屈服せずに太陽に向かう彼の姿に希望を見出している。「私」は勇気づけられると同時に「寒さと恐怖を思い、いつかやむ雨風を思い、いつか終わる暗い夜を思い、臆病さを思い、恥辱を思」[113]った。散文「秋夜」は関露が日本占領区上海で体験している孤独と希望という複雑な心情を表現している。

魯迅の『野草』の第一篇の題名も「秋夜」という散文であり、二本の棗の樹と夜空が困難にくじけない戦いを表し、棗の樹の気ままな精神を称賛している。棗の樹は、「彼はすっかり葉を落として、幹を残すだけになった。だが、これまでの木いっぱいに果実と葉をつけていたときのたわんだ姿からとき放たれて、気持ちよさそうに伸びをしている。ただ何本かの枝は、棗をたたき落とす竿から受けた樹皮の傷をかばうように、低く垂れている。そして、もっともまっすぐでもっとも長い何本かの枝は、異様で高い空を声もなく鉄のようにつき刺し、空をきらきらと陰気に瞬かせる。ちかちかとうしろめたくまばたかせる」[114]。

「そして何一つ身につけていない幹は、あいかわらず異様で高い空を声もなく鉄のようにつき刺し、空が人の心をまどわすたくさんの瞳をどんなに瞬かせようとも、ひたすらその死命を制しようとしている」[115]。

関露の「秋夜」と魯迅の「秋夜」はともに「まるはだかの幹は、あい変わらずあやしくも高い空を黙々と鉄のようにまっすぐつき刺している」という反抗と闘争の精神を称賛している。そして、関露「秋夜」には挿絵が付されており、それは雨に打たれて枝だけを残しているが、天を深く突き刺している一本の樹の絵である。ここにも魯迅「野草」にある棗の木の精神を体現している。

---

[112]原文「想著黑夜裡在街道上的恐怖與孤獨、想著悲哀與眼淚。想著那個青年的乞者、從乞者我都想著他的奇怪的勇敢與安寧。然後我又像突然地瞭解了他、他的行為與態度並不奇怪、因為他有許多像他那樣的生活經歷、所以他的態度那樣安靜。他在不斷地追尋妥歇與睡眠的地方、所以他是那樣的勇敢。他雖然在黑暗的風雨裡、但他有一個的希望、他希望可以看見一盞遠遠的明燈與明日的太陽、所以他的臉上有微笑、他的眼睛裡閃出安詳的光」(『女聲』雑誌 1 巻 7 期、14 頁)

[113]原文「想著寒冷和恐怖、想著會停歇的風雨、想著會完結的黑夜、想著怯懦、想著恥辱！」

[114]原文「他簡直落盡葉子、單剩幹子、然而脱了當初滿樹是果實和葉子時候的弧形、欠伸得很舒服。但是、有幾枝還低亞著、護定他從打棗的竿梢所得的皮傷、而最直最長的幾枝、卻已默默地鐵似的直刺著奇怪而高的天空」(魯迅「秋夜」。翻訳は『魯迅全集』3(学習研究社、1985 年)15 頁より引用。)

[115]原文「而一無所有的幹子、卻仍然默默地鐵似的直刺著奇怪而高的天空、一意要制他的死命、不管他各式各樣地〖目夾〗著許多蠱惑的眼睛」(魯迅「秋夜」。翻訳は『魯迅全集』3(学習研究社、1985 年)16 頁より引用。)

創刊号に掲載された、魯迅の「野草」をベースにしたと考えられる「虚妄の幻想」のほかにも、創刊号にはさらに一つの短文が掲載されている。作者は著名な映画俳優の李麗華で、題名は「私がもっとも好きな二つのアメリカ映画」（我最喜歓的両部美国電影）であり、このような文章を載せていることもまた、日本の反欧米言論に対するささやかな対抗といえる。これらから、関露は編集と創作において、抗日の闘争精神の宣伝を心掛けており、同じ使命を持った人々にそれを伝えることを望み、また戦争において人々が苦しみの中でも希望を見失わないよう勇気づけたのであった。

『女聲』は日本占領時期の上海において「出版期間がもっとも長く、もっとも重要な女性雑誌」[116]と評され、近年では当時の上海にあって影響力のある女性雑誌と見なされるようになった。日本政府の文化的な道具として日本占領地区上海で創刊されたが、国境を越えた女性啓蒙活動経験のある編集長佐藤俊子、そして中国共産党地下工作員という身分で編集者として、また執筆者として活躍した関露という二人の女性によって、『女聲』はある程度の独立した思想を保持し、複雑な政治勢力と文化階層の中で、女性の言論空間を構築し、中国における異なる階層の女性たちに向けて民族独立と女性解放のメッセージを発信し続けたのである。

2.6　小結

以上、『女聲』創刊以前の佐藤俊子、関露の動きを追うことで以下のことが分かった。

１、佐藤俊子はカナダ時代に『日刊民衆』雑誌の編集を一人で行っており、その当時から女性の労働問題について注目していた。そして、この編集者時代の経験が後の『女聲』の紙面構成や掲載内容選別の目を鍛える下地となったと考えられる。

２、これまで佐藤俊子は日本帰国後に、創作意欲を無くした女浦島と伝えられてきたが、カナダ時期に得た労働者とくに女性労働者への関心を帰国後も継続させ、多くの座談会に参加し、随筆を書いていた。

３、カナダ時代から中国滞在時期の前期に発表された佐藤の言論の多くは一貫して女性労働者への関心がその中心となっており、1942年に創刊される『女聲』は単

[116]原文「出版時間最長也最重要的婦女専刊」（李相銀『上海淪陥時期文學期刊研究』、上海三聯書店、205 頁）

なる女性向けの総合雑誌としてではなく、やはり女性解放を目指す雑誌として作られた可能性が高い。

４、関露は『女聲』の重要な編集者の一人であるが、その身分は共産党地下工作員であり、女聲社入社も共産党の任務を負っていた。

５、関露は共産党員の身分を隠し、1943 年 8 月に中国代表者の一人として大東亜文学者大会に参加したため、売国奴のレッテルを張られ、それまで交流のあった中国の抗日作家たちとも疎遠になっていき、1980 年代まで正当な評価を受けることはできなかった。

６、王伊蔚の回想から、本研究の中心となる『女聲』の雑誌名は、劉王立明の『女聲』を継承することを望んでいた関露の提案による可能性が高い。関露は王伊蔚の思想的立場に賛同し、女性解放と民族の解放を結び付けた 30 年代に発行された『女聲』を継承すべく、佐藤俊子に提案したものと考えられる。

第三章『女聲』の体裁及びその中心思想について

3.1『女聲』の出版背景
3.2『女聲』の内容
3.2.1　発刊主旨と執筆者
3.2.2　紙面構成――常設欄、各欄の変遷
3.2.3　『女聲』各欄の内容について
3.3 特集号
（1）收回租借特輯（第 2 巻第 4 期 1943 年）
（2）春節特集（第 3 巻 11 期、1945 年）
（3）紀念特輯（第 4 巻第 1 期、1945 年）
3.4 日本文学の翻訳
3.5 小結

本章では『女聲』について、常設欄の内容から考察を加えていくことで、当時『女聲』が何に注目し、どのような話題に重点を置いていたのかを整理し、その特徴を明らかにしていきたい。

3.1　『女聲』の出版背景

『女聲』は 1942 年 5 月 15 日に創刊され 1945 年 7 月まで発行された月刊誌で、計 38 期発行された。編集長は日本人の佐藤俊子（中国名は左俊芝）、編集者は中国人の関露、凌大嵘、趙蘊華である。第 3 巻 12 期の編集を終えて後、佐藤俊子が脳溢血により死去した後に関露が編集長となり、第 4 巻 1 期、2 期を編集した後に停刊した。日本駐南京政府大使館と日本駐華軍報道部の出資によって出版され、発行数は毎月 4000～5000 部と一定の影響力を持っていた[117]。『女聲』の販売は当初上海だけで行われていたが、翌年の 1943 年 2 月、第 1 巻第 10 期から編集室が太平出版公司から独立した後、販売経路も南京、蘇州、無錫、揚州、漢口、常州、松江、杭州、嘉興へと拡大した。編集室の独立に当たり佐藤俊子と太平洋公司との間でどのよう

[117]『女声』雑誌の販売部数について、塗暁華は丁景唐の回想及び関連資料から「一般的に 4000 から 5000 部」と結論付けている。（塗暁華「上海淪陥時期「女聲」雑誌的歴史考察」中国現代文学研究叢刊、2005 年第三期 89 頁）

な駆け引きがあったかは未だ明らかになっていないが、出版権は太平洋公司においたまま編集室だけを独立させた。同雑誌の影響については、「私たち青年の教室」、「最も密接な友人」等といった読者からの投稿からも窺うことができるように好評だったようで、『女聲』の内容は家庭、社会、文芸、科学、婦女問題等に跨る総合雑誌であった。後にも述べるが、『女聲』最大の特徴は、日本軍支持下の雑誌でありながら、遠く離れた共産党統治区（延安）の主流の女性政策に呼応する文章を多数掲載していたことである。

第二章で述べたように、佐藤（田村）俊子[118]（1884—1945）は 1938 年 12 月から中央公論社の特派員として中国に渡り、特派員としての在任期間が過ぎた後も中国に滞在、1942 年から 1945 年に逝去するまで上海で『女聲』の編集長を担当した。

関露（1907—1982）は『女聲』社の重要な編集者である。1932 年共産党に入党、革命運動に参加するとともに、詩歌や小説の創作を行う著名作家であった。1942 年に党の指示により共産党地下工作者という特殊な身分で『女聲』社入り、佐藤俊子の病没後に同雑誌の編集長を担当した。日本軍の監視下で働く共産党地下工作者という複雑な立場にありながら、関露は『女聲』に 130 篇に上る文章を発表している。

関露と佐藤俊子の二人は異なる民族、立場であったが、ともに社会主義思想の影響を受け、また女性啓蒙活動に参与するなど共通点を有し、『女聲』においてお互いに欠かすことのできない存在であった。

『女聲』について考察を加える前に、まず時代背景として、1930～40 年代の国民党統治区、共産党統治区及び日本軍占領地区において主流となっていた女性観及び女性政策について、先行研究に基づき確認していきたい。

女性のありかたをめぐって 30 年代から 40 年代の二度の「女は家に帰れ」論争が起こっている。五四運動（1918 年）以降、職業をもつ女性はしだいにその数を増やし、20、30 年代になると多くの女性が働くようになった。しかし、30 年代の中期に日本帝国主義の侵略が次第に深まるに従って、中国の世論に「女は家に帰れ」を鼓吹する風潮が起きた。

[118]佐藤俊子が中国へ赴く以前の女性解放思想を見ると、日本では伝統家庭の束縛からの解放を、カナダでは社会主義の思想女性解放を導いた、しかし、帰国後、帝国主義が隆盛していた日本において、女性解放や人種差別に関心をもつ佐藤はうまく文壇で活躍できず、1939 年から中央公論社の特派員として中国に渡り、1945 年に逝去するまで中国で活躍した。

蒋介石の国民党政権は共産党との内戦を繰り広げながら、統治基盤を強化するために全国的に「新生活運動」（1934～1949 年）を推進した。「新生活運動」は孔子を尊び儒教の古典を読むことを鼓吹し、日常生活のなかに忠孝仁義の考えをうち立てることを強要するもので、女性解放に反対しては封建主義的な良妻賢母を主張するものであった[119]。

国際的には 1929 年から 1933 年の間に資本主義社会で経済危機が爆発した。その経済危機がもたらした失業問題を解決するために、ドイツにおいては、女性に「3K 主義」を実行するように鼓吹した。3K とは、ドイツ語の K で始まる台所、教会、ベットの三つで、女性に対して、工場や社会から離れて家庭に戻り、子供を産み育て、就業の機会を男性に譲るように強要するものである。多くの旧思想をもつ文化人や官製の女性団体および刊行物は、次々にこれに同調する文章を書いたり演説を行うなどして、女性が家庭に戻り、良妻賢母となることを盛んに鼓吹した[120]。

中国でもこうした状況を背景に、30 年代初めに第一回目の「女は家に帰れ」論争が始まった。その論争の口火となったのは、1933 年 9 月 13 日『時事新聞』に載った林語堂の「結婚と女性の職業」である。これはもともと 1930 年 6 月に上海のマクタイア女学校で、「文学と職業」と題して行った講演の原稿であった。その中で、特に「女子は嫁に行くのが最良」、「女子の最も心に適う職業は結婚である」という言葉は、33 年から始まった第一回「女は家に帰れ」論争の火付け役となったのである。林語堂は、文学ではとても食べていけないからこれを職業にはしないほうがよい、それに現在の経済制度ではどの職業も男性と比べて女性は不利で、唯一の職業は結婚であり、多くの女性はこれに適していると述べた[121]。これに対して、女性の社会的役割を重視する人々は「女性は家に帰って良妻賢母になるべき」という主張に反論を加え、男性と同等の権利を得るためには男性と同じように社会に出て働き、社会の義務を尽くすべきだと論じ[122]、また民族存亡の危機にあって、女性運動の主要な目的はまず男女が協力して民族の解放を勝ち取ることだと論じた[123]。

---

[119]中華全国婦女連合会編著、中国女性史研究会編訳（1995）『中国女性運動史　1919-49』、論創社 288 頁を参考

[120]中華全国婦女連合会編著、中国女性史研究会編訳（1995）『中国女性運動史　1919-49』、論創社 288 頁を参考

[121]末次玲子（2009）『二〇世紀中国女性史』、青木書店、285 頁

[122]尹鳳先（2004 年）「中国の「女は家に帰れ（婦女回家）」キャンペーンの歴史と現在――女性の二重負担の観点から――」『GENS ジャーナル　お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム　ジェンダー研究のフロンティア』NO. 2

[123]中華全国婦女連合会編著、中国女性史研究会編訳（1995）『中国女性運動史　1919-49』、論創社、291 頁

国民党は新生活運動を展開する中で、1936 年 2 月には新生活運動婦女指導委員会を設け、委員長である蒋介石の妻の宋美齢は、女性が家を治め、子を教え、また悪い風習を捨て去るように「女は家に帰れ」運動を推進し、良妻賢母教育を鼓吹した。

前山加奈子は、中国において 20 世紀初めの「良妻賢母主義は、国家的視点からも、家庭的視点からも、一歩進んだ近代女性論として受け入れられた。しかし、この三〇年代においては、同じ「良妻賢母」が、それとは異なった意味でスローガン化され、女性の人生観、倫理観の基準とされたのであった。つまり、職業を求め、社会的役割を担うことは、良妻賢母たりえない、女は家に居て、良き母、良き妻であるべきだとし、女性を家庭に「閉じ込め」ようとしたのである」[124]と指摘している。

1940 年代初めに起こった第二回「女は家に帰れ」論争（1940―1943 年）は、抗日戦争が対峙段階に入ったときに、国民党地区で再び起こった論争である。そのきっかけは各地で女性職員を解雇する事件が相次ぎ発生したことによる。1940 年 7 月 6 日、重慶『大公報』に端木露西「青色の中のひとつの暗点」が載り、第二回「女は家に帰れ」論争の口火を切った。文中では、現在の社会制度組織下で女性はどの階級であれ、90％の女性は結局家庭で主婦、母親になるのが自然であると述べ、「女性は家に帰って「良妻賢母」になるべし」と主張した。これに対して多くの反論が寄せられて論戦に発展したが[125]、争点は第１回のものとほぼ同じであり、国民党地区では 1930 年代から 40 年代前半まで「女は家に帰れ」論が主流を占めていた。

一方、日本占領地区の北京や旧満州地区では、呂美頤（2001）によると「抗日戦争時期の日本占領者は、占領地区で大々的に良妻賢母主義を主張していた。しかしこれは日本人の創意ではなく、当時中国でおこっていた良妻賢母主義の全国的な論争に対するものであった。それは政治目的を持って選ばれた、対中戦略であり、文化政策と直接関連していた」[126]と論じている。つまり、1940 年代に北方の日本占領

---

[124]前山加奈子（1993）「林語堂と『婦女回家』論争 ―― 一九三〇年代における女性論」汲古書院、518 頁

[125]尹鳳先（2004 年）「中国の「女は家に帰れ（婦女回家）」キャンペーンの歴史と現在――女性の二重負担の観点から――」『GENS ジャーナル　お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム　ジェンダー研究のフロンティア』NO.2

[126]原文「抗日戦爭時期日本占領者曾在淪餡區大肆宣傳與推行賢妻良母主義、其実、這並非是日本人的創挙、而只是対中國正在進行的關於賢妻良母主義的全國性論爭、帶有政治目的的選択、這種選択與日本対華的総戦略、総的文化政策直接相關」（呂美頤（2001）「抗日戦争時期華北淪陥区関于賢妻良母主義的論争」、「殖民地時期女性史第二回研究会・報告原稿」、東アジア近代女性史研究会、2001 年 3 月 13、14 日）

地区において良妻賢母主義が宣伝されたのは、1930 年代から国民党統治区で展開していた「良妻賢母主義」を引き継いだものであったというのである。なお、北京における女性をめぐる言説についての研究は始まったばかりだが、こうした良妻賢母主義の流れにささやかな抵抗を試みた雑誌があったことが報告されている[127]。それによれば、当時の北京で 1940 年 9 月から終戦間近の 1945 年 7 月まで 5 年近く発刊された『婦女雑誌』は、日本占領下の女性雑誌として刊行期間が最も長く、大きな影響力をもっていたが、日本軍が設立した武徳報社の傘下にあったため、戦後しばらく「漢奸雑誌」とみなされ注目されてこなかった。しかし現在では再評価が進み、政治に関する記事では日本の政策の影響を色濃く受けているものの、女性に関する論説では政治と極力距離をとり、男女の平等な関係性や、女子教育の普及、家庭生活の向上等といった「近代主婦」を目指した雑誌であったという。つまり、近代主婦像の構築を通して旧式の良妻賢母論の解体を模索したものであり、女性の家庭領域での改革を目指す動きがあったことがわかる。

40 年代の延安の共産党統治区における女性解放政策は、中共中央委員会『関於各抗日根拠地目前婦女工作方針的決定』（略称『四三年決定』）を境に大きく政策転換され、それまでの多様な女性問題に関する議論から、女性の社会・生産参加に絞ったものへと変化した。

1939 年 6 月 1 日延安で初めての女性雑誌の『中国婦女』（1939 年 6 月―1941 年 3 月、計 22 期発行された月刊誌）が創刊された。江上幸子（2003）によると、『中国婦女』掲載文には、[一]弱点の所在：A「女性幹部に」か、B「党の指導に」か？[二]活動内容について：A「参戦活動主体」か？B「女性の利益保護活動強化」か？[三]家庭問題の処理：A「家庭の和睦（＝団結）中心」か、B「封建的束縛打破（＝闘争）中心」か？[四]生産と解放の関係：A「生産参加（＝経済的独立）により解放できる」か、B「並行してほかの女性解放活動も必要」か？[五]参政と解放の関係：A「参政権・婚姻条例ができればいい」か、B「さらに意識や現実の変革も必要」か？[128]という五つの争点があり、[三]の「家庭問題の処理」と[四]の「生産と解放の関係」をめぐって意見対立が顕著であったという。しかしながら、『中国婦女』の時期には、少なくともこれらの問題が広く議論され、[四]生産と解放の関係で

[127]羽田朝子（2018 年）「『婦女雑誌』にみえる梅娘の女性観――近代的主婦像と「国民の母」」『現代中国』第 92 号、日本現代中国学会、98 頁
[128]江上幸子（2003）「毛沢東「新中国」における「人民・家庭・女性」――丁玲の『夜』再読―」『ペンをとる女性たち』フェリス女学院大学編、翰林書房、198 頁

は、四〇年末の婦女連会議の『決議』はむしろ、A「生産参加（＝経済的独立）よりもB「並行してほかの女性解放活動も必要」が強調されていたのだが[129]、『四三年決定』では、今まで「生産参加を理解せず」にきたと批判され、「今後は生産」を重視してAのみを強調しBを否定する「新方向」が出されたのだった[130]。また、江上幸子（1993）は『中国婦女運動的重要文件』[131]を引用し、延安では「女性を生産活動に参加させ、生産・消費合作社を組織して、……女性自身の経済的地位を向上させた」、また毛沢東の『四三年決定』の功として「『四三年決定』が経典化していく中で、女性解放には経済的独立が必須という思想の強化に役立ったことが挙げられよう。」[132]と述べており、延安の共産党統治区では『四三年決定』以降、女性の経済的独立が特に重視されるようになったことがわかる。つまり、共産党統治区では抗日戦争に農民を動員する過程で、女性にも抗日運動への参加が期待され始め、さらに男性の従軍により手薄となった主として農業における労働力不足を補うために、女性の生産活動が強調されるようになったのである。共産党統治区の女性政策の方針は、国民党当地区や日本占領地区で展開された「婦女回家」や良妻賢母主義とは反対の方向を向いており、女性をいかに家の外に出すかが議論され、女性の婚姻、家庭問題や性の解放などはほとんど触れられなくなったのである。

以上、国民党地区、日本占領地区の北京、共産党統治区の女性解放思想について先行研究を踏まえてみてきたが、本稿の中心となる上海における女性解放思想については、日本の占領下に入ったばかりであるという先入観から、女性に関する言論はほとんどなかったと考えられてきた。近年ようやく『女聲』研究の深まりとともに、占領地区では日本の植民主義である「良妻賢母」、「前線救護工作等の言説に包囲されていたが、女性雑誌の中では『女聲』だけが、女性は「自由な精神で独立した人」であることを主張し、女性の経済的独立と主体性を持った人格を育てることを強調した[133]という指摘がなされ、『女聲』が占領地区で主流だった良妻賢母主義ではなく、経済的独立と個の解放の両方の宣伝に力を入れていたと述べている。

『女聲』は日本駐南京政府大使館と日本駐華軍報道部の出資により出版されたことから、中国では戦後から2000年代に至るまで、「漢奸」雑誌と評価されることが

[129]同上、198頁―200頁を参考
[130]同上、198頁―202頁を参考
[131]中華全国民主婦女聯合会宣伝教育部出版社編（1953）『中国婦女運動的重要文件』、人民出版社
[132]江上幸子（1993）「抗戦期の辺区における共産党の女性運動とその方針転換――雑誌『中国婦女』を中心に――」『中国の伝統社会と家族』、汲古書院、540頁
[133]塗曉華「上海淪陥時期『女聲』雑誌的歴史考察」『中国現代文学研究叢刊』、2005年第3期89頁

多かった。しかし、21 世紀に入ると中国で「日本軍の政治宣伝以外にも、ある程度中国女性の苦難を反映した」[134]と評価されるようになり、この頃からようやく『女聲』に対する再評価が始まったといえる。李暁紅（2007）の博士論文『民国時期上海的知識女性与大衆伝媒』（民国時代上海における知識女性と大衆メディア）や塗暁華（2014）『上海淪陥時期「女聲」雑誌研究』では、丁景唐の著作を底本にしながら 『女聲』に関係した人々にインタビューを行い、雑誌刊行の実態に迫っている。岸陽子（2005）「三つの『女聲』――戦時下上海に生きた女たちの軌跡」では、『女聲』は日本軍の厳しい思想統制の下、「“侵略”と“抵抗”の複雑な状況の中で」出版され、「社長であり編集長であった俊子の志と、中国語を解さない俊子を援けて実際の編集を担った中国の女性詩人関露の深謀によって、その意図は巧みにかわされ、厳しい状況の中で中国の女性解放に一定の足跡を残すこととなった」[135]と『女聲』が日本の言論統制を巧みにかわしつつ、女性問題をめぐり自らの見解を発信したと評価している。

これらの先行研究からもわかるように、日本占領時期の上海における女性言説に関する研究および『女聲』研究は途に着いたばかりである。そこで、本論では雑誌『女聲』を中心に据えながら、当時の上海における女性をめぐる言説の空白を埋め、中国における女性解放の流れを明らかにしたいと考える。

3.2『女聲』の内容

以下『女聲』の創刊主旨、執筆者、紙面構成等の面から『女聲』がどのような内容であったかを記していく。

3.2.1　発刊主旨と執筆者

編集長佐藤俊子は『女聲』創刊の主旨を（1）女性の声、（2）女性のための声、（3）女性から発する声[136]と明言し、原稿は関露らの編集者が執筆する以外に、当時の文化人等に依頼をした他、読者からの投稿も積極的に採用した。第 1 巻第 2 期の「投稿規定」には「全ての女性読者に言論と意見発表の機会を設ける」[137]

[134]原文「在為日寇做一些政治宣傳外也在一定程度上反映了中國婦女的苦難」（錢理群等編『中國淪陥區文學大系・史料卷』、広西教育出版社、2000 年、678 頁
[135]岸陽子（2005）「三つの『女聲』――戦時下上海に生きた女たちの軌跡」、渡辺澄子（2005）『俊子新論：今という時代の田村俊子』、至文堂、23 頁
[136]原文「(一）乃婦女呼聲（二）爲婦女而聲（三）由婦女發聲」（『女聲』第 1 巻創刊號、1 頁）
[137]原文「為要達到我們創辦『女聲』的宗旨、使每個婦女的讀者都有機會發表言論和意見、所以有「信箱」一欄的設備」（『女聲』徵文簡章、創刊號 40 頁）

ために、「信箱」（読者の声）を設置するとした。詳細な規定はなく、「評論と小説」の募集をし、賞金も出した[138]。第 1 巻 2 期、3 期に掲載された投稿規定には評論は最も良い作品を採用、字数は最大 3 千字、賞金は 100 元とあり、小説は創作作品であること、投稿作品から最も良い二篇を採用、字数は最大 7 千字、一等賞金 300 元、二等賞金は 200 元とあるが[139]、第 1 巻 4 期では長編創作小説の賞金が、一等賞 2000 元、二等賞 1000 元と一気に跳ね上がっている[140]。塗暁華（2014）『上海淪陥時期「女聲」雑誌研究』によると、執筆者には、関露や丁景唐[141]をはじめ、同じく地下党員であった楊志誠（ペンネームは陸洋）、鮑士用（ペンネームは席明）、杜淑貞（ペンネームは李璈）、陳新華（ペンネームは陳聯）、李祖良（ペンネームは方暁）、陳嬗（ペンネームは凱勒）、陳琳（ペンネームは羅沈）等[142]がいたことが判明している。当時の文化人の文章は実際には少なく、積極的に原稿依頼をしていなかったことからも、関露ら編集委員の外には、一般の人々からの投稿で雑誌が成り立っていたと考えられるが、その中には多くの地下党員がいた。掲載数から見ると関露が 130 篇余、丁景唐が 56 篇と多く、共産党地下工作員の文章が上位二位を占めている。また、編集長佐藤俊子の文章としては、確定できるのは俊生のペンネームで映画評論が 5 篇ほどあるが[143]、他に読者からの悩みに答えた「読者の声」の多くに回答している。巻頭語「先聲」にも署名がないが、編集長佐藤の思想が多く反映されていると考えられる。

『女聲』は出版されてから二か月後には既に注目を集め、読者から多くの手紙を受け取っている。その中には雑誌に対する称賛以外にも、批判や助言の声もあった。読者からの批判は「（1）文芸読物が少なすぎ、レベルも高くない。（2）題材が平凡で新鮮味に欠ける」であった[144]。それに対する『女聲』の回答は「確かに、

---

[138]『女聲』徵文簡章、創刊號、1942 年、40 頁
[139]『女聲』第 1 巻 2 期、1942 年、40 頁
[140]『女聲』第 1 巻 4 期、1942 年、36 頁
[141]丁景唐（1920—2017）、浙江省鎮海（現寧波）の人。詩人。ペンネームは黎揚、歌青春、丁英等。1938 年に中国共産党に加入。1939-1943 年、上海東呉大学、濾江大学を卒業。1944 年に光華大学中文科を卒業。中国共産党地下工作員であり、共産党の敵占領地における工作方針として、自身で刊行物を創刊することができなかったため、敵側の刊行物に投稿をした。このような状況で、丁景唐は『女聲』雑誌に歌青春、戈慶春、秦月、辛夕照、楽未央、楽未恙、宗叔、包不平などのペンネームで、詩、散文、雑文、評論、古典文学等の各種文章を投稿し、『女聲』雑誌の主要投稿者となった。また、詩集『星底夢』を出版した。新中国建国後は上海市委宣伝部処長、上海文芸出版社社長兼総編集等を歴任。
[142]塗暁華（2014）「上海淪陥時期『女聲』雑誌研究」、中国傳媒大学出版社、55 頁
[143]同上、52 頁
[144]原文「近來我們接了許多讀者的來信、在他們心中、除開表示對鄙刊的讚美與愛好而外、還有許多可寶貴的批評與指導、現在我們把讀者的意見大略分爲兩種：（一）文藝讀物太少、不到水準上、（二）題材未免太平凡、容易犯了老生常談。」（『女聲』餘聲、第 1 巻 3 期、1942 年、36 頁）

私たちはこの二つの欠点を認めます。しかし私たちはかつて「第一声」でも話したように、本誌の意図は女性のために声を上げることであり、本誌は純文芸雑誌ではありません」と自身の立場を読者に対して再度明確にし[145]、純文学的な内容を追及するのではなく、女性のために声を上げ，女性の啓蒙をし、女性が発言権を得て女性問題を解決する場であるという創刊の主旨を堅持している。

また雑誌の販売状況も第 7 期には、「本誌の第 1 期から第 6 期はすべて売り切れ」[146]と記されており、人気の高さを見ることができる。そして「近頃度々読者からの電話や手紙を受け取った。それは私たちの雑誌を予約したがまだ一度も手に入っていないというものである。私たちが調査をした結果、ある読者は弊社で直接購入したのではなく、一人のセールスマンを経たという。このセールスマンがその信用を果たしていないのだ」と偽の販売員も出現し、読者に注意を呼び掛けている程であった[147]。

『女聲』は日本占領時期に、女性が声を上げ、女性の問題を解決する場所として、投稿を呼びかけ、賞金を出し、積極的に女性読者に働きかけた人気雑誌であった。また、投稿者の構成を見ていくと、その多くは関露と同様に共産党地下工作員がおり、『女聲』は彼らの隠れた投稿先ともなっていたのである。

3.2.2　紙面構成――常設欄、各欄の変遷

塗暁華（2014）によると、1 巻第 5 期に「突然『国際新聞』欄が始まる」が、その理由は「当時田村俊子らが『女聲』の基本的な欄を設置し、自分たちの読者獲得に成功した後、政治が彼女たちに近づいてきたことを避けることができなかったからだろう。確かな証拠は無いが、筆者は『国際新聞』欄の設置は、日本軍部あるいは大使館からの圧力ではないかと推測する」とし、「編集者は客観性を示すため、時には当時の政治動向についてニュース報道の形式で記しているが、評論は加えていない」[148]とも指摘している。また創刊時からあった『電影与戯劇』（映画と演劇）

---

[145]原文「的確、我們承認這兩個缺點：不過我們在「第一聲」里、曾經説過、本刊的宗旨是為婦女的呼聲、所以本刊並非純文藝的刊物」（『女聲』餘聲、第 1 巻 3 期、1942 年、36 頁）

[146]原文「本刊從第一期到第六期全已售完」（『女聲』餘聲、第 1 巻第 7 期、1942 年、44 頁）

[147]原文「近來累次接到讀者的電話或是信件、説是訂了我們的刊物但是不曾得到、我們調査的結果、有些讀者並非來敝社直接訂購、而是由一位推銷員處經手、而這位推銷員又不能盡其信用上的責任」（『女聲』第 2 巻 1 期、1943 年、48 頁）

[148]原文「是從第 5 期才開始突然出現『國際新聞』欄目」、「也就是説、當田村俊子她們搭起了『女聲』雑誌的基本框架、成功試行並有了自己的讀者群之後、政治就不可避免地找上了她們。雖然沒有確切的證據、但筆者推測設置『國際新聞』欄目應該是來自日本軍部或者大使館的壓力」、「編者為了顯示客觀、有時把當時的政治動向時事述評一概以新聞報道的形式出現而不加以評論」（塗暁華（2014）「上海淪陥時期

欄は、第 1 巻は評論と映画紹介が多くあったが、第 2 巻以降は映画評論が減り、演劇評論が増えたと指摘している。この時期の上海の映画は、主に大東亜共栄圏の宣伝したものが多く、「日本は大々的に映画の宣伝を強化しようとしていたが、彼らは映画の宣伝が失敗したことを認めないわけにはいかない」[149]とも指摘している。

『国際新聞』欄と『映画と演劇』欄は政治色を帯びたものだったが、これらは最初から編集者の意図したものではない可能性が高い。

『女聲』の常設欄には、前書き（先声）、評論、文藝、戯評、兒童、編集後記（餘聲）で、毎号およそ 10 の常設欄があったが、創刊時から数度の調整があり、『国際新聞』欄が政治的圧力により開設された以外に、その他にも調整され取り消された常設欄が存在する。

第 1 巻第 2 期の「編集後記（餘聲）」には雑誌刊行の目標は「知識層の注意を引くと同時に各層各階級の興味を引く」[150]ことであるとして、読者の興味を引くために評論、修養、世界知識、娯楽、文藝、戯劇と映画、中外女傑、漫画、美容、随筆等計十の欄を設定した。さらに、評論、修養、職業、家政、衛生、日本語等をまとめて知識類の欄として設定したとある。また第 1 巻第 2 期には「本誌では第 3 期より『女聲』の範囲を拡大するため、女性たちに福利を図る円満な家庭の男性読者たちが、随時本誌に批評や建設的な意見を寄稿してくれるように願います。これも、文壇における一種の助け合い精神の表現です」とし、内容を拡大して男性からの意見を募集し始めた[151]。

後に『女聲』の代表的な常設欄となる「読者の声（信箱）」は第 1 巻第 4 期から始まり、第 3 巻第 12 期まで続いた。「読者の声」は読者からの投稿に直接編集長佐藤俊子や編集者関露らが「編集室」の署名で回答をするという形式をとり、男女を問わず広く投稿が寄せられ、内容も女性をめぐる問題に多くの紙面が費やされ、『女聲』の女性観をもっとも直接的に体現した内容となっている。「広く婦女と青年の読物となる」ことを目指した『女聲』は初期の段階から読者の興味を大切にす

『女聲』雑誌研究」、中国傳媒大学出版社、59 頁-60 頁）

[149]「盡管日方大力加強電影宣傳、但是他們不得不承認他們電影宣傳的失敗」（塗暁華（2014）「上海淪陥時期『女聲』雑誌研究」、中国傳媒大学出版社、73 頁）

[150]原文「第一目的要引起智識階層的注意、同時誘導各層階級的興趣」（『女聲』餘聲、第 1 巻 2 期、1942 年、40 頁）

[151]原文「我們在第三期起、更加擴大了我們這『女聲』的範圍、想一般對於女界福利和家庭幸福的男性讀者們、時時賜給我們的批評、和建設性的指導、也是文壇上一件互助精神的表現」（『女聲』餘聲、第 1 巻 2 期、1942 年、40 頁）

るために多様な項目を設定した。そのためか、全 38 期を通じて特集はわずか三回しか組まれなかった。

『女聲』の紙面構成について、主な常設欄を対象に見ていくと、『女聲』の主な欄は「評論」欄であり、内容は女性問題関係が多く、第 3 巻第 10 期より「隨感」と改名した。「評論」の次に力が注がれたのは短篇小説、長篇小説が掲載された「文藝」欄であった。文芸欄ではある程度の固定した執筆者の他に、一般人からの投稿作品も多く採用した。「電影與戯劇」（映画と演劇）欄は中国劇や映画の評論である。一時「戯評」や「演藝」（一度のみ）と改名しながらも、毎号掲載されており、以上の三つの常設欄は『女聲』が非常に重視していたと考えられる。

「兒童」、「故事新述」もそれぞれ一時「兒童的問題」、「故事新編」と改称しながらも多く掲載された。

戦況を伝え、日本軍部の動きを伝えた「国際新聞」欄は毎号 2 ページほどが費やされしたが、その中で、署名入り記事は僅か三件のみであり、政治的な内容に対しては匿名性を重んじていたことがわかる。

その他女性問題に関するものでは、「女性と職業」（婦女與職業）、「女性の新知識」（婦女的新知識）、「女性の生活」（婦女的生活）が設置されていた。

以下『女聲』を編集長佐藤俊子時期の第 1 巻から第 3 巻を前期、関露が編集長を継承した第 4 巻を後期として二つに分けて、『女聲』の中心的な内容について具体的に検討していく。

表 3 は前・後期における欄、執筆者とそのペンネーム及び執筆回数である。また、執筆者の多くがペンネームであるため、現在までに判明しているものは括弧内に記した。

表３　『女聲』前期執筆者・執筆回数一覧

欄名	執筆者（掲載時のペンネーム・執筆回数）	備考
①先聲	孤（9）	
②評論	関露（芳君・25、関露・2）李蘊冰（4）、郭異（3）東方明（2）、萬孟婉（1）　、文英（1）、橋上客（1）、魯風（1）、周作人（知堂）（1）、潘予且（1）　、洛川（1）	のち欄名を「随感」に改名
③文藝	関露（関露・25、芳君・1、芳・1）、丁景唐（歌青春・15、微萍・3、包不平・1、戈慶春・1、辛夕照・8、宗叔・1）、鮑士用（席明・2）、楊志誠（陸洋・4、嵋・3、修嵋・3）、李璈（杜淑貞・１）、李祖良（方暁、2）、陳碄（羅沅・2）、陳新華（陳聯・3）、陳嬗忱（凱勤・1）、葉甦（5）、絢子（4）、熹（3）、以文（2）、史修（2）、如也（2）、方媚（2）、翁倩因（2）、以下各（1）路易士 、路鵲、綠萍、初犢、玲瑩、靜蒂、伊凡、號羊、文黎、張資平、蕭傑、姚吉上、艸叚、湘淩、祭達、步建、肅傑、沙金、珊璨、藉雨冷、席與琳、柳雨生、婷倩、冰燕、波人、洛梅、韋茵、嬰甯、諸葛心、寒舍、宇文洪亮、匡子英、炯子、望洋、洋、陳翠、珠、青風、蘭尼、陳其逸、奏月、楊子江、潘予且、柳中、胡生權、徐邨、徐振鐸、冷路、胡生權、南郭龍、號羊、君治、哲人、魯賓、歐芙陽之、 葉洚、■旦、伊籐研之。 翻訳作品：武者小路実篤（荻崖訳・6）、豊島與志雄（緑妮訳・１）、火野葦平（荻崖訳・3）、以下各（1）小宮義孝（錫熹訳）、宮澤賢治（緑泥訳）、稲垣（靈陀訳）	▼長編小説関露『黎明』は19回にわたり掲載された。 ▼丁景唐は辛夕照の名で小泉八雲の小説を、宗叔の名でフィリップ（不詳）の小説をそれぞれ翻訳発表した。[152]
④婦女與職業	方媚（5）、以下各（1）玉壺、根弟、陳敏、韞輝、関露（芳君）	
⑤婦女的生活	丁景唐（樂未央・3、樂旡恙・4、包不平・1、樂無恙・2、辛夕照・1）、方媚（6）、絢子（3）、蕙蓀（2）、孤嶼（2）王文山（2）、以下各（1）珮璉、申年、王東、梅林、含青、蕙、蔣山青、左君、王新湯、雨中鳶、光宇、如蠅、辛思、茅愛立、伊籐研之、楊劍花、蕭南、嚴藝英、劉心如、呉蘭、洛梅、仕英、郭武	
⑥婦女生活	各（1）洛川、林妹殊、丁景唐（歌青春）、錫熹、浮萍	
⑦婦女的新知識	正木智海（2）、その他各（1）魯風 洛川 柳雨生 陶晶孫 丁景唐（包不平）　譚惟翰 瘦菲　馬博良　絢子	
⑧修養	方媚（5）、孤嶼（3）、霞華（3）、余極（3）、関露（芳君・1、関露・1）、陳翠珠（2）、王幗敏（2）、申年（2）、橋上客（2）、以下各（1）靜兮、號羊、蔚英、羅紋、葉芝、劍湖、珠	

[152]丁景唐はこの他に、微萍、歌青春、戈慶春、秦月、辛夕照、樂未央、樂無恙、包不平等のペンネームで『女聲』雑誌に詩歌、散文、雑文、評論、古典文学研究等を計56篇発表している。

	英、雲、東方英祺、堡景、柳萍、席明、鄔曦、予且、陶熾孫、玉耑山人、劉心如、晶玉、絢子、宗叔、方曉、洛梅、白燕	
⑨家政	葉庭芝（6）、純黎（5）、方媚（3）、蕙蓀（2）、梵慈（2）、梵溪（2）　葉庭廾（2）　丁詠絮（2）、衡（2）、蘅（2）、漱蕙（2）、以下各（1）藍、菡、玉壺、老我、煜、鍾號羊、南水、韋金、榮、余牧、華、菲茜、洋、烹調主人、毓英、愛美、陳翠珠、嚴藝英、白萍、楊絢莘、申年、晉琳、郭武、寒蕚	
⑩生活與感想	丁景唐（樂未央・1、宗叔・1、辛夕照・1）、絢子（2）、以下各（1）陳翠珠、関露（芳君）、方媚、瞿中倫　東方明、楊志誠（陸洋）	
⑪世界知識	華（11）、以下各（1）羅山、珍、王文山	
⑫所見所聞	方媚（9）、関露（芳君・1、関露・2）、韞輝（2）、熹（2）、顧藝莘（2）、孤嶼（2）、以下各（1）世澤、風棋、樹漢、東方明、竹青、洋、若望、丁景唐（樂旡恙）、晶孫、孤嶼、克榆、衡、偉	
⑬衛生	葉庭芝（4）、虞澄（4）、張文華（4）、沈望乙（4）、宋大任（2）、以下各（1）朱學蓮、郭太華、榮	
⑭娯樂	孤嶼（5）、榮（3）、孤岐（1）、劍湖（1）	
⑮漫畫	丁悚（10）、羅山（1）	
⑯戯劇與電影	蘭（14）、榮（6）、俊生（4）、爲（2）、以下各（1）羅山、惟、李麗華、諦（関露）、張冰獨、関露	
⑰戯評	蘭（16）、董楽山（史蒂華（5）、麥耶（2））	
⑱演藝	蘭（1）	
⑲散文	芳（1）	
⑳中外女傑	芳君（2）	
㉑兒童欄	菡（21）、豊島與志雄（緑妮訳・7）、琪（4）、陳聊（3）、皇甫少英（2）、以下各（1）薇芹、如蠅、虞澄、梵慈、紓紆、 王珠、易水、霞、羅山、魚人、倪金易、鮑佳木、榮	
㉒美容	小慧（3）、君、沙門	
㉓日語	羅山（4）、蘆山（1）	
㉔國際新聞	孤嶼（1）、南木（2）[153]	
㉕清代女詞家	史修（1）、冷（1）	
㉖木刻	夏雲（1）	
㉗兒童的問題	各（1）絢子、華、韋金、瑛、琪、兪丞	

[153]塗暁華（2014）は「南木の文章には多く典故が用いられ、古文への傾倒がとても深い」、「いつも彼の書いた『国際新聞』欄はよく気が使われており、その立場も日本の立場と一致している」、「執筆の風格や細かい点（日本語がわかる）」などから南木、孤嶼、弧が同一人物で、男性執筆者ではないかと推測している。『上海淪陥時期『女聲』雑誌研究』、中国傳媒大学出版社、65 頁

㉘特輯	收回租借特輯各（1）芳君、孤嶼、華、方媚、柳雨生　知識人、新道繁、絢子、菡 春節特輯各（1）洛川、陶晶孫、瘦非、萍	
㉙故事新述	孤嶼（2）、丁景唐（樂無恙・1）、梅林（1）	
㉚故事新編	孤嶼（3）、南木（1）	
㉛趣味叢談	高橋敬三（錫熹訳、6）、絢子（2）、丁景唐（歌青春、2）、以下各（1）孤嶼、般若、陶晶孫、萍	
㉜書評	梅林（2）	
㉝餘聲		

注：『女聲』目録に基づき筆者作成。現在までに判明している共産党地下工作員は網かけで示した

佐藤俊子の逝去後に関露が編集長になってからは、終戦に伴い二期しか出版されなかった。それまでの連載を打ち切り、内容を一変させた。その理由は「佐藤女士は生前このような意見を出した。それは、第四巻一期は革新の号となる。革新号では以前のいくつかの長編を暫時停止し、新しい内容に変更するというものであった。今、私たちは故人の遺志に則り、古い連載を停止し、新しい内容に変更した」[154]からであった。関露が佐藤俊子の意思をそのまま継いだのか、それとも心機一転するために体裁や目次を一変させたのかは不明であるが、目次から内容まで全てが新しいものとなり、欄名も増加して一定していない。第 4 期の目次は次の通りである。

第 4 期第 1 巻（1945 年 6 月 15 日出版）

編者「三周年を迎えて」（三週年的話）

紀念特輯

石上玄一郎「佐藤女史及びその文学の足跡」（佐藤女士及其文學的足跡）

陶晶孫「日本からアメリカ、そして中国へ」（從日本到美國到中國）

内山完造「思い出の言葉」（回憶漫語）

草野心平「佐藤女史の思い出」（憶佐藤女士）

関露「私と佐藤俊子女士」（我和佐藤俊子女士）

片言三則

羣音「ナチスとドイツ女性」（納粹與德國婦女）

[154]原文「佐女士在世時就有過這樣一個一件、説是從四卷一期出一個革新號。在革新號中把以前的幾個長篇暫時停止、換一些新的東西。」（編集後記『女聲』、4 巻 1 期、1945 年 6 月 15 日）

正之「生死の闘争」（生死的搏鬥）

小文「母親を保証するために新法令」（保障母親的新法令）

東方明「スコットランドの公爵夫人」（蘇格蘭公爵夫人）

散文隨筆

何若「純粋ではない」（不純粋的）

関露「リズムのない歌」（没有節拍的歌唱）

文人逸事

藩屏「接見室と靴」（會客室和靴子）

家庭與兒童

梵慈「春夏の小児病及びその予防法」（春夏季的小兒病及其預防法）

珍珠「子どもたちへの言葉」（寄小朋友）

文藝創作

予且「媒酌」（短篇小説）

江口近子（煙袋訳）「疎開先の子どもたちへ」（寄給被疎散的孩子）

新幗風「行商してまわる」（跑單幫）

長篇連載

W・ワーズワース（訳：小光）「虹」

詩

李璈「春の歌」（春天之歌）

鳴江「牧歌」

評介（紹介）

尚穆「雑文を読む」（讀雜文）

特写（クローズアップ）

草人「人員整理」（裁員）

雁足傳書（読者の投稿）

傻子「女性建築家の夢」（女建築家的夢）

武年「赤い蝋燭、師を拝す、青春の落ちぶれ」（紅蠟燭、拜師父、青春潦倒）

小和尚「彼は彼女の器械のところで話すことができない」（他不敢到她的機器上談話了）

琪「一人のよく笑う女郎」（一個愛笑的女郎）

諸人「いくつかの質問」（小問數則）

第 4 期第 2 巻（1945 年 7 月 15 日出版）

煥雲「和平の中での女性代表大会」（和平聲中的婦女代表大會）

煒「師生の道」（師生之道）

周玉「こちらも女性、家庭、婚姻を語る」（也談婦女、家庭、婚姻）

鼐「見張り台」（瞭望臺）

周作人（知堂）「佐藤女史の事」（佐籐女士的事）

報告文學

洛川「暗い部屋」（黒暗的屋子）

家庭與兒童

珍珠「子どもたちへの言葉」（寄小朋友）

陳聯「机を打った」（寫字台賣掉了）

林一松「毛糸」（織絨線）

隨筆

関露「都市の煩悩」（都市的煩惱）

詩

丁景唐（歌青春）「雨天」

方曉「苦学の詩」（苦學詩章）

短篇小説

李璈「食べる」（吃）

石井謨（煙袋訳）「イサドラ・ダンカンと現代バレエ芸術」（鄧肯與現代跳舞藝術）

（作者記載なし）林蔭訳「ダンカンの悲劇」（鄧肯的悲劇）

評価

夢茵「『星の下の夢』を読んで」（讀了「星底夢」）

長編連載

W・ワーズワース（訳：小光）「虹」

雁足傳書（読者の投稿）

雪琰「彼女の母が恋をした」（她底母親戀愛了）

志豪「子どもに気を持たせるな」（不要吊小孩子胃口）

麗娜「一つの失敗が千古の恨みとなる」（一失足成千古恨）

壽娟「ラブレターはどのように書くべきか」（情書怎樣寫）

似萍「彼に私のところに来させないようにする」（請他不要來找我吧）

諸人「いくつかの質問」（小問數則）

編集後記

（注：現在までに判明している共産党地下工作員は網掛けで示した）

3.2.3　『女聲』各欄の内容について

塗曉華『上海淪陷時期「女聲」雑誌研究』にはそれぞれの欄について概要が記してあるが、具体的な内容に関してはあまり記されていない。ここでは『女聲』の特徴を明らかにするために、「評論」「文藝」欄について具体的な内容を見ていきたい。

①　「評論」（第3巻第10期より「隨感」と改名）

「評論」欄は巻頭語「先聲」のすぐ後に置かれることが多く、『女聲』の中でも人気のあった欄である。内容は女性や社会に関する評論が多い。執筆者は関露が最も多く、芳君のペンネームで24篇、関露の名で2篇、また「隨感」に改名してからも芳君のペンネームで3篇掲載している。また、文化人の中では、周作人（知堂）や潘予且[155]が寄稿している。

ここで「評論」の内容を、メイン執筆者である関露の主張を例に挙げながら見ていきたい。

第四章でも少し触れるが、「評論」で関露はしばしば女性問題について論じている。例えば「女性の文芸から婦女についてまでを論じる」（從關於女性的文藝講到婦女）（『女聲』第1巻12期4頁）では、文学を通して女性の解放を唱え、「職業婦女與無職業婦女」（職業女性と無職女性）では労働女性に対して「よい前途のために彼女たちは自分自身の個人的な享楽を放棄して、生活を社会に近づけるべきで

[155]潘予且(1902―1990)安徽省涇県の人。原名は潘序祖、字は子端、ペンネームは潘予且、水繞花堤館主等。1930年代より長編小説執筆を開始、以後は主に予且のペンネームにて作品を発表する。青年時代は上海の聖約翰大学（St. John's University）にて学に、後に同大学が学生の社会運動に圧力を加えたことに反対し、光華大学に編入。卒業後、前後して上海中華書局、光華大学付属光華中学校の歴史教員となる。抗日先生開始後は、家族とともに上海を離れる。1939年夏に上海に戻り、また学校教員、後に『中華日報』主幹を任じる。1942年、日本へ赴き大東亜文学者代表大会に参加、1943年に『予且短編小説集』で第二回大東亜文学賞正賞を獲得、また中華代表団の一員として、北京には中国文化人協会設立の活動に参画。1944年南京に赴き、中国文学年会及び第三回大東亜文学者代表大会に参加。（『中国淪陥区文学大系』、広西教育出版社、2000年を参照）

ある」[156]と女性が社会に出ていくことを提唱し、「從“中國的女人道”到“男人煩惱”」（中国の女性道から男性の煩悩まで）でも同様に「女性の主な生活と人々への任務は裁縫と割烹に限られるものではない。女性は社会と国家の一人の人民なのである」[157]と女性に対して社会国家の一員としての自覚を促す文章や、「論離婚」（離婚を論じる）のように夫が心変わりをしてしまった際に、妻は「努力して社会へ出ていくべきであり、努力して独立した生活技能を得るべきである。夫が自分に対してよくしなければ、自ら夫から離れて、可哀そうな捨てられた女になってはいけない」[158]と女性は経済的に独立するべきであることを繰り返し指摘している。また、創刊号の「中國婦女求學問題」（中国女性の求学問題）では「女性の知識レベルを高め、学校に行く女性の人数を増やすことで、女性は真の女性解放を得ることができる」[159]とも述べており、女子教育の促進により女性の能力や技能を高め、社会に進出することによって女性解放が実現するという主張がなされている。ここで注意すべきは、関露は伝統的な家庭に閉じ込められている女性たちが抱える問題についてはほとんど触れていないことであり、関露の女性解放に関する関心が女性の経済的独立や社会進出に強く向けられていたことがわかる。

②「文藝」

「文藝」欄も『女聲』の中では「評論」同様に人気があり、読者から文藝欄の拡大の要望もあった。内容は長短編小説、散文、評論、劇作等である。詳細は第四章にて後述するが、執筆者の中でもっとも多く掲載されたのは関露である。関露の名で 25 篇、芳君、芳の名で各一篇発表している。

文藝欄の代表的連載小説として関露『黎明』が挙げられる。関露には自伝三部作と呼ばれる作品があり、第一部は『新旧時代』（1940 年上海光明書局出版）、第二部は『黎明』、第三部『潮』（未発表）である。このうち第二部の『黎明』は 1943 年 10 月『女聲』第 2 巻第 6 期から 3 巻第 12 期まで 19 回にわたり掲載された（『女聲』停刊とともに終了、未完）。

---

[156]原文「其為著好的前途、她們是應該在某些地方放棄了自己的個人享樂、使自己的生活多接近一些社會」（芳君「職業婦女與無職業婦女」『女聲』第 2 巻第 1 期、1943 年 5 月、5 頁）

[157]原文「女人的主要生活和對於人們的任務並不限制於縫織布和烹飪、女人是社會與國家的一個人民」（芳君（関露）「從“中國的女人道”到“男人煩惱”」『女聲』第 3 巻第 4 期、1944 年 8 月、5 頁）

[158]原文「應該努力打出社會的出路、努力得到獨立生活的技能、丈夫對自己不好、就自動離開他、不要做一個可憐而被遺棄的女人！」（芳君（関露）「論離婚」『女聲』第 3 巻第 7 期、1944 年 11 月、5 頁）

[159]原文「提高婦女的知識水準、提高求學婦女底數目、這才能夠使婦女得到真正的解放」（関露「中國婦女求學問題」『女聲』、1942 年 5 月創刊号、5 頁）

第一部の『新旧時代』について関露は1940年3月に発表した後記の中で、「私は私自身を中心に、私たちの民族革命の解放闘争の中で、私たち全民族が封建勢力と帝国主義に反抗し、新民主主義国家に向かおうとしている時の女性の生活を書いた。彼女のような生活経験を有する者が、果たして彼女がその後歩いた道を行くべきだったのかどうか。夢と自由と解放を追い求めた女性はどうしたら自身の希望を得ることができるのか。旧い封建的な生活から新しい生活に至った彼女の生活の過程がどのようなものだったのか、これらを私は読者に告げたかったのです」[160]と記している。

『黎明』は『新旧時代』の続作ともいえる作品であり、小説の初めに、関露は『黎明』執筆のいきさつを記している。「四年前に『新旧時代』を出版した。あれは私が計画していた長編小説の第一部であり（中略）『黎明』の物語は『新旧時代』に続くものだ。読者が理解しやすいように、以前の文章に登場した重要人物の名前は変えていない」[161]と、『黎明』が『新旧時代』の続編である自伝体小説とした。しかし、『黎明』にはあきらかな政治的色彩はみられない[162]。テーマは「あの特殊な環境の中で生活と戦った青年の心情であり、努力して特定の時代の足跡を描写した青春の歌である。私は私たちの愛する物を愛し、（中略）憎むものを憎む」[163] とある。また第三部の『潮』は、1944年4月10日の『雑誌』第13巻第1期「編集後記」によれば、「関露女史の『新旧時代』と『黎明』に続く『潮』は来月から連載開始する」[164]と予告されており、この予告は1944年5月20日の『中国文学』第5号にも掲載された。また、1943年9月に関露が日本から帰国の際に、北京で知り合った友人に宛てた手紙の中でも「『女聲』月刊には長編『黎明』の連載があり、来月からは『雑誌』でも『潮』の連載が始まる。『潮』の執筆方法は『黎明』

[160]原文「我是拿我自己做中心、寫一個在我們民族革命解放鬥爭中、在我們底全民族都在反抗封建勢力跟帝國主義、走向新民主主義國家時候的女性底生活。一個經過了她那種生活的女性是否應該走到她後來所走的這路上、一個一向都夢想與追求著自由跟解放的女性、要怎麽樣才能獲得自己底希望。一個如何從舊的封建生活走向新生活的她底生活過程、這些都是我要告訴讀者的」（自光明文藝叢書社 1940年7月初版。『海上文學百家文庫 安娥 關露 白朗卷』、上海文藝出版社、498頁）

[161]原文「四年前我出版了『新舊時代』、那是我的一本有計劃的長篇小說的第一部（中略）『黎明』的故事是接著『新舊時代』而來的、為著使讀者便於了解、前文中的幾個重要人物的名字都不改」（『女聲』第2卷第6期）

[162]丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社、126頁

[163]原文「在那個特殊環境裏生活和戰鬥著的青年一代的心緒、努力譜寫帶著特定的時代印記的青春之歌。我愛我們所愛、（中略）我憎我們所憎」（丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社、126頁）

[164]原文「關露女士繼『新舊時代』與『黎明』後的『潮』將在下期開始連載」、『雑誌』第13巻第1期、1944年

とは少し異なるが、内容的には関係がある」[165]とあったが、『雑誌』に第三部『潮』が掲載されることはなかった。

第二部『黎明』の内容は以下の通りである。女性主人公の杜菱は大学時代に凌青と知り合い、初恋をしたが、凌青には婚約者がおり、しかも卒業と同時に将来の義理の父と外国に留学すると決まっていた。杜菱はそれを知り、ひどく落ち込んでいたが、文学を愛好する進歩的な学生王瑜から文章を書くことを勧められる。皆とともに詩文を論じ、文学雑誌を創刊したりしているうちに、情感の世界から抜け出したという話である。関露は作品の中で、自伝的に女性の苦悩を語っており、伝統的な社会において文学に接する女性という自らの体験を通じて新しい知識女性のイメージを描いている。

また『黎明』ではこの他にも青年男女の遭遇と追求を描写している。例えば呉沼の恋愛では強烈な悲劇の烙印が押されている。若い娘の呉沼の叔父との恋愛は、一族の中では倫理を乱す行為だと見られており、叔父とは血縁関係がなかったものの、許されるものではなかった。そこで呉沼の弟が村から駆けつけて来て、姉の行為を阻止しようと試みたが、「五四」新文化運動の影響を受けた姉の意志は固く、弟の説得は失敗した。そこで弟は重い肺病で入院していた叔父のもとへ行って叔父を脅したため、叔父が逝去したという話である。ここには新旧時代における古い伝統勢力が進歩青年に引き起こした悲劇が描かれている。

関露の『黎明』は同時期に出版された蘇青『結婚十年』と同じく、ともに実生活の体験をベースに描かれており、新旧交替の時代における青年たちの恋愛や結婚における矛盾を記している。関露は『黎明』について、「努力して恢復しようとしたのは 20 世紀初頭の女性の社会地位に関する各種の旧きを廃し、新しきを立てるという思想」だ[166]と創作目的を語っている。

3.3 特集号

次に『女聲』でわずか 3 回しか組まれなかった特集号について見ていく。

（1）收回租借特輯（第 2 巻第 4 期 1943 年 8 月 15 日）

---

[165]原文「『女聲』雑誌月刊上有一個長篇連載『黎明』、從下月起『雑誌』上也有一個連載『潮』—『潮』底寫作方法跟『黎明』有一點不同、但是内容是有關的」

[166]原文「努力重振的是二十世紀初關於女性社會地位的各種除舊立新的思潮」（関露「黎明」『女聲』、第 2 巻 6 期、1943 年 10 月）

1943 年 7 月 30 日に上海共同租界[167]が親日政権である汪精衛の国民政府に返還されたことを記念して組まれた特集である。日本は 1941 年 12 月に上海を陥落、その後 1945 年まで占領していたので、実際には汪精衛政府に共同租界が返還されたとはいっても、それは表面的なものであり、実際の統治権はそのまま日本にあった。

そのような状況で、『女聲』は租界返還特集を組んだ。返還から僅か 15 日後に出版しており、かなりタイムリーな話題であったと考えられる。この特集では芳君「收回租界與婦女」（租界返還と婦女）、孤嶼「最光榮的一頁」（最も光栄な一ページ）、華「上海租界的沿革」（上海租界の沿革）、方媚「婦女節約和建設新中國」（婦女の節約と新中国建設）、雨生「八月一日（詩）」、知識人「中國知識分子對收回租界的感想」（中国知識人の租界返還に対する感想）、新道繁「舊租界之一部（小圖）」（旧租界の一部）、絢子「新上海的女人羣像（小圖）」（新しい上海の女性群像）など評論５篇、詩１首、絵画２点が掲載された。

前書き（先聲）の中で、特集を組んだ理由は「租界が返還されたのは、中国人民にとって当然のことである。この年を記念して、今回は十六頁の特集を組んだ」[168]とある。そして、注目すべきは、それぞれの立場から異なる意見を提出していることである。

芳君（関露）は「租界返還と婦女」に副題「收回租界是中國獨立的開始、是婦女解放的先聲」（租界の回収は中国独立の開始、女性解放の声）を付けて、日本の租界返還は「友好国の日本が私たちに親善を表し、私たちの平等と独立を保証してくれた。すでに先月三十日に共同租界返還の協定を締結した。これは私たちの国父孫中山先生が四十数年かけて努力をした理想であり、今日友好国の切実な協力の下に完成した。この協定は私たちが真に中華民族が独立へ向かうための一つの保障であり、中日基本条約締結以来最大の進展、そして自由平等という中華民族革命を実現させる新たな段階なのである」[169]としているが、日本に関してはこの一言しか言及しておらず、共同租界の返還を中華民族の独立や民族革命の実現と結びつけて論じ

---

[167]上海共同租界とは、上海にあった租界のうち、フランス租界を除いた数カ国が管理していた共同租界のことで、1842 年の南京条約にもとづき同 11 月から 12 月にかけて設定され 1943 年 7 月 30 日まで続いた。

[168]原文「收回租界這件事可以説是對于中國人民的一件很有道理的事。為着表示紀年起見、我們在本期中集了一個十六頁的專欄」（『女聲』第 2 巻第 4 期、1943 年 8 月 15 日、1 頁）

[169]原文「友邦日本為着表示與我們親善和保障我們的平等和獨立、已於上月三十日簽訂交還公共租界的協定。這是我們的國父孫中山先生努力了四十多年的理想、而今在友邦的誠懇協助下完成了。這個協定是我們走向真正獨立中華民族的一個新保證、是中日基本條約締結以來兩國邦交最大的新進展、也是實現自由平等的中華民族革命的新階段」（芳君（関露）「收回租界與婦女」、『女聲』第 2 巻第 4 期、1943 年 8 月 15 日、3 頁

ている。そして、テーマにある通り、話題の中心は以下のように租界返還を巡る上海女性の問題に置かれている。

文中では、「イギリス、アメリカ帝国主義は租界にて、上海の女性を二つの暗黒の地獄に引き入れた」[170]とし、それは「上流階級の女性は肉欲の誘惑に惹かれて、神経を刺激し魂の堕落に陥り、下層階級の女性は物質生活の圧迫から、自身の肉体を売り身体の堕落に遭った。これは租界が出来てから上海の女性が遭った運命だ」[171]とし、公共租界が回収されてからは「これまで幾重もの圧迫を受けていた女性たちは、新しい新天地に進んだ（中略）彼女たちはもう奴隷ではなく、新しい自由な地区の女性なのである」[172]と上海の女性たちが解放されたと、大げさに喜びを伝えている。そして、上海の女性たちの今後は、「このように生活上で先に解放された女性たちは積極的に国民としての責任を担うべきであり、未来の新中国に対して、今でも自分たちに野心を向けている以前の敵に対して、以前の敵が作り上げた力の暴力の下で倒れている女性の同胞たちに対して、これからも戦い続けるべきである」[173]と女性たちがこれからも積極的に敵に対して戦っていかなければならないことを説いており、むしろ共同租界返還を利用して、女性解放のメッセージを送っているとも読める文章である。

関露の文章に続いて孤嶼「最光榮的一頁」（最も光栄な一ページ）が掲載されている。孤嶼の文章に触れる前に、まず作者について見ていきたい。孤嶼については研究者の塗暁華が何度か考察を加えている。それによると、「孤、孤嶼、南木は文章の風格から見て同一人物だと考えられる。（中略）孤嶼は田村俊子が『女聲』の編集長であった時に、ほぼ毎号作品を発表している。『女聲』の長期的な執筆者といってもよく、『女聲』の中で「大東亜共栄」等の言葉は基本的に彼の文章から出ている」[174]とし、塗は孤嶼が日本軍関係者ではないかと推測している。

---

[170]原文「這就是英美帝國主義者借了租界的魔力、給上海婦女造就的兩種黑暗的地獄」

[171]原文「上層的婦女由於肉慾的引誘、用刺激神經去遭受靈魂的墮落；下層婦女由於物質生活的壓迫、用出賣肉體去遭受身體的墮落。這是自從有了租界以來我們上海婦女所遭遇的命運」

[172]原文「至於受着幾種重壓壓迫我們婦女也走進了一個新的天地。（中略）她們不再是奴隸、而是新自由區域中的婦女了」

[173]原文「這些生活上先受了解放的婦女該積極地負起國民的責任、對於未來的新中國、對於仍然向我蓄具了野心的舊日的敵人、對於還躺在舊日敵人淫威餘力下的婦女同胞、還應該作無窮的戰鬥才是。」

[174]原文「孤、孤嶼、南木文章內容以及文章風格、認為這是同一人（中略）孤嶼再田村俊子主編『女聲』時、幾乎每期都有作品發表、可以説他是『女聲』的一名長期作者、『女聲』中具有「大東亞共榮」之類的語句基本出自他的文章」涂曉華（2014）『上海淪陷時期「女聲」雜誌研究』、中國傳媒大学出版社、168 頁

孤嶼『最光榮的一頁』（もっとも光栄な１頁）では、租界ができてしまったのは「以前の清朝の腐敗官僚たちが、まったく少しも国家の土地や主権といった考えを持っていなかったからだ。そのために種々の屈辱をうけた。しかし今日の屈辱が洗い流されたとはいえ、しかしやはり自分たちの力ではなく、友邦の日本の協力を得て今日に至った」[175]とし、清朝にさかのぼり当時の主権意識の無さが租界を作ってしまったのであり、「今回は友邦日本が起こした大東亜戦争を経て、全東アジアに対し欧米の圧迫からの民族解放を実行した。（中略）友邦が道義の精神に則り、租界を返還し、治外法権を取り消し、種々の設置がされたのは、すべて中日が協力して大東亜戦争を完遂させるという前提にあり、それにより今回の栄光を得たのである」[176]と、日本の協力があったからこそ租界が返還できたのだと強調している。

上記二篇とまた異なる角度から記したものが、知識人『中國知識分子對收回租界的感想』（中国知識人の租界回収に対する感想）である。この文章は日本に対してまだ信用はしておらず、注意深く懐疑的な目で見ている。「上海が回収された後に、もしも上手く運営していけば、重慶に行った私たちの友人たちは大挙して上海に戻ってくるであろう。彼らが今注目しているのは、これから上海をどのように運営していくのかということである。彼らは特に日本が表面的には返還したが、実権はそのままつかんでいるのではないか、南京政府の一部の人間がそれを自身の利益にする危険がないかということに非常に注目しているのである」[177]と日本や親日政権である汪精衛政府に厳しい視線を注いで事の成り行きを見ている。この文の最後に括弧書きで編者の注が記されており、「これはある中国の知識青年の上海租界回収に対する意見の一部分であり、この中には学ぶべきものが多く存在すると感じ、敢えてこの欄で紹介する」[178]と記している。

---

[175]原文「從前清朝腐敗的官僚、簡直沒有一點國家土地和主權的思想、所以釀成了種種恥辱。不過今天雖然恥辱可是雪恥、但是仍不是我們自己力量、不過由友邦日本的協助而得到今天」（孤嶼「最光榮的一頁」『女聲』第 2 巻第 4 期、1943 年 8 月 15 日、4-5 頁）

[176]原文「這次得友邦日本發起大東亞戰爭、實行將全東亞的被歐美壓迫的民族解放起來、（中略）友邦本着道義精神、交還租界、取消治外法權、種種設施、均以中日合作協力完成大東亞戰爭為前提、所以才得到今次的光榮」『女聲』第 2 巻第 4 期、1943 年 8 月 15 日、6 頁

[177]原文「上海收回後、如果經營得好、我們到重慶去了的朋友、也必大舉歸來的。他們現在正集中視線、看我們怎樣運用上海、他們似乎尤其注意日本有沒有表面上交還實則攫取的事、南京政府的一部份子有沒有把牠作爲肥肉的危險」（知識人「中國知識分子對收回租界的感想」『女聲』第 2 巻第 4 期、1943 年 8 月 15 日 15 頁

[178]原文「這是某中國知識青年對收回上海租界所透露的意見的一部分、覺得這里也有許多該學的東西、爰敢介紹給本欄。」知識人「中國知識分子對收回租界的感想」『女聲』第 2 巻第 4 期、1943 年 8 月 15 日 15 頁

「租界返還特集」（收回租借特輯）では、バランスよく様々な立場のものが掲載されているが、その中に、日本や中国の親日政権に対して懐疑的な知識人「中国知識人の租界返還に対する感想」（中國知識分子對收回租界的感想）の一文を混入させているのは、日本出資の雑誌としては異例なことである。租界特集を全体から見ると、最初の孤嶼「最も光栄な一ページ」（最光榮的一頁）では日本の貢献について大きく宣伝し、次の関露「租界返還と婦女」（收回租界與婦女）では日本の宣伝が減り、その代わりに民族解放の視点から女性の社会問題について論じている。そして、「知識人」のペンネームで発表された「中国知識人の租界返還に対する感想」では、租界返還の後の成り行きを懐疑的な目で記している。このようにして『女聲』はできるかぎり日本の宣伝に関わる言論を減らし、中でも関露は租界返還を女性問題と関連させて、日本軍の宣伝色を抑えており、ここからも『女聲』の突出した思想的立場がうかがえるのである。

（2）春節特集（第 3 巻 11 期）

春節特集は 1945 年 3 月 15 日出版の第 3 巻 11 期で『女聲』二度目の特集が組まれた。それは、ヤルタ会談（1945 年 2 月 4 日〜11 日）の直後であり[179]、中国でも日本敗戦の噂が広がり始めた時であった。

1945 年の春節は 2 月 13 日であり、正に 11 期の編集を行っていた頃だと考えられる。『女聲』発刊からすでに二度の春節を経ているが、それまで特集は組まれなかった。この号の編集後記（余声）は「読者の声」の返信に用いられているので、特にこの理由には触れられていない。特集には洛川[180]「上海之春」、晶孫[181]・瘦菲の連名で発表した「春」、萍「春は人の間に在り」（春在人間）の三篇が収録されている。この三篇の中で、特に注目すべきは洛川 『上海之春』である。なぜなら、この原稿を投稿した時に 19 歳であった洛川も関露同様に共産党地下党員であったから

[179]ヤルタ会談ではアメリカのルーズベルト大統領とソ連のスターリンの間で秘密会談を行い、ルーズベルトはソ連の満州国の権益や千島列島等の領有要求に応じる形で、２月８日にソ連に対して日ソ中立条約の一方的な破棄、即ちソ連に対日参戦を促した。

[180]羅賓（1926－？）、広東省興寧の人。ペンネームは洛川、会明等。14 歳で共産党入党。1946 年に広東省立文理学院（華南師範大学の前身）中国文学科卒業。大隊政治処幹部、中国共産党興寧県委委員、『梅江報』総編集長等を歴任。1990 年に中国作家協会に加入。代表作に『鉄筆遊撃隊』、『洛川詩文集』等がある。

[181]陶晶孫（1897—1952）、江蘇省江無錫の人。本名は陶熾、陶熾孫。ペンネームは晶明館主、晶孫等。江蘇省無錫の人。1906 年、父とともに日本へ。小学校から大学卒業までを日本にて過ごす。1921 年 7 月に創造社の設立に参与。1925 年に発表した短編小説『音楽会小曲』で脚光を浴びる。1929 年に革命劇団芸術劇社、1930 年に左翼作家連盟に加入。1946 年には台湾へ移住、1950 年に日本に移住した。

である。小説ではまず上海の暗い一面を描き、その後に太陽が出て町全体が明るくなった。最後に町に春が来たがリンゴの木の下で登場人物の一人の女性が失踪したという内容である。「灰色の雲は厚くて、変化が多く、そこに隠れて暖かい春が来るのを待ち望んでいる。しかし低気圧の中、人々は未だ寒さを取り除けないでいる」[182]など売春婦、賭博等の戦時上海の暗い一面を描いている。そして、「風雨が暗闇の中で永遠に止むことがないように、春の中で寒さはより厳しくなった」[183]と、上海の状況がより厳しくなったことを暗に示している。その後、「太陽が出た」[184]、「人々は濃い春の気持ちと温かさを感じる（中略）なぜなら人々が希望をもち、夢の中に真実を抱いているからだ。空は明るい太陽の下にある」[185]と太陽の到来を心待ちにしていることを記し、「彼らは歌っている、永遠に衰えることのない春を巡って」[186]と太陽と春を称えている。共産党は当時から太陽に喩えられていたので、共産党が上海に来て日本軍を一掃することを心待ちにしていると読むこともできる。そして最後の一行で、しかし「リンゴの木の下から、リリスがいなくなった」[187]とあり、リンゴは赤であり、リリスは共産党党員として地下に潜った、或いは延安へと行ったという自身の境遇を婉曲に記しているのではないかと推測できるものになっている。

現在からみると明らかに共産党を讃えていると読める文章であり、洛川は学生を主人公とすることでカモフラージュしたのだろうが、しかしそれでも当時日本軍出資の『女聲』に掲載することは非常に大胆な行為であったと考えられる。

（3）紀念特輯（第 4 巻第 1 期 1945 年 6 月）

この号は佐藤俊子逝去記念特集号である。組まれた理由を「編集後記」（「余声」より改称）には「本社社長佐藤女士が先月突然病気で亡くなった。本雑誌にとっては本当に大きな痛手である。彼女を記念し、同時に彼女が上海で過ごした三年

[182]原文「灰色的雲層是深厚的、多變化的、隱藏着一種溫存的晴天的願望。但是低氣壓中、人們並未能掃除寒意」（洛川「上海之春」『女聲』、第 3 巻 11 期、1945 年 3 月 15 日、3 頁）
[183]原文「風雨在黑暗中像永遠不會停一樣、抖峭的寒氣更慎重了。」（洛川「上海之春」『女聲』、第 3 巻 11 期、1945 年 3 月 15 日、3 頁）
[184]原文「太陽出來了」（洛川「上海之春」『女聲』、第 3 巻 11 期、1945 年 3 月 15 日、3 頁
[185]原文「人們是感到濃馥的春情與和暖了。（中略）因爲人們懷著希望、懷著夢裏的真實。天空在明朗的太陽下」（洛川「上海之春」『女聲』、第三 3 巻 11 期、1945 年 3 月 15 日、3 頁）
[186]原文「他們在唱歌、繞著永遠不會衰老的春天」（洛川「上海之春」『女聲』、第 3 巻 11 期、1945 年 3 月 15 日、3 頁）
[187]原文「苹果樹下、立里斯却不見了」（洛川「上海之春」『女聲』、第 3 巻 11 期、1945 年 3 月 15 日、4 頁）

間を記念して、私たちはこの三周年と佐藤女士の紀念特集号を出版した」[188]と、編集長という『女聲』の柱を失った痛手を記しているが、「私たちは悲しみにより失望や弱さを感じることはない。私たちはより大きな努力で、私たちに向かってくる打撃と障害を打ち負かす。私たちはよりよく仕事をこなし、志をより堅くし、苦難と困難に抵抗する」[189]と今後も困難に負けず刊行を続ける意思を示している。

特集号には石上玄一郎[190]「佐籐女士及其文學的足跡」（佐藤女士及びその文学の足跡）、陶晶孫「從日本到美國到中國」（日本からアメリカそして中国へ至る）、内山完造[191]「回憶漫語」（回想文）、草野心平[192]「憶佐藤女士」（佐藤女士の思い出）、関露「我和佐藤俊子女士――悼佐藤女士――」（私と佐藤俊子女士――佐藤女士を悼む――）の五篇が掲載されている。また、その他関連する文章として次の第 4 巻第 2 期に知堂（周作人）「佐藤女士的事」（佐藤女史のこと）が掲載されている。寄稿者は皆生前佐藤俊子と交流があり、それぞれの文章から佐藤俊子への評価の一面を知ることができる。

石上玄一郎「佐籐女士及其文學的足跡」では、佐藤俊子の足跡を年譜を追いながら著述している。石上は「私と女士はただ上海で公開の席で何度かお会いしただけ」[193] と深い付き合いはなかったと述べているが、文中では前年の 1944 年に、初めて佐藤と出会った時のことを叙述している。それによると、「去年、私が初めて女士にあった時に、彼女は私に「石上さん、私は長い間怠けていました。でも、今でも私はまだ創作を続けたいと思っている」と吐露した」[194]とあり、晩年、ほとん

---

[188]原文「本社社長佐籐女士突於上月病故、對於本刊實在是一個很大的打擊。爲了紀念她、同時紀念她的日子正是三週年紀念的日子、我們就編出了這個三週年和佐籐女士的記念特號來。」（『女聲』編後記、第 4 巻第 1 期、1945 年）

[189]原文「我們並不因悲哀就感到失望和軟弱、我們要用更大的努力去向我們的打擊和障礙做報復。我們要把工作做得更好、志向立得更堅、更要能夠抵當堅苦困難」（『女聲』編者「三週年的話」、第 4 巻第 1 期、1945 年、2 頁）

[190]石上玄一郎（1910－2009）小説家。郷里東北の風土を背景に、現象学や仏教思想などの影響を受けた独自の実存主義的作風を展開した。1944 年 4 月、知人の誘いで上海に渡り、1947 年 1 月に帰国した。

[191]内山完造（1885－1959）岡山県の人。日本の書店主・文化人。1930 年代以降、中華民国上海と日本東京の両方で書店経営者として成功し、日中文化人交流に大きな影響を与えた。

[192]草野心平（1903－1988）福島県の人。詩人。1938 年 2 月から 4 月まで、『帝都日日新聞』の記者として満州・中国に渡り、その後、南京に成立した親日政権汪兆銘の中華民国国民政府の宣伝部長を務めていた大学の同窓生に誘われ、宣伝部顧問として終戦まで南京に滞在する。

[193]原文「我和女士認識的祇是到滬以來在公開的會席上見過幾次」（石上玄一郎「佐籐女士及其文學的足跡」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、4 頁）

[194]原文「去年、當我初次見到女士的時候、她對我這樣傾吐：“石上先生、我怠惰了很久了、不過這個時候我還是想繼續寫作呢。」（石上玄一郎「佐籐女士及其文學的足跡」『女聲』第 4 巻第 1 期、1945 年 5 頁）

ど創作活動をしなかった佐藤俊子が忙しい『女聲』編集の間でも、創作の願望があったことがわかる。石上はそのような佐藤の姿を「求道者」[195]と称している。

陶晶孫「從日本到美國到中國――悼佐籐女士――」では、佐藤について「彼女は進歩思想があり、孤独で屈強な個性を持ち、男と女の社会において極めてよいお手本となった」[196]と評価している。内山完造「回憶漫語」では「預兆」を話題とし、佐藤は内山が自身の妻を静安寺に埋葬したと聞いて、「私もあなたに（筆者補：静安寺の墓地購入の）手続きをして欲しい」[197]と頼み、それに内山が応えると「それなら安心した」[198] と言い、その後も何度かこの件について聞きに来たと記している。草野心平「憶佐籐女士」では、草野が佐藤の部屋に行き、建物の廊下や階段には蜘蛛の巣が至る所に張り、暗い階段を毎日上り下りしていたことを思うと、「やるせない気持ちになる」[199]と述べ、またそのような暗い部屋に住み「多くの悲しい渦」[200]があったとしても「他人に対しては明る」[201]かったと述べている。そして、その佐藤がどんなに辛いときにでも明るかった理由は「それは彼女の自覚と教養が彼女をそうさせている」[202] と評価している。また、佐藤が逝去した時のことについても「『女聲』の校正が終わった二日目に」[203]亡くなったとあり、最後まで『女聲』の編集に取り組んでいたことが分かる。そして、草野は「佐藤女士は最後までやはり一人の孤独な女性であり、ペンを用いた労働者であった」[204]とまとめている。そして最後に『女聲』について、「本雑誌はようやく独立した形で中国の友人たちの手により出版された。このようにして私たちの最初の理想は実現できた」[205]と、日本軍の管轄下であったが、中国人である関露が『女聲』を継いだことを評価している。関露は『女聲』編集者として三年間仕事をし、また一年七か月の間佐藤と共同生活をし、苦楽を共にしてきた最も身近な存在である。「我和佐藤俊子女士

---

[195]石上玄一郎「佐籐女士及其文學的足跡」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、5 頁
[196]原文「她是一個進步思想的、孤立而屈強個性的、可以誇示於男女性社會的、一個極好標本」（陶晶孫「從日本到美國到中國――掉佐籐女士――」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、5 頁）
[197]原文「我也想請你辦一下呢」（内山完造「回憶漫語」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）
[198]原文「那我放心了」（内山完造「回憶漫語」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）
[199]原文「心裏過於不去」（草野心平「憶佐籐女士」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）
[200]原文「有着許多悲傷的漩渦」（草野心平「憶佐籐女士」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）
[201]原文「對人却是明朗的」（草野心平「憶佐籐女士」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）
[202]原文「是她底自覺和教養令她這也」（草野心平「憶佐籐女士」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）
[203]原文「在『女聲』校對完畢的第二天」（草野心平「憶佐籐女士」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）
[204]原文「然而佐籐女士到最後仍然是一個孤獨的女人、筆的勞動者」（草野心平「憶佐籐女士」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）
[205]原文「本刊概漸漸以獨立的形態由中國的友人發刊了、這樣我們最初的理想得以現實化了」（草野心平「憶佐籐女士」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）

――悼佐籐女士――」（私と佐藤俊子女士――佐藤女士を悼む――）では、他の人たちには書けなかったであろう佐藤の一面を記している。例えば、佐藤は周囲の人々から「変わった性格」[206]と見られ、佐藤の前ではイエスマンとなり「本当のことを言わなかった」[207]と述べており、また、「朝、新聞で戦況のニュースを見ると、彼女は眉間にしわを寄せて私に「文化が破壊された！」と言った」[208]、とも述べており、戦争により中国文化が破壊されていくことに心を痛める様子を伝えている。

佐藤は子も孫もおらず、ソファーに座り蝋燭の前で読書をする姿は傍からみると寂しそうに映るが、実際には「しかし実情はそのようではない。暇な人こそ寂しさを感じるのであり、彼女は寂しくなかった。なぜなら彼女は忙しすぎたからだ。彼女はあまりにも多くのことを考えすぎ、あまりにも愛しすぎ、あまりにも希望を持ちすぎていた。あまりにも多すぎて、手に入らなかった。そのことに彼女は苦しんだのだ。」[209] と、最後まで『女聲』の編集に忙しく取り組んだ佐藤の様子が描かれている。

3.4 日本文学の翻訳

『女聲』には 10 人余りの日本人作家、学者の作品が翻訳掲載されているが、ここでは『女聲』がどのような基準で日本の文学作品を選択し翻訳掲載したのかを考えていきたい。当時上海における日本文学翻訳作品に関する先行研究を見ていくと、まずは日本によって上海に設置された東方文化編訳館の存在が注目される。木田隆文「中日文化協会上海分会と戦時上海の翻訳事業――武田泰淳「上海の蛍」を手掛かりとして」[210]によると、翻訳館は中日文化協会（上海分会）の下部組織であり、「これまでは中支における日本の文化工作機関としての評価が一般的であった」。その目的は「崇高たる日本文化を無条件に中国に移入する」[211]ことであり、そのた

---

[206]原文「脾氣怪」（関露「我和佐藤俊子女士――悼佐籐女士――」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）

[207]原文「大家都不跟她説真話」（関露「我和佐藤俊子女士――悼佐籐女士――」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、6 頁）

[208]原文「清早上、看見報上戰事的消息、他皺着眉、跟我説：“文化摧毀了”！」（関露「我和佐藤俊子女士――悼佐籐女士――」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、7 頁）

[209]原文「但情形並不如此、閑空的人才會感到寂寞、她不寂寞、因為她太忙了。她想的太多、愛的太多、希望的也太多；太多、但是得不到、因此她苦悶了！」（関露「我和佐藤俊子女士――掉佐籐女士――」『女聲』、第 4 巻第 1 期、1945 年、7 頁）

[210]木田隆文（2017）「中日文化協会上海分会と戦時上海の翻訳事業――武田泰淳「上海の蛍」を手掛かりとして」、『戦時上海グレーゾーン』、勉誠出版、152 頁

[211]同上、152 頁引用の林広吉「上海文協の進路」『文協』第二巻第五・六合併号、1944 年 9 月

めに東方文化編訳館が 1944 年 6 月に設立された。『女聲』の佐藤俊子、関露は同分会の文学専門委員だった[212]。木田はこの編訳館の性質について「いわば汪兆銘政権支配下における日中の文化交流の達成を演出し、それによって大東亜文学者大会の開催地としての面目を保つべく発足させられた組織だったのであるとも考えられる」[213]と述べている。

実際の編訳館における日本文学作品の翻訳状況について、木田によると、『大陸日報』に「発足から約一年で三十五本（中国語訳三四本、日本語訳一本）の翻訳が完成」[214]という記事が載ったが、実際には翻訳完成の予告だけにとどまり、「そもそも出版機関であり編訳館自体が出版困難な状況で企画され、発足後も実際に出版できないことを承知で翻訳だけを量産し続けていたことを示している」[215]とし、具体的な出版物が確認されていないと指摘している。また翻訳に携わった中国人もその多くが「左翼くずれ」[216]であったことも注目に値する。つまり、多くの左翼人士が日本の文化工作機関の中で、翻訳作業に従事していたということだ。

では『女聲』に翻訳掲載された作品はどのようなものであったのだろうか。表４にまとめると次のようになる。

[212]同上、152 頁引用の「文協文学専門委員を招集」『大陸新報』（1944 年 8 月 13 日）による
[213]同上、155 頁
[214]同上、157 頁
[215]同上、158 頁
[216]同上、161 頁引用の武田泰淳「上海の蛍」収録の「汗をかく壁」

表４『女聲』掲載の日本文学翻訳作品

作者	作品名	翻訳者	掲載巻・欄目名
高橋敬三	『南洋的海底動物』（上）	錫熹	第 3 巻 7 期「趣味叢談」
	南洋的海底動物』（下）	錫熹	第 3 巻 8 期「趣味叢談」
	『南洋的海底動物』（續）	錫熹	第 3 巻 9 期～12 期「趣味叢談」
武者小路実篤	『愛與死』	荻崖	第 3 巻 3 期～8 期「文藝」
豊島與志雄	『銀笛和金毛皮』	綠妮	第 3 巻 1 期～2 期「文藝」
	『銀笛和金毛皮』（下）	綠妮	第 3 巻 3 期「児童」
	『麵和石頭』	綠妮	第 3 巻第 4 期「児童」
	『鞋匠大王』	無署名	第 3 巻第 5 期「児童」
	『黃洋的象』	無署名	第 3 巻第 8 期「児童」
	『黃洋的象』（續）	無署名	第 3 巻第 9、11、12 期「児童」
火野葦平	『宋公館怪談』	荻崖	第 3 巻 10～12 期「文藝」
小宮義孝	『稻和螟虫』	锡熹	第 2 卷第 7 期「文藝」
宮澤賢治	『定伴繁多的館子』	無署名	第 2 巻第 8 期「文藝」
小泉八雲	『女性中心的螞蟻』	辛夕照	第 2 巻第 10 期「文藝」
稻垣	『阿清祖母』	靈	第 3 巻第 12 期「文藝」
江口近子	『寄給被疎散的孩子』	煙袋	第 4 巻第 1 期「文藝創作」
石井謨	『鄧肯與現代跳舞藝術』	煙袋	第 4 巻第 2 期

（『女聲』目録に基づき筆者作成）

これらの作品は、「文芸欄」、「児童欄」、「趣味叢談欄」などの欄に掲載された。そのうち「文芸欄」には以下のものが掲載された。

①武者小路実篤「愛與死」（原題：愛と死）[217]（『女聲』第 3 巻第 3 期から第 8 期まで六回にわたり連載）。第一回と第六回に翻訳者の訳者荻崖による付記が掲載されている[218]。そこには武者小路実篤の作品がこれまで魯迅等により翻訳されてきたこと、「愛と死」は昭和 14 年（1939）に発表された際に、「日本の文壇に非常に大きな驚きと衝撃」を与えたこと、そして当時五十五歳であった武者小路がこのように若々しく、情熱を持った作品を描けることは本当に珍しいことだ、とある。

②火野葦平[219]「宋公館怪談」（第 3 巻 10 期から 12 期までの三回掲載）

未完。内容は当時の中国広東を舞台とした怪談。しかし、掲載作品を見る限り、政治的メッセージは認められない。

[217]原文は「愛と死」として 1939 年に『日本評論』に発表。
[218]荻崖、「翻訳付記」、『女聲』第 3 巻第 3 期、1944 年
[219]火野葦平は 1937 年に日中戦争に応召し、その後、報道部へ転属とあり、軍部と深い関わりがあった。代表作に兵隊三部作があり、兵隊小説家と称される。

③小宮義孝[220]「稲和螟虫」（第 2 巻第 7 期に掲載）

小宮は上海に十数年住んで、寄生虫の研究を行っていた人物である。文章は当時の上海周辺における害虫被害と駆除、自身の少年時に日本で見た害虫の駆除の方法等を記した知識普及のための読物である。政治性は一切ない。

④小泉八雲「女性中心的螞蟻」（原題：Beyond Man）（第 2 巻第 10 期に掲載）

蟻の世界を人間世界に喩え男女の平等を表している作品。辛夕照（丁景唐）はこの文章を翻訳した理由について「前書き」で次のように書いている。

「女性が中心のアリの世界を描写しており、男性がはるかに女性より優れ、男女の平等であるべきでないと肯定する人たちに対して、とてもよい反駁となる一篇だ」[221]と翻訳者の立場を鮮明に表明している。

⑤宮澤賢治「定伴繁多的館子」（注文の多い料理店）（『女聲』第 2 巻第 8 期）

イギリス軍の服装をした二人の兵士が山中で山猫に食べられそうになるのを鉄砲を持った猟師に助けられるという話。作中には帝国主義への皮肉が込められており、非常に大胆な選択であったと言える。

⑥稲垣[222]「阿清祖母」（『女聲』第 3 巻第 12 期）

未完で、第二章の途中まで掲載されている。作者名が稲垣としか書いておらず、作者のフルネーム、原作名共に不明。

また「児童欄」に掲載された翻訳作品には、豊島與志雄[223]の作品のうち「銀笛和金毛皮」（原題：銀の笛と金の毛皮）は文芸欄に収録されたが、「銀笛和金毛皮」（下）以降、「麺和石頭」（うどんと石）、「鞋匠大王」（太一の靴は世界一）、「黄洋的象」（象のワンヤン）、「黄洋的象」（續）はすべて児童文学作品として児童欄に掲載された。

「趣味叢談欄」に掲載されたものは高橋敬三「南洋的海底動物」（上）、同（下）、（續）があり、内容は珊瑚、山椒魚、亀類の生態に関するものである。（続）の文末に（待続）とあるので、もともとは連載が続く予定であったようであるが打ち切りとなった。政治的要素は全くない。

---

[220]小宮義孝（1900-1976）寄生虫学者。1931 年に上海自然科学研究所に入所、寄生虫について研究を行う。

[221]原文「因寫女性中心的螞蟻世界、對於那些認男子遠較女子超優、而肯定男女不應平等為天經地義的人們、是一篇很好的駁斥文。」（『女聲』第 2 巻 10 期、1943 年、34 頁）

[222]稲垣は作家の苗字だと思われるが、実名か仮名かは分からない。

[223]豊島與志雄（1890－1955）、小説家、翻訳家、仏文学者、児童文学者。法政大学名誉教授等を歴任する。日本芸術院会員。

その他、関露が編集長になってからは日本人の作品が二篇翻訳収録されている。一つは江口近子「寄給被疎散的孩子」（ばらばらになった子供たちへ）である。「編集後記」には「『寄給被疎散的孩子』は母性愛について描写したもので、この文章の中で、作者は私たちに戦争中の日本人の母性の暖かさを描写している。これは一通の手紙ではなく、一篇の散文の抒情詩だと言える。この作品は日本語から翻訳した」[224]とある。作者の江口近子がどのような人物であるかは不明である。もう一作は石井謨「鄧肯與現代跳舞藝術」（イサドラ・ダンカンと現代バレエ芸術）であり、こちらも編集後記には「日本人作者石井謨は世界のバレエ芸術ついて深く研究している人物であり、読者にこの女性ダンサー、イサドラ・ダンカンについて一歩進んで理解してもらうために特別に「鄧肯與現代跳舞藝術」（イサドラ・ダンカンと現代バレエ芸術）を紹介した」[225]とある。

『女聲』に掲載されたこれら翻訳作品を見ると日本の文学作品の翻訳は 1943 年 11 月発行の第 2 巻第 7 期から停刊の第 4 巻第 1 期まで毎号一篇以上掲載されていることがわかる。これは丁度、第二回大東亜文学者大会が終了した時期に当たり、この大会で「陶亢徳が共同翻訳機関設置を提言」[226]していたことが、同大会に参加していた佐藤俊子、関露に影響していたのかもしれない。そうであればこの時期から『女聲』に日本の文学作品が翻訳掲載され始めた理由も納得がいく。

さて、掲載された作品群には一つの共通点が浮かび上がる。それはすべての作品を通じて日本宣揚や愛国的な言論、或いは政治的なメッセージがほとんどなく、逆に宮沢賢治「注文の多い料理店」のような帝国主義を皮肉った作品まで掲載されているということである。その他の掲載作品はどれも文芸作品や自然科学といった分野であり、これらも『女聲』の内容が、女性の問題に集中せずに、表面的にはバラエティに富んだ総合雑誌という体裁をとり、戦略的な紙面構成をしていたからだと言える。また、掲載作品の選択において、佐藤俊子、関露が文学委員を務めていた東方編訳館の「崇高たる日本文化を無条件に中国に移入する」[227]という趣旨に沿いながらも、政治的メッセージを有する作品を敢えて掲載しなかったことは、『女

---

[224]原文「『給被疎散的孩子』是描寫母性的愛。在這篇文章裏、作者向我們描寫了一個在戰爭中的日本母性的溫存。這不是一封信、可以説是一篇散文的抒情詩。這是從日文翻譯的」（『女聲』編後記、第 4 巻 1 期、1945 年）

[225]原文「日本作者石井謨是一位對於世界跳舞藝術有深刻研究的人、爲了使讀者對於這位女跳舞家鄧肯更進一步地了解、我們特別介紹了『鄧肯與現代跳舞藝術』這篇文章」（『女聲』編後記、第 4 巻 2 期）

[226]木田隆文（2017）「中日文化協会上海分会と戦時上海の翻訳事業――武田泰淳「上海の蛍」を手掛かりとして」、『戦時上海グレーゾーン』、勉誠出版、155 頁

[227]同上、155 頁掲載の林広吉「上海文協の進路」『文協』第二巻第五・六合併号、1944 年 9 月

聲』の立場の表明とも考えられる。そしてこれは佐藤俊子がかつて北京時代に執筆した「支那趣味の魅力」（六）に記されている「政治性を含んだ日華文化交流問題などについて考へたりすることは、全くいやになる。」[228]と日本の政治問題から距離を置こうとした態度と一致する。

3.5 小結

以上、本章では『女聲』の体裁及びその中心思想について、『女聲』の出版背景と内容について考察を加え、その結果以下のことがわかった。

１、『女聲』は「広く婦女と青年の読物」となることを目指したため、初期の段階から読者の興味を大切にするために多くの欄を設定し、賞金を出し、常に読者からの投稿を呼びかけた。また、「先生の話」のような文章を避けるために、著名人への原稿依頼を極力しなかった。「評論」ではもっとも執筆回数の多い関露の女性に関する主張を考察したが、女性は社会に進出することにより真の解放を得られるという論調が主流であり、伝統的な家庭における女性の問題についての文章は少ないことがわかった。「文藝」でも、メイン執筆者である関露の『黎明』に考察を加えた。関露の『黎明』は同時期の蘇青『結婚十年』と同じく、ともに実生活の体験をベースに描かれており、新旧交替の時代における青年たちの恋愛や結婚を通して古い恋愛観や結婚観を批判したものだった。また女性問題に関する記事を突出させないようにカモフラージュするために、常設欄を多数設置し、読者からの広く原稿を募集して、バラエティに富んだ紙面構成を画策したことがわかった。

２、『女聲』全 38 期を通じて特集はわずか三回しか組まれなかったが、まず指摘するべきは「租界返還特集」における君（関露）「租界返還と婦女」である。日本との友好親善については一言しか言及せずに、副題「收回租界是中國獨立的開始、是婦女解放的先聲」（租界の回収は中国独立の開始、女性解放の声）の通り、表面的には租界問題を論じながら、話題の中心を上海女性の問題にずらして論じることで、女性解放のメッセージを巧みに挟み込み、自らの意思を伝える姿が浮き彫りにできた。また「春節特集」では、洛川 『上海之春』に注目をした。共産党地下党員の洛川は共産党を太陽に比喩し、その到来の喜びを記している。このような文章を掲載するには相当の勇気が必要だったことがうかがえるが、一方でこの背景には、

[228]佐藤俊子「支那趣味の魅力（六）」、満州日日新聞、1941 年 10 月 5 日版

日本の敗戦が間近となり、それまでの出版統制に緩みが生じていたのではないかとも考えられる。

３、『女聲』に掲載された日本文学作品について、日本の文学作品の翻訳は 1943 年 11 月発行の第 2 巻第 7 期から停刊の第 4 巻第 1 期まで毎号一篇以上掲載されており、その内容も日本への宣揚や愛国的な言論が非常に少ないものであった。『女聲』で日本文学の翻訳が掲載され始めた時期は、佐藤俊子、関露が参加した第二回大東亜文学者大会が終了した時期であり、この大会中に「陶亢徳が共同翻訳機関設置を提言」している。また、『女聲』に掲載された翻訳作品はどれも文芸作品や自然科学といった分野であり、これは日中の政治からなるべく遠い位置にいようと心掛けていた『女聲』の立場が表れていると考えられる。このことは『女聲』編集者であった佐藤俊子がかつて北京で執筆発表した『支那趣味の魅力』（六）にある「政治性を含んだ日華文化交流問題などについて考へたりすることは、全くいやになる」と政治問題から距離を置こうとした態度と一致していることが分かる。

第四章「女聲」雑誌にみる女性解放の主張

4.1　共産党地下工作員及び進歩青年の女性をめぐる言説
(1) 丁景唐「彼女の一生」
(2) 丁景唐「彼女の一生（続）」
(3) 関露「女性の文芸から婦女についてまでを論じる」
(4) 丁景唐（辛夕照）「女性と文学――『女性の文芸から女性まで』読後感」
(5) 丁景唐（楽未央）「「子見南子」から語る家庭での女性観」
(6) 丁景唐「妻を追い出す物語」
(7) 丁景唐「詩人秋瑾」
(8) 楊志誠「香港の女性」
4.2　「読者の声」（信箱欄）から見る『女聲』の女性観
4.3　『女聲』の良妻賢母をめぐる言説
4.3.1　周作人の女性観と『女聲』
4.3.2　「女子与読書」に対する反響と関露の女性観
4.4　小結

4.1 共産党地下工作員及び進歩青年の女性をめぐる言説

先行研究によると、これまで『女聲』に寄稿した作者の中で、共産党地下工作員であると判明しているのは『女聲』編集者の関露を含めて計 16 名いる。彼らはみなペンネームを使って投稿しているが、一人で複数のペンネームを持っている者もいた。

現在までに判明している共産党地下工作員及び進歩青年の執筆者は以下のようである。

関露、丁景唐（歌青春、戈慶春、秦月、辛夕照、楽未央、楽无恙、宗叔、包不平、微萍）（男）、共産党地下工作員の楊志誠（陸洋）（女）、光華大学生鐘恕（女）と唐敏之（女）（胡生權）、陳琳（羅沉）（女、大同大学学生）、布店の營業員、工會工作者鮑士用（席明）（男）、李璈（杜淑貞）（女）、李祖良（方曉）、董樂山（麥耶、史蒂華、聖約翰大学学生）（男）、宇文洪亮、李冷路（冷路、新四軍に参加した後上海で編集者となった）（女）、陳嬗忱（凱勒、丁景唐と

滬江大学中文系高一班のクラスメートで啓秀女中[229]の国語教師）（女）、陳新華（女）（陳聯）、そして楊豐（揚子江、楊鋒、関露の友人で進歩青年であった）（女）[230]、葉甦（丁景唐の回想によれば、彼は浙江省東部を根拠地にしていた）

以下、代表的な文章に考察を加え、彼らの女性をめぐる言説がどのような内容であったのかを検討していきたい。

丁景唐によると、彼は 1942 年 12 月から『女聲』に投稿を始めてから、第 3 巻第 5 期（1944 年 9 月）、第 3 巻第 7 期（1944 年 11 月）、第 3 巻第 10 期（1945 年 2 月）、第 4 巻第 1 期（1945 年 6 月）以外は、基本的に毎月作品が掲載され、同号に 2 から 5 篇された掲載されたことが 11 期あったという。

研究者の塗暁華（2014）によると、丁景唐は当時学生の間で地下工作を行っており、歌青春、戈慶春、秦月、辛夕照、楽未央、楽无恙、宗叔、包不平、微萍（他人のペンネームを借用）等のペンネームを用いていた。そして、『女聲』1942 年 12 月号第 1 巻第 8 期から文章を発表し、計 56 篇発表した。その中で詩歌が半数を占め、26 首に上る。丁景唐が『女聲』で発表した文章はおおきく二種類に分けられる。一つは現代詩歌、散文、随筆、小説の類であり、もう一つは古典文学や詩歌、民謡を多く用いて書かれた文章である。その題材の多くは、圧迫された中国女性の苦しみであり、中国の旧伝統の暗部に攻撃を加えるものだった[231]。

その中でも特に詩歌と随筆は婉曲に書かれており、作者の背景を理解しなければ文の真意を読み取ることは難しい。

（1）丁景唐「彼女の一生」（她的一生）『女聲』第 2 巻 1 期 8-10 頁

丁景唐は民謡には旧社会における女性の不幸が凝縮して描かれていると述べる。少女時代は「他人に嫁ぐ」（嫁別人）や、「ごくつぶし」（賠銭貨）と呼ばれて、父母から農家の働きとして使われ、結婚すると働き手が少なくなって遺憾だと言われる。さらに、父母は娘を家畜より劣るとみなし、「豚を育てれば肉を食べられる。犬を育てれば番犬にできる。猫を育てればネズミを捕まえる。だが女を育てて

[229]丁言昭『諜海才女』（北方婦女兒童出版社 1989 年 110-111 頁）によると、関露はかつて啓秀女子高校、中学校で高校の国語を担当していた。しかし抗日戦争がはじまり、社会の抗日熱が同校にも広まり、民族の尊厳、国家の前途のために真理を追究する女学生たちが相次いで抗日運動に参加していった。そして、中国共産党に入党し、啓秀女中青年会も組織された。

[230]丁言昭『諜海才女』、塗暁華（2014）「上海淪陥時期『女聲』雑誌研究」、岸陽子「『女声』創刊号に秘められたメッセージ」を参考にした

[231]塗暁華（2014）『上海淪陥時期『女聲』雑誌研究』、中國傳媒出版社、156-157 頁

何になる」[232]と言われ、そのうえ父母から虐待を受ける。そして、不幸なことに継母から虐待を受けても反抗することもできず、結婚後にかりに暗い家庭を離れて離婚をし、新しい男性を探したくても、恋愛の自由が無いので、ただ盲目的に「運命に従い」、「父母の命と媒酌人の言葉」[233]に従うしかない。媒酌人も目的は金銭であり、女性は媒酌人のうまい言葉に騙されて不幸な結婚をし、一生悲劇が続いていく。このように民謡には旧社会制度における女性の悲劇が描かれていると述べている。

(2) 丁景唐「彼女の一生（続）」（她的一生（続）『女聲』第 2 巻 2 期 9-11 頁

「彼女の一生（続）」では、丁景唐は一歩進んで「かつてある人は、結婚は女性の特殊な職業であると言ったが、私に言わせれば結婚は女性の職業というより、はっきり言えば結婚は現代の非合理な制度の下での一種の女性売買である」[234]と述べている。ここでいう「結婚は女性の特殊な職業」とは林語堂のいう結婚は女性の職業であるという観点を指すと考えられる。文中では当時の社会背景や、結婚した女性の詩歌を引用しながら、結婚後の生活は結婚前の家庭生活よりも更に苦痛であり、このような売買婚のもとで「夫は妻を個人の財産と見做し、姑は金銭で交換してきた二本足の動物と見做している。男性社会で女性は自由平等を得ることは無く、このような現象が変わることはない」[235]と述べている。

(3) 関露（芳君（評論）「女性の文芸から婦女についてまでを論じる」

（從關於女性的文藝講到婦女））『女聲』第 1 巻 12 期 4 頁

関露は「文芸作品は多くの点で女性と関係がある」[236]と述べ、たとえば文学作品には多くの女性の悲劇が書かれるので、「同時に、社会の問題を解決しなければならず、そのためには道具が必要である。そして文芸はこれらの社会問題を解決する

---

[232]原文「養活豬、吃口肉。養活狗、會看家。養活貓子拿耗子。養活你這Y頭做什麼？」（丁景唐「她的一生」、『女聲』第 2 巻 1 期、1943 年、8-10 頁）

[233]原文「委諸命運」、「父母之命 媒妁之言」（丁景唐「她的一生」、『女聲』第 2 巻 1 期、1943 年、8-10 頁）

[234]原文「曾經有人説過出嫁是女子的一種特殊職業、在我看來與其説出嫁時女子的職業、還不如直接地明確地説。出嫁是女子在現時代不合理的制度下的一種婦女買賣」（丁景唐「她的一生（続）」『女聲』第 2 巻 2 期、1943 年、9-11 頁）

[235]原文「丈夫把老婆看做個人的私産、婆家視媳婦為用金錢換來的「兩腳動物」、在男權社會、婦女沒有獲得自由平等的情形之下、這種現象是絶不會更改的」（丁景唐「她的一生（続）」『女聲』第 2 巻 2 期、1943 年、9-11 頁）

[236]原文「文藝作品在許多地方都關聯著婦女」（関露（芳君）「從關於女性的文藝講到婦女」、『女聲』第 1 巻 12 期、1942 年、4 頁）

道具の中でもよいものである」[237]、「文芸は女性問題を解決するとてもよい道具かもしれない」[238]。しかし女性の生活は狭い範囲に限定されているため、「社会と政治の上で解放は得られず、彼女たちの生活範囲も広げることができない。彼女たちは自分の生活を家庭から社会に広げていくことができず、経済的にも真の独立を得ることができない」[239]。そのために社会で活動の自由を得ることができず、社会活動の方向と発展を理解することもできない。女性はどのような状況にあっても創作を行うべきであり、「自身の生活の中でもっとも戦闘性のある、もっとも生命力のある一点を創作の題材」[240]とするべきだと呼びかけ、特に「現在とてもつらい時期を経験している」[241]女性に対してそれを創作の題材として奮闘し、「家庭以外の発展」[242]をするべきだと語っている。関露は女性が生活と社会の体験を通じて現実を理解し、創作することで社会発展の方向と女性問題の解決を模索することを提唱している。

（4）丁景唐（辛夕照）「女性と文学――『女性の文芸から女性までを論じる』読後感」『女聲』第 2 期 3 巻 28 頁

これは丁景唐が「関露女史の『女性の文芸から女性までを論じる』を読んだ後、関露の文章に対して「まだ「すべて同感できない」ことがあり、ここに続けて書くことにした」[243]とある。関露の文章では、歴史上に女性作家が少ない理由を女性に著作の才能がない等と語っているが、それは偏見であると指摘し、丁景唐はその理由を「男尊女卑の男性社会の中で、女性は男性と同じ地位を得ることはできず、さらに教育の蚊帳の外に追いやられてきたからで、男女が享受してきたものが平等ではないのに女性は文学の才能が劣っているというのは認めることができない」[244]と

---

[237]原文「同時、要解決一種社會問題、就得有一種工具、而文藝是許多解決社會問題的工具裡的一種很好的工具」（関露（芳君）「從關於女性的文藝講到婦女」、『女聲』第 1 巻 12 期、1942 年、4 頁）

[238]原文「文藝也是解決婦女問題的一種頂好的工具」（関露（芳君）「從關於女性的文藝講到婦女」、『女聲』第 1 巻 12 期、1942 年、4 頁）

[239]原文「在社會與政治上都得不到解放、她們的生活的範圍也不能開展、她們不能把自己的生活從一種家庭的桎梏開展到社會上來、她們的經濟也不能獲得真正的獨立」（関露（芳君）「從關於女性的文藝講到婦女」、『女聲』第 1 巻 12 期、1942 年、4 頁）

[240]原文「把自己生活中最有戰鬥性、最富有生命力的一點作為創作的題材」（関露（芳君）「從關於女性的文藝講到婦女」、『女聲』第 1 巻 12 期、1942 年、4 頁）

[241]原文「正在經歷一個非常艱苦的時期」（関露（芳君）「從關於女性的文藝講到婦女」、『女聲』第 1 巻 12 期、1942 年、4 頁）

[242]原文「得要去作家庭以外的發展」（関露（芳君）「從關於女性的文藝講到婦女」、『女聲』第 1 巻 12 期、1942 年、4 頁）

[243]原文「覺得還有些「不盡雷同」的一件、於是又繼寫了些」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第 2 巻第 3 期、1943 年、28 頁）

[244]原文「蓋在重男輕女的男權社會中、女子既不能與男子具有同樣的地位、且被摒棄於教育的權門之外、

関露に反駁し、「女性と文学の関係が密接であることはすぐにわかる事実であり、関露が言及している多くの民間女性の中にも、彼女たちの生活において多くの口承文学が創作されてきたが、それらは文字がわからずに記録されなかったために伝わらなかった」[245]と、女性文学の中では民間文芸も重視すべきだとした。

また関露が女性文学の題材の範囲が狭いと述べたことに対して、「まさに文学とは生活の反映であるからだ」[246]、「女性の作品内容が貧弱なのは、単に彼女たち（ここでいう彼女たちとは上層階級の女性を指し、文字を知らない民間女性ではない）の日常生活の領域が狭いために起きたことであり」[247]、「まさに中国の自然科学が発達しないのと同じように、中国の女性文学作品の内容も貧弱である。はじまりは女性作家だけでなく、一般的な男性作家も同様であった」[248]と指摘した。

しかしそのようであっても、やはり才能ある女性作家は出現してきたとして、丁景唐は「蔡文姫、王昭君、清末の秋瑾、李清照と宋淑貞、さらには現代の女性作家である丁玲、廬隠、冰心、陳学昭、蘇雪林、蒋冰之（丁玲のこと、筆者註）、蕭紅、草明、白薇、関露、羅淑、葛琴、凌叔華、馮沅君、沈櫻」の名前を挙げている。名前が挙がった現代の女性作家の多くが、五四時期に注目を集めた女性作家や30年代に活躍していた左翼系の作家であり、関露の名も記されている。

そして、最後に「女性文学の展開はもとより女性が自覚して幸福を求め、伝統の束縛から抜け出す問題と関係があり、女性の自尊心と自信さらには執筆の技能を高めていくことが急務である」[249]とまとめている。

関露と丁景唐の間で意見が取り交わされた文芸と女性については以上のように、一見すると二人の論争のように見えるが、実は計画された論争であった。

以男女享受不均而來斷定女子文學才能的低劣、這絶不是一件公允的事」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第2巻第3期、1943年、28頁）

[245]原文「婦女與文學關係的密切是顯而易見的事實、文中敘説在廣大的民間婦女中也因她們的生活的豐富創作了很多的口頭文學、但因為不懂文字沒能記錄下來而失傳了」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第2巻第3期、1943年、28頁）

[246]原文「正因為文學是反映生活的」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第2巻第3期、1943年、28頁）

[247]原文「婦女作品内容的貧弱、單純是由於她們（指上層婦女而能握筆的、不是不識字的民間婦女）日常生活領域的狹隘使然的」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第2巻第3期、1943年、28頁）

[248]原文「正似中國自然科學的不發達一樣、中國女性文學作品内容的貧弱、初不僅限於女性作家的作品、即使一般男性作家」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第2巻第3期、1943年、28頁）

[249]原文「婦女文學的開展固與婦女自覺起來爭取幸福、掙脱傳統的桎梏的問題有關、惟提高和加強女性的自尊性和自信力以及培養寫作的技能更是「當務之急」」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第2巻第3期、1943年、28頁）

具体的にはまず関露が「從關於女性的文藝講到婦女」（女性の文芸から女性について語る）を『女聲』第 1 巻第 12 期（1943 年 4 月）に発表した。その内容は 「もしも一つの社会問題を解決するのなら、そこには道具が必要である。そして文芸は多くの社会問題を解決するためのよい道具である」[250]として、社会における女性の問題を解決するために、女性たちに積極的に文芸創作をすることを提言し、その題材を生活経験の中から取材するよう呼びかけたものである。それに対して辛夕照（丁景唐）は「すべてに同意はできない」[251]と感じ、「婦女與文學（感想）」を第 2 巻第 3 期（1943 年 7 月）に発表した。丁景唐が反駁したのは関露の「文学の歴史を紐解くと、私たちは歴史の上にわずかに女性の記録を見ることができる、しかし真に一つの時代を代表し、永遠に歴史に残り、歴史のために身を投げうつ女性作家はほとんどいない」[252]という箇所である。この歴史に残る女性作家の作品がほとんど無いという問題について、丁景唐は、その背景を説明する形で次のように反論した。「文学史において女性作家が少なく、時代を代表する女性作家の作品も少ない。これは事実である。しかしだからと言って女性には著作の才能がなく、女性は文芸活動に従事するには相応しくないと結論し、そこから女性の能力が生来男性に及ばないということはできない」[253]とし、歴史に残る女性の文学作品が少ないのは「民間にはどれほど才能ある無名の女性がいるのだろうか。彼女たちは光栄ある作家という称号を得るべきであるが、誤った制度のせいで際限ない大海、暗黒の大海へと飲み込まれてしまった」[254]と古代から続く男尊女卑の社会制度のせいで才能ある女性作家たちが埋没してしまったことが一番の原因であることを指摘した。

その後関露は「私は彼の文章を読んだが、彼と私の意見は特に「すべてに同意できない」というところはなかった」[255]と、それに返答する形で再度、関露は「再論女性的文藝跟婦女」（女性の文芸と婦女について再び論じる）を第 2 巻第 5 期に発

---

[250]原文「要解決一種社會問題、就得有一種工具、而文藝是在許多解決社會問題的工具裏的一種很好的工具」（関露「從關於女性的文藝講到婦女」『女聲』、第 1 巻第 12 期、1942 年、4 頁）

[251]原文「不儘雷同」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第 2 巻第 3 期、1943 年、28 頁）

[252]原文「翻開文學的歴史、雖然我們在史頁上看到一些關於婦女的記録、但是要找一個真正地代表一個朝代、能夠永存在歴史上、能夠為歴史效命的女作家、却是少得幾乎沒有」（関露「從關於女性的文藝講到婦女」『女聲』第 1 巻第 12 期、1942 年、28 頁）

[253]原文「在文學史上女性作家之稀少和缺乏代表時代的作品、這也是生活上的事實、但不能因而得出婦女根本沒有著作的才能、婦女根本不配從事文藝活動的結論而説婦女的能力生來就不及男子！」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第 2 巻第 3 期、1943 年、28 頁）

[254]原文「多少民間有才能的無名女子、她們應該可以獲得光榮的作家銜號的、而悖謬的制度恰似無邊無際的大海、黑暗的大海、給呑沒了」（辛夕照（丁景唐）「婦女與文學（感想）」『女聲』、第 2 巻第 3 期、1943 年、28 頁）

[255]原文「我讀了他的文章、我並不覺得他的意見與我「不儘雷同」的地方」（関露「再論女性的文藝跟婦女」『女聲』、第 2 巻第 5 期、1943 年、4 頁）

表した。これは関露が「歴史のために身を投げうつ女性作家はほとんどいない」と記した箇所を、辛夕照（丁景唐）は関露が「女性には創作の才能がなく、女性は文芸活動に従事するには相応しくなく」、女性の才能がないから歴史に女性作家の名が残らなかったと言っているのだと誤解したため、関露はその誤解を解こうとして記したものである。「彼の言葉は私と彼の観点の違いから出たものだと考える。私はここで彼が考える私の誤りについてそれを正そうと思う」[256]と記し、「強く勇敢な女性は、自身の力であれらの主観意識と客観勢力の古い垣根を打ち破り、自身のために新しい大陸を築き上げるべきだ」[257]と述べて、女性に能力がないといっているのではなく、積極的に立ちあがって旧社会の束縛を打破し、女性たちが自身の新しい居場所を創り上げるべきだと言ったのだと改めて強調した。

関露と丁景唐の「論争」にも、女性自身が古い伝統を打ち破り、社会に進出していくべきだという強い主張が表れている。そして、半年間をかけて論争という形で誌上に発表することにより、故意に読者の注意を集めたとも考えられる。丁景唐は後にこの時の関露とのやり取りを「記 1943 年関露約我到她住處的一次会見」（1943 年関露が私を彼女の家に招待したある日の面会について）[258]で記している。それによると、丁景唐は関露と 1942 年の冬に知り合ったが、当時丁は 22 歳、関露は 36 歳であった。丁はその時すでに共産党に入党し、地下工作員として上海で活動しており、表向きの身分は上海沪江大学中文系三年生であった。丁は関露の「從關於女性的文藝講到婦女」（『女聲』第 1 巻第 12 期）を読んで、辛夕照[259]のペンネームで『女聲』に投稿をした。丁が原稿を女聲社に郵送して間もなく、関露から手紙を受け取り、その手紙には丁の文章は自分の意見と何も違いはないとあり、関露の家で会う約束をした。丁の回想によると「彼女は私に説明して、私たちの女性と文学に対する見解には違うところはないと言った。彼女は先ず私の文章を発表し、その後に彼女が続きの一文を書いて、再度説明をすることにした」[260]とあり、二人の『女

---

[256]原文「我懷疑到他的那一段話是因為覺著我與他的觀點不同而說的。我希望在這裏把他認爲的我的錯點洗刷一番」（関露「再論女性的文藝跟婦女」『女聲』、第 2 巻第 5 期、1943 年、4 頁）

[257]原文「堅強而勇敢的女性、是應該用自己的力量去衝破那些主觀意識和客觀勢力的破舊藩籬、為自己築起一條新的大陸來。」（関露「再論女性的文藝跟婦女」『女聲』第 2 巻第 5 期、1943 年、5 頁）

[258]丁景唐「記 1943 年関露約我到她住處的一次会見」『档案春秋』雑誌、上海档案館発行、2010 年、28 頁

[259]丁景唐はこのペンネームについて、暗い夜でも共産党は心の中で光り輝く意味と解説している。（丁景唐「記 1943 年関露約我到她住處的一次会見」『档案春秋』雑誌、上海档案館発行、2010 年、29 頁）

[260] 原文「她向我解釋、我們對婦女與文學的看法並沒有分歧。她打算先把我的文章編發、然後她續寫一篇文章、再作説明。」（丁景唐「記 1943 年関露約我到她住處的一次会見」（丁景唐「記 1943 年関露約我到她住處的一次会見」『档案春秋』雑誌、上海档案館発行、2010 年、29 頁）

聲』での論争は、前もって打ち合わせがなされていたことが分かる。二人とも同様に共産党地下工作員という身分ではあったが、当時は「関露は特殊任務を担当する「老」共産党員であり、私は入党五年の若い地下工作員であった。当時はお互いにその身分は知らなかった。これらは解放の後に知ったことだ」[261]とお互いに共産党の地下工作員という身分であることを知らなかったと述べている。そして丁は最後に「関露は党の批准を経て、8 月 16 日に日本で開催された第二回大東亜文学者代表大会に出席した。同月 25 日に帰国後はまた忙しく敵に応対した…このような緊張した生死をかけた闘争の合間を見て筆を執り私の文章に返答をし、『女性の文芸と女性と再論する』を書いた。本当に尊敬に値する」[262]と述べている。その後、丁は度々関露から原稿依頼を受け、様々なペンネームを用いて『女聲』に計 56 篇の文章を寄稿した。

関露と丁景唐は『女聲』が発行されていた当時、お互いが共産党地下党員ということは知らなかったと述べている。それにも拘わらず、関露が丁に幾度も執筆依頼をしたのは、関露が丁の執筆した原稿に自身の女性観に近いものを認めたからではないだろうか。

(5) 丁景唐（楽未央）「「子見南子」から家庭での女性観を語る」（従「子見南子」談到儒家的婦女観）『女聲』第 2 巻 7 期 14-16 頁

「子見南子」は孔子が礼儀のない南子に会うという故事だが、丁景唐は歴史上の司馬遷、朱熹などの文人が男権のために「子見南子」の故事を歪曲していると批判し、そのうえで、「民国十八年（筆者注：1929 年）に山東省立第二師範の教員と学生が、林語堂の子見南子の脚本[263]をもとに、創立記念日に劇を上演したところ、孔子六十戸族の孔伝堉などの怒りを買い、孔らが同校の校長宋還吾を告発」したため、「一時、世論が紛糾したが、間もなく教育部からの通知により、校長が辞職に追いやられ、この事件も終結した」 と述べ、この事件から、伝統の旧勢力が当時も強大であったことが分かると指摘している。丁景唐は、この事件の原因について

[261]原文「関露是負責特殊任務的「老」共産黨員、我是有著五年黨齡的年輕地下工作者、當時彼此都不知曉、這都是解放後才知道的」（丁景唐「記 1943 年関露約我到她住處的一次会見」『档案春秋』雑誌、上海档案館発行、2010 年、30 頁）

[262]原文「関露經黨的批准、於 8 月 16 日赴出席在日本召開的第二屆大東亞文學者代表大會、當月 25 日回國後、又忙於應對敵人……在這樣緊張的生死大搏鬥間隙、她還提筆撰寫答覆我的文章、『再論女性的文藝跟婦女』、令我感佩不已」（丁景唐「記 1943 年関露約我到她住處的一次会見」『档案春秋』2010 年、30 頁）

[263]林語堂が『奔流』月刊 1928 年 10 月に発表したもの。内容は『論語』を題材として、孔子を風刺した反伝統思想の脚本である。当時、孔子の故郷山東省の中学校で上演したため社会的な問題となった。

「儒家の男尊女卑の女性観が邪魔をしたからであり」[264]、「所謂儒家の女性観とは自然経済を基礎にして、宗法社会の男性中心の生殖本位の思想――女性蔑視の思想に賦役したものだ」[265]と手厳しく批判をしている。

（6）丁景唐「妻を追い出す物語」（上）（下）（出妻史話）
『女聲』第2巻8期、9期

孔子、曾子、孟子などの「先賢の士」が、なんということはない罪で自らの妻を追い出し新たな妻を娶ったという史実を挙げ、彼らの女性に対する無情と酷薄、虚偽の礼教という教条で飾り付けられた男性の卑劣な行為とそれによって女性が受けた屈辱と迫害について記している。また郭沫若が、孟子が妻を追い出した故事を歴史劇にして演出したことに触れて「「孟子が妻を追い出す」と題して、孟子から道家の仮面をはがした」[266]と郭沫若を高く評価した。また「七出」典律、唐律、そして二十年前の民国の法律はどれも外面を変えただけで、その内容は変化なく女性を迫害する古い法律を継承しており、女性は今も「追い出される妻」（出妻）という悲惨な網を潜り抜けることができないとした。そして「この古い劇を改造するためには、女性が束縛された自由を打ち破り、自分のために人の権利と幸福を求め、二度とこのような悲劇が続かないようにし、「追い出される妻」を歴史遺跡にしなければならない。この世代の女性たちに劇の中で新たな役を創造させ、歴史を変革させよう」[267]と述べて、「追い出される妻」の事例をもとに社会の女性に対する迫害を分析し、旧思想は依然として根強く残っているけれども、女性が積極的に自身の権利を得るために立ち上がるよう呼びかけた。

（7）丁景唐「詩人秋瑾」『女聲』第3巻6期

丁景唐が1944年の春に日本占領地区である杭州に赴き、地下工作をしているとき、彼が鉄柵で封鎖された旅館の付近にある秋瑾烈士の墓を見たときに作った散文

[264]原文「儒家重男輕女的婦女觀在背後作祟」（丁景唐（楽未央）「従「子見南子」談到儒家的婦女観」、『女聲』第2巻7期、1943年、14-16頁）
[265]原文「所謂儒家的婦女観是産生於自然經濟的基礎上而服役於宗法社會男權中心的生殖本位底一種經典思想――一種蔑視女性的思想」（丁景唐（楽未央）「従「子見南子」談到儒家的婦女観」、『女聲』第2巻7期、1943年、14-16頁）
[266]原文「題名就叫「孟夫子出妻」、給他拉掉道家學的面具」（丁景唐「出妻史話」、『女聲』第2巻8期、1943年）
[267]原文「要改造古老的戯劇、只有婦女打破束縛自由的桎梏、為自身求得人的權利和幸福方能確保不再串演悲劇的角色。讓「出妻」成為古物陳列所裡的遺跡。讓這一代的女性創作戯劇中的新角色並去改造歴史吧」（丁景唐「出妻史話」、『女聲』第2巻8期、1943年）

である[268]。秋瑾（1875－1907）は清朝末期の女性革命家であり、文中では秋瑾の『感嘆』詩からはじまり、秋瑾が民族解放と女性解放の犠牲となったこと、また女性文学に新たな一面を開いたことを称賛している。

全文を通じて激しい語調で、秋瑾の詩を通じて「民族解放」と「女性解放」について述べ、民族思想における亡国の悲しみや自由や独立の闘争を表現している。丁景唐は、秋瑾が男尊女卑の古い国において女性が「男性の人形」[269]となることに反対したこと、また、「男女平等は天賦の権利であり、なぜ牛後に甘んじるのか」[270]と男女不平等に抵抗したこと、新文化教育は重要であり、よって女学校と『中国女性新聞』の刊行が必要だと考えていたこと、さらに重要なのは「彼女は男女が平等で助け合うべきだと考えただけでなく、女性は国家の危機の中で欠けることのできない力だと見なした」[271]ことだと述べて秋瑾の思想を高く評価し、秋瑾の偉大さは彼女の詩人としての熱意にあり、官家に生まれ育った高貴な身分を捨て、「椅子に座り家庭の玩具となることに甘んじず――あるいは良妻賢母の小鳥となることに甘んじず、ツバメのように新時代の波を迎え、自由な心の道を追及した」[272]ことだと述べている。そして魯迅、ゲーテの詩集、ロマン派の詩人シェリーの「西風に寄せる歌」などを引用して、「秋瑾に、預言者の吹くラッパの音を祖国の空に響かせて、西風のように、眠りについている世界に火を起こしてもらおう」[273] と、秋瑾を旧思想を駆逐し、新しい希望をもたらす「預言者」に喩えて讃えている。

塗暁華の丁景唐に対するインタビューによると、「施済美が私に、『女聲』はとても変わっている雑誌で、もともとはただの雑誌だと思っていたが、実際に掲載されている文章はとてもよく、内容も格別だ。収録された文章の中で、ある文章は愛国主義を提唱し、また古代の作家の紹介もあり、更には愛国の女性詩人を紹介したこともあると言った」[274]と施済美が『女聲』を高く評価していたことに言及し、「愛国の女性詩人を紹介した」とはまさに丁景唐が書いたこの文章をさしており、

---

[268]塗曉華（2014）「上海淪陥時期『女聲』雑誌研究」、中國傳媒大学出版社、159 頁
[269]原文「給男性做玩偶」（丁景唐「詩人秋瑾」、『女聲』第 3 巻 6 期、1944 年）
[270]原文「男女平權天賦就、豈甘居牛後？」（丁景唐「詩人秋瑾」、『女聲』第 3 巻 6 期、1944 年）
[271]原文「她不僅以為男女應該平等互助、且認女子在挽救祖國垂危的洪流中是一股不可缺少的力量」（丁景唐「詩人秋瑾」、『女聲』第 3 巻 6 期、1944 年）
[272]原文「不安於座椅和家庭的玩偶―或所謂賢妻良母的小鳥、像海燕地迎接著時代的浪濤、追求自由的心路」（丁景唐「詩人秋瑾」、『女聲』第 3 巻 6 期、1944 年）
[273]原文「就讓秋瑾、以先知底喇叭響徹祖國的長空、像西風一樣給沉睡的世界吹起燼火吧」（丁景唐「詩人秋瑾」、『女聲』第 3 巻 6 期、1944 年）
[274]原文「施濟美告訴我説她認為『女聲』很怪、本來以為是罕見雑誌、但文章其実不錯、不是一般的内容、有的還提倡愛國主義、它介紹古代作家、記得還介紹過一個愛國女詩人」塗曉華（2014）「上海淪陥時期『女聲』雑誌研究」中國傳媒大学出版社、252 頁

中国人が愛国を口にすることができなかった日本占領区において非常に大胆な文章だったと受け止められていたことが伺える。

（8）楊志誠「香港の女性」（香港女人）『女聲』第 2 巻 8 期 26-27 頁

地下工作員の楊志誠は杭州女子中学の卒業生で、長期にわたり結核を患い、四明医院の病床にいた。強い意志で病魔と闘いながら執筆をし、比較的早期に『女聲』に投稿し、掲載された文章も多い[275]。ペンネームは陸洋、修嵋、嵋、洋などであり、「香港の女性」（香港女人）（『女聲』第 2 巻 8 期）や「船山群島の漁塩農婦たち」（船山群島的漁塩農婦們）（『女聲』第 1 巻 9 期があり）、「船山群島の漁塩農婦たち」の前書きで編集者から「この文章は生き生きとして内容も充実している。作者は力のある文字で私たちの生活のあれほど重要で、社会への貢献があれほど多く、しかし私たちに軽視されている労働する農村女性を描いている。この文章には多くの女性の汗と、女性の功績と苦痛の叫びが含まれている。読者たちには特に注意してもらいたい」[276]と称賛されている。

また「香港の女性」（香港女人）は主に香港の女性が一夫多妻制により深い苦しみを受けてきたことを記している。香港には帝国主義の圧力とともに、西洋文明が流入したため、香港の女性たちは自由な恋愛とデートを楽しむことができたが、実際には愛人となることも多かった。しかし女性は旧い教育を受け、婚姻については旧伝統の影響を強く受けていた。一夫一妻制は少なく、一夫多妻が多かったが、かわいそうとも不合理とも思わず、また反抗もしなかった。文中では女性が「妾」となる例を挙げ、こうした「結婚が彼女にもたらすものは不幸であり、奴隷となるだけだ」[277]と述べ、またこのような女性が自身を恨むことも反抗的になることもないと目覚める機会さえない香港の女性を描いている。

また文中ではかつて香港を震撼させた殺人事件についても触れている。その事件は一般的な家庭で起こった。夫がさらに二人の妻を娶ると、最初の妻が夫と二人の妻およびその子供を殺害した事件である。「二番目と三番目の妻は一番目の妻の権利と愛情を奪ったために報復をされ、同時に夫も殺害された。なぜなら彼女は夫を

[275]塗曉華（2014）「上海淪陷時期『女聲』雑誌研究」中國傳媒大学出版社、163 頁

[276]原文「這是一篇文字生動、内容充實的文章、這位作者用她有力的文字反映了一大批對於我們的生活那麽重要、對社會的貢獻那麽多、但又被我們大家忽略了的勞動的農村婦女。這篇文章裡含著許多婦女的虚汗、婦女的功績與婦女的苦痛的呼聲的。望讀者特別注意」（楊志誠「香港女人」、『女聲』第 2 巻 8 期、1943 年、26-27 頁）

[277]原文「結婚隨附於她的是不幸福、而只是做一個變相的奴隷而已」（楊志誠「香港女人」、『女聲』第 2 巻 8 期、1943 年、26-27 頁）

愛していたからであり、他人に侵されるのを免れるためだ。しかし、彼女が幸せの障害を取り除き自由人になろうとしたときに、法律が彼女を捕え、殺人者として死刑の判決をくだした」[278]。法律は犯人である最初の妻を死刑に処したが、「彼女が殺人を犯した理由については解決されていない」[279]と結んでいる。

この事件は、社会習慣として一夫多妻が許されており、強大な制度の下では、法律や社会は女性に手を差し伸べることができず、女性自身も自らの正義を得る術がないと指摘している。

以上のように、共産党員地下工作員だった青年たちの文章は、恋愛・結婚など女性の家庭領域におけるさまざまな問題に目を向けたものが大半をしめており、それまでは『女聲』は、主として評論などでは女性の社会進出を強く提唱していたが、文芸などでは女性の家庭問題などにも目が向けられていることがわかる。

4.2 「読者の声」（信箱欄）から見る『女聲』の女性観

塗暁華は『女聲』の「読者の声」について、一般に「読者の声」は、1940 年代の出版物としては、特に新鮮味や独自性はなかった。なぜなら淪陥時期の雑誌にはどれも簡単な通信欄があったからで、内容的にも多くは編集長と読者の間での通信あるいは簡単な読者の相談に対する回答であり、「読者の声」は不定期な存在であり、取り消されることもあった。しかし、『女聲』の「読者の声」は、「とても特徴があり、中国の新聞史の中で読者とメディアの相互作用としてもっとも成功した欄の一つである。――その成功はおそらく正に女性の生活にある、ひそひそ話が好きだという特徴を突いたことにある」[280]と述べている。

山崎眞紀子、周珊珊（訳）（2017）「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における信箱――「私たち」に声のゆくえ」[281]及び山崎眞紀子、周珊珊（訳）（2015、2016）「田村（佐藤）俊子における『女声』――「信箱」「余

[278]原文「做為她們奪取她的權利和愛情的報復、同時也殺死了她的丈夫、因為她愛他、免得他繼續被人侵佔。可是正當她剷除了她的幸福的障礙而想做一個自由的人的時候、法律把她抓住了、以殺人的刑律、判決她死罪」（楊志誠「香港女人」、『女聲』第 2 巻 8 期、1943 年、26-27 頁）

[279]原文「卻沒有把她之所以殺人的原因解決」（楊志誠「香港女人」、『女聲』第 2 巻 8 期、1943 年、26-27 頁）

[280]原文「卻辦的非常出色、也許在中國的新聞史上、它都是讀者與媒體互動最為成功的欄目之一――也許它的成功、正是切中了女性面向生活、喜歡私語的特點」（塗暁華（2014）『上海淪陷時期「女聲」雑誌研究』、209-210 頁）

[281]山崎眞紀子、周珊珊（訳）（2017）「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における信箱――「私たち」に声のゆくえ」、堀井弘一郎、木田隆文（2017）『戦時上海グレーゾーン』、勉誠出版 200-213 頁

声」を中心に」[282]では『女聲』の「信箱」（読者の声）と「余声」（編集後記）に目を向け、「信箱」の中から女聲雑誌の特徴を表す内容を抽出し、時系列に沿って紹介している。

「読者の声」（信箱）は第 1 巻第 4 期から始まり、第 3 巻第 12 期までの計 32 回にわたり掲載された。読者からの投稿を非常に重視していたことは既に上述したが、「余声」（編集後記）に書かれている読者への言葉を見ていくと、同欄がどれほど人気であったのかが容易に推測できる。

「私たちは「信箱」を読者のために設けました。よって、読者からの投稿をお待ちしています。しかし、「信箱」の内容は主に読者を助け社会問題、婦女問題及び思想上の問題を解決することです」[283]と、読者からの手紙内容が雑多になり始めたため、社会問題や女性についての問題、そして思想上の問題をより多く投稿してくれるよう念を押しており、ここからも『女聲』が読者にどのような投稿を期待しているのかが分かる。

そして「読者の声」（信箱）の人気が出始めると、「読者からの投稿が多すぎるため、すべてに回答することができません。また、読者が心配する恐れがあるので、今は暫時一つの折衷的な方法を用いています。多くの青年や女性に関する問題についての投書は、内容とともに回答を掲載し、その他については回答のみを掲載します。また完全に個人的な内容や、ごく簡単な問題については、弊社より個人的に回答します」[284]と『女聲』発刊から二年目には入ってからは、すでに回答が間に合わないほどの人気欄になっていたことが分かる。

また、掲載した読者からの手紙は内容を一切修正することなく掲載した。その理由は、「読者に対し、一般的な女性がどのくらいの知識レベルがあり、女性たちの間で教育がどれほど発展しているのかを知らせるためにも、私たちは読者からの手紙をそのまま読者の前に披露する必要がある。よって、私たちは「信箱」に送られてきた手紙は、一字一句修正することはありません」[285]という理由からであった。

---

[282]山崎眞紀子、周珊珊（訳）（2015、2016）「田村（佐藤）俊子における『女声』――「信箱」「余声」を中心に」（上、下）

[283]原文「我們的信箱是專為讀者而設的、自然是非常歡迎讀者的來件。但是我們這個信箱主要的是幫助讀者解決社會問題、婦女問題、以及許多思想上的問題的。」（『女聲』餘聲、第 2 卷第 2 期、1943 年、48 頁）

[284]原文「信箱因來件太多、不能完全作答。又恐讀者懸念、現在暫時採取一種折中辦法、就是除將一些有關大多數青年或婦女問題的信件連帶原函發表外、其餘的只發表覆信、原函從略。至于完全是個人或是極簡單的問題、則由敝社私函作答。」（『女聲』餘聲、第 2 卷第 3 期、1943 年、48 頁）

[285]原文「況且、為着要使讀者們知道我們一般的婦女究竟獲得如何的知識水準、教育在婦女羣中究竟發展的怎麽樣、我們更有把函件的原樣向讀者披露的必要。因此我們在信箱的來件中、對于字句和標點都不加

読者からの手紙が更に増えると、「私たちは毎月多くの手紙を受け取るが、答えられるものはほんの少しです。この点は読者だけでなく、私たち自身も満足していません。（中略）私たちに対して謙虚な挨拶の言葉を書くのは止めにしましょう。そうすることで、掲載時に少し紙面を節約できます。また読者はできる限り話の内容を短縮し、もっとも簡潔な方法で自身の問題を説明してください」[286] と一人ひとりの投稿を極力短くすることで、できるだけ多くの読者の質問に回答できるようにしたいと呼び掛けている。そして、第 3 巻第 4 期から佐藤俊子が逝去する第 12 期にまでは、「余声」（編集後記）部分もすべて読者からの質問に対する返事に割いている。

その後、関露が編集長を引き継いだ第 4 巻第 1 期からは「読者の声」（信箱）が無くなり、最終巻の第 4 巻第 2 期では「読者の声」（信箱）は「雁足傳書」と改名され、その内容も「私たちは雁足傳書を個人的な問題を投稿する場所にしたくありません。私たちはここで一般的な青年や女性に関する問題を討論したいと考えています。よって、たまに取り上げる個人的な問題を記した手紙については、元の手紙は掲載せず簡単に答えるだけにします。また同時に読者に伝えたいことは、私たちは一般的な問題についての手紙を歓迎するということです」[287]と、今後は個人の悩みから一般的な問題を討論する場へと変更していこうという方向転換がみられる。

1940 年代に『女聲』と同じく日本の出資を受けていた『文友』雑誌には『女聲』に触れた文章が二つある。一つは漱六（1944）「七年来的上海雑誌事業（下）」で、『女聲』を「婦女家庭の類」刊行物の代表と位置付け[288]、もう一つの魯茜「三論」は、「婚姻についての問題ばかり」[289]と厳しい批判を加えている。

「婦女家庭の類」刊行物の代表というカテゴリーは的を得ているが、魯茜が『女聲』について結婚等のことばかりだと非難した論調は的外れだといえる。なぜなら、『女聲』は結婚問題だけでなく、表面的にはバラエティに富んだ総合雑誌の形

刪改」（『女聲』餘聲、第 2 巻第 4 期、1943 年、64 頁）

[286]原文「我們每月所收的信很多、但是答覆的却寥寥無幾。這點不但讀者不滿意、就是我們自己也不滿意。（中略）不要向我們説客氣話。這一來、這發表的時候就可以省去一點篇幅。其次望讀盡量把要説的話縮短、用最短最簡略的方式説明自己底問題。」（『女聲』餘聲、第 3 巻第 2 期、1944 年、44 頁）

[287]原文「我們不祥把「雁足傳書」作爲只是個人問題的信箱、我們想在這裏展開一般的青年和婦女問題的討論、因此對於一些偶然的個人問題的信件、就把原函取消、簡單地回答。同時更向讀者申明、我們歡迎一般問題的信件。」（『女聲』編後記、第 4 巻第 2 期、1945 年）

[288]漱六（1944）「七年来的上海雑誌事業（下）」、『文友』第 3 巻第 3 期 16-17 頁

[289]魯茜（1945）「三論」、『文友』、第 5 巻第 1 期、11 頁

を取っていたことは明らかである。実際には前述したように、常設欄の中でも特に、「読者の声」（信箱）は、編集者の対応が全く追いつかないほどの人気があり、雑誌の重点はむしろここにあったと言えなくもないが、もしも「読者の声」（信箱）を突出させていたら、軍部の干渉により雑誌の発行に支障をきたすかもしれず、だからこそ、常設欄に多様な項目を設けて総合雑誌という体裁を取ったと考えられるのである。

以下、『女聲』を代表する信箱から『女聲』の女性観を具体的に見ていく。「信箱」欄については会田綱雄の回想録に詳しく、「この雑誌で人気があったのは、田村さん自身が回答者になっていた人生相談の「信箱」という欄だった。田村さんは左俊芝という中国名をつかっていたが、かんじんの中国語はできない。[290]カナダじこみの英語で彼女が回答を口述して、助手の若い中国人が手際よく翻訳していたわけである。」[291]とある。会田の回想から二つの重要な事実がわかる。一つは「「読者の声」（信箱）への投稿に対して佐藤俊子自身が内容を確認して回答をしていたこと。もう一つは「読者の声」が雑誌の中で人気があったことである。「読者の声」は読者との直接の対話の場であった。1942 年から逝去するまでの三年余りの間、佐藤俊子は『女聲』の運営に没頭していたようで、現在までにこの期間におけるその他雑誌への寄稿は見つかっていない。よって「読者の声」は佐藤最晩年のフェミニズム思想を知る上で貴重な資料ともなっている。

読者の声を具体的に見ていく前に、『女聲』全体における女性関係の文章の割合について確認したい。渡辺澄子、劉英順（訳）「田村俊子主宰『女聲』の総目次」収録の「雑誌『女聲』の総比率」[292]によると、『女聲』全体において女性関係の文章はわずか 38％で、その他は 62％とある。また各欄のパーセンテージは以下の通りである。

---

[290]佐藤俊子の中国語能力に関して、会田綱雄は「できない」と述べているが、徐静波（2013）『近代日本文化人与上海』では室伏高信の娘「室伏クララが翻訳していた」（224 頁）とあり、また塗暁華（2013）『上海淪陷時期「女聲」雑誌研究』では「田村俊子はずっと中国語を学んでおり、彼女が訪中したばかりの時に発表した文章の中で中国語の家庭教師がいたことを記している。また、凌大嵘の追憶では、『女聲』の大小様々なことは全て田村俊子が決定し、原稿も最終的には田村俊子がチェックをしたとある。田村は簡単な中国語しか話せなかったが、中国語の閲読は何の問題もなかった」（92 頁）と記しており、田村俊子の中国語閲読力は高かったと考えられる。

[291]会田綱雄（1972）「一つの回想」（『現代詩手帖』15（10）、思潮社、132 頁）

[292]劉英順（訳）「田村俊子主宰『女聲』の総目次」、『国文目白』43、2004 年、97―132 頁

表４　『女聲』全体における女性関係の文章

欄名	女性関係文章	その他
評論欄	65%	35%
世界の知識	41%	59%
修養欄	78%	22%
見聞欄	14%	86%
衛生欄	52%	48%
娯楽欄	0%	100%
文藝欄	47%	53%
家政欄	27%	73%
映画と芝居	30%	70%
児童欄	0%	100%
美容欄	100%	0%
漫画欄	87%	13%
生活と感想	33%	67%

これらからも『女聲』は婦女雑誌と位置付けられているが、実際には女性に関する話題は全体の 38%に過ぎず、総合雑誌としてかなりバランスのとれた紙面構成となっていることが分かる。その中で、読者の反響が最もよく見えるのは、読者と直接やりとりをした「読者の声」（信箱）であり、「読者の声」を読み解くと『女聲』の読者たちが如何に労働問題等に関心を持っていたかが分かり、同時に佐藤俊子が熱心に読者に回答している姿が見え、関露が力を注いでいた「評論」欄と同様に、『女聲』の女性思想が集中して体現されていると言える。

以下、「読者の声」から三つの具体例を挙げ『女聲』（佐藤俊子）の女性観を見ていく。山崎真紀子は「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における信箱　――「私たち」の声のゆくえ」[293]の中で佐藤俊子が「読者の声」で繰り返し読者に送っていたメッセージは「女性の人権を認めず常に女性に従属を強いる封建的な思想から女性が自身が抜け出すために、教育をうけて経済的な自立を果たすことであった」と指摘している。これを踏まえて以下、三つの具体例を見ていく。

まず一つ目は、女性の伝統制度への反抗についてである。投稿者は 15 歳の女性で「頑固な母親」が勝手に見知らぬ男性との婚約を決めてしまったというものであ

[293]山崎真紀子「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における信箱　――「私たち」の声のゆくえ」、堀井弘一郎、木田隆文（2017）『戦時上海グレーゾーン』、勉誠出版、213 頁

る。投稿者は、「このように幼く、見識に欠けている者に、良妻賢母になれというのなら、きっと幸せな結果にはならないとわかっている(中略)私は反抗をするべきだが、礼教、封建、専制のスローガンの下で、どのように始めればよいのでしょうか」[294]と相談している。それに対する『女聲』の回答は「あなたはできるだけ徹底的に反抗すべき」[295]であり、「あなたは母親に、引き続き学校に行けるよう要求するべきだ、少なくとも将来あなたが独立できるくらいの技能を身につけるべきだ」[296]と回答している。また、別の投稿者への回答には女性の価値について「女性は家庭の人ではなく、社会の人である（中略）目を家庭から社会に向けていくべき」[297]と明確に述べている。佐藤俊子は女性と社会のつながりを重視し、経済的にも独立できるような技術を身につけることが大切だと説いている。

二つ目は女性と職業についてである。投稿者は下層職業に就く女性で、戦争によって家庭が崩壊し、生きるために仕方なく世間から賤しいといわれる仕事に就いているとある。

「六年前、私には素晴らしい家庭がありました。（中略）しかし、私の家庭は戦火を浴びて壊滅し、私の一生も破壊されました。父は砲火の中で亡くなり、兄も失い、今まで音沙汰がありません。母は砲火により障害者になり、私の弟妹たちは涙の中で日々を過ごしています。皆障碍者や幼い子供で、少しの生産活動もできません。親友から借金をしましたが、長い時間が経ち白い目で見られるようになりました。去年、私は一家のために自身の幸せを犠牲にし、嚮導女（タクシーダンサー）になり、さらにダンサーを兼ねています。そのため売春婦となって社会から軽視される下賤の者となりました。しかし、私はあがき、この悲惨な生活状況から抜け出さなければなりません。」[298]この女性の苦悩について佐藤は次のように回答している。

---

[294]原文「這樣年幼而無見識的人、去做一個“賢妻良母”知道一定得不到美滿的結果（中略）我要起來反抗、但是在禮教、封建、專制的口號下、叫我怎能啓口呢？」(「信箱」欄『女聲』、女聲雜誌社、1942 年第 1 卷 7 期)

[295]原文「妳一定要盡量的反抗到底」(『女聲』、女聲雜誌社、1942 年第 1 卷 7 期)

[296]原文「妳要向妳母親竭力要求、讓妳繼續入學、至少要完成妳將來能夠獨立的一種技能」(「信箱」欄『女聲』、女聲雜誌社、1942 年第 1 卷 7 期)

[297]原文「女子活在世上最重要的意義、是做一個人、一個有獨立意誌和獨立人格的人。(中略）更進一步、女人不是家庭裏的人、而是社會的人（中略）把眼光從家庭放開到社會去」(「信箱」欄『女聲』、女聲雜誌社、1944 年第 3 卷 9 期)

[298]原文「當在六年前的時候、我也有一個美滿的家庭、(中略）可是我美滿的家庭受炮火的洗禮、而毀滅了、也把我的一生毀滅了。我的夫親就在炮火中長逝、我的哥哥也在炮火中失了、至今還是音訊杳然、我母親也在炮火中成了殘廢的人、遺下來祉有我的弟妹等都在眼淚中過日子、全是殘的幼的、絲毫不能生産、向親友處貸借、日積月累、終於得到人家白眼。當去年的年日、我為了一家的生命、犠牲了我一人的幸福、去充當嚮導女、更兼職舞女、因而變為賣淫的人、被社會輕視、最下賤的人。可是我需要掙紮、跳

「私たちは非常にあなたに同情し、尊敬します。あなたは一般の人からは堕落して軽視される女性かもしれませんが、あなたは多くの人たちが及ばない高尚で純潔な魂、そして光に向かっていく勇敢な心があります。今の状況は決してあなたの誤りではありません。あなたは虚栄心でもなく、享楽でもなく、生活に逼迫されて生きるために競争をしているのです。私たちはあなたの苦しみがわかります。そしてあなたが良い道をいけるように手助けしたいと思います。しかし現在の状況ではとても難しく、いくつかの義務教育の補習学校がありますが、それは労働者の児童と女工のためのものです。私たちはあなたに会いたいと思います。あなたと向かい合って話をすれば、何か方法が思いつくかもしれません。また、あなたの遭遇は特別で、生活経験も豊富ですから、あなたと話すことは私たちにとっても意味があると考えています。私たちに住所を教えてくれませんか」[299]。

このように享楽や虚栄心のためにダンサーなどをしている女性は非難しているが、戦争でやむなく低級の仕事をしている女性たちには深い同情を表し、そこから抜け出すための方法を共に考えようと回答している。また別の回答でもダンスの相手をするタクシーダンサーや、セックスダンサーなど買春を伴う仕事をしている女性は「ただ人に消耗されるだけで、社会生産とは関係がない」[300]としている。ここには女性が社会生産に参加するように導こうとする佐藤のフェミニズム思想の実践が見られる。

三つ目は生産に携わる女性の重要性についてである。『女聲』は「婦女問題の主要な対象は生産に携わる女性であり、農村婦女、女工、女教員、女職員さらにはその他の労働（頭脳と肉体労働）をしている女性であり、彼女たちこそ社会の中堅である。彼女たちがいなければ、社会全体、民生全体の問題と文化教育に影響が生じる」[301]と叙述しており、「社会に利益をもたらす婦女たち」[302]を最も重視すべきだ

出我的火坑」（「信箱欄」『女聲』、女聲雑誌社、1943 年第 2 巻 4 期）

[299]原文「我們非常同情你、並且也很尊敬你、你雖然被一般人看作是墮落而被人輕視的女人、但是你有一個許多人所不及的高尚純潔的靈魂、和一顆光明向上而勇敢的心。走在現在的路决不是你的過錯、你不是慕着虛繁、不是為着享樂、你是由於生活的逼迫、為着生存的競争的！我們很能了解你的痛苦、也很希望帮助你走一條很好的道路。不過目前的情形很困難、本埠有幾個義務補習學校、但都是為着工人兒童和女工的。因此我們希望看見你、當面跟你談一談、也許臨時可以想一點弁法。同時我們認為你的遭遇離奇、生活經驗豊富、跟你談話對我們也是很有利的。你願意告訴我們你的地址嗎？祝好！」（「信箱欄」『女聲』、女聲雑誌社、1943 年第 2 巻 4 期）

[300]原文「只是使人消耗、與社會生産沒有關系」（「信箱欄」『女聲』、女聲雑誌社、1942 年第 1 巻 7 期）

[301]原文「她們的問題雖是婦女問題中的一都（部 筆者註）份、但不是主要的。婦女問題中主要對象是生産的婦女、這就是説、農村婦女、女工、女教員、女職員、以及其他的勞動（包括腦力和體力勞動）婦女、因為這些婦女才是社會的中堅、沒有她們、整個社會生産、整個民生問題和文化教育都要發生影響」（「信箱欄目」『女聲』、女聲雑誌社、1944 年 3 巻 9 期）

[302]原文「一批有利於社會的婦女們」（「信箱欄目」『女聲』、女聲雑誌社、1942 年第 1 巻 7 期）

述べている。『女聲』は労働する女性こそ社会の中堅であり、彼女たちがいなければ、社会全体、民生全体の問題と文化教育に影響が起こるとし、社会に利益をもたらす婦女たちを最も重視すべきだ提唱している。

「読者の声」（信箱）は、読者からの手紙に回答するという形式を用いた。そのため、「読書の声」からは当時の上海における女性の問題について理解することができる。『女聲』は読者への回答と通じて、読者の様々な問題について多くの解決策を提案した。例えば、女性の婚姻問題では、女性が「旧道徳」の束縛に抗うことを希望し、そのためにも女性自身が経済的に独立することを提唱し、そうでなければ不幸な婚姻となるとした。また、女性が社会に目を向けることを希望し、女性の社会性を強調した。さらに、低級な女性労働者に対しては切実な提議と援助を申し出、社会に有益な生産労働に参加することを希望した。このように読者の声では読者からの婚姻から仕事まで、様々な質問逐一回答し、『女聲』の女性問題の関心に対する幅の広さが窺える。

4.3　『女聲』の良妻賢母をめぐる言説[303]

『女聲』には既婚女性の労働や社会参加を奨励する言葉が、評論をはじめ「読者の声」（信箱）でもしばしば言及されている。本節では、『女聲』が良妻賢母思想をどのようにとらえていたかを、1940 年代に占領地区北京で活動していた周作人が『女聲』に寄稿した「女子与読書」（女子と読書）を手掛かりに、考察していきたい。

周作人（1885―1967）は魯迅の弟であり、新文化運動時期の代表人物である。女性解放問題においても重要な啓蒙の役割を果たし、1918 年 5 月 5 日に与謝野晶子『貞操論』を翻訳発表した際には、女性の貞操をめぐって大きな議論を呼び起こしている。周作人の女性観の研究は、1910 年代の五四運動期に集中している。阿莉塔（2002）は「周作人と与謝野晶子　―両者の貞操論をめぐって―」で周作人が与謝野晶子『貞操論』を中国でいち早く翻訳発表した理由を「自分の主張に対する共鳴者を日本で見つけて、それを武器にして当時の中国の女性問題を解決しようとした」[304]とし、両者の共通点を指摘している。また范輝（2009）は「二種類の配慮―

[303]本節は日本現代中国学会第 66 回全国大会（2010 年 10 月 30 日　慶応大学藤沢キャンパス）にて口頭発表後、『常盤台人間文化論叢』3 号（2017 年）に論文「日本占領時期の「女聲」雑誌に見る女性観の研究：普及活動の形態と課題」として掲載されたものに修正、加筆したものである。
[304]阿莉塔（2002）「周作人と与謝野晶子　―両者の貞操論をめぐって―」、『九大日文』1 号、131～149 頁

—周作人と蘇青の女性観の比較」[305]の中で、伝統的旧観念に対して周作人が女性解放の立場から「性の解放と経済の解放があってこそ真に女性が解放される」と認識していたと述べている。その他にも韓玲姫（2013）「周作人の女性思想と与謝野晶子の影響 ：「防淫奇策」から「貞操論」へ」[306]、李瑾（2003）「文学活動初期における周作人の女性観--翻訳小説『侠女奴』を中心に」[307]等があるが、1940 年代を中心とした周作人の女性観の研究は少ない。湯麗敏（2007）「周作人の女性観への考査」[308]では五四時期から 1950 年代までの周作人の女性観を分析している。湯氏は文中で「女子と読書」を挙げているが、「とにかく女性も男性も同じ人間であり、物質的にも精神的にも先ず真の「人」に成長しなければならないが、与謝野晶子と周作人の共通の認識だ」[309]と指摘するに止まっている。また、王蘭（2005）「女傑賛美から「婦人を哀れむ」へ　周作人の女性論の変遷について」[310]では、周作人の女性論を五つの時期に分け[311]、その変化の軌跡を叙述しており、その中で国民政府と中日戦争期（1928-1945）における周作人の思想の特徴として儒教への回帰を挙げている。

4.3.1　周作人の女性観と『女聲』

周作人は 1918 年 5 月 5 日『新青年』誌上に与謝野晶子「貞操は道徳以上に尊貴である」を「貞操論」として翻訳発表し全国的な論争を引き起こした。阿莉塔（2002）の「周作人と与謝野晶子－両者の貞操論をめぐって－」によると、「周作人は早くから女性問題に関心を示していたが、女性問題の研究において、体系的思想、理論を作りあげたのは五四新文化運動が始まって以降のことである。彼は、女性問題には女性の性の解放と経済的な解放という二大問題があると指摘しているが、特に、前者の女性の性の解放を強調している。なぜなら、女性の性は何千年も続く封建的専制体制によって最も深く支配され、圧迫されてきたからである。この問題をまず解決しなければ、経済問題をはじめとする他の問題の解決は話にもならないのである。女性の性の問題とは、一言で言えば、女性を一人の人間としてみる

[305]范輝（2009）「両種関照—周作人与蘇青女性観之比較」、『名作欣賞』14 号、63 頁
[306]韓玲姫（2013）「周作人の女性思想と与謝野晶子の影響：『「防淫奇策」から「貞操論」へ』」『国際文化表現研究 9 号』、52 頁
[307]李瑾（2003）「文学活動初期における周作人の女性観—翻訳小説『侠女奴』を中心に」『中京学院大学研究紀要 10 号』、182 頁
[308]湯麗敏（2007）「周作人の女性観への考査」『国際教養学部紀要 VOL.3』66-73 頁
[309]湯麗敏（2007）「周作人の女性観への考査」『国際教養学部紀要 VOL.3』69 頁
[310]王蘭（2005）「女傑賛美から「婦人を哀れむ」へ　周作人の女性論の変遷について」『中国女性史研究（14)』11-24 頁
[311]王蘭（2005）「女傑賛美から「婦人を哀れむ」へ　周作人の女性論の変遷について」『中国女性史研究（14)』11 頁

ことであり、女性に自分の人格を持たせることであり、男の所有物ではなくなるということである。（中略）一九一八年十月（ママ）には彼の論文「愛の成年」の中でカーペンターとH・エリスを紹介し、年末には有名な論文「人の文学」 を発表している。（中略）この時期の周作人の女性解放論の最大の特徴は、主に外国研究者の女性問題論を紹介するところにあった。目的は、中国の女性問題の研究を啓発するためである」と述べている。

これを踏まえて『女聲』に掲載された「女子与読書」をみていこう。周作人は『女聲』に二篇発表している。一つは知堂（周作人）「女子与読書」（『女聲』第 2 巻第 10 期、1943 年、4-5 頁）、もう一つは知堂（周作人）「佐藤女士的事」（『女聲』第 4 巻第 2 期、1945 年、6-7 頁）である。「佐藤女士的事」（佐藤女史の事）は佐藤俊子逝去時の追悼文であり、その具体的内容はすでに第三章の特集号でも触れたので、ここでは省略する。「女子与読書」で周作人は与謝野晶子『一隅より』（1911 年、金尾文淵堂版出版）収録の「雑記帳」を翻訳引用している。そして翻訳引用について周作人は「明治四十四年の出版、即ち辛亥の年であった。今から三十二年前のことだ」[312]とし、「余暇の時に、差し障りのない文章を探しその要約を叙述してもいいだろう。もともと『一隅より』の感想文集の中には 20 のテーマがあり、その末尾にある「雑記帳」はその総称である。収録されている長文短文は多く全体の半数、300 ページ余りを占めている。その中の一つの短文は、人に読書を勧めているものであり、今これを紹介するが、果たして他人の訳文を写したのか、自分で訳したのかは定かではない」[313]と述べている。筆者は中国における当時の与謝野晶子作品の翻訳出版状況を調査したが、「雑記帳」の翻訳が出版された形跡はない。周作人がかつて手ずから翻訳しておいたものを雑誌の求めに応じて、紹介したものと考えられる。

では、なぜ周作人は 32 年前に翻訳しておいた与謝野晶子「雑記帳」の内容を 1944 年の『女聲』に引用発表したのだろうか。その理由は、「私は民国六年に貞操論という文章を翻訳し、『新青年』に掲載した。今、最初の感想文集を読み直すと、その中でよい議論は少なくない。しかし、すぐにすべてを翻訳することはできない。

---

[312]原文「係明治四十四年出版、即是辛亥那一年、已是三十二年前事了」知堂（周作人）（1943）「女子與讀書」（『女聲』第 2 巻第 10 期、女聲雑誌社、4-5 頁）

[313]原文「餘下来可做的事、是找一篇平常點的文章、摘要叙述、以見一斑。原来這一册「從角落裏」的感想集裏列著二十題目、唯末尾的「雑記帳」一目實在乃是總名、收容長短文章甚多、佔全書分量之半、約有三百餘葉。其中有一短篇、是勸人讀書的、現在便介紹過来、也説不清是抄是譯了。」知堂（周作人）（1943）「女子與讀書」、『女聲』第 2 巻第 10 期、女聲雑誌社、4-5 頁

訳者の怠惰が一つの原因であるが、もう一つの原因は今の時代に合わない文章があるということだ。余暇の時に、差し障りのない文章を探しその要約を叙述してもいいだろう」[314]と述べている。逆に言えば周作人は「雑記帳」から差し障りのない内容を「女子与読書」に引用したのだとわかる。

周作人が「女子与読書」に翻訳引用した「雑記帳」の内容は、主に家庭にいる女性と育児に関する二点である。

先ず家庭婦人について、周作人（与謝野晶子）は次のように述べている。

周作人「對於現今在家庭裏的青年女性有一件希望的事、便是為得將來可以做得丈夫的伴侶、做得兒女的教師、又使得自己的心賢明聰慧、溫雅開濶、在短的一生理（里、筆者註）享受長的精神上的快樂起見、每日至少要有一小時、就是在晚上把睡眠時間減省下來也好、養成讀書的習慣。」[315]

与謝野晶子「只今の家庭の妻となつて居られる若い御婦人方に望みますことは良人の伴侶となり子供の教師となり又自己の心を賢く聰明にし、温雅快濶にして、短い人生に永い精神上の楽しみを享受する為に、毎日せめて一時間は夜分に睡眠時間を割いても読書の習慣を作られたい事です。」[316]

ここで周作人の翻訳をみていくと、周作人は与謝野晶子が原文に「家庭の妻」とすでに家庭に入っている女性を対象として論じているのと異なり、「青年女性」と翻訳し若い女性を対象にしていることが見て取れる。そして、家庭婦人或いは若い女性が夫のよき伴侶、子女のよき教師、また自身も賢明になるため、読書の習慣を身につけるよう提唱している。また育児については、以下のように述べている。

周作人「假如眞是深愛兒童、父母先自成為賢明、再將兒童養育成賢明的人、那是很切緊的事吧。」[317]（下線は筆者）

---

[314]原文「我在民國六年譯過一篇論貞操的文章、登裁「新青年」上、至今重閲最早的感想集、裏邊好議論還是不少、但是要想整篇的翻譯、卻又（通‘又’、笔者注）一時不易做到。譯者的懶是一個原因、其次是文章也就是不合時事。餘下来可做的事、是找一篇平常點的文章、摘要叙述、一見一斑。」知堂（周作人）（1943）「女子與讀書」、『女聲』第 2 卷第 10 期、女聲雑誌社、4-5 頁

[315]知堂（周作人）（1943）「女子與讀書」、『女聲』第 2 卷第 10 期、女聲雑誌社、4-5 頁

[316]与謝野晶子『一隅より』、金尾文淵堂版出版、1911 年、517 頁

[317]知堂（周作人）（1943）「女子與讀書」、『女聲』第 2 卷第 10 期、女聲雑誌社、4-5 頁

与謝野晶子「子供を眞に深く愛するならば親が先づ賢くなつて子供を賢く育ててやることが大切でせう」[318]　（下線は筆者）

ここに挙げた与謝野晶子「雑記帳」より翻訳引用した二例は女性観にかかわる箇所でもある。『女聲』に「女子与読書」が掲載された当時の占領区での主流思想は良妻賢母思想であったことは先に述べたが、周作人は文中で「賢」の字を用いており、一見すると良妻賢母思想を唱えているように誤解を招く可能性があるが、実際には良妻賢母については一言も触れてはいない。しかも、「家庭内の父母（夫妻）は平等で、育児は女性だけの責任ではなく両親（夫婦）とも賢明でなければいけない」と、主流とは異なる観点から述べており、その言説は周作人の五四時期の女性観と基本的に変化していない。

では、良妻賢母について、周作人はどのように考えていたのだろうか。「女子与読書」より三年ほど前の 1940 年『新光』雑誌第 6 期に発表した「女学一席話」（女学生への話）には当時の周作人の良妻賢母に対する見解が見て取れる。

まず良妻賢母について「仮に世間が言うように良妻賢母が平穏な主張であるとしたら、その時に私はそれを讃えることはできない。それはなぜか。理由は二つある。一つは、どうすれば良妻賢母になるのか私にはわからないからだ。一つのことを論じるには種々の異なる基準があり、それはそれぞれ異なっている。」[319]と良妻賢母には基準がないと述べている。次に二つ目に、男女平等の角度から「如何にして賢夫良父になるのか、これについてもよく分からない。多くのことは対応している。女性に良妻賢母になれというのなら、男性にもどのように良夫賢父になるのかを尋ねなければならない。それは対照的なものだからだ。しかしこれについても私はわからないし、恐らく他人も私よりよく知っているということはないだろう」[320]。そして、「一言でいうなら、良妻賢母は事なかれ主義だといえるし、新旧どちらでもよいといえる。しかし私はこれらにも難しいところがあり、どこからも手を

[318]与謝野晶子『一隅より』1911 年、金尾文淵堂版出版、521 頁

[319]原文「如世間所云、賢妻良母、當是平穏的主張、到那時鄙人不能賛一辭。為什麽呢？這有兩種理由。其一如何是賢妻良母、我不能知道。論一件事情可以有種種不同的標準、因時地而異」（周作人「女學一席話」（『新光抄』（五）1940 年 6 月初出、薬堂（周作人）『周作人散文全集』第八巻、廣西師範大學出版社、2009 年、495 頁）

[320]原文「其二、如何是賢夫良父、這又是不明白的事。許多事情都是對應的、要想叫女人作賢妻良母、對於男子方面也不得不問一聲、怎樣是賢夫良父、以便對照設計。可是這個不但我不知道、恐怕別人也都不能比我知道得多」

付けられない。ただ謝して辞するだけだ」[321]と「現在男子の職業にはまだ問題があり、大学卒業生の進路は役人になるか、雑誌を発行するか、教員になるかの数種類である。（中略）婦女の職業に至っては、われわれのような門外漢はどこから手を付ければいいのか分からない」[322]、「先進的な中国の家庭と市場はやはり旧体が組織したもので」[323]あり、主婦が仕事で得る収入と家庭内で人手不足により人を雇う費用を計算すると金銭的にはほぼ変わらない。よって「現在の女性は教育を求めるているが、それを職業から考えるべきではない」[324]と述べている。少々長い引用であるが、ここからいくつかのことが分かる。一つは周作人は「良妻賢母」には基準がないと考え、「良妻賢母」があるのなら、それに対応する「賢夫良父」もあるはずと、「良妻賢母」の存在に疑問を呈していること。そして二つ目に当時の社会や市場に根強い伝統思想を鑑みると、女性が就職することは困難で、なんの優勢もないとして、女性が職業につくことには消極的であった。

先行研究では 1940 年代の周作人の女性観について「儒教への回帰」、「伝統への回帰」をその特徴として指摘しているものがあるが、『女聲』に発表した「女子与読書」の内容は、かつて五四時期に取り上げた与謝野晶子を再度引用し、自己の思想を表現したものである。

このように、1940 年代の周作人の女性観は北京で主流であった良妻賢母とは異なり、周作人の女性に対する考え方は、与謝野晶子「雑記帳」の女性思想と通じるものがあった。それは家庭内の女性の啓蒙を主とし、良妻賢母については疑問を呈するものであり、当時占領区の主流思想とは異なる角度から論じられたものであった。しかし言論統制が日々強まる中で、主流思想とは違う視点からの言論はしにくかったと考えられる。だからこそ、32 年前に翻訳しておいた与謝野晶子の文章を、1944 年になって用いたのであろう。

4.3.2　「女子与読書」に対する反響と関露の女性観

以上のように、『女聲』と同じく日本占領区にあった周作人の女性思想との比較を通して、周作人が 1940 年代に占領地区の主流とは異なる女性観を五四時期と変わ

---

[321]原文「總結一句話、賢妻良母、雖是四平八穩的主義、講得圓到一點可以新舊鹹宜、可是我覺得有這些難處、所以無法著手、只好敬謝不敏了」
[322]原文「現在男子的職業還成問題、大學畢業的出路只有做官、辦報、教書這幾種（中略）此刻來為婦女話職業、我們外行實在覺得無從下手」
[323]原文「但是現今中國的家庭與市場都還是舊式組織的」
[324]原文「現在女子求教育，不可從職業著想」

らずに持ち続け、与謝野晶子の引用を通じてその女性観を婉曲に表していたことを指摘したが、周作人「女子与読書」に対する反響はどのようなものがあったのだろうか。

結論から述べるとまったく何も反響がなかったといえる。『女聲』では一般的に重要な作家や寄稿された文章に対してコメントを付す。例えば、周作人が佐藤俊子の追悼文「佐藤女士的事」を寄稿した時には、「周氏の「佐藤女士的事」の意義は単なる追悼文ではなく、佐藤女士の短い歴史だといえる。読者は最近死去した日本人女性作家を理解することができる。ここで周作人氏に深く感謝いたします」[325]と、当時編集長であった関露は周作人に対して、深い尊敬と謝辞を表している。しかも周作人ほどの著名な文化人であれば、その他の雑誌に寄稿した際も、何らかの形でコメントされるのが通例である。しかし「女子与読書」に対しては一切コメントがされていない。また「女子与読書」のすぐ後ろには芳君（関露）「節約と青年女性」（節約和青年婦女）（『女聲』1944 年第 2 巻第 10 期 6-7 頁）が掲載され、周作人が家庭婦人のことを論じているのとは異なり、関心は働く女性に向けられている。

芳君（関露）は文中で「混乱した特殊な時期」における女性の節約問題を論じているが、その対象は主に労働女性と職業女性に向けられている。「都市部において、女性たちはずっと辛抱強さと苦労に耐えて努力するという中国固有の道徳を守っています。貧しい女性たちも農村の女性たちと同様に、家庭主婦と一般人としての仕事を兼ねています。彼女たちは育児や炊事洗濯をするだけでは無く、なおかつ裁縫や編み物等の仕事をすることで夫の生産を助けます。」[326]とし、都市部の中流以下の家庭女性も農村女性と同様に家事を行い、その上で社会生産を助けると述べており、そこからも関露が女性の中でも特に中下層の家事と社会生産を兼ねている女性に対して関心を持っていることがわかる。

---

[325]原文「周先生的『佐藤女士的事』這篇文章意義也並不只是追悼、可以説是一篇佐藤女士短短的歴史、所以我們現在特別刊登出來、使讀者們可以了解一位新近故去的日本女作家、同時我們在這裏向周作人先生深深致謝！」（関露『女聲』第 4 巻第 2 期、1945 年、6-7 頁）

[326]原文「在城市裏、婦女們一向也是守著中國固有的道德、堅忍和勤苦。貧窮的婦女們也像農村婦女一樣、兼有家主婦和一般人底工作。她們不但撫育孩童、炊爨和洗滌、並且還用縫紉和編織一類的工作去幫助丈夫的生産。富有家庭的婦女就從事刺繡一類的女紅」（芳君（関露）「節約和青年婦女」、『女声』第 2 巻第 10 期、1944 年、6 頁）

少し後に載った洛川[327]「女性職業的新姿態」（女性職業の新しい姿）（第3巻第6期、1944年10月）[328] でも「ある人は、例えば林語堂等の輩は、ひいては女性自身も、嫁ぐことが女性の唯一の職業であるとユーモラスに主張している」[329]とし、続けて蘇青を例に出して「私たちは上海で最も大胆で、最もはっきりしている女性作家蘇青について述べていこう」[330]とし、蘇青は「女性が家を守ることに賛成する人物だ」[331]と述べている。そして最後に「女子教育が日増しに発展し、社会が毎日進歩している今、女性に完全に家を守らせるのは不可能である」[332]とした。また、女性の職業を医者、看護婦、弁護士、会計士、教員等の「たくさんの知力や頭を使う高尚な職業」[333]と女工、保母、女郎、ダンサー、売春婦等の「多く体力を用いる労働職業」[334]の種類に分け、上海においては後者が職業女性の多くを占めるとし、その理由は社会制度の欠落にあり、そのために中国の職業女性は「未だ正しい発展を得ていない」[335]としている。そして、 「この戦時という機会を利用して、職業の闘争における新進軍になろう」[336]と呼びかけて、戦時という特殊な時期を利用して女性は職業を開拓していくべきだと記し、家庭婦人のことを語る林語堂や蘇青を批判している。

芳君（関露）はこれより数年前にも「結婚後の女性と社会の関係」（結婚以後的婦女與社會的關係）等において家庭婦女に対して以下のように述べていた。

結婚前の女性は「自身が学び従事したものをあきらめたことがなかった。しかし結婚の後、彼女たちは完全に変わる。家庭の雑事や育児は彼女たちをすぐに社会生活から家庭の中へと転向させ、ついには世間と隔絶する」[337]と述べ、家庭女性に対して、「更に重要なことは彼女たちが正確な心理を建設することだ。この種の心理の建設は簡単に言えば、心理面で生活の自覚をすることであり、自己と社会との相

---

[327]羅賓（1926－？）、広東省興寧の人。ペンネームは洛川、会明等。14歳で共産党入党。1946年に広東省立文理学院（華南師範大学の前身）中国文学科卒業。大隊政治処幹部、中国共産党興寧県委委員、『梅江報』総編集長等を歴任。1990年に中国作家協会に加入。代表作に『鉄筆遊撃隊』、『洛川詩文集』等がある

[328]『女聲』第3巻第6期（1944年10月）10―11頁

[329]原文「有的人、如林語堂之流、甚至女人自己、都很幽默的主張嫁人是女子們唯一的職業出路。」

[330]原文「我們即以上海最大胆最透澈的女作家蘇青女士來説吧」

[331]原文「便也是一個贊成以女人守住本位主張對内治家的人物」

[332]原文「在婦女教育日形發達、社會文化日形進步的今日、欲使婦女完全株守家庭已不可能」

[333]原文「多用智力腦力的高尚職業」

[334]原文「多用體力的勞働職業」

[335]原文「仍未獲得正當底發展」

[336]原文「利用這戰時作職業爭鬥上的新進軍吧！」

[337]原文「還是不曾放棄自己所學習與從事的東西。可是到了結婚以後她們就完全變了、家庭雑物與兒童的養育使她們迅速地從社會生活轉向家庭中去、終於就與世隔絶了」（芳君（関露）「結婚以後的婦女與社會的關係」、『女聲』雑誌、第1巻7期、1942年、2－3頁）

互関係を悟ることだ」[338]としている。そして「どのような婦女であっても、人妻であり母であるかもしれないが、それらは只の個人の任務であり、個人の任務の上にはさらに高いレベルのものがある。それは彼女と彼女の家庭がいる社会だ」[339]とまとめている。

周作人の女性観の特徴として、女性の就業について反対はしていなかったこと、そして占領地区で主流であった「良妻賢母」思想とも異なっていたことはすでに述べた。周作人は女性の就業問題について、現実問題として女性が就業することの困難を指摘し、同時に女性自身の内面的な修養を高めることを提唱した。これに対して関露や洛川などは、女性は社会の一員であるという理念から出発し、女性の社会進出を提唱した。また関露は家事を「余暇の消化」と捉えており、女性の家庭における仕事まで顧みていなかったのである。

1935 年以降、共産党の革命地となった延安で、女性を戦争と生産に動員することは中心的課題となっていた。特に「四三年決定」では、家庭改革や女性の権利問題よりも女性の生産参加を強調していた。そして『女聲』でも「女性は社会職業に従事し、経済的にも独立するべき」、「女性は家庭内でなく、社会の人」であると主張するもの多く、これは共産党占領地区の女性思想と呼応するような内容である。『女聲』が周作人「女子与読書」に何のコメントもせずに冷淡に接したのは、当時の『女聲』が女性の家庭主婦にまで目を向ける余裕がなかったことも一因だと考えられる。『女聲』が注目したのは家庭主婦よりも労働女性に対してであった。

しかし、『女聲』の女性に関する文章の中で、一篇だけ良妻賢母に肯定的な論考が掲載されている。それは陳翠珠「女性與家庭」（女性と家庭）である。この文章では、大小の家族制度についての利害を述べた後に「家庭制度がどのようなものであっても、「良妻賢母」の原則は必ず守らなければいけない」[340]と良妻賢母を肯定している。そして、具体例を挙げ日本の女性は「皆大体「良妻賢母」の資格がある」[341]、ドイツの女性は「ヒットラーの政策の影響を受け、「良妻賢母」の道を邁

---

[338]原文「更要緊的是給她們加一種正確的心裏建設。這種心理的建設、簡單地説起來、就是要使她們在心理上起一種生活的自覺、要覺悟自己與社會之間的相互關係」（芳君（関露）「結婚以後的婦女與社會的關係」、『女聲』雑誌、第 1 巻 7 期、1942 年、2－3 頁）

[339]原文「不管是什麽樣的婦女、也許是人的妻子、也許是人的母親、妻子與母親只是她私人的任務、在私人的任務以上還有一個更高的東西、那就是她與她的家庭所寄托的那個社會」（芳君（関露）「結婚以後的婦女與社會的關係」、『女聲』雑誌、第 1 巻 7 期、1942 年、2－3 頁）

[340]原文「我以為無論家庭制度是怎樣「賢妻良母」的原則是不可不遵守的」（陳翠珠「女性與家庭」『女聲』、第 2 巻第 6 期、1943 年、10 頁）

[341]原文「差不多都能做到「賢妻良母」的資格」（陳翠珠「女性與家庭」『女聲』、第 2 巻第 6 期、1943 年、10 頁）

進しているところだ」[342]とある。また欧米人の生活スタイルは「極端な個人主義で」[343]……「どうしても東洋の国々には相応しくない」[344]と、良妻賢母は東洋の女性にとっては欠かせないものであるとしている。陳翠珠の文章は完全に良妻賢母を賛美した例外的な文章であり、『女聲』では反対に、伝統的な社会制度に反対し、新しい女性のあり方を説くものが主流であり、時には伝統的な思想を持つ人物を名指しで批判することもあった。例えば、第三章「評論」でも取り上げたがここでもう一度、関露「中國的女人『從道』到『男人煩惱』」（中国女性の「従順の道」から「男性の苦悩」まで）[345] を少し細かくみていくと、他雑誌に掲載された辜鴻銘（1857-1928）[346]の「中国的女人道」（中国女性の道）と廣覺「男人的煩惱」（男性の苦悩）に対して次のように意見を述べている。辜鴻銘に対しては「辜鴻銘は一人の学者ではあるが、私たちの世代と比べると、彼は過去の人物である。ここでいう過去とは、年齢が上ということでもなく、既に亡くなっているということでもない。彼の思想が陳腐であり、私たちの時代には合わないということだ」[347]とすでにその思想が過去の遺物であり新しい時代には合わないことを述べている。辜鴻銘は理想の女性像を「一人の賢く素晴らしい女性は永遠に忠実に自分の父、夫、子ともに従う」もので、「これらの良い道徳があるからこそ、中国女性の長所が形成された」[348]と考えていた。しかし関露は女性には賢さの他にも「知恵、強さ、勇敢さ」[349]が必要だとし、「女性の生活そして任務は裁縫や割烹に止まらない。女性は社会と国家における一人の人民であり、彼女は「人」の立場から多くの人に貢献をすべきである。公民の立場に立って国家に貢献をするのである。そして家庭における物事は、ただ彼女が帰宅した時の一種の私生活における余暇の消化を示しているにす

---

[342]原文「受了希特勒氏政策的影響、也正向「賢妻良母」的道路上邁進」（陳翠珠「女性與家庭」『女聲』、第 2 卷第 6 期、1943 年、10 頁）
[343]原文「極端個人主義」」（陳翠珠「女性與家庭」『女聲』、第 2 卷第 6 期、1943 年、10 頁）
[344]原文「無論如何是不時適於東方國家的」（陳翠珠「女性與家庭」『女聲』、第 2 卷第 6 期、1943 年、10 頁）
[345]『女聲』第 3 卷第 4 期、4 頁
[346]辜鴻銘（1857-1928）イギリス海峡植民地（現マレーシア）ペナンの人。1867 年からスコットランド、イギリス（エジンバラ大学）、ドイツ（ライプツィヒ大学）フランス（パリ大学）等で学ぶ。1885 年より、清朝で張之洞の外国語担当の秘書、上海黄浦江浚渫局局長、上海南洋公学（現上海交通大学）、北京大学教授等を歴任。西洋科学に精通。女性の問題については一夫多妻を主張した。
[347]原文「辜鴻銘雖是一個學者、但是跟我們這一代比、他是一個過去的人。過去的意義、不是說他的年紀太老、甚至於他已經死去、而是說他思想已經陳腐、不適合於我們這一代。」（関露「中國的女人『從道』到『男人煩惱』」、『女聲』第 3 卷第 4 期、1944 年、4 頁）
[348]原文「一個真正賢良的婦女是該永遠而忠實地服從自己的父親、丈夫和兒子。這些都是本文作者對於中國女性的理想、況且、他以為也正因爲有了這些好的道德、才形成了中國女性的優點」
[349]原文「還要智慧、堅強和勇敢」

ぎないのだ」[350]と共産党地区延安の女性解放思想と呼応するような、女性と社会との関係を重視するものであった。関露にとって良妻賢母は思想的に相いれないものであり、家庭の女性は良妻賢母となるよう教育する対象ではなく、それとは逆の経済生産活動への参加を呼びかけるものであった。

また、関露が家事について「私生活における余暇の消化」と見ていたことからも、関露は家庭の女性たちが抱いている問題に対して、ほとんど関心を示さなかった。そのため、女性が社会で活動する際に負担となる、家事や育児の問題などが解決されない現実を鑑みて、女性の就労問題についてあまり語らなかった周作人や蘇青に対しても、いくら彼らが実際には良妻賢母思想を支持していなかったとしても、そのことについて関露が正しく理解することは難しかったようである。

4.4　小結

以上の考察から、以下について明らかとなった。

１、共産党地下工作員及び進歩青年の女性をめぐる言説について考察を加えた。

丁景唐は「彼女の一生」及びその続編で、家庭や結婚さらには職業上で女性の不幸は一生続いていくと指摘し、「「子見南子」から家庭での女性観を語る」では、「子見南子」に関する故事歪曲事件を取り上げ、その原因を男性本位の女性蔑視の思想に由来すると批判、「妻を追い出す物語」では、「追い出される妻」の事例をもとに社会の女性に対する迫害を分析し、女性が積極的に自身の権利を得るために立ち上がるよう呼びかけた。また、楊志誠は「香港の女性」で、香港の女性が一夫多妻制により深い苦しみを受けてきたことを記し、女性の婚姻問題に目を向けた。また関露は女性が文芸活動に加わり、自身が体験した生活と社会の現実をみつめ、それを創作することで社会発展の方向と女性問題への解決を模索することを提唱した。

関露の主論については「評論」等でも指摘したように、女性と社会とのつながりを強調するものが多いが、丁景唐等は女性の婚姻、家庭といったテーマにも目を向け論じていることがわかった。

２、『女聲』と同じく日本占領区にあった周作人の女性思想と比較を行い、周作人は女性の就業について反対はしていなかったが、現実問題として女性が就業する

[350]原文「但是女人的主要生活和對於人們的任務並不限止於縫織和烹飪、女人是社會與國家的一個人民、她應該在「人」的立場對於許多人去服務。站在共鳴的立場去為她的國家服務。而對於家庭的事物只是在她回家的時候一種私生活上的消閒的表現」

ことの困難を指摘し、同時に女性自身の内面的な修養を高めることを提唱したことがわかった。また、それに対して関露や洛川などは、女性は社会の一員であるという理念から出発し、女性の社会進出を提唱し、家事を「余暇の消化」と捉え、女性が家庭領域で抱える問題にまで関心を向ける余裕がなかったことを指摘することができた。

また、1935 年以降、共産党の革命地となった延安では、女性を戦争と生産に動員することが中心的課題となっていた。特に「四三年決定」以降、家庭改革や女性の権利問題よりも女性の生産参加を強調するようになっていた。『女聲』はこれに呼応するかのように、「女性は社会職業に従事し、経済的にも独立するべき」であり、「女性は家庭内でなく、社会の人」と提唱していたことを指摘することができた。

３、『女聲』全体のバランスから考えると、表面的にはバラエティに富んだ総合雑誌の形を取っているが、実際に読者の反響が一番よく分かる「読者の声」を見ると彼女たちの関心が女性の労働問題にあることがわかった。また、関露も「評論」で 65％も女性問題について論じており、その関心は同様に女性の経済的自立にあり、更に「読者の声」で彼女たちの女性思想を補足しているように考えられる。

しかし、第三章で取り上げた関露の小説「黎明」や本章で記した地下工作員や進歩青年の作品は、女性の婚姻、生活における旧思想への反抗がその大きなテーマとなっている。つまり、良妻賢母思想が主流であった上海で共産党地区の主流思想に呼応して女性の生産活動への参加を呼びかけながら、一方で共産党が支配する延安地区で不足していた女性の婚姻家庭問題およびそこにひそむ旧思想に対する批判も行なっていたのであり、これが『女聲』の最大の特色であるといえる。

第五章　日本占領時期（1941-1945）の上海における女性に関する多様な言説――関露と蘇青を中心に

5.1　蘇青と雑誌『天地』について

5.2　蘇青の関露、佐藤俊子に対する見解

5.3　上海在住作家の交流

5.4　女性作家座談会――作家・作品の評価をめぐって

（1）「最初の作品の来歴」について

（2）「好きな作家」について

（3）「取材範囲」について

（4）パール・バック　『大地』　及び舞台『大地』について

5.5　「女性、家庭、婚姻などの問題」をめぐって

（1）「蘇青、張愛玲対談記」

（2）「蘇青、張愛玲対談記」に対する『女聲』の反駁

（3）『雑誌』特集――書面による談話（筆談）

5.6　「詹周氏夫殺害事件」をめぐって

5.7　小結

中国女性史研究において、日本占領時期の上海における女性解放思想の研究は少ない。同時期の国民党統治区（武漢、重慶など）と共産党解放区（延安など）における女性問題についての討論、論争に関する研究に比べて、研究が少ない主要な理由の一つには、占領下で女性解放運動は難しく、その展開がそもそも期待されていなかったこと、そしてもう一つは、占領下の特殊な状況下においても文学雑誌等で女性問題に関する言説が発表されていたことへの認識が不足していたことにある。

確かに、女性解放「運動」はほとんど姿を消してしまったが、日本占領時期（1941-1945）の上海においては短期間ではあったが、新しいタイプの女性作家が出現し、彼女たちを通して女性問題が社会問題として取り上げられたのだった。

孟悦、戴錦華は、太平洋戦争時期の女性作家は「日本の文化侵略が偶然にもたらした言説の隙間」[351]を享受したと述べている。そこから生まれた「牢獄での自由」

[351]原文「日本文化侵略帯來的偶然的話語縫隙」（孟悦、戴錦華（2010）『浮出歴史地表ー現代婦女文学研究』、中国人民大学出版社、292-295 頁）

により、彼女たちはもう二度と国家や大衆あるいは民族主体の意識形態である女性への規範と要求を代表することもなくなったため、「気兼ねすることなく自身や女性、女性の考える男性を描いた」[352]のである。こうした中で当時の上海文壇においても女性作家が出現した。蘇青、張愛玲など新式教育を受けた女性作家は、女性たち自身の生活の中から得た経験を通して女性問題に注目したのである。

上海は日本占領時期のおよそ4年間に、話題性に富み知名度の高かった蘇青や張愛玲、また身分を隠しながらも女性解放運動に参画し続けた関露、更にはコスモポリタン思想を持つ佐藤俊子等を輩出した。彼女たちは日本占領という特殊な政治状況の下で、文学創作、雑誌編集を通して当時の女性解放の問題に関心を寄せたのである。その中で、雑誌『天地』の蘇青と『女聲』の関露は、「前者に見られたのは小資産階級の雰囲気であり、後者が引き継いだのはモダンガールを批判した左翼的な立場であり、その上女性雑誌に偏っており、文学的な刊行物ではなかった」[353]と評されるように、それぞれの雑誌が代表する階級は異なっていたが、本稿で明らかにするように、共に文学にとどまらず広く女性問題を扱う雑誌を刊行した。蘇青と関露は上海で同様に社会的な動乱を経験し、その動乱の中で女性個人の生活体験を書くことで、当時の女性問題をその中に取り込んだのである。

日本占領時期の上海では、日本軍により厳しい言論統制がなされ、出版物も日本軍の審査が必要であり、中には日本軍の支持の下に創刊されたものもあった。

現在までに確認できた当時上海で出版され、且つ女性問題を多く取り上げた雑誌は主に以下のものが挙げられる（表5）。

---

[352]原文「毫無顧忌的寫自己、寫女人、寫女人眼中的男人」（孟悦、戴錦華（2010）『浮出歴史地表ー現代婦女文学研究』、中国人民大学出版社、207頁）

[353]原文「前者透露的是都是小資産階級的氣息、後者延續的是批判摩登女性的左翼立場、且較偏向婦女雜誌而非文學刊物」（「太平洋戰爭時期 上海文學場域與女性寫作---從「天地」説起、1943-1945」（楊佳嫻『近代中國婦女史研究』、第18期、2010年12月、220頁）

表５　日本占領下の上海で女性問題を取り上げた雑誌

雑誌名	発行年月	編集者	出版社	その他
中国婦女	1939-1945	濮大江	中国婦女雑誌社	月刊、家庭雑誌
宇宙風	1935.9-1947.8	林語堂、陶亢德	宇宙風社	月刊、後に半月刊。全 152 期。文学雑誌
風雨談	1943.4-1945.8	風雨談社	太平出版印刷公司	月刊、全 21 期。文芸総合雑誌。日本資本
古今	1942-1944	周黎庵	古今出版社	月刊、半月刊。総合雑誌
婦女共鳴	1929.3-1944.12	婦女共鳴社	婦女共鳴社	半月刊、月刊。家庭雑誌
良友	1926.2-1945.10	伍聯德、周瘦鵑、梁得所、馬国亮、張沅恒	良友図書印刷有限公司	半月刊、月刊。幾度かの停刊、復刊を経る。全 172 期。総合画報。日本資本
天地	1943.10-1945.6	蘇青	天地出版社	月刊、上海市長陳公博の出資による
女聲	1942.5-1945.8	左俊芝（佐藤俊子）、関露	女聲社	月刊、日本資本

（全国報刊索引に基づき筆者作成）

『女聲』は、日本軍の支持の下に創刊された女性雑誌であった。前章で述べたように編集長であった日本人女性作家の佐藤俊子の女性運動の経験と理想は、同雑誌の女性解放の主張に影響を与えたと考えられ、また同雑誌の主要な編集者である関露は共産党地下党員という身分を持つ左翼女性作家であるが、その身分を隠しながら『女聲』において自身の立場から女性解放を宣伝した。

これまで『女聲』と他紙との交流については、塗曉華（2013）によると、「『女聲』が出版された当時の上海出版界は荒んだ時期であり、『女聲』第 3 巻第 12 期に書かれているように、（筆者補：出版物は）本当に少なく、女性読み物に至ってはほとんどなかったといえる。『女聲』は同時期の雑誌とはほとんど交流が無く、当時の雑誌を見ても、『女聲』より後に創刊された『風雨談』雑誌に、何度か広告が掲載され」[354]ている程度であると述べている。しかし、本章で明らかにするよう

[354]原文「『女聲』剛出版時正是上海出版界的荒涼時期、第 3 卷第 12 期『女聲』中寫道、真是鳳毛麟角的少數、至於婦女讀物更説是一句「絶無僅有」了、『女聲』與同時期的雑誌幾乎沒有交往、翻看當時的雑誌、筆者註意到『女聲』在其後創刊的『風雨談』雑誌上曾連載過幾期啓事」（塗曉華（2013）『上海淪陷

に、関露は『女聲』の編集者や女性作家という身分で、当時、上海政府が主催した各種の社会活動や文化交流に参加し、また他の雑誌社が主催した活動にも参加して、蘇青、張愛玲等の作家及び文人たちと交流を持っていたのである。

本論では、当時上海で活躍していた女性作家蘇青（1914-1982）等の言論と比較することで、『女聲』を取り巻く、当時の女性解放の言説を補足し、より広く当時の上海における女性解放に関する言説を捉えてみたい。

5.1　蘇青と雑誌『天地』について

関露については先に述べたので、ここでは蘇青と彼女が編集長を務めた『天地』雑誌について簡単に述べていきたい。

蘇青（1914－1982）、浙江省寧波の人。本名は馮和儀、字は允庄。初期は馮和儀の名前で作品を発表。蘇青はペンネームである。日本占領時期の上海で活躍した女性作家で、『天地』雑誌の創刊者、編集長を務めた。

蘇青は、読書人の家庭出身である。祖父の馮丙然は清末の挙人であり、かつて杭州副参議長等を歴任した。父馮松雨、母鮑竹青の下に生まれ、父は蘇青が年少の頃、庚子賠款[355]の留学生としてアメリカのコロンビア大学に留学、母は女子師範にて学んだ。蘇青は父母とともに上海で豊かな生活を送り、中学時代には済南事件に対する学生運動に、1931 年には柳条湖事件に対する抗日学生運動に参加した。南京国立中央大学外国語系に在学中、李欽後と結婚した後、妊娠のため退学した。寧波にある夫の実家で女児を出産後、同年に林語堂が編集長であった『論語』雑誌に女児を出産した為につらい思いをさせられる嫁の立場を書いたエッセー「産女」を投稿、林語堂に認められ、これ以降投稿が続く。その後、上海「孤島」時期（1937 年 11 月―1941 年 12 月）には上海で、中学の臨時教師を務めながら作品創作を行う。1942 年に夫との関係が悪化し離婚、その後文化活動に参画していく。

『天地』（1943 年 10 月―1945 年 6 月）は日本占領下の上海で発行された月刊誌で、散文を主とする。計 21 期。内容は人物談、文化、読書、衣食住、婚姻家庭、生活雑談等多岐にわたり、上海市市長陳公博の出資により創刊された。陳公博は当時日本との協調路線をその政策の方向としており、親日政権から出資を受けるということは一般的な中国人からは中国国家への裏切りと考えられていた。

時期「女聲」雑誌研究』、中国傳媒大学出版社、27 頁）

[355]日露戦争後、日本の東三省への進出に対抗するため、1911 年に東三省幣制･軍事借款が起こされた。1901 年、義和団事件の処理に関する議定書において 4 億 5000 万海関両の賠償金が課せられた。

5.2　蘇青の関露、佐藤俊子に対する見解

上海が日本に占領された後、上海在住の文人たちの中には他地域へ移住する者も出現した。日本軍により厳しい監視とコントロールが行われた占領地区において、言論統制により抗日の雰囲気は抑圧された。関露と蘇青は『雑誌』[356]が主催した討論会で発言の機会を得たが、それは発言の「権利」を付与されるとともに、各種の社会文化活動に参加する「義務」も負うことになった。

日本の占領下において、中国の国家民族意識を刺激するような言論は記すことはできず、親日政権である汪精衛政府が上海で組織した社会・文化活動に文化人たちが参加することは、文化面から間接的に日本軍に加担することを意味したのである。

当時の上海を代表する女性作家たちは公共の人物として、日本軍占領時期の上海で政治・文化活動に参加し、『申報』[357]には、関露や蘇青が文壇、出版界、婦女に関する活動及び中日親善の宣伝活動に参加していたという報道がみられる。例えば、「1943 年末に「市民節約」協会理事に当選し、上海において「中日親和」の象徴となった二人の女性作家関露と蘇青（馮和儀）」[358]、「1944 年 2 月 7 日、中日女性作家交流活動の出席者は天地社編集者の馮和儀（蘇青）、文友社編集者の潘柳黛（中略）日本文芸主潮社同人三村亜紀及び女性作家張愛玲、潘瓊英、陳緑妮、陳海魂（中略）中日の女性生活、文学創作、女性総動員等の諸問題について討論する。この夜、蘇青、関露、佐藤俊子、草野心平等は錦江会館で行われた宴会に招待され出席した」[359]といった記事がそうである。

これらの政治宣伝を目的とした活動の中で、文人たちが友誼を結ぶことは難しく、更にはこれらの活動については極力話題にすることを避けた。蘇青は『続結婚十年』（1944 年）[360]で、40 年代前半のころを描写した箇所に、登場人物の一人「秋姉さん」の描写を通して、婉曲的に関露の整形手術と男性に捨てられたことを嘲笑し、関露が左翼出身でありながら、終には左翼に失望したしたという消極的なイメージを与える描写をした。蘇青と関露は日本占領時期の上海での活動、そして日本

---

[356]『雑誌』(1938.5-1939.7 1939.11-1941.4 1942.8-1945.8）は共産党地下工作組織が利用した所謂「親日行物」の一つであったが、日本占領下の上海において、二度の発行停止と復刊を経、復刊の後は中立の立場を保った。

[357] 『申報』(1872 年 4 月創刊―1949 年 5 月停刊)、近代中国において強い影響力を持っていた新聞の一つ。

[358]「市民節約協会　昨日改組成功　通過会章及理事人選」『申報』1943 年 12 月 31 日

[359]『申報』1944 年 2 月 8 日、陳雁（2014)『性別与戦争　上海　1932～1945』、社会科学文献出版社、300-301 頁より引用。文芸主潮社、三村亜紀に関しては不詳。

[360]蘇青の自伝的小説。1947 年に単行本として出版される。

軍、或いは親日政権からの出資を得て雑誌を出版したという共通した立場にありながらも、世論と精神的抑圧の前で互いを憐れむことはしなかったのである。

「秋姉さんも左翼出身だという。男性と同居したが、後にまた別れた。最近は異邦の老処女作家に代わりこの『婦友』を編集している。内容は平淡だから、当然社会からは注目されなかった。あの秋姉さんは三十を超えているように見える。とても勉強好きな話しぶりで、交際が派手、化粧も派手だ。しかし惜しいことに鼻の作りがおかしい。その原因は彼女が若い時に自身の鼻が低いことを嫌って、小さな美容院で改造し、蝋を入れたからだ。なぜかその蝋がまた溶けだした。（中略）それからは左翼思想等にも自信を無くした。なぜなら同志でもある同居男性が彼女を捨てたからだ」[361]

文中の「婦友」とは『女聲』を指し、「秋姉さん」は明らかに関露を指す。派手な化粧や整形手術で失敗した鼻を嘲笑の対象とし、男性関係までも暴露している[362]。ただし「左翼思想等にも自信を無くした」とあるのは、関露が地下党員であることに気づいていなかったのか、或いは知らなかったか、または故意にカムフラージュしたのかは不明である。

蘇青は関露を「秋姉さん」のモデルとし、美容整形に失敗し鼻が潰れたことを嘲笑し、恋人に捨てられたのだと皮肉ったが、蘇青自身もちょうどこのころ出版した『結婚十年』[363]（1944 年）で書いているように、婚姻に失敗するなど女性としての辛い経験をしていた。つまり、蘇青は関露と様々な点で共通点を持ちながらも、二人は団結することはなく、むしろ類似した政治環境の中で、『天地』と『女聲』は、女性に関する問題を多く扱っていたこともあり、お互いにライバルのような関係にあった。

---

[361]原文「秋小姐據説也是左翼出身的、與人同居過、後來又分開了、最近替一個異邦老處女作家編這本婦友、内容很平常、自然引不起社會的註意。那秋小姐看去大約也有三十多歳了、談吐很愛學交際花派頭、打扮得花花緑緑的、只可惜鼻子做得稀奇古怪。原因是她在早年嫌自己鼻梁過於塌了、由一個小美容院替她改造、打進蠟去、不知怎的蠟又融化了、（中略）從此對於左傾等也灰心了、因為那個同志又同居的男人不久就棄她而去」（蘇青（1948）『續結婚十年』、四海出版社、80-81 頁）

[362] 関露が美容整形をした理由については、烏珠「女作家関露二三事」（『海潮周報』（1946 年第 23 期、5 頁）や小君平「女作家関露追求李之華」（『海花』、1946 年、第 3 期、9 頁）にも「関露が同じ「量才詩歌座談会」の指導員であった李之華に一目惚れしたが振られ、鼻が低いと陰口を叩かれたから」と記しているが、作者は同文の中で「整形の理由がその陰口のせいであったかどうか、真相はわからない」とも記しており、共産党地下党員としての任務を遂行するために整形した可能性もある。珊子「関露的鼻梁」（『東南風』、1946 年第 2 期、8 頁）のようにただのゴシップとして扱う記事もある。

[363]1944 年、天地出版社。抄訳として白水紀子訳「結婚十年（抄訳）」『中国現代文学珠玉選　女性作家選集』（白水紀子主編・二玄社　2001 年）がある。

しかし、蘇青の関露、佐藤俊子に対する描き方は、単にライバル関係から生まれたものではなく、その根底には同じ女性解放問題に関心を寄せた女性作家でありながらも、その思想立場に差異が存在していたからとも考えられる。

以下、関露、蘇青を中心に彼女たちが参加した女性問題をテーマにした活動について具体的に分析し、日本占領時期の上海における女性に関する言説の多様性をみていく。

5.3　上海在住作家の交流

当時の上海における多様な女性言説を検討するために、当時上海で中立の立場を保ち、社会問題に敏感であった文学雑誌『雑誌』掲載の記事を取り上げる。

『雑誌』（1938.5-1939.7、1939.11-1941.4、1942.8-1945.8）は共産党地下工作組織が利用した所謂「親日刊行物」の一つであったが、日本占領下の上海において、二度の発行停止と復刊を経、復刊の後は中立の立場を保った。

李相銀（2009）『上海淪陥時期文学期刊研究』[364]によると「『雑誌』は発行を保証するために、「一方では日本勢力に自らの「従順」、「合作」の態度を表明し、日本当局に対して『雑誌』は汪精衛政府の文化繁栄に期待し力を出すとし、もう一方では広く読者に対して、体は曹操陣営にあっても心は漢にあるという形で自らの潔白を表明した」[365]と記している。

『雑誌』は 1942 年に復刊後は 1945 年まで一度も停刊することなく、当時の上海文壇において多方面に影響を有していた。

『雑誌』は「文化人を団結」[366]するために、計 11 回の座談会を主催した。内容は映画、舞踊、音楽等の芸術関係、文学、伝記等の文学関係、更には女性作家の座談会である。またこの他にも 14 回の書面による談話を行っている。座談会と書面による談話には上海文壇の著名人が集い、当時の上海における中心的な話題を体現している。その中で女性を話題とした座談会や書面による談話は、当時の代表的な女性観を表していると考えられる。

関露、蘇青、張愛玲等の当時の上海を代表する女性作家も度々『雑誌』が主催した女性に関する座談会等に参加している。具体的には以下の通りである。

---

[364]李相銀（2009）『上海淪陥時期文学期刊研究』、上海三聯書店、121 頁

[365]原文「『雑誌』為了保證發刊、「一方面要向依仗的日偽勢力表明自己「順從」、「合作」的態度、讓他們以為『雑誌』的所作所為是在汪偽政權期待的文化繁榮而效力。另一方面則要向廣大讀者表明自己「身在曹營心在漢」式的清白」（李相銀（2009）『上海淪陥時期文學期刊研究』、117 頁）

[366]李相銀（2009）『上海淪陥時期文学期刊研究』、上海三聯書店、124 頁

① 女性作家座談会（女作家聚談）

『雑誌』第 13 巻第 1 期（1944 年 4 月）掲載。参加者は汪麗玲、呉嬰之、張愛玲、潘柳黛、譚正璧、藍業珍、関露、蘇青、魯風、呉江楓。

②対談（『新中国報』主催）[367]「蘇青、張愛玲対談記――女性、家庭、婚姻などの問題」（蘇青、張愛玲対談記――関於婦女、家庭、婚姻諸問題）

『雑誌』第 14 巻第 6 期（1945 年 3 月 10 日）掲載。1945 年 2 月 27 日、張愛玲宅にて。参加者は蘇青、張愛玲、司会（記者）。

③書面による談話（筆談）「女性、家庭、婚姻などの問題（一）」『雑誌』1945 年 4 月号）、同（二）（1945 年 4 月号）、同（三）（1945 年 5 月号）。参加者は、蘇青、張愛玲、盛琴遷、記者、周越然、司馬斌、宛青、慶子、丁芝、藍蘭、王淵、洪洪、煙萍。

④「夫殺しについての書面による談話」（殺夫者筆談）

『雑誌』第 15 巻第 3、4 期（1945 年 7 月）。参加者は、蘇青、趙田孫、慶子、沙莉、関露。

『雑誌』は中立の立場を保ちながら多くの交流活動を主催した。それが、作家同士の「団結」につながったかどうかは更なる研究が必要であるが、女性を話題としたこのような活動の中で、より多くの女性問題に対する考えを引き起こしたことは事実である。

以下、これらの座談会、対談、書面による談話を、話題になった内容に沿って論じていきたい。

5.4　女性作家座談会――作家・作品の評価をめぐって

(1)　「最初の作品の来歴」について

(2)　「好きな作家について」

(3)　「取材範囲」について

(4) パール・バック　『大地』　及びその舞台『大地』について

5.5　「女性、家庭、婚姻などの問題」をめぐって

(1)　「蘇青、張愛玲対談記」

[367]「『雑誌』は復刊の後、『新中国報』と強い結びつきがあった。『新中国報』は当時上海における四大日報の一つであり、もっとも広範囲の情報資源を有していた」（李相銀（2009）『上海淪陥時期文学期刊研究』、上海三聯書店、114 頁）。この対談も主催は『新中国報』であるが、記事は『雑誌』に掲載されている。

(2) 「蘇青、張愛玲対談記」に対する『女聲』の反駁

(3) 『雑誌』特集――書面による談話（筆談）

5.6 「詹周氏夫殺害事件」をめぐって

5.4 女性作家座談会――作家・作品の評価をめぐって

1944 年 3 月 16 日、『雑誌』誌上で「女性作家座談会（女作家聚談）」が開催された。話題は「処女作の来歴」、「女性作家が女性作家を語る」、「好きな外国人作家は誰か」、「流行作品の批判」、「取材範囲の問題」、「どのように執筆するか」、「暇つぶしと読書」、「女性作家の業績」、について汪麗玲、呉嬰之、張愛玲、潘柳黛、譚正璧、藍業珍、関露、蘇青、魯風、呉江楓の十人が語り合った。これらの作家の中でよく名前を知られていたのは張愛玲、関露、蘇青で、皆当時非常に人気があった。

（1）「最初の作品の来歴」について

司会の魯風は関露に文学生活の始まりを尋ねた。関露は「ちょっと考える」[368]と言い「最初に詩を書いたのは沈起予の『光明』半月刊」[369]であるとした。関露が言及したのは 1936 年 10 月 25 日『光明』第一巻第十期に掲載された詩作「故郷よ、私はあなたを落ちぶれさせない」（故郷我不讓你沈淪）[370]である。

私はあなたの夢をみた、
あなたが私にお別れをいう夢を見た。
あなたは外側の脅威が無数にあると言った。
あなたは異民族の侵略を受け、
誰もあなたに代わって復讐も抵抗もしないと言った。
あなたは昔日に亡くなっていく
言葉、文章、
子ども、青年、
あなたを統制する新しい異種の王にとってかわられようとしている。

[368]原文「想了一下」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）
[369]原文「開始是寫詩的、我的第一首詩是刊在沈起予編的「光明半月刊」」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）
[370]丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社、187 頁

故郷よ、あなたを思うと、
祖国の恨みがこみあげてくる！

私はあなたを夢に見、
あなたの今を夢に見、
あなたの過去も夢に見
見よ、あの失った土地を、
敵の旗の下、
どれほどの同胞、
離散、飢餓、奴隷、死傷があることか。
敵の軍馬の灰の下に、
すでに祖国の滅亡が象徴されている。

しかし、私の夢の中で、
私はあなたが抗っているのが見える。
あなたの助けを求める声に、
すでに四万の同胞たちが共鳴している。
故郷よ、
私はかつてあなたの胸の中で成長した。
あなたを愛する、
私が父母、兄弟、忠実な友人を愛するように。
私はこの熱い血と体温で、
あなたの戦いの刀槍となる。
私はこのような破壊された山河にいて、
もう一度
長江を隔てた酒楼で歌われている「後庭花」を聴くわけにはいかない。

故郷よ、私に祖国の恨みを思い出させた。
故郷よ、
私はあなたを凋落させたりはしない！[371]

[371]原文「我夢見你、夢見你將要向我道別的模樣：你説你的外患無疆；你説你曆受異族的侵辱、無人替你

この詩は屈辱に耐える愛国の情を表明し、異民族に侵略された祖国と犠牲になった同胞のために、多くの同胞と同じように、祖国を異民族の侵略から守るために戦おうという激情が表現されており、題名からも作者の民族に対する情熱がみられる。

この詩が発表されたのは魯迅が 1936 年 10 月 19 日に亡くなってまもなくであり、魯迅に対する念もそこには含まれている。

しかし、これは関露が発表した最初の詩ではない。関露は南京中央大学在籍時に、「詩作と散文を学び始め」[372]、1930 年 3 月 10 日に『幼稚』第 2 期に「一人の知識青年の旧社会における不幸な遭遇」[373]を描いた小説「余君」[374]を発表している。

つまり、関露は「ちょっと考える」と言い、故意に処女作ではなく比較的新しいこの詩を挙げて、自身の愛国への情熱が変わっていないことを暗示したのではないだろうか。

この詩が発表された 1936 年、関露は詩集の『太平洋上の歌声』（太平洋上的歌声）（1936 年 11 月上海生活書店出版）を出版した、この詩集は 22 首の詩を集め、詩作は民族危機に面して、一人の愛国青年の世界政治の変化と祖国の運命に対する深い関心をよく表しており、この詩集により関露の名は広まった。

一方、蘇青は「最初はもともとは『宇宙風』に寄稿したが、停刊のために原稿を持って帰ってきた。その後は、執筆を生業としたので、今度は『古今』に投稿した。当時私は女児を出産していた。家族は皆女児を嫌っており、私はいつもつらい思いをしていた。よって私は彼女たちとあまり話をせずに、暇があれば部屋にこもって子どもの世話をし、子供が寝たら読書をした。私の読書は暇つぶしであり、ただ小説や戯曲の類だけを読んだ。家で購読していた雑誌は『論語』と『人世間』の二種類であった。私は特に前者を好んだ。ある日、突然文章を書きたくなり、「女

報仇和抵抗；你將要死去昔日的　言語、文章　孩提、少壯、換一個統制你的異種的新王。故鄉、憶起你、掀起我祖國的惆悵！我夢見你、夢見你的如今、也夢見你以往。看吧、那失去的領地、在敵人旗幟的飄展下邊、有多少我們同胞、流離、饑餓、奴隸、死傷；在敵人的走馬灰塵裡已象徴了祖國的垂亡！但是、在我的夢中、我也看見你掙扎的情況；你待救的呼聲　已經把四萬萬同胞振響。故鄉、我曾在你懷中長成、我愛你、好像愛我的　父母、兄弟、忠實的朋友；我願意以我的熱血和體溫　作你戰鬥的刀槍、我不能在這破碎的河山裡、重聽那『後庭花』隔江歌唱！故鄉、憶起我祖國的惆悵。故鄉、我不能讓你淪亡！」（上海市作家協會 上海文學發展基金會主持『海上文學百家文庫 安娥 關露 白朗卷』 上海文藝出版社、2010 年 317-318 頁）

[372]原文「開始学習写作新詩和散文」（丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社、315-318 頁）

[373]原文「將一個知識青年在舊社會的不幸遭遇」（丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社、315-318 頁）

[374]週刊誌。文学青年が南京で組織した幼稚社により出版

児の出産」を書き『論語』に投稿したところ、すぐに採用された。しかしテーマは編集者により「男を産むことと女を育てること」に変更された。これが私の正式に書いた文章の始まりである。その文章は「論語」64 期に掲載された。民国 24 年（1935 年）6 月 16 日の出版であり、原稿料は五元であった。」[375]と述べている。

潘柳黛は、執筆は「完全に興味から」[376]始まり、「原稿料をもらって生活するようになるとは全く思っていなかった」[377]が、蘇青と同じように後に「原稿料で生活する」ようになったとある。

翌月、1944 年 4 月 15 日に発売された『女聲』第 2 巻 12 期に関露「執筆についてのいくつかの話」（關於寫作上的幾句話）が掲載された。文中では、現在の読者が悩んでいるのはお金を出して雑誌を購入しても、読むべきものが少なすぎるからで、その原因は「もしも作者の創作態度がまじめなもので無く、読者や自身に忠実ではなく、創作はただの職業の一つとしたならば――私たちは創作を職業化しようとしているが、「職業化」以外に、創作自体に意義があるべきだ――文章を一つの商品とみなし、ただ金銭と交換できさえすれば、編集者とその刊行物に適当にちょっと書いてしまう」[378]ので、その刊行物の内容は空虚なものとなる。作者が生活のために創作を職業とすることに反対はしないが、「作者は読者の利益を自身の利益と見做さなければならない」[379]。「絶対に消極的で適当な態度を抱いては」[380]ならず、永遠に「自己批判と学習の中にある」[381]べきであり、「名声や原稿料のために創作をするべきではない」[382]と、手厳しく記している。これは蘇青や潘柳黛が表向き、創作は暇つぶしであり趣味であると語ったことに対する批判と考えられる。

---

[375]原文「第一篇本來是寫給「宇宙風」的、後來「宇宙風」停刊、這篇搞子就取了回來、原想不發表了、後來因為賣稿為生、於是又拿出來、在「古今」上發表了。那時我因為養了一個女孩子、家裏的人都不喜歡、時時予我以難堪、我便不大和她們談話、閒下來躲在房裏抱抱孩子、孩子睡著了、便看些書。我看書因為是消遣性質、所以只看小説戯劇之類、雑誌則家中定的衹有「論語」及「人世間」兩種、我對於前者尤其愛好。有一天忽然技癢起來、寫了一篇「産女」投稿到「論語」去、很快的就被録用了、不過題目已由編者改為「生男與育女」、這是我正式寫文章的開始。那篇文章登在第六十四期「論語」上、是民國廿四年六月十六日出版的、實得稿費五元正」（蘇青が投稿した雑誌『論語』は林語堂が創刊したもの。「産女」（のちに「生男与育女」は第 67 期（1935 年 6 月）に掲載された。）

[376]原文「完全是出於興趣」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[377]原文「根本想不到有一天居然會靠賣文為生」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[378]原文「如果作者的寫作態度不嚴肅、不忠於讀者也不忠於自己、只是把寫作單純地看成一種職業―我們要把寫作職業化、但是在「職業化」這一點以外、寫作本身該有其他的意義―把文章就看成是一種商品、只要能夠換到錢、就隨便寫一點去應付編者和他地刊物的話」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[379]原文「作者該把讀者底利益看成是自己本身底利益」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[380]原文「絶不要抱一種消極和隨便的態度」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[381]原文「要在自我批判和學習當中」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[382]原文「不為成名或稿費而寫作」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

(2) 「好きな作家について」

「中国の古代および現代の女性作家」[383]という議題で「好きな作家」について答えたものである。

１、古代の女性作家について

藍業珍、吴嬰之、関露、蘇青、汪麗玲、潘柳黛、張愛玲の七人の中で、蘇青と吴嬰之を除く五人が李清照を挙げている。（下線は筆者）

関露：「古代の女性作家の中で、私は朱淑貞と李清照を好んでいます。彼女たちの文章は美しく人の心を打ち、内容も非常に大胆で、他の女性が口にすることができなかったことを話しています」[384]

汪麗玲：「私がもっとも好きなのは李清照の詩詞です。李清照といえば、李后主が思い浮かびます。彼女たちはともに中国における詩詞の提唱者というだけでなく、生涯の境遇も似ているところがあります。最初に彼女たちが送った生活はとても円満で、詩詞に表現されたものも艶めかしくあでやかでしたが、後に、一人は国を、一人は配偶者を亡くしたため、晩年の境遇はさびしいものであり、彼女たちの詩詞も痛ましいものとなり、強い悲しみの中にありました」[385]、と語って李清照『武陵春』を諳んじた。汪麗玲は李后主と李清照の生活経験と詩詞を借りて、亡国の悲哀を表現した。

潘柳黛：「私は非常に李清照と朱淑貞の作品が好きです。彼女たちはそれぞれ個人の風格がありますが、しかし李清照の作品の優雅な麗しさ、朱淑貞作品の人の心を打つ美しさへの憧れは今日まで止むことはありません。彼女たちは超人的な想像力があり、特にあのような旧伝統時代において女性はまったく地位が無かったが、彼女たちは文学の方面で頑張って一席を占めることができました。そしてその一席は、完全に作品自身の価値により得たものでした。実に、彼女たちのあのような成功した作品は、当時の男性作家のなかでも多くはなかったと思う」[386]と、文学的才

---

[383]原文「中國歷史上的以及現代的女作家」(「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 卷第 1 期、1944 年 4 月)

[384]原文「在古代女作家中、我喜歡朱淑貞和李清照、我覺得她們的詞句纏綿動人、而且寫得很大膽、能説別個女人不敢説的話」(「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 卷第 1 期、1944 年 4 月)

[385]原文「我最喜歡李清照的詞、提起李清照、我就想到李後主、他們不獨在作品方面同為中國詞的盟主、就是他們一生的遭遇也很有些相像的地方。起先、他們過的生活太美滿了、所以表現於詞的也就顯得香豔纏綿、後來、一個王國、一個喪偶、晚景淒涼、於是他們的詞也就變得沉痛哀怨、悽惻欲絶」(「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 卷第 1 期、1944 年 4 月)

[386]原文「我非常喜歡讀李清照和朱淑貞的作品、雖然她們個人有個人的風格、但是李清照的作品的清麗、朱淑貞作品的纏綿、就是真到現在、也令人嚮往不已。她們都有著超人的想像、尤其在那樣的封建時代裡、女人根本沒有地位、而她們卻能掙扎著在文學的領域裡佔有一席、而這一席的佔有、也完全是以文學本身的價值換來的、實在、像她們那樣成功的作品、就是在當時男性作家群裡、也該是不可多得的吧！」

能によって女性が社会的地位の無かった古代において一席を占めたことを称賛している。

張愛玲：「古代の女性作家の中でもっとも好きなのは李清照です。李清照の優れた点については早くに定評がある。私が分析して紹介するまでもないでしょう」[387]と具体的に李清照に対する見解を表してはいない。

古代の女性作家については、関露は主に李清照と朱淑貞の大胆な女性らしい表現を評価し、女性の反抗精神に対する称賛が表れている。汪麗玲は李清照の作品を評価した以外に、さらにはその詩詞の中から亡国の悲哀を読み取った。潘柳黛は創作による女性の地位の向上という面から、彼女たちの作品にもう一つの価値を見出している。張愛玲は李清照に具体的な評価をしていないが、「古代の女性作家の中で、もっとも好きなのは李清照」と語っている。総じてみると、古代の女性作家の中で李清照そして朱淑貞に対しては一致して肯定と称賛をしているのである。

２、現代女性作家について

彼女たちの古代の女性作家に対する評価はほぼ一致していたが、現代女性作家に対する認識は一様ではなかった。

まず前述の議題、即ち「最初の作品の来歴」に関する話題において、記者の呉江楓と蘇青が冰心に言及した点について補足する。

呉江楓：「女性作家といえば、冰心を思い出します。私が最初に新文芸に興味を持ったとき、中学の国語の教科書で冰心の作品、『超人』、『去国』等を読んだことを覚えています。その後にまた彼女の多くの本、『超人』、『寄小読者』、『繁星』、『春水』などを読みました。」[388]

蘇青：「冰心といえば、私も以前彼女の詩と文章を読んだことがあります。とても美しいと感じましたが、後に彼女の顔写真を見たら、とても醜かった。それに彼女の作品がいつも自分の女性美をひけらかしているのを知って、それからは彼女の作品に興味は無くなりました。本当に口に出して言うのもおかしなことです」[389]

以下は「現代の女性作家について」の出席者の回答である。

（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[387]原文「古代的女作家中最喜歡李清照、李清照的優點、早有定評、用不著我來分析介紹了」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[388]原文「説到女作家、便記起了冰心、我記得最初對新文藝感到興趣的、是在初中的國文教本土上讀到冰心的作品、如「超人」、「去國」之類、後來又讀了她不少集子、如「超人」、「寄小讀者」、「繁星」、「春水」等等」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[389]原文「説起冰心、我從前讀過她的詩和文章、覺得很美麗、後來看到她的照相、原來非常難看、又想到她在作品中時常賣弄她的女性美、所以後來就沒有興趣再讀她的作品了、真是説也可笑！」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

藍業珍：回答なし

呉嬰之：「現在の女性作家の作品はあまり読みません」[390]

蘇青：「女性作家の作品は以前からあまり読まず、ただ張愛玲の文章を読むだけです」[391]

関露：「現代の女性作家であれば丁玲が好きです。彼女の作品は大胆で情熱的ですから。彼女の生活経験は広いため、彼女の作品の題材は現実的で、また広く深く発展しています」[392]

汪麗玲：「私は子どもの時から冰心女史の『寄小読者』[393]が好きでした」（中略）「少し成長してからは丁玲女史の作品を好むようになりましたが、冰心女史の自然な活発さとすがすがしい伸びやかな美しさは忘れていません」[394]

潘柳黛：「現代の女性作家といえば、私は子供のころ冰心の作品を読むのがとても好きでした。たぶんそれは彼女の作品の内容と私の生活が近かったからだと思います」（中略）「その後、中学へ入学すると、冰心の作品は私には影響が無くなり、黄廬隠と丁玲の作品に大きな興味を抱くようになりました。なぜなら冰心の作品は往々にして私が体験したもので、廬隠と丁玲の作品の内容は私が追求したいものだったからです」[395]

張愛玲：「近代では蘇青がもっとも好きです。蘇青より前では、冰心の清々しい美しさは往々にして不自然さに流れているし、丁玲の初期作品は素晴らしいですが、後には気持ちはあるが力が伴っていないところがあるようです。着実に生活の趣を

---

[390]原文「目前女作家的作品、我不大讀」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[391]原文「女作家的作品我從來不大看、只看張愛玲的文章」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[392]原文「現代女作家則喜歡丁玲、她的作品大膽而有熱情。由於她的生活經驗寛廣、她的題材是現實的、而且能向廣而深的方面去發展」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[393]『寄小讀者』（小さな読者に寄せる）は謝冰心が 1923 年の留学開始時から 1926 年までの三年間連載発表した児童向けのシリーズものコラムである。全二十九篇からなり、主に旅行中の景色やそれまであまり知られていなかった海外の事柄が描写されており、同時に旅人の故郷への思いや祖国、家族に対する恋しさを表している。最初は『晨報』の「児童世界」欄に掲載され、1926 年にそれらをまとめて出版した。1960 年から 70 年代にかけて冰心は、『再寄小讀者』（再び小さな読者に寄せる）と『三寄小讀者』（三度小さな読者に寄せる）を発表した。『寄小讀者』は中国における児童文学作品の先駆と位置付けられている。

[394]原文「我從小就喜歡讀冰心女士的「寄小讀者」」（中略）「稍長、我又愛上了丁玲女士的作品、但我並沒有忘記冰心女士的自然活潑和清新流麗」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[395]原文「談到現代的女作家、在我小的時候、很喜歡讀冰心的作品、大概是因為她作品的内容跟我的生活接近的緣故」（中略）「之後我入了中學、冰心的作品對我就沒有力量了。我開始對黄廬隠和丁玲的作品發生極大的興趣、因為冰心的作品内容、往往是我所體驗到的、而廬隠和丁玲作品的内容卻正是我要追求的」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

捉えている点で、蘇青はもっとも優れているといえ、彼女の特徴は「偉大なる単純」と言えます」[396]

張愛玲が蘇青を「現代もっとも好きな女性作家」[397]だと言ったのは、日本占領時期の上海において、臆せずに堂々と女性を語る蘇青の姿勢に対してだと思われる。このような特殊な歴史環境の中で流行した女性に関する言説は、婉曲で控えめな冰心や女性革命作家丁玲とも異なるものであった。

孟悦、戴錦華（2010 年）はこの時期の女性作家たちは「日本の文化侵略がもたらした偶然の言説の隙間」[398]を享受し、「牢の中での自由」[399]を産んだと述べているが、まさに蘇青や張愛玲は「少しも気兼ねすることなく自身、女性、女性の目に映る男性を書いた」[400]のである。

また、張愛玲の「丁玲の初期作品は素晴らしいですが、後には気持ちはあるが力が伴っていないところがあった」[401]という評価は、丁玲の創作は初期は知識女性の苦悩の描写だったのだが、30 年代には社会革命や闘争に関する作品が描かれるようになったことを指し、張愛玲のいう「初期」とは、丁玲が共産党員として革命活動を作品のモチーフにする以前の時期である。その他の女性作家が丁玲の作品を「力がある」と小説の内容を称賛しているのとは逆に、張愛玲は「力が伴っていない」という言い方で丁玲に対して一定の距離を保とうとしているようにも見える。

ともあれ、現代女性作家の作品鑑賞に関しては、多くが冰心から丁玲へと関心が移行したことがうかがえる。先行研究では、冰心を五四新文学における女性作家の代表としている。例えば、汪麗玲が挙げた『寄小読者』は新文化啓蒙期における代表作の一つであり、呉江楓は「最初に新文芸に興味を持ったとき、中学の国語の教科書で冰心の作品を読んだことを覚えている」[402]とし、汪麗玲は幼いころから冰心

---

[396]原文「近代的最喜歡蘇青、蘇青之前、冰心的清婉往往流於做作、丁玲的初期作品是好的、後來略有點力不從心。踏實的把握住生活情趣的、蘇青是第一個。她的特點是「偉大的單純」。」

[397]原文「近代的最喜歡蘇青」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[398]原文「日本文化侵略帶來的偶然的話語縫隙」、孟悦、戴錦華（2010）『浮出歴史地表―現代婦女文学研究』、中国人民大学出版社

[399]原文「牢獄中的自由」、孟悦、戴錦華（2010）『浮出歴史地表―現代婦女文学研究』、中国人民大学出版社

[400]原文「毫無顧及的寫自己、寫女人、寫女人眼中的男人」、孟悦、戴錦華（2010）『浮出歴史地表―現代婦女文学研究』、中国人民大学出版社

[401]原文「丁玲的初期作品是好的、後來有點力不從心」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

[402]原文「記得最初對新文藝感到興趣的、是在初中的國文教本上讀到冰心的作品」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）

を好んでおり、潘柳黛もまた「とても小さいときは、冰心の作品が好きであった」[403]と、冰心作品がこれら作家たちの文芸面での啓蒙において大きな影響を与えていたことがわかる。五四文化啓蒙運動の時代に冰心は童心の誠実さで、自然に母性を受け入れ、宇宙の真善美を崇拝したが、民族の存亡の危機という厳しい現実に面した時に、冰心の婉曲で控えめな風格は、新しい社会の現実に対応することはできなかったのだろう。よって汪麗玲の言う冰心の「自然な活発さとすがすがしい伸びやかな美しさ」[404]という風格は、このような社会環境の中では「影響を失った」[405]のであった。

一方の丁玲は五四文化運動が衰退した後に文壇に現れ、左翼文化運動の直接的な影響を受けた女性作家であり、蒋介石の南京政府に一時軟禁されていたが、脱出して 1937 年 2 月に延安入りを果たした、共産党員でもあった。この座談会で丁玲の名前を口にすること、「好きな作家」というソフトな話題の中で、丁玲の名前を口にすること自体が大きな意味をもっていたのである。張愛玲が、丁玲の前期の作品を評価するという形で丁玲の名前を出したこともまた同様に評価されるべきであり、民族解放のイメージを持つ女性作家丁玲の名を挙げることで、当時の上海では、民族の解放を謳った左翼的な文学作品が発表しにくくなっていると、暗に日本占領下の上海の文化状況に対する批判が込められているようにも見える。

(3) 「取材範囲」について

「取材範囲の問題について」問われ、蘇青は「女性作家の生活範囲は比較的狭い、よって取材も広範囲にわたることはできない」[406]と答え、関露は蘇青の「題材の狭い、広い」に対して、性別による区分けにはとても「賛成できない」と述べている。そして関露は、男性作家の林語堂の作品の題材は女性作家の丁玲と比べて広くはないと例をあげて、性別の違いと題材の範囲は関連がないとし、暗に林語堂に対する批判も込めていた。

林語堂は1930年代に良妻賢母思想を支持した男性大物作家であり、丁玲は当時共産党地区で活躍していた女性左翼作家である。

---

[403]原文「很小的時候、很喜歡冰心的作品」(「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月)
[404]原文「自然活潑和清新流麗」(「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月)
[405]原文「沒有力量了」(「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月)
[406]「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月

中国では五四時期に「男女共学、女子の高等教育への進学、婚姻や恋愛の自由などが実現し、限られた範囲ではあったが、女性が職業を持って社会進出することも可能となり」[407]、「女性は家を出よう」というスローガンが提出された。しかし、数千年間、礼教と経済的強権の二重抑圧のもとにあった女性が、やっと夜明けの光を見たのに、「婦女は家に帰れ」の動きがたびたび女性たちを襲ったのだった。

林語堂が1930年にミッション スクールの上海中西女塾で行った講演で、「女性の職業は結婚」だという発言は大きな論争を引き起し、1933年から1937年にかけて展開された第一回目の「女は家に帰れ」論争の導火線となった。[408]関露が丁玲の名を挙げ林語堂との引き合いに出したのは、丁玲を支持することにより関露自身の左翼的な立場を表すためであったと考えられる。

(4) パール・バック[409] 『大地』[410] 及び舞台『大地』について

１、座談会におけるパール・バックへの言及

２、パール・バック及び『大地』の評価について

１、座談会におけるパール・バックへの言及

座談会において続いて注目すべきは、司会者呉江楓の「外国人女性作家の中で誰の作品が好きですか」[411]という質問である。張愛玲はステラ・ベンソンを挙げ、汪麗玲はダフニ・デュ・モーリエ、ジェーン・オースティン、さらに「これらの他に私は中国人が最もよく知っている女性作家パール・バックの作品を好んで読んでいます」[412]とパール・バックとその作品『大地』を挙げ、『大地』の「中国農村の状

---

[407]中国女性史研究会編（2004)『中国女性の一〇〇年』、青木書店、134 頁

[408]前山加奈子（1993)「林語堂と『婦女回家』論争――一九三〇年代 に於ける女性論」柳田節子先生古稀記念論集編集委員会『中国の伝統社会と家族』汲古書院、509-526 頁を参照。

[409]パール・バック（1892 年 6 月 26 日－1973 年 3 月 6 日)、英語名は Pearl S. Buck、中国名は賽珍珠、アメリカ人作家。人権、女権活動家。出生四か月後に宣教師であった父母に連れられ中国へ至り、1934 年まで中国で過ごした。アメリカに帰国した後も、夫とともに「東西方連合会」(East and West Association) を設立し、アジアと西洋の文化交流のために尽力した。アメリカ人であるが中国語を母語とし、青年期を過ごした鎮江を中国の故郷と称していた。代表作には中国の農民生活を描いた長編小説『大地』、続編の『息子たち』(1932 年)、『分裂せる家』(1935 年) 三部作等があり、1938 年にこの作品でアメリカで二人目となるノーベル文学賞を受賞した。

[410]『大地』(The Good Earth) は中国の農民生活を描いた作品である。1931 年 3 月にニューヨークで出版され、同年のベストセラーとなった。1932 年に中国にて中国語版『大地』が発表され人気を博したが、同時に「資産階級から見た中国の農村」、「外国人の色眼鏡を通して見た中国」等の批判もあった。

[411]原文「對于外国女作家喜讀那一位」(「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月)

[412]原文「此外、我還愛讀一位中國人最熟悉的女作家賽珍珠的作品」(「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月、53 頁)

況についての描写は、完全に正確であるとは言えませんが、その文章は詳細で精緻であり、現代女性作家の中で右に出るものはいないと言えます」[413]と述べている。

中国でよく知られている外国人女性作家として名前があがったパール・バックであるが、次に発言した関露はパール・バックやその作品には一切触れずに、フランスの「ロマン的な才能と天才的な表現に満ちた」[414]ジョージ・サンドとソ連の「最もよく母性愛を表現している」[415]サブリナ（詳細不詳）の名を挙げている。そして、最後の潘柳黛は、自分は英語の本は直接読めないが、パール・バックの『大地』とダンサーのイサドラ・ダンカンの自伝『魂の燃ゆるままに』はともに「迫力ある著作」[416]だと語った。

「好きな外国人女性作家」という話題に、張愛玲、汪麗玲、関露、潘柳黛の四人が回答しているが、汪麗玲と潘柳黛の二人がパール・バックの『大地』を挙げたことは注目に値する。

２、パール・バック及び『大地』の評価について

『大地』はパール・バックの長編小説の一つであり、中国北方の農村を舞台に、主人公の王龍が富を得ていく物語である。彼はもとは貧しい農民であったが、富豪から多くの金銀財宝を奪い、大地主となった。小説ではまた阿蘭、梨花の二人の女性を中心に、中国農村女性の悲惨な運命を描いている。

英語で書かれたこの小説は、1931 年にアメリカで出版されるとベストセラーになり、翌年にはアメリカ最高の文学賞ピュリッツァー賞を獲得し、さらに 1938 年には『大地』、続編の『息子たち』（1932 年）、『分裂せる家』（1935 年）三部作でノーベル文学賞を受賞した。この頃、「抗日戦争が勃発したばかりで、非常に弱体化していた中国は日本ファシスト勢力に対抗する中流の柱となり」[417]、中国は全世界から注目を浴び始めた頃であった。一方のアメリカでは 1929 年 10 月、ニューヨークの株式大暴露を発端とした大恐慌が起こり、『大地』は「苛酷な苦しみをオプティマステイックに生き抜く人間への共感を喚起」[418]させる作品として読ま

[413]原文「描寫中國農村情形、雖然不完全確切、但是筆法的細膩精緻、當代的女作家裡我敢説是無出其右的了」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）
[414]原文「充滿了浪漫的才情和天才表現的」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）
[415]原文「一個最能表現母性愛的」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）
[416]原文「著作的魄力」（「女作家聚談」、『雑誌』、第 13 巻第 1 期、1944 年 4 月）
[417]原文「抗日戰爭剛剛爆發、極弱的中國成為抗擊日本法西斯勢力的中流砥柱」（熊玉鵬「賽珍珠與中國小説」、『文藝理論研究』、1991 年 5 期、華東師範大學出版）
[418]白水紀子（1991）「パール・バック『大地』の復活」、『ユリイカ』9 月号

れ、また日本では「運命を宿命論的に読む者が多かった」[419]といい、そのため、『大地』はアメリカや日本においてよく受け入れられた作品であった。

「パール・バックの『大地』の中国語訳は 32 年に『東方雑誌』に連載され、翌年に単行本が出版された後、中国の知識層の間でより大きな反響があり、その頃のパール・バックと作品に対する紹介文や論説は 50 本以上に上る。だが、アメリカや日本と異なり、中国ではパール・バック「大地」に対して「中国農村で生まれつつある新しい変化を描かずに、ことさら旧い中国を描き続けるバックの姿勢に疑問を投げかけたものが多」[420]かったという。

魯迅も読者の一人であったが、1933 年 11 月 11 日の『申報・自由談』に姚克「美国人心目中的中国」（アメリカ人の目から見た中国）が発表されると、魯迅はその四日後、15 日に姚克宛への手紙で「中国のことは、結局は中国人がやってみて初めて真相を見ることができるのです。ちょうどバック夫人（筆者注：パール・バック）のように、上海ではかつて大歓迎をし、彼女自身も中国を祖国のように見ていると言っていますが、しかし、彼女の作品を読むと、結局、中国で成長したアメリカの女性宣教師の立場でしかありません」[421]と書いている。1920 年から 1924 年にかけて魯迅は辛亥革命を背景に、農民を題材とした小説を発表した。そして農民に対して、魯迅は大きな同情を抱くとともに、圧迫と使役に甘んじる農民たちの「奴隷根性」に強烈な不満を抱いていた。彼は農民の深層心理を明らかにすることで、数千年の伝統文化に批判をしたのである。パール・バックにとって中国を愛する心持ちで書かれた『大地』は、魯迅から言えば、表面的に中国農村の情景を描写したものであり、そこに深い社会批判が無いと言うのであった。

当時左翼文芸理論家の胡風は『大地』について「中国農村の人情風俗については非常に詳しい」[422]と述べながらも、以下の欠点を総括している。一つは「作者は農村の生活、経済活動について理解していない」[423]、二つ目は「作者は客観的に現実の必然性に立って貧農の運命を把握できていない」[424]、「貧民にのしかかる伝統の

---

[419]白水紀子（1991）「パール・バック『大地』の復活」、『ユリイカ』9 月号
[420]白水紀子（1991）「パール・バック『大地』の復活」、『ユリイカ』9 月号
[421]魯迅、1933 年 11 月 15 日、姚克宛書信。引用は竹内実訳『魯迅全集』第 16 巻「書簡Ⅲ」（学習研究社、1986 年、189 頁）を使用した。
[422]原文「對於中國農村底人情風俗是相當熟悉的」（孟林（胡風）「大地」、『文学』五巻三号、1935 年 9 月）
[423]原文「作者對農村底生活經濟活動是非常模糊的」（孟林（胡風）「大地」、『文学』五巻三号、1935 年 9 月）
[424]原文「作者不能在客觀現實底必然性上把握住一個貧農底命運」（孟林（胡風）「大地」、『文学』五巻三号、1935 年 9 月）

重い負担を見ることができない。すべての悲劇を天災のせいにし、天災までもが一種の「奇遇」として処理されている」[425]、三つ目に「中国農村の血を吸い尽くした帝国主義については何も書かれていない」[426]、四つ目に「数十年来にわたり中華民族は解放を求めてあがいてきたが、ここではそれに対する真の理解が見えないだけではなく、それらの現象の反映すらも書かれていない」、「作者は中国の解放運動に対して、何も理解しておらず、同情もしていない」[427]と、社会分析や階級意識の欠如など、手厳しく批判がなされた[428]。しかし例外的に『大地』を高く評価した文学者もいた。例えば林語堂は「彼女の文学観に自身のそれと共通する部分を見出」[429]し、渡米後は彼女と親交を深めたのである。

英語の映画版『大地』（原題：The Good Earth）は当時のアメリカ映画会社 M.G.M（メトロ・ゴールドウィン・メーヤー）により、1937 年 1 月 29 日アメリカのロサンゼルスで公開され、中国では公式には 1999 年上映されたが、同時期の上海において見ることができたとも思われる。

一方、舞台版『大地』は 1943 年に、北京の脚本家黄宗江[430]、監督朱端鈞[431]、上海藝光劇団により蘭心劇院にて上演され注目を浴びた。ちょうど座談会（1944 年）が開かれたころである。舞台版『大地』は、当時上海で発行された各種の雑誌に取り上げられ、再び小説版、舞台版『大地』及びパール・バックに対する様々な議論が起こった。[432]座談会が開かれた時、上海の女性作家たちの間では、1930 年代のように『大地』に対する批判的な態度とは異なり、パール・バックを好きな女性作家と

---

[425]原文「在這裡我們看不到壓在貧民頭上的封建重擔、一切的悲劇都被還原到了天災上面、而且連天災都由一種『奇遇』跳過了」（孟林（胡風）「大地」、『文学』五巻三号、1935 年 9 月）

[426]原文「吸幹了中國農村底血液的帝國主義在這裡也完全沒有影子」（孟林（胡風）「大地」、『文学』五巻三号、1935 年 9 月）

[427]原文「幾十年來中華民族為了求解放的掙紮、在這裡不但沒看不到真正的理解、甚至連現象的反映都是沒有的」「作者對於中國解放運動實際上並沒有什麼理解和同情」（孟林（胡風）「大地」、『文学』五巻三号、1935 年 9 月）

[428]白水紀子（1991）「パール・バック『大地』の復活」、『ユリイカ』9 月号。白水によると、「大地」の時代背景は清末から辛亥革命までの 40 年間（1870 年～1911 年ころ）であるが、中国では「大地」が刊行された 1931 年より前の 40 年間（1890～1930）が描かれていると誤読され、的外れの批評が多数書かれたという。清末のころに共産党が指導する農民革命の兆しを見ることは不可能であり、「大地」に新しい農村が描かれていないと批判するのは間違っていたことになる。白水は、30 年代から 40 年代にかけての「大地」をめぐる論争からわかることは、当時の左翼作家たちの間に教条的なマルクス主義文学理論による批評が優勢を占めていたということだと指摘している。

[429]白水紀子（1991）「パール・バック『大地』の復活」、『ユリイカ』9 月号

[430]黄宗江（1921―2010）、浙江省瑞安の人、北京に生まれる。シナリオライター。十歳の時に、春秋童子のペンネームで『世界日報』にて発表。後、南開劇社等で活動。著名作に『雷雨』等がある。

[431]朱端鈞(1907―1978)、新劇監督。字は公呂、浙江余姚の人。 1921 年に上海南洋中学、1926 年にセントジョン大学に入学、翌年復旦大学外国文学部に転向。また、辛酉劇社に参加。共産党の組織である上海劇芸社の演出等を歴任。

[432]筆者は現在まで映画版『大地』に関する当時の評論資料は見ることができていない。

して挙げるようになっていた。これは、パール・バックの作品が当時の上海でよく受け入れられていたことを示している。

しかし関露は、このような有名な女性作家パール・バックとその作品『大地』について知らないはずはなかったが、この座談会でそれらに対して何もコメントしてない。実はこの四か月前に『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）で『大地』に関する批判的な評論をすでに書いていたからで、口を閉じていたのはこの日の座談会の主な論調とは異なるものだったからではないかと考えられる。

当時、上海における演劇『大地』及び原作に関し、以下の記事が発表された。

表６　演劇『大地』演出後の上海における報道

	題名	掲載雑誌	作者	出版社	掲載日時
①	「大地」在舞臺上	『新都週刊』	張守雷	新都周刊社	1943 年第 5 期
②	記「阿蘭」戴耘	『雑誌』	于良	雑誌社	1943 年 第 11 巻 第 2 期
③	「大地」観感	『太平』	若望	太平画刊社	1943 年 第 2 巻 第 7-8 期
④	「大地」	『太平洋週報』	無署名	中国文化服務社	1943 年 第 1 巻 第 62 期
⑤	「大地」小評	『中華週報』	人中徽	中華日報社	1943 年第 45 期
⑥	「大地」	『女聲』	蘭（関露）	女聲社	1943 年第 1 巻第 12 期

（「全国報刊索引」を基に筆者制作）

①張守雷「『大地』在舞臺上」[433]、②于良「記“阿蘭”戴耘」、③若望『大地』観感」は「中国千百年来の農民生活の歴史の縮図を見ることができる」、「農村の気配を嗅ぎ取ることができる。」[434]など小説、演劇共に当時の中国を非常によく表現できていると評価している。それに対して、④「大地」（『太平洋週報』）[435]では「仮に作者は農村に詳しくないと言うのであれば、この言葉は独断的であるといえる。「中国通」のパール・バックは中国人よりも中国を理解しているとでもいうのか？――『愛国者』が明らかな証拠だ。パール・バックの成功は彼女のずる賢さにある。言い方を変えれば、中国を謎の国だと考えている外国人に中国を面白おかしく売ったにすぎない。林語堂はこの仕組みが分かっており、これにより彼も世界

[433]『新都周刊』（1943 年 3 月創刊―1943 年 10 月経済的な理由により停刊）、上海の新都周刊社より発行された総合雑誌である。編集者は呉毅、李影彤、蒋槐青、陳若虹等。執筆者には呉春羲、吉星、潘景根、李賢影、周復、田心蓉、曾瑞、洪山道、天笑、林之寿、王麟君、董鎮貴、謝申天等。「新しい都市経済の建設、新しい都市生活の創造」を主旨に、政治経済、文化性格の各方面を掲載した。女性問題関連では、『女子応有之常識』、『男女合校問題』等がある。

[434]原文「（若望）總之、從這一劇中、不獨可以看到中國千百年來農民生活歴史的縮影、還可以感到最親切自然的人性、與及嗅出大量的泥土氣味。」「『大地』観感」『太平洋週報』

[435]『太平洋週報』（1942 年 1 月創刊-1944 年 3 月停刊）、方昌浩編集、中国文化服務社の発行。総合雑誌である。時評、文芸、随筆、映画評論等。

の文壇にのし上ったのであり、パール・バックとコンビを組んで多くの外国人の金を騙し取った」[436]とパール・バックと親密な関係にあった林語堂も一緒に厳しく批判している。

⑤人中徽「大地」小評（『中華週報』）は、「中国の農民に対する深い理解と体験が欠けている」、そのために演劇『大地』には「農村の気配は非常に少なく」[437]、「不必要な「面白味」を加えて（中略）脚本家は上海人の嗜好をシナリオの重点としている。これは完全に「商売人の眼」であり、文芸の二文字とは言えない」など、これも非常に厳しい評価を下している。

そして、最後に⑥蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）を見てみよう。「数年前に私は『大地』というこの名著を読んだ後、一つの思いがあった。なぜパール・バック女史は『大地』という小説を書いたのだろうか。なぜこの本がアメリカであのように流行したのだろうか。なぜ作者はこの創作によって「ノーベル賞」を受賞したのだろうか」[438]。関露はまず執筆動機に疑問を呈し、続けて原作に対して批判を加えている。「この本は技巧から内容まですべてレベルの高くない作品である。更に「レベルが高くない」という点から言えば、非常に平凡なものである」[439]。「なぜなら作者は中国について理解していないからだ…彼女の中国に対する認識と見解は、ただ立派で堂々とした背もたれのある椅子に座って、そこから植民地の文化を見ているだけだ。よって、彼女は中国の農村を書きたいと思ったけれども、しかし中国の農村について一度も理解したことがなかった。彼女は中国農民の本当の生活を理解しておらず、中国農民の意識も理解していない。そして農村経済の破綻も見ていない。彼女はただ好奇心から現実以外のひとつの偶然の現象を捉えて、自身がたまたま目にした、或いは人から聞いた事柄から一つの話を創作し

---

[436]原文「如果説作者不熟悉農村、這句話是太武斷的難道「中國通」式的賽珍珠會比中國人更了解中國？——「愛國者」就是一個明證。賽珍珠之所以成功、是在乎她的一點小聰明——換句話説、那些一向以為中國是個迷的國度的外國人賣中國嘘頭而已。林語堂懂得這個道理、因此他也靠此而登龍世界文壇、與賽珍珠一搭一檔、騙了許多外國「曲死」的冤枉錢。」（無署名「大地」、『太平洋週報』、中国文化服務社、1943 年第 1 巻 第 62 期）

[437]原文「對於中國農民都缺少深刻的了解與體驗。因此這個戯的演出很少泥土氣息。」（人中徽「大地」小評、『中華週報』、中華日報社、1943 年第 45 期）

[438]原文「在幾年前我看了『大地』這本名著以後、我就發生一個感覺、為什麽賽珍珠女士要寫『大地』這本小説、為什麽這本小説在美國會那樣流行、而且作者因為這本創作還得了「諾貝爾」奬金？」（蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）

[439]原文「這本書從技巧到内容上都是一本水準不高的作品。況且就從「水準不高」這一點上來講、還是極平凡的貨色。」（蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）

て…このような奇想天外な話を書いたのである」[440]と、作者が中国の農村の現実も農民の意識も全く理解しておらず、現実からかけ離れていることを批判している。

また、舞台化については、「改編し舞台へ持ち込むことは意義がないことではない。しかし、黄宗江の改編は少し物足りなさを感じる。彼は一部に増減を加えた以外に、私たちのいるこの新しいこの時代のものを少しも加えていないのである。（中略）パール・バックが原作の中に描いているのは民国十一、十二年（筆者注：1922～23 年）の農村であり[441]、それに彼女が知っている民国十一年以前の中国の農村に対する認識を加えたものである。古いものを私たち現代の観衆に見せるのはいい、例えば歴史劇と同じように。重要なことは、劇作者は現代の眼を用いることだ。（中略）しかし大部分はなかなかいい。総括すると『大地』はいい劇である」[442]と、総体的に舞台化を肯定しながらも、「現代の眼」で「私たちのいる新しいこの時代のもの」が加えられていないことに物足りなさを指摘している。関露が考える「新しい」ものとは、30 年代の左翼系批評家と同じように、農民の革命闘争の精神であると考えられる。

演劇の『大地』については肯定的な態度を示していた『女聲』であったが、原作『大地』に対しては上記の通りパール・バックが中国の農村を理解していなかったことを指摘し、中国農民の描き方に厳しい批判を加えている。

まず、一般的な農民の行動について「農民が買春をし、妾を求めるというのは中国ではあまり見られない。本当に純朴な農民にこのような考えと行動はあり得ない。――たまたまこのようなことがあったとしてもそれを一般的な農民の代表とすることはできない…」[443]と述べる。続けて阿蘭の描写に関しても「阿蘭は本当の農民女性であり、農民婦女も一般的な中国婦女と同じように圧迫され、人から苛めら

---

[440]原文「因為作者並不了解中國……她對中國的認識和看法只是坐在一張富麗堂皇的靠椅上去看殖民地的文化。因此她雖然想寫中國的農村但是對中國的農村並不曾理解、她不曾理解中國農民的真正生活、不理解中國的農民的意識、沒有看見農村經濟破産。她只是為了好奇心、抓住了現實以外的一個偶然現象、從自己偶然間看來、或是聽來的一些事件裏創出一個故事（中略）這樣一個異想天開的故事。」（蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）

[441]正しくは、清末から辛亥革命までの 40 年間（つまり 1870～1910）のことが描かれた作品である

[442]原文「我們把它改編、搬上舞臺、不是沒有意義的。但是黄宗江的改編似乎使人感到有一些不夠、他除開對於小節上加以增減而外、不曾加進一些接進我們這時代的新的東西進去。――因為賽珍珠的原作裏所描寫的是以民國十一二年時候的農村作背景、而加了她自己對於中國農村十一年以前的認識的。把陳舊的東西做給我們現在的觀衆看是可以的、比方編一個歷史戯一樣、但是有一個重要之點、作者要用現在的眼光。――不過在大體上是不錯的。」「總括起來「大地」是一個好戯」（蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）

[443]原文「一個種田的人會去嫖妓而討姨太太在我們中國到是少見的事。一個真正純樸的農民是不會有這樣的念頭和舉動――也許偶然有這樣的事、但不能代表一般的農民……」（蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）

れる苦痛を味わっていた。しかし彼女は肉体労働をする女性なので、（中略）彼女たちの多くは体格はがっしりとしており、性格は豪快で、声は響き、そして少し粗暴なところがあるはずだ。決して阿蘭のように身体が弱く、声の細い、貧しい家から幼いときに買われ育てられた女性のモデルではない。[444]彼女の描写は原作の小説の中ではすでに現実離れしている、映画の中ではさらに滑稽である」[445]と、中国の農民女性について、体格から声色からすべて現実とはかけ離れていると記している。

更に「私は『大地』があれらの資本主義国家、農民を見たことがないアメリカ人が見るのはいいと思う、少なくとも目新しいと感じるだろう。しかし私のように農村に行き、多くの農夫、農婦を見たことがある中国人からしてみれば、これは本当に受け入れがたい。」[446]と、再度パール・バック批判へと戻り、如何に農民を理解していないかを記している。

「特にこの本の作者は中国の女性を誤解している。一般の中国女性は従順であり保守的である。そして軟弱で屈服している。なぜなら伝統の礼教と関係があるからだ。しかし、これは一般的な中産階級に限られる。（中略）彼女たちは反抗する能力もなく、反抗の意識もない。だが農村女性はそうではない。彼女たちは健康な体力と労働の習慣があり（中略）貧困に安んじることはなく、虚栄心もなく、偽りの面子も必要がない。彼女たちは苦労に耐えることができる。これらの条件があるのに、家庭は彼女たちを無理やり従順にさせることができるだろうか。よって、パール・バックの目から生み出された阿蘭もまた一つの誤りなのである。」[447]

つまり、関露はパール・バックの農村や農民の描き方について階級論に基づいて批判を加え、革命の主体となる農民は、女性であっても体格はたくましく、反抗精

---

[444]阿蘭は女奴隷出身であり、主人から貧農の王龍に払い下げられた女性であり、小さいころに息子の嫁として買われたのではない。関露の勘違いである。

[445]原文「阿蘭是一個到地的農民婦女、農民婦女也跟一般的中國婦女一樣受著壓迫、挨著被人欺侮的苦痛。但是因為她們是體力勞動婦女、（中略）她們大半是體格高大、性格毫爽、聲音嘹亮而帶一點粗魯的、決不是像阿蘭那樣體格柔弱、聲音纖維的小家碧玉兼童養媳的模型。關於她的描寫在小説裏已脱離了現實、在電影裏更可笑。」（蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）

[446]原文「我以為「大地」只在那些資本國家、沒有見過農民的美國人看來是好的、至少是新奇的、而讓我這個到過鄉下、見過很多農夫農婦的中國人看起來簡直是不能領會。」（蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）

[447]原文「尤其是本書作者誤解了中國的女人的性格。一般的中國女性是訓服而保守的、軟弱而屈服的、因為傳統的禮教關系。然而這只是限於一般小康之家、（中略）她們既沒有反抗的能力、也沒有反抗的意識。至於農村婦女卻不是這樣、她們有強健的體力、勞動的習慣（中略）她們不貧安、不好虚榮、不要虚偽的體面、她們能吃苦耐勞、有了這些條件、家庭能勉強她們去訓服麽？因此在賽珍珠的眼珠裏産生出來的阿蘭又是一個錯誤。」（蘭（関露）「大地」『女聲』（1943 年第 1 巻第 12 期）

神があり、貧困に甘んじることなく屈服しないのが真の姿であり、文学はこれを正しく表現しなければならないと反論を加えたのである。

『女聲』では、それより二年前の 1942 年にも蘭(関露)「若草物語」（劇評）[448]においてパール・バックを批判していた。「『若草物語』の脚本について私は特に言いたくはない（中略）私の個人的な観点から言えば、私は少しもアメリカの作品が好きではない。特に女性作家の作品は――女性作家スメドレーと非常にアメリカ的な作風の黒人作家ラングストン・ヒューズを除いて――彼女らは生活についての見解は深くなく、作風も上品ではないと思う。例えばパール・バック女史はこうしたあまり優れない人物である」と、ここでもパール・バックについて否定的な見解を述べている。ちなみに、関露がここに挙げたスメドレー、ラングストン・ヒューズはともに左翼作家である。

以上、「女性作家座談会」で、司会者呉江楓の「外国人女性作家の作品は誰のものが好きですか」という質問に対して、汪麗玲、潘柳黛が『大地』だと答えているのに対して、関露が全くパール・バックや『大地』に触れなかったのは、このような背景があったのだった。まとめると以下のようになる。

１、座談会で好きな外国人女性作家を問われて、女性作家たちがパール・バックを挙げたのは、パール・バック作品の優れた描写に対してであった。このころ『大地』は舞台化されて話題になっており、劇評も賛否両論があった。

２、1930 年代、中国では『大地』に描かれた中国農村の真実性に疑いが持たれ、「旧い」という批判が多かった。特に代表的な左翼作家の胡風は「思想面」から強く批判していた。

３、関露は座談会でパール・バックについて一言も言及しなかったのは、座談会の四か月前と 2 年前に『女聲』に『大地』に関する批判的な評論をすでに書いていたからで、その内容は 30 年代の左翼作家の批評を継承するものであった。関露は革命の主体となるべき農民に大きな期待を抱き、農村女性も「体格はがっしりとしており、性格は豪快で、声は響き、そして少し粗暴なところがあり」、「貧困に安んじることなく、虚栄心もなく、偽りの面子も必要がない。彼女たちは苦労に耐える

[448]原文「關于小婦人的劇本我不想説什麽、（中略）在我個人的觀點上説、我一點也不喜歡美國作品、特別是女作家的――除開女作家史末得萊（Smedly）與帶著充分美國作風的黑人作家休士（Langston Hughes）――我以為他們對于生活的認識既不深刻、作風又不大方、比方賽珍珠女士就是這麽一位不大高明的人物。」　蘭(関露 筆者注)「小婦人」劇評、『女聲』第一巻七期、1942 年

ことができる」と、中国の農村女性の中に力強さを見出しており、それを文学に表現すべきだと考えていたことがわかった。

つまり、関露は『大地』の批評に際してもマルクス主義文学理論の影響を強く受けて、かなりイデオロギー的な解釈をする傾向があり、これは、すでに触れた女性解放をめぐる言説にも表れているように思われる。

5.5 「女性、家庭、婚姻などの問題」をめぐって

(1) 「蘇青・張愛玲対談記」

『新中国報』[449]主催の「女性、家庭、婚姻などの問題」と題された対談が 1945 年 2 月 27 日午後、張愛玲の自宅で行われた。対談者は蘇青と張愛玲の二人で、『雑誌』の記者が進行をつとめた。これは「蘇青、張愛玲対談記」として『雑誌』第 14 巻第 6 期（1945 年 3 月 10 日）に掲載され、その後この対談の内容は他雑誌へと波及し、大きな議論を呼んだ。ここでは、それら議論を考察することで、当時の上海における知識人たちの女性観をさぐってみたい。

『雑誌』の編集者は対談に入る前言において、「現在の上海文壇においてもっとも名高い女性作家が張愛玲、蘇青であることは疑いない……もっとも貴重なのは、彼女たちの文章は現在の知識女性の考え方、人生観を代表していることで、彼女たちの個人的な言葉の中に（あるいは、彼女たちはそれぞれの語りの中に）記者は女性問題に対する多くの独特な見解を聞くことができた。よって弊社は蘇、張二人の女性の対談の場を設け、現在の中国女性の家庭、婚姻等の問題を対談のテーマとした」[450]と述べ女性の問題に特化して座談会は進められた。

記者の「（女性は働くべきか）という質問に対して、蘇青は「女性は就業するべきか、或いは家庭に戻るべきかについては、一概に論じられない」[451]、「私が言う

---

[449]「『雑誌』は復刊の後、『新中国報』と強い結びつきがあった。『新中国報』は当時上海における四大日報の一つであり、もっとも広範囲の情報資源を有していた」（李相銀（2009）『上海淪陥時期文学期刊研究』、上海三聯書店、114 頁）とあり、この対談も主催は『新中国報』であるが、記事は『雑誌』に掲載されている。

[450]原文「當前上海文壇最負聲譽的女作家、無疑地是張愛玲和蘇青……尤其可貴的、似乎在她們兩位的文章裡、都代表當前中國知識婦女的一種看法、一種人生觀、就是在她們個人的談話中、記者也常可以聽到她們關於婦女問題的許多獨特的見解、因此記者特約蘇張兩位元女士舉行對談、以當前的婦女、家庭、婚姻諸問題為對談題材」（「蘇青、張愛玲対談記――関於婦女、家庭、婚姻諸問題」、『雑誌』、1945 年 3 月 10 日、第 14 巻第 6 期）

[451]原文「婦女應不應該就這或是回到家庭去、我不敢做一定論」（「蘇青、張愛玲対談記――関於婦女、家庭、婚姻諸問題」、『雑誌』、1945 年 3 月 10 日、第 14 巻第 6 期）

のは、「しなければならない」とは限らないが、確実に「する必要がある」ということだ」[452]と述べた。

1942 年以降、日本が上海を占領すると、蘇青の夫李欽後も仕事を失い、生活の困窮とともに夫婦関係も悪化していった。夫の浮気、また自身も肺結核を患い、離婚して蘇青は家庭の主婦から単身の母となった[453]。この時、蘇青は生存のために、社会環境に適応し、生きる手立てを謀る必要に迫られた。そこで、蘇青は文筆活動を生活の手段とし、職業女性となった。その経験から職業は女性が動乱の世の中で生きるために「必要」だと考えたのである。

張愛玲も「私は、現在女性の職業はするべきか、するべきでないかという問題ではないと思う。物価が高騰している現在、多くの男性たちは家庭を養うに足りる稼ぎができていない、女性が完全に家庭に入るというのは、事実上不可能なことである」[454]と述べ蘇青と張愛玲はともに女性の就業には反対はしておらず、しかも現在の社会では生活のために女性が働くことが必要だと考えている。

蘇青は職業女性の最大の問題は、「職業女性は外で仕事をする以外に家事をしなければならず、男性職員の仕事のように単純ではない」[455]と、職業女性は職業と家事の二重負担に向かい合わなければならないとした。そして具体的には、職業女性は「仕事の辛さはもちろんのこと、精神的にも苦痛である。職業女性は、毎日出かけて仕事をする以外にも、子どもの世話をし、おしめを洗い、石炭で竈に火を起こす等の家事をしなければならず、男性のように仕事に出かけて家事をすべて妻に任せるというわけにはいかない。よって職業女性はとても辛いものである」[456]と述べている。

職業女性の二重負担の問題について、蘇青は「家事は特に時間の無駄であり、（中略）多くの女性の時間や精神はここに浪費されてきた」[457]、よってその対策として「職業女性の家事を減少する方法を考えるべきだ。例えば育児の問題を解決するためには託児所を組織してもいいし、洗濯も例えば廉価でいい仕事をする洗濯屋

---

[452]原文「我講、雖不一定是「應該」、但已確實是「需要」」（「蘇青、張愛玲対談記――関於婦女、家庭、婚姻諸問題」、『雑誌』、1945 年 3 月 10 日、第 14 巻第 6 期）
[453]林秀青（2013）『孤島女作家蘇青的文學生命史』、國立成功大學修士論文、33 頁
[454]原文「我覺得現在、婦女職業不是應該不應該的問題了。生活程度漲的這樣高、多數男人都不能夠賺到足夠的錢養家、婦女要完全回到廚房裡去、事實上是不可能的」（「蘇青、張愛玲対談記――関於婦女、家庭、婚姻諸問題」、『雑誌』、1945 年 3 月 10 日、第 14 巻第 6 期）
[455]原文「是職業婦女除做事外還得兼顧家務、不像男職員的工作那末單純」
[456]原文「工作辛苦是一端、精神上也很痛苦。職業婦女、除了天天出去辦公外、還得兼作抱小孩洗尿巾生煤球爐子等家庭工作、不像男人般出去工作了、家裡事物都可以交給妻子、因此職業婦女太辛苦了」
[457]原文「家務工作尤其浪費時間……許多婦女的時間精神都浪費在這上面了」

があれば、どうして自分で手を動かして洗濯をする必要があるだろうか。同様に、炊事も必ずしも自分で手を動かす必要は無く、食事をするには公共の食堂に行けばそれでいいのではないか」[458]、また「もしも、商店もすべて値段が同じであれば、女性は行ったり来たりして商品を選んだり、至るところで値段の掛け合いをする必要が無くなる」[459]。こうした対策ができれば育児や家事の時間等を減らすことができると述べている。つまり、もし社会が共同託児所で育児を分担し、共同の食堂と統一した物価で女性の育児や家事の負担を軽減できるなら、女性の就業環境はずいぶんとよくなると述べている。

しかし現実社会では、他の文章に書いているように、「子どもを信頼して預けられる託児所がなく」[460]、「大きな上海で、私が知るところ、ただ女青年会がやっている二か所しかない。しかも、そこの業績は良いが受け入れ人数が少なすぎて、千万の児童」[461]は預けるところがないのだった。つまり、託児所、共同食堂、物価の統一も今はまだ実現できていないため、女性が働くにはあまりに環境が整っていないと述べている。

蘇青は、この対談「蘇青、張愛玲対談記」（『雑誌』第 14 巻第 6 期（1945 年 3 月 10 日発行））のあとすぐ、自身が編集長を務める『天地』第 18 期（1945 年 3 月発行）に「談婚姻及其他」（婚姻及びその他について語る）の一文を掲載し、『雑誌』での対談を補足している。補足の理由は「雑誌社は張愛玲と私を招待し、婦女の職業や婚姻等の問題について対談の場を設けてくれたが、実は私たちはすでに何度かそれについては話し合ったことがあった。あの日は記者もいたので、私は却って少しかしこまってしまった。帰宅の途中で、先ほどの対話を細かく吟味すると、まだ言い尽くせていないことがあると感じた」[462]からであった。

「私は女性の職業には反対しない、なぜならそれは時代の必然的な流れだからだ。経済が困難になり、思想が解放されて、誰が彼女たちを家に閉じ込めることができるだろうか。しかし残念なことに現在は過渡期であり、職業を持つ女性は二重

---

[458]原文「職業婦女的家庭工作應該設法減少、譬如解決管理孩子問題可以組織里弄托兒所、關於洗衣、如有價廉而工作好的洗衣店、那洗衣又何必自己動手呢？同樣的、燒飯也不必一定要自己動手、要吃飯、上公共食堂不就得了？」

[459]原文「假使商店都是化一價鈿的、女人就不必跑來跑去去撿、或是到處討價還價了」

[460]原文「小孩沒有好好的托兒所可托」（原載『浣錦集』天地出版社 1944 年 4 月初版）『蘇青散文精編』、浙江文藝出版社、218 頁

[461]原文「諾大的上海、據我所知、就只有女青年會辦的兩個、而且成績雖好、數額太少、成千上萬的兒童」蘇青「組織里弄托兒所」（同上）

[462]原文「雜誌社請張愛玲與我對談婦女職業與婚姻等問題、其實我們已幾次談過了、那天因爲有記者在座、在我反而有些拘束。在歸來的途上、我細細回味剛才説過的話、覺得意猶未盡、故有重加論述之必要。」（蘇青「談婚姻及其他」、『天地』第十八期、1945 年 3 月、15 頁）

の責任を負い、二重の苦しみに耐えている。」[463]と、女性が職に就くことは時代の流れとして当然であるが、女性の就労には様々な問題が伴うのだと再度強調しており、「女性は就業すべきか、それとも家庭に戻るべきか」というふうに二者択一的に考えたり、そのどちらに価値があるかを論じることに違和感を感じたのだろう、「談婚姻及其他」では以下のように様々な状況を想定して、女性の就業について考えている。

「①女性がもし仕事が必要であれば、その女性は先ず子育てという職業を選ぶ権利がある。②これでもまだ足りなければ、養育の妨げにならないという原則の下で、仕事を軽くするが、給料は減らさない。養育費は国家から給付されるべきであり、そうなれば男性に頼る必要がなくなる。③仮に女性が出産してから養育をしたくなければ、国家が人を雇い代わりに養育し、彼女は自由に他の仕事に従事できる。④仮に彼女が出産もしたくないというのであれば、男性と同じように能力の及ぶ限りどのような仕事でも行うべきである」（下線は筆者）[464]と、①育児が好きな女性は育児を職業として選択することができ、②もし育児に携わる女性が社会に出て働きたければ、減給せずに軽い仕事をすればよく、③もしも女性が育児という職を選択したくなければ、育児は国が負担し、④出産を望まない女性は社会で男性と同じように力の及ぶ仕事をすることができるとした。蘇青が女性の職業としてまず最初に①の専業主婦パターンを挙げているところは、彼女に性別役割分業意識が強いことを示しているが（当時ではむしろこのような意識が主流だったが）、主婦も職業の一つだととらえているところは新しい。また、家庭が第一の職業であると言っても、林語堂のように良妻賢母の思想に基づいているのではなく、蘇青は女性の現実から出発して女性と就労の問題を語ろうとしている。蘇青が林語堂と親しかったために、蘇青も良妻賢母を主張しているように見られがちだったが、これらの文章を読むと明らかに林語堂と蘇青の女性観は異なることがわかる。

蘇青は、他の文章「第十一等人 ―談男女平等」（十一等の人――男女平等について語る）[465]でも職業女性の悩みを書いている。「成功した者も当然いるが、それは

---

[463]原文「我並不反對女子職業、因爲那時必然的趨勢、經濟困難了、思想解放了、誰還能把她們關在家裏？可惜目前過度時代、職業婦女都負着雙重責任、忍受著雙重痛苦」（蘇青「談婚姻及其他」、『天地』第十八期、1945 年 3 月、16 頁）

[464]原文「女人假如需要工作、則她先有選擇以養男育女為職業之權。假如還不夠、則以不妨害她的養男育女為原則、工作輕便、報酬不減。養男育女的報酬應由國家付給、使其不必依賴於男人。假如此女人生了孩子而不願養育、則由國家僱人代養、讓她自由從事別的工作。假如她連生産也不願、則應該同男人一樣做其能力所及的任何工作。」（蘇青「談婚姻及其他」、『天地』第十八期、1945 年 3 月、16-17 頁）

[465]蘇青「第十一等人――談男女平等」（原載『浣錦集』、天地出版社、1944 年 4 月初版）『蘇青散文精編』、浙江文藝出版社、1995 年版

少数である。そしてこれら少数の成功者にも普遍的な現象がある。それは彼女たちが職業上成功した後で、婚姻や育児では失敗しているということだ。ここにおいて多くの人たちは、ノラたちはやはり家に帰ったほうがいいと勧めるようになり、ノラたちも味気ないと感じて、家に帰りたいと思うようになる」[466]。ここでいうノラたちとは家を出た職業女性を指す。つまり、たとえ少数の成功した職業女性がいるとはいえ、多くの職業女性はこの二重負担という圧力のもとで、仕事と家庭を両立させることができず、職業か家庭かの二者択一を迫られ、結局は家庭にもどっていくのだと述べている。

しかし、女性が家庭に入っても、その責任は軽いものではなく、夫から次のことを要求される。「第一に、新しい学問と旧い道徳を兼ね（ここでいう旧い道徳とは、当然婦徳等である）」、「第二に、内を管理でき、外に対してもうまくできる。内を管理するとは、洗濯、料理や子どもの面倒を見ることであり、外に対してとは宴席に赴き客にあいさつをし、社交ダンスを踊ることである」、「第三に、合えば残り、合わなければ去る」、「妻を追い出しても、たかだか数千元の養育費を払えば済むことだ。夫婦間の問題は法律で解決するのがもっとも難しい。まさか司法警察が無理に自分を部屋に押しこめようというのか」[467]。家庭に入った女性は良妻賢母なることを要求され、その努力をしたとしても安定した婚姻が保障されるわけではないのだった。

家庭女性の苦難について、蘇青はこの一年前にも『古今』に「戀愛結婚養孩子的職業化」（恋愛結婚と養育の職業化）[468]を書いていた。「結婚は女性にとっても最も良い職業であることは、林語堂氏がすでに詳しく述べている…しかし彼が言っているのは、恋愛と育児という二つの仕事を含んでいるようだ。この業務範囲はあまりに広すぎ、結婚を職業とする人にとってもとても辛いことであろう。目下一般的に工業では分業が進んでおり、分業ができればできるほど良いとされている。恋愛、結婚そして育児も同様である。恋愛は美感を重んじ、結婚は実質を重んじる…

---

[466]原文「成功的當然也有、但是只在少數。而且在這些少數的成功者當中、尚有一個普遍的現象、便是她們在職業上成功以後、對於婚姻同養育兒女方面卻失敗了。於是許多人都勸娜拉們還是回到家裡去吧、娜拉們自己也覺沒味、很想回到家裡來了」

[467]原文「第一、有新學問兼有舊道德（此地所謂舊道德、當然是指婦德之類而言）」、「第二、能管内又能對外。管内便是洗衣做菜抱孩子、對外便是赴宴拜客交際跳舞」、「第三、合則留不合則去」、「踢開一個妻子、横豎也不過是幾千元贍養費的事、夫妻之間最難法律解決、難道司法員警可以把自己硬押進房不成？」

[468]蘇青「戀愛結婚養孩子的職業化」（恋愛結婚と養育の職業化）、（原載『古今』第 16 期、1943 年 2 月）、『蘇青散文精編』、浙江文藝出版社、1995 年版、275―279 頁

結婚を職業とした人は、まずはどのように雇い主に替わって家庭や料理などの雑事を管理し、どのように病気の世話をし、客人の接待をするかを学ばなければならない。こうして雇い主に一つ一つ満足させることができれば、この一つの職業をもって老年までやっていくことができ、二度とその他各種の生活の闘争に参加する必要がなくなるはずだ」[469]と述べて、結婚を職業とするばあい、本来ならその仕事は家事だけのはずだが、実際にはさらに恋愛と育児の「仕事」も要求される。これでは女性の負担が大きすぎるので、分業にすべきではないかと述べ、特に三つ目の育児については、「これは非常に厳しく大きな仕事であり、個人の経営に帰することはできず、必ず国営企業のプロジェクトの中に入れなければならない」[470]、と職業女性だけでなく家庭女性にも育児の社会化の必要性を述べている。

だが現実には、育児の社会化は実現できないため、結局は女性の負担となり、結婚を職業とした場合、良妻賢母となって内と外を管理し（家事）、夫の歓心を得（恋愛）、さらに育児まで負担しなくてはならないと、家庭女性の苦難を述べている。

(2) 「蘇青、張愛玲対談記」に対する『女聲』の反駁

関露はこの『雑誌』の対談には参加していないが、その四か月後に『女聲』（第4巻第2期、1945年7月17日、関露が編集長を担当）に、小学校の教師周玉[471]が著した「也談婦女、家庭、婚姻」（こちらも女性、家庭、婚姻を語る）を掲載して、以下のように蘇青と張愛玲の観点に反論をしている。

「『雑誌』では女性、家庭、婚姻に関する問題について3回特集が組まれ、女性は男性に属するのだと言っている。特に「上海文壇で最も名高い女性作家」さえ「抑圧された快楽」が必要だと語っている。（中略）よって「経済及び職業の上で男性とあまりにも平等になること」を特にはありがたがらない。「上海文壇で最も

[469]原文「婚嫁是女子最好的職業、關於這點林語堂先生已詳細説明過了……不過他所説的、似乎包括兼戀愛及養孩子這兩種工作、其業務範圍未免太廣、以結婚為職業的人也就未免太苦了。目下一般工業都講究分工、愈分得開愈好、戀愛結婚養孩子亦然。戀愛是講究美感的、結婚是講究實際的……以結婚給職業的人、應該在事先學習如何替雇主管理家庭、料理瑣事、如何侍候疾病、接待賓客、這樣使雇主覺得事事愜意了、始可執一業以到老、從此不必再參加其他各種的生活鬥爭」蘇青「戀愛結婚養孩子的職業化」（恋愛結婚と養育の職業化）（原載『古今』第16期、1943年2月）『蘇青散文精編』、浙江文藝出版社、1995年版、278頁

[470]原文「最後、該説到養孩子這樁事了。這是頂艱巨的工作、不能歸私人經營、必須列入國營企業項下」（蘇青「戀愛結婚養孩子的職業化」、原載『古今』第16期、1943年2月）『蘇青散文精編』、浙江文藝出版社 、1995年版、 278頁

[471]周玉は当時の著名作家周瘦鵑の娘である。周瘦鵑(1894-1968)、男性、江蘇省蘇州の人。字は祖福。作家、翻訳家。代表作に『祖国之徽』、『南京之国』、『花花草草』等がある。

有名な女性作家」はなんと「現実的」で、なんと「謙虚が女性の本質」だとよく理解していることだろう」[472]と、蘇青が語った女性は「抑圧された快楽」を好むとか、張愛玲が語った「謙虚が女性の本質」だという言葉から二人が男尊女卑の思想を持っていると読み、だから経済や職業の上で男性と平等になることを望まないのだと皮肉っている。周玉は女性の経済、教育、政治選挙権について、「1910 年にドイツとアメリカで起こった女性の民衆運動に目を向けよう。また経済と教育の平等権を得るために、オーストラリアでは女性労働者八百万人余りが首都で女性参政権を要求しデモ行進をした。更に 1905 年にはイギリスでタカ派の激烈な行動によってようやく女性の選挙権が認められたのだ」[473]と国際的な女性運動を取り上げて、政治、教育、経済すべてにおいて男女平等を目指すのが正しい方向であると反駁した。

また、ほかの読者の書面による談話に対して、慶子は「女性はもとよりあまりにも多くのものを要求する。青春、金銭、地位、学問と思いつくものは全てほしがる。しかし、女性自身はいったい何を持っているのか」[474]と書いていたが、それに対して周玉は「男性が要求するものは永遠にあんなに多い。なぜ男性が欲しがるものを女性は欲しがってはいけないのか」、「なぜ男女の驕った虚栄心だけが黙認されるのか」[475]と女性に対する偏見に反駁している。

さらに周玉は蘇青が「女性の生理組織が男性と異なるために、女性の効果と力は、永遠に男性に劣っているかもしれないと疑念をいだき、それで再び「女性は台所に戻れ」を提唱している」[476]とみなし、それに対して、「もとより、人心の陰険さ、社会の蔑視、社会事業と託児所の組織がないことなどは、すべて現在の女性が自身の力で社会にでていけない理由を形成している。これは事実であり誰も否定することはできないが」[477]、しかし、「国外の学者は『女性の能力が男性に劣ると言

---

[472]原文「『雜誌』連載了三期特輯、在婦女、家庭、婚姻諸問題上面。女子是屬於男子的。 尤其像「上海文壇上最負盛譽的女作家」也需要「被屈抑的快樂」、原因是顧慮「陰陽互濟之道」、「無可奈何的補救辦法、還是找個把情人」、所以不希罕「在經濟及職業上與男人太平等了」。「上海文壇最負盛譽的女作家」是多麽「實際」、多麽瞭解「謙虛是女性的本質」。」（周玉「也談婦女、家庭、婚姻」『女聲』第 4 卷第 2 期、1945 年 7 月 17 日）

[473]原文「我們看看一九一〇年德美的婦女覺醒群眾運動、謀取經濟和教育的平等權、奥國女工八百萬餘眾在首都遊行示威要求女子參政、一九〇五年英國經過狂暴派的激烈行動才始承認婦女有選舉權。」

[474]原文「女人所要求的總是太多了、青春、金錢、地位、學問想得到的都要。但是女人自己能有些什麽呢？」

[475]原文「男人所要求的不是永遠那麽多？為什麽男人能想的女人就不能想？」「為什麽只有男女自傲的虛榮心被默認為許可呢？」

[476]原文「關於有人以為女子的生理組織異於男子、因此懷疑女子的效果和力量、永遠低於男子、所以複倡「回到廚房裡來吧」！」

[477]原文「固然、人心的險惡、社會的蔑視、社會事業和托兒所沒有組織、都形成現在的女子無法發展自己

うのは、往々にして経験に基づいて語っているのであり、現実に科学的には証明されていない…腕力が人より強くても、人類の知識と芸術を進歩させることができるとは限らない』と言っており」[478]、事実として、「ヨーロッパにおける戦争でも、ドイツ、ロシア、アメリカ諸国の女性たちは多くの偉業を成し遂げた」[479]と西洋の例を挙げて、「女性の力は小さくはない、そして家庭の雑事だけに適しているというのでもない」[480]とした。また、男女の区別の面からは、「世界では男性と女性の違いに基づいて、物事をそのようにはっきりと分ける事はない。才能あるものとして発展していけば間違いない」[481] と生理組織が男性と異なるにしても劣っていないと裏付けている。

蘇青と張愛玲に対してやや誤解があったとしても、周玉の「対談」への反論は国際的な成功の経験、先進的科学を根拠に、男女の生理の違いによって女性が男性よりも劣っているとみなすことに反対している。そして女性は家庭の雑事だけでなく、努力によってその才能を伸ばすことができるとして、欧米の女性運動を手本にした中国女性の社会進出を唱えている。この主張は関露の主張と類似しており、蘇青が一番述べたかった点、つまり女性の就業をはばむ様々な問題に関してはほとんど関心が示されていない。

(3) 『雑誌』特集――書面による談話（筆談）

1945 年 3 月 10 日、「蘇青、張愛玲対談記――婦女、家庭、婚姻などの問題」が『雑誌』に掲載されると、『雑誌』には読者からの多くの反響が寄せられた。そこで『雑誌』は 1945 年 4 月～5 月にかけて「關於婦女、家庭、婚姻諸問題」（女性、家庭、結婚などの問題）と題する三回の特集に組み、書面による談話を掲載した。特集の第一回目は『雑誌』から寄稿を依頼された人々の談話、二回目は読者の談話が載っており、この二つは『雑誌』の同じ 4 月号に掲載された。そして三回目も引き続き読者の談話が掲載された。

的力量到社會上去、這是是事實、誰也不能否認」

[478]原文「科學：國外學者所言「言女子的腦力遜於男子者、往往以其本身的經驗而言、然在切實之科學記載中則無此佐證」」（周玉「也談婦女、家庭、婚姻」『女聲』第 4 卷第 2 期、1945 年 7 月 17 日）

[479]原文「臂力過人者、亦未必能增進人類的知識和藝術」（周玉「也談婦女、家庭、婚姻」、『女聲』第 4 卷第 2 期、1945 年 7 月 17 日）

[480]原文「歐洲大戰中德、俄、美、諸國的女子又建下多少偉業。……女子的力量並不渺小、並不只適於家庭雑物。」（周玉「也談婦女、家庭、婚姻」、『女聲』第 4 卷第 2 期、1945 年 7 月 17 日）

[481]原文「天下的事沒有因為男子和女子的區別就把事情也劃分得那麽清楚了、憑著天才發展去、準沒有錯兒」（周玉「也談婦女、家庭、婚姻」、『女聲』第 4 卷第 2 期、1945 年 7 月 17 日）

この三回にわたる特集の作者と題名は次の通りである。

１）「女性、家庭、結婚などの問題」（『雑誌』1945 年 4 月第 15 巻第 1 期）：周越然[482]「孕」（妊娠）、司馬斌「甥姓篇 關於「被屈抑的快活」及其它」（「抑圧された快楽」及びその他について）、盛琴僊[483]「苦與樂」（苦しみと楽しみ）、宛青「失嫁與結婚」（嫁ぎ損ねと結婚）。

２）「女性、家庭、結婚などの問題特集二」（『雑誌』1945 年 4 月第 15 巻第 1 期）：羅沉「應該彼此諒解」（お互いに理解しあうべき）、箴姒「回到家庭裏來吧！」（家庭に戻りましょう）、依於仁「女大當嫁」（女性は成人したら必ず嫁がなければならない）、顧加工「依然是社會的人」（依然として社会の人）、何春「平等才有愛情」（平等であってこそ愛情がある）、梁質君「家庭婦女更不幸」（家庭の婦女はより不幸）、修竹「慎重其事」（そのことは慎重に）。この特集では他に「另一群人的意見」（別の人たちの意見）と題して南容、阿筠、費景須、亞聲、文洛、朱洗塵の短文が掲載されているが、感想程度のものなのでここでは省略する。

３）「女性、家庭、結婚などの問題特集三」（『雑誌』1945 年 5 月第 15 巻第 2 期）：慶子「女人也不是好東西」（女性もいいものではない）、丁芝「癡情與負心」（痴情と負心）、藍蘭談、王簡記「不佔男人的便宜」（男性のうまい汁を吸わない）、王淵「新的舊人」（新たな旧人）、洪洪「一個報告」（ある報告）、煙萍「交女友之難」（女友達と付き合う難しさ）

更にこれら『雑誌』の特集を読んで、伊林[484]は「婦女問題論争――談談「蘇青、張愛玲対談記」所引起的婦女、家庭、婚姻諸問題」（女性問題の論争――「蘇青、張愛玲の対談記」が引き起こした女性、家庭、婚姻などの問題）（『光化』、1945 年第 1 巻第 4 期）を発表した。

それらの文章のうち、対談の中で取り上げられた蘇青の職業女性の二重負担について、周越然[485]は「孕」（妊娠）（特集１）の中で，「彼女たちは祖母、妻となる

---

[482]周越然（1885－1962）、蔵書家、本名は周之彦、字は越然。別名は走火。南社社員。商務印書館函授学社副社長、兼英文科科長、著作に『英語模範読本』等。
[483]盛琴僊、映画関係の娯楽雑誌『西影』（1938 創刊-1945 停刊）の編集長。
[484]伊林はソビエトの作家ミハイル・イリーン（1895-1953）の中国語名であり。1929 年以降中国で広く普及していた『十萬個為什麼』（なぞの科学）の作者である。ここでは婦女問題に対する疑問を提示するためにこれをペンネームとして用いたのではないかと考えられる。
[485]周越然（1885－1962）、蔵書家、本名は周之彦、字は越然。別名は走火。南社社員。商務印書館函授学社副社長、兼英文科科長、著作に『英語模範読本』等。

べきであり、「家庭の主婦」になるべきであり、「職業女性」になるべきではない。彼女たちのもっとも重要な職業、最大の責任は子育てをすることであり、妊娠をすることである。」[486]と職業女性に正面から反対し、女性は家庭で子を産み育てることこそ最大の責任であるとした。その理由は、「女性に対して、私は嫁いで子供を孕めという。これは彼女たちの本業であり、彼女たちの副業は米を炊き、料理を作り、裁縫をすることだ。（中略）しかし、何があっても彼女たちは外で就業する必要はない。自分から苦労を求めるようなものだ。一人で内外の職を兼ねるなど、どうして耐えることができようか」[487]と女性は子供を産むことが本業で、家事は副業であるから、さらに外で仕事をするのは苦しむだけだとした。

羅沉「應該彼此諒解」（お互いに理解しあうべき）（特集 2）は、蘇青は職業女性の仕事の辛さについて、「毎日出かけて仕事をする以外にも、子どもの世話をし、おしめを洗い、石炭で竈に火を起こす…」と言うが、これらの家事をなぜ女性がすべてやるのだろうか。子どもは夫婦二人のものなのに、なぜ必ず女性が世話をしなければならないのか。食事は皆が食べるものなのに、なぜ男性は竈に火を起こし、野菜を炒めることができないのだろうか。問題は、皆が互いに理解しあい、共同作業をするべきということである」[488]と、性別役割分業に疑問を投げかけ、男女が共同で家事育児をやるべきだと述べている。女性の職業に関しては、「女性は職に就くことができる――そうするべきである。これは金を稼いで家計の足しにするという意味ではない。なぜなら女性も一人の人間であり、社会の人間であるのだから」[489]と女性が社会に属している以上、働くのは当然だとしている。

顧加工「依然是社會的人」（依然として社会の人）（特集 2）は、「結婚後女性が特にすべきことは夫とともに社会に出ることである。職のある人はそれを続け、職のない人は仕事を探すべきだ。（中略）家庭内の生活は極力簡単にし、陳腐な習俗と悪習は極力避け、無駄な時間を省いて社会のために働き、多くの社会活動に参加

---

[486]原文「他們應該做奶奶、做太太、他們應該做「家庭婦女」、不應該做「職業婦女」。他們最重要的職業、他們最大的責任、是生男育女--是孕。」（周越然、「孕」、『雑誌』、1945 年第 15 巻第 2 期、52 頁）

[487]原文「對于女子、我這樣説、嫁人、受孕！這是他們的正業、他們的副業是燒飯、製菜、縫衣（中略）但是無論如何、他們不必到外面去就職業、自討苦吃。一個人身兼内外兩職、那裏吃得住？」（周越然、「關於婦女、家庭、婚姻諸問題」、『雑誌』、1945 年第 15 巻第 2 期、55 頁）

[488]原文「就説職業婦女工作辛苦、「天天出外辦公、還得兼抱小孩洗尿布生煤球爐子」其實這些家庭工作為什麽全要女人做？孩子是兩個人的、為什麽就非得女人抱不可？飯是大家一道吃的、為什麽男人就不能去生生煤爐、炒炒小菜？問題是大家應該彼此諒解、合作」（羅沉「應該彼此諒解」、『雑誌』、1945 年 4 月号）

[489]原文「女人是可以去就職業的――並且也應該去。這並不是來貼補家用的意思、因爲女人也是一個人、也是社會上的一個人！」（羅沉「應該彼此諒解」、『雑誌』、1945 年 4 月号）

し、読まなければならない本や新聞を読むべきだ」[490]と職業は既婚女性にとっても必要で、職業女性の家庭負担については、生活の簡易化することで家事に費やす時間を節約し、社会での仕事に参加するように提案している。この見方は関露が「中国の女性の「従順の道」から「男性の苦悩」まで」（「中國的女人『從道』到『男人煩惱』」『女聲』第3巻第4期、1944年9月）で、「女性は社会と国家における一人の人民であり、彼女は「人」の立場から多くの人に貢献をすべきである。公民の立場に立って国家に貢献をするのである。そして家庭における物事は、ただ彼女が帰宅した時の一種の私生活における余暇の消化を示しているにすぎない」[491]と述べていたのと類似しており、家事、育児が職業女性の大きな負担になっていることに対してはあまり重視していない。

何春「平等才有愛情」（平等であってこそ愛情がある）（特集2）は、「私は蘇青、張愛玲の女性、家庭、婚姻に関する諸問題についての対談を読み、また最近では『天地』雑誌に掲載された（蘇青の：筆者補）「どのように生きていくか」」（如何活下去）[492]を読んだ…家庭と社会という泥濘の中でのたうちまわる女性の姿を見たような気がした。それは運命に随う女性と比べると、精神の苦痛は数倍以上である」[493]と感想を述べている。

洪洪「一個報告」（ある報告）（特集3）は、友人である探の体験を例に挙げて家庭の犠牲になった女性について述べている。探は優秀な研究者であったが、結婚したあと子供の養育に縛られ、若い時の理想を何も実現できずにいた。筆者の洪洪はそれを「女の身に生まれたのが不幸だった」[494]と記し、育児と仕事の二重の負担の下で、育児のために仕事を放棄せざるを得なかった友人を憐れんでいる。

---

[490]原文「婚後婦女特別應當的是同丈夫一同到社會裡去、有職業的、便應繼續就職、沒有職業的要找尋職業。（中略）家庭内的生活、應當盡力簡單化、腐俗與惡習、應當竭力免除、把不必浪費的時間節省下來、為社會做事。多多參加社會的生活、讀必須讀的書報」（顧加工「依然是社會的人」、『雑誌』、1945年4月号、68頁）

[491]原文「但是女人的主要生活和對於人們的任務並不限止於縫織和烹飪、女人是社會與國家的一個人民、她應該在「人」的立場對於許多人去服務。站在共鳴的立場去為她的國家服務。而對於家庭的事物只是在她回家的時候一種私生活上的消閒的表現」（関露「中國的女人『從道』到『男人煩惱』」、『女聲』第3巻第4期、1944年9月4頁）

[492]蘇青「如何生活下去」、『天地』第十七期「談天説地欄」、（1945年2月）。文中では、夫と離婚し自身も社会で働かなければならない蘇青の生活を背景に、生きるために直面した二つの脅威について記している。一つは戦争の生命に対する脅威であり、もう一つは離婚した職業女性であった蘇青が家庭と仕事の中で直面した巨大な経済的な困難であった。

[493]原文「我看了蘇張二女士對婦女、家庭、婚姻諸問題的對談、又看到最近『天地』上的「如何活下去」（中略）仿佛見到一個滚在家庭與社會的泥濘裡的女人的影子、較之隨了命運安排的婦女、其精神的痛苦是數倍以上的」（何春「平等才有愛情」、『雑誌』、1945年4月号）

[494]原文「不幸生為女兒身」（洪洪「一個報告」、『雑誌』、1945年5月号）

以上、蘇青が投げかけた職業女性や家庭婦人が抱える問題は広く人々の関心を呼び起こし、性別役割分業に基づいて育児や家事は女性の第一の職業であるとするもの、二重負担は耐えがたいので女性は育児や家庭に専念するのがよい、あるいは「家に帰る」しかないとするもの、反対に女性は男性と同じように社会の人として、結婚後も職業を持つべきだというもの、そのためには家事の簡素化、育児の社会化、男性の家事分担が必要だというものなど多様な意見が出された。

女性の職業と結婚、家庭の問題をめぐって、蘇青は「理念」ではなく、「現実」から出発して女性の幸福とは何かを探ろうとしていたが、関露（『女聲』）は「女性は社会参加すべきだ」とやや理念的にとらえており、これは当時の共産党地区延安と呼応した考えであることは前章でも述べた。関露の主張は正論ではあり、特にすでに迫られて働いている労働女性たちの問題に取り組んだことは高く評価すべきだが、一方でこのために、重い家庭責任を負わされ、良妻賢母の規範に縛られている女性たちが抱える問題への関心が軽視される傾向にあったことも否めない。その意味で、延安地区ですでに議論されなくなった女性の家庭領域における問題がこうして上海で議論されたことは、非常に意義のあることだと言える。

5.6　「詹周氏夫殺害事件」をめぐって

最後に当時の上海で大きな話題となった「詹周氏夫殺害事件」を取り上げ、上海の作家たちがこの事件の何に関心を向けたかをみていきたい。

詹周氏事件は家庭内暴力及び女性解放に関わる特殊な歴史事件であり、ごく普通の家庭主婦が夫を殺害した事件として、上海市を揺るがす大きな事件となった。また、半世紀以上が過ぎた現在でも詹周氏事件は注目され続け、小説化、ドラマ化されて、詹周氏の命運もそれぞれの時代で議論され見直されてきた。「詹周氏夫殺害事件」を題材とした作品には、台湾作家の李昂の小説『夫殺し』（殺夫）（1983年）、そしてこの小説をもとに映画化された『殺夫』（1984年）、更に2017年に香港の映画監督陳可辛による『醤園夫殺害事件』（醤園殺夫案）がインターネット上で配給され、同事件は現在でも注目を集めている。

「詹周氏夫殺害事件」は1945年3月20日午前6時、上海新昌路の自宅にて、詹周氏が夫の詹雲影をナイフで殺害し、その後四肢を16部分に切断して皮箱の中に隠した事件である。

容疑者詹周氏には一審で「詹周氏の殺人に対し死刑に処し、公権を剥奪し、終生包丁を没収する」[495]という判決が下された。また判決の主文[496]では、同事件について二方面から述べられた。一つはその事実関係である。「詹周氏、もとの姓は杜、幼くして父母をなくし孤児となり、周という人に引き取られ養育され、九年前に詹雲影の妻となった。詹雲影は仕事をせず、しばしば賭博場やダンスホールへと足を運んだ。周氏はたびたびそのことを諫めたが、彼は妻の言葉には耳を貸さず、浮気をし、経済的にも困窮した。数年は一日の如く、本年三月二十日午前三時、詹雲影が遠東飯店の賭博場より帰宅した際、周氏が家を売って屋台を開き商売を始めようと話したところ、詹雲影から激しく非難され、押し黙ったまま就寝した。午前六時頃、周氏は悪い夫に嫁いだことを思い、夜も眠れず、この世の我が身を嘆き、殺意が湧いてきて、詹雲影が寝ている間に寝室を離れ、包丁を取りに行き」[497]殺害に及んだ。

二つ目は判決理由である。「被告の自供によると夫殺しは積年の恨みから出たもので、死体をばらばらにしたのは痕跡を隠ぺいするためであった。そしてどのように殺害を実施したか（中略）供述に前後の矛盾は無く、犯罪の事実は非常に明確である。殺人と死体損壊の罪が成立し（中略）情理からも許すことはできず、しかも死体をばらばらにしたことは残忍極まりなく、ここに死刑に処する」[498]というものであった。

事件の前後関係は極めて明らかであり、詹周氏は単独犯で、その残忍な殺害方法から死刑がほぼ確定したのであった。

この残忍な事件は、当時の上海の各新聞で報道され、メディアや小規模の新聞が販売部数を伸ばすため、事件の内容に「さまざまな要素を加え」[499]たため、当時人々の間で大きな話題となった。蘇青は一審で死刑判決が下された後の事件の盛り上がりを背景に「為殺夫者辯」（夫殺しを弁護する）を『雑誌』に発表した。その中で「このような判決が出て『非常に痛快だ』という声を聞いた。当時、『裁

---

[495]原文「詹周氏殺人處死刑略奪公権終身菜刀一把没收」（蘇青「為殺夫者辯」、『雑誌』第 15 巻 3 期、1945 年 6 月 10 日掲載）
[496]蘇青「為殺夫者辯」記載の判決文より引用
[497]原文「詹周氏原姓杜、幼失怙恃、零丁孤苦、由周姓撫養成人、九年前嫁詹雲影為妻、雲影不事生産、常寄跡賭場舞館間、周氏每有所諫、輒置不理、室家之好、失於經濟之累者、數年如一日、本年三月二十日午夜三時、詹雲影自遠東飯店賭罷回家、周氏力陳變賣傢俱設攤營業、頗遭雲影非議、默然就寢、六時許、周氏以遇人不淑、夜不能寐、感慨身世、頓起殺機、於是乘雲影酣睡之際、離床啓屜、覓取菜刀」
[498]原文「被告供認殺夫出於洩憤、分屍冀圖滅跡、以及如何實施兇殺（中略）供證亦無二致、犯罪事實極臻明確、自應成立殺人及損壊屍體之罪（中略）情無可原、而分屍成塊、殘忍尤烈、應予論處死刑」
[499]原文「加醤油糖醋」

判所前には人々が押しかけ、傍聴席も満員』で、実に盛大であったというのだ！そして、その後は自然と落ち着きを取り戻し、大衆もニュースを耳にすることがなくなると、あとは注目しなくなり、ただ詹周氏の上訴が棄却されることを望んだ。皆はにぎやかに死刑場に行ってこのヒロインが銃殺刑或いは絞殺刑に処されることを見たいと思ったのであった」[500]、と述べて、事件発生当初、この事件をおもしろおかしく捉えていた人々を風刺した。そして、詹周氏が死刑判決を受けてから、人々の間にこの惨劇が発生した本当の原因を見直そうとする動きがもちあがり、徐々に多くの人々が詹周氏に対して同情と理解を示し始めると、蘇青もこの事件に積極的に介入して、「新聞では『非常に痛快だ』と述べているが、私の心は痛快ではない。不快であるだけでなく、非常に痛ましい」[501]と述べた。蘇青は詹周氏の弁護士が詹周氏に代わってすでに上告したことに対して「合理的な判決を得られることを望む、社会の人々も正面から聞いてみるべきだ」[502]と詹周氏に対する同情を表明し、また社会の「歪曲された」[503]世論を批判したのである。蘇青のこの詹周氏を弁護する文章は、広く反響を呼び、その一ヶ月後には『雑誌』（第 15 巻第 4 期、1945 年 7 月）で「夫殺害事件書面インタビュー」特集が組まれている。

その特集を見る前に、まず蘇青の「為殺夫者辯」を詳しく見てみよう。蘇青は夫殺害事件のどこにこれほどの関心をもったのだろうか。

「殺人の罪を自分の命で償う」[504]という死刑の観念は中世の復讐観から起こったが、「一般に学者は、犯罪の事実と犯罪者の環境には大きな関係がある」、「よってその性質と重さは人によって異なる」[505]と近代に至り新たな原則と発見があったと述べていた。つまり、「殺人の罪を自分の命で償う」というのは伝統的な観念であり、詹周氏事件は詹周氏の生活環境から分析するべきであり、殺人を犯したからといって必ずしも死刑に処するべきではないと述べている。蘇青は、判決文に書かれていた「積年の恨みから出たもので、死体をばらばらにしたのは痕跡を隠ぺいするため」[506]でという見解に異論をとなえ、詹周氏の婚姻後の生活状況、生い立ちや

---

[500]原文「據說這是「大快人心」的、當時「法院前人山人海、旁聽席滿坑滿谷」、真是猗歟盛哉！然後以後就不免絢爛歸於平淡了、大衆沒有什麽新聞可聽了、只好巴望詹周氏上訴再失敗、大家好閧著感到刑場去看女主角被槍斃或處絞刑」（蘇青「為殺夫者辯」、『雑誌』第 15 巻 3 期、1945 年 6 月 10 日掲載）
[501]原文「雖然報紙上說是「大快人心」的、但是我的心裡卻不快：不惟不快、而且覺得淒慘得很」
[502]原文「得到合理的判決、即社會人士也大可正一次試聽」
[503]原文「不正」
[504]原文「夫殺人償命」
[505]原文「一般學者、就認為犯罪事實、與犯罪者的環境大有關係」、「故其性質與分量、應該因人而施」
[506]原文「出於洩憤、分屍冀圖滅跡」

家庭環境、精神の状態等から、再度、夫殺しの原因と動機を見直す必要があると主張した。

１）幼少期の環境について、詹周氏は「私は幼いころに父母を亡くし、親戚を通じて養子に出され、後に養父によって詹雲影と婚約させられた。当時私はまだ十七歳であった」[507]と供述した。それに対して、蘇青は詹周氏が「幼くして頼るものを無くし、孤独で、良い教育を受けることができず、また家庭内での楽しみも享受できなかった」[508]と、貧しく、孤立無援で、教育を受けたこともなく、更には十七歳で婚約させられ、しかも「生活は悲惨であり、精神的にも苦痛であった」[509]ことも、後の思想に重大な影響を与えたとした。

蘇青は「私は女中或いは童養媳（筆者注：将来の息子の嫁にするために他家から引き取った幼い女の子）出身の人は、多くはひねくれている」[510]と思うと述べ、それは天性のものではなく、「長い年月に亘る屈辱と苦悶が、彼女の心をおかしくしたのであり」、「それが長期にわたると、邪悪の気となり、天をも驚かす事件を引き起こしたのだ。その結果、万人が血を流せば英雄となり、一人が血を流せば犯罪者とされた。事件を起こさないで、それらを芸術に託す者もいる。英雄や才子と犯罪者は軌を一にするものである。なぜなら彼らは皆感情の起伏が激しい性質だからだ」[511]と、女中や童養媳とされた女性が長期的に受けてきた苦悶と屈辱が、彼女たちの性格や精神を変化させたとした。このような環境の下では人々は何らかの方法でそれらを発散しなければならない。蘇青は詹周氏の生い立ちが「学がなく、職がなく、発展する機会がない」[512]環境によって作り上げられたものだと分析した。

２）結婚後の環境をみると、詹周氏は「結婚後二か月にはもう詹雲影が浮気をし（中略）仕事をせず、お金があれば、友だちと終日賭博や買春をし、家庭を顧みず、むやみと彼女を殴り、虐待した（以下略）」[513]と述べている。このような不自

---

[507]原文「我從小就沒有父母、由親戚做主、送給人家。後來那家主人就將我許配給詹雲影、當時我還秪十七歲」

[508]原文「幼失怙恃、零丁孤苦、既不能受良好教育、更無從享家庭樂趣」

[509]原文「生活既悲慘、精神自傷憂」

[510]原文「我總覺得一個做Y頭或童養出身的人、行為多乖戾」

[511]原文「乃由於經年累月的屈辱苦悶、已使她在心理上起了變態」、「久而久之、化為厲氣、必須作出驚天動地的事來。做出來的結果、使萬人流血、便是英雄；使一人流血、便是罪犯。也有不造成血案而寄情於藝術的、英雄、才子與罪犯如出一轍、因為他們都是帶神經質的呀！」（蘇青「為殺夫者辯」、『雑誌』第15巻3期、1945年6月10日掲載）

[512]原文「無學無職無機會以謀發展」（蘇青「為殺夫者辯」、『雑誌』第15巻3期、1945年6月10日掲載）

[513]原文「婚後二月、即發現詹雲影已有外遇（中略）不事生産、有了錢、與一般歹友為伍、終日嫖賭、不管家用、動輒亂打、肆意虐待（以下略）」

由で不幸な結婚生活について、蘇青は「詹雲影のような夫は本当に人でなし」[514]であり、詹周氏が結婚後に失望と苦痛の生活を送ったのはこんな夫がいたからだとした。

詹雲影が浮気をして子供を作ったことについては、蘇青は「情婦も一人の女中である。情婦の蘭喜からすれば、詹雲影と関係をもったために大家から家を追い出され、頼るところもなく自然と詹雲影の家に行くしかなかった。実際にはそこが彼女の家ではあったが。そして図らずも詹雲影は無慈悲にも、蘭喜を助けないばかりか、彼女を憎み、時には暴力を振るい」[515]、妊娠していた蘭喜を捨てた。「後に蘭喜は病院で男児を産んだので、詹周氏はその子を台所にいた隣家にあげ、蘭喜も他人に嫁がせた」[516]のである。詹雲影は誠実さのない悪辣な人間であり、それに比べて詹周氏は「同類を憐れむ心があり、夫の情婦に対しても助けの手を差し伸べ」[517]、「義狭心があり、心の広い、几帳面な性格の」[518]人物であった。蘇青は、詹周氏が夫の愛人だった蘭喜を「憐れ」んで手助けをしたからこそ、蘭喜は新しい生活を始めることができ、より悲惨な状況に陥らなくて済んだと分析している。蘭喜も詹雲影によって傷つけられた貧困階級の女性であり、同情せずにはいられなかったのである。

その後、詹周氏は詹雲影を手伝って生計を立て直したが、詹雲影は詹周氏を虐待し続け、彼女の婚姻生活は嘲笑され侮辱されて非常に苦しいものだった。幼いころから苦労をしてきた詹周氏にとって、この婚姻に最初は多くの希望を持ち、うまく蘭喜の件を処理し、夫を助け、家を建て直そうとした。ここからも詹周氏が冷静で聡明な女性であったことが分かる。しかし、詹雲影のような悪辣な人間に嫁いだために、夫の精神的肉体的に暴力に耐え続けねばならなかった。

詹周氏は夫の虐待や差別、抑圧の他に、生活のストレスにも直面しなければならなかった。生活がままならない状況で、詹周氏は女工として働こうとしたが、詹雲影は彼女の浮気を疑い、仕事をさせなかった。また彼女は隣家にも借金を試みたが、長期間にわたる借金により隣家から嘲笑され軽蔑されてしまった。このような生活であっても詹周氏は何度も夫をなだめ、「お金がなくても大丈夫です。お金が

---

[514]原文「像詹雲影般丈夫真不是人了」
[515]原文「姘婦也是一個Y頭、換做蘭喜、因與她丈夫發生關係而被東家驅逐出來、無依無靠、自然衹好找上她丈夫的家、事實上也就是她的家來。不料她丈夫心腸狠毒、對蘭喜不但不援助、反而厭惡她、時常加以毆打」
[516]原文「後來蘭喜在醫院裡生下一個男孩、就把他送給灶披間裡的鄰居、蘭喜也由她設法許配給人了」
[517]原文「帶著同病相憐心情、她慷慨地援助了情敵」
[518]原文「俠義的、大方的、處事井井有條」

あっても無くても私たちは夫婦ですから。今は運気が良くないときだから、悪い友人と一緒に遊ばないでください。中古販売の商売がだめなら、私たちは小さな商売をしてもいい。お金を五、六万元どこかから借りてきて、パイコー（排骨）と餅の屋台を開いてもいい。今後、道が開けてからまた他のことをしても遅くはない…」[519]と励ました。詹周氏は積極的で向上心があり、夫を愛する妻であり、どうにかして貧しい生活を変えようとしていた。しかしこのように向上心があっても、夫はそれに気づかず、詹周氏を罵り、「俺に金があれば、賭博へ行くさ」[520]と答えるばかりで、失望した詹周氏はついに夫の殺害に至ったのであった。

蘇青は詹周氏の幼少期と結婚後の生活環境を分析して、詹周氏は幼くして孤独であり、結婚の自由もない貧困層の女性であり、結婚後も夫に浮気をされ、身体と精神にも虐待を受け、婚姻生活は非常に不幸であった。しかも安定しない生活に耐え、また仕事をすることも許されず、夫に商売を勧めても聞き入れられなかった。詹周氏は向上心もあり夫を愛した妻であったが、このような不幸な生い立ちと結婚後の生活の現状を変えることができず、それらが彼女の苦痛、抑圧を作り上げた。そして、詹周氏が夫を殺害したのは、女性が極限まで抑圧をうけた結果「神経錯乱」をきたしたものであり、詹周氏自身はもともとは殺人という野蛮な暴力を振るう人間ではないとし、むしろ、蘇青は貧困女性が家庭で夫から受ける肉体的精神的暴力を問題視して、貧しい女性たちの家庭内における地位や抱える問題に関心を寄せている。

詹周氏の出生と婚姻以外にも、蘇青はこのような悲劇が起きた原因として以下の三点を挙げている。一つは社会的な原因であり、「社会の人々は、ただ劇が盛り上がった時に、同情や反感の気持ちを起こすことを知っているだけで、劇が進展することに注意し防ぐことは決してやろうとしない」[521]、と誰も彼女を助け励まさなかったことを指摘した。

二つ目には、詹周氏が古い考えにとらわれていたことである。「彼女は古い考え方の女性」[522]であり、「もし彼女を助ける人がいて、反抗する能力があれば、彼女は離婚に訴えることもできた。仮に、彼女の心が折れず、詹雲影の傍にいることを

---

[519]原文「沒有錢不要緊、有錢無錢還是夫妻。現在運道不好的時候、不要和一班壞朋友在一起玩、舊貨生意不好、我們可以做小生意、設法去借五六萬元錢擺一個排骨年糕攤、以後有了出路再改行也不遲……」
[520]原文「我有這些錢、還是去賭！」
[521]原文「社會上的人們就是只知道在戲劇高潮時發生同情或反感、而決不肯在劇情進展中予以注意或防範的」
[522]原文「她是個舊腦筋的女人」

甘んじながら他の活動ができれば、もしかしたらより良いことが見つかったかもしれない。しかし彼女は古い考えの女性」[523]だったのである。そのため怒りを覚えた時には「彼女には二つの道しかなく、それは自殺でなければ殺人であった」[524]。五四運動以来新思想が流入し、恋愛、結婚の自由、男女平等などの思想が広がり、女性は徐々に歴史の表舞台に登場し始めたが、新思想を受けたのは一部の中産階級の知識層に限られていた。そして、多くの女性、特に低層階級の貧困女性の生活に変化は無く、伝統的な観念が色濃く残っていたことがこの事件に反映されていると考えた。

そして第三に、「仮に彼女に子供がいたならば、私は彼女がこのような行動にでなかったと信じる」[525]。子供、特に男子を産めば家庭内における女性の地位も安定し、夫殺しをすることもなく、また子供を産むことが女性自身をを救済する方法であったかもしれないとした。つまり旧い観念の中で生きざるを得ないなら、女性は男児を産めば家庭内の地位は安定するのだと述べている。

蘇青は詹周氏事件に対して、詹周氏が幼児期だけでなく結婚後も経済的精神的貧困の中にあったこと、また彼女たちに社会が手を差し伸べて助言を与えたりしなかったこと、さらに彼女たち自身が古い結婚観に縛られていたために、反抗するすべを知らなかったことにも事件発生の原因があることを指摘している。

蘇青の詹周氏事件をめぐる発言は、社会のこの事件に対する注目を引き起こすとともに、社会の蘇青に対する世論も引き起こした。周作人は蘇青に対して「今、『雑誌』に掲載されたあなたの文章を読みました。甚だ同感です。この種の事件は現在ではタブーを犯すことにならざるを得ません」[526]と、蘇青が妻の夫殺しという社会通年では許されない事件を弁護したことに対して支持を表した。蘇青の社会の「タブーを犯した」弁護は、一方で強い非難を受けながらも社会の注目と共鳴を呼び、『雑誌』社が主催した詹周氏問題から女性問題の特集につながっていったのである。

---

[523]原文「假如她有援助的人、有些反抗能力、她可以訴請離婚。假如她不死心塌地、守著詹雲影、盡可以另外活動、也許可以找個更好的。然而她是個舊腦筋的女人」
[524]原文「她祇有二條路可走、不是自殺便是殺人！」
[525]原文「假如她有孩子、我相信她也不會如此做的」
[526]原文「目前讀『雑誌』中大文、甚感同意、此種一件在此刻恐不免甚犯忌諱」（王一心『海上花開――民國上海四才女之蘇青傳』、18 頁）

蘇青が『雑誌』に「為殺夫者辯」（夫殺しの者を弁護する）を発表した五日後に出版された『女聲』第4期第1巻（1945年6月15日）にも「生死的搏鬥」（生死をかけた戦い）と題して「詹周氏夫殺害事件」に関する文章が掲載された。

筆者は正之、ペンネームであると考えられる。この号は編集長であった佐藤俊子の追悼特集号であり、関露が『女聲』編集長を引き継いだ後の第1号である。また、蘇青の文章の五日後に出版されたことから、時間的に考えても『女聲』の記事は蘇青の文章を受けて書いたものではなく、偶然に同時期に発表したものだと考えられる。

正之「生死をかけた戦い」（生死的搏鬥）では、詹周氏と二房東（又貸しの大家）の供述及び『女聲』の本事件に対する見解が記されている。

詹周氏の自供によると、夫が中古品商売をしていた時は、「ある程度の収入があったが、私に生活費をくれないばかりか、いつも買春と賭博をしていた。しかも私は父母がいなかったので、私を見下していた。私は何度も彼に忠告した」[527]が、効果はなく、詹周氏が働きに出ようとすると詹雲影は彼女が情夫を探しに行くのではないかと疑い、仕事をさせなかった。詹周氏はまた屋台を開いて生計を立てようとしたが、それも夫に拒否された。生活に緊迫した詹周氏は離婚をすることもできず、「完全に、女性が重い圧迫の下で生を求めても得られず、死を求めても得られない状況の縮図だった」[528]。

「詹周氏は長期にわたり普通の生活を求めながらも人間以下の生活を送り」[529]、「彼女は一人の良妻賢母であり、死者の方は無責任で、まともな仕事もしない人間であった」[530]ため、彼らは婚姻生活の中で、既に夫婦としての意義を失い、生と死の闘いとなった。詹周氏はまともな人としての生活を送れずに自身が死んでしまうことを願わなかったし、我慢の限界に達したときに、生存の障害を取り除くために最後の手段をとった。これは純粋に圧迫された人間の本能であり、自発的であり、拒否することのできない自衛行動である、として抑圧されれば女性にも反抗する権利があるのだと述べている。

このように、『女聲』の「生死をかけた戦い」と蘇青の「為殺夫者辯」は共通して詹周氏が夫を殺害した原因を貧困女性が置かれた婚姻・家庭環境から分析してお

---

[527]原文「當時其所入雖豐、然非但不給我生活費用、而專事狂嫖濫賭、並以我無父母、故看不起我、而我曾屢次勸告」（正之「生死的搏鬥」『女聲』雑誌第4期第1巻、1945年6月15日発行）
[528]原文「完全表現了一幅婦女在重重壓迫下求生不得、求死不能的縮影」
[529]原文「詹周氏經歷了長期的委屈求全的非人生活、克盡了同居義務的妻子的責任」
[530]原文「她是一位賢妻良母、而死者却不負責任、不務正業的浪蕩子」

り、女性が男性の抑圧下に置かれたときの自己防衛の行動であったとして、第二審で刑が少しでも軽くなるように希望するものだった。

これら二つの文章が発表された一月後に『雑誌』（15 巻 4 期、1945 年 7 月 10 日）誌上で「詹周氏夫殺害事件書面インタビュー」特集が組まれた。そこには、男女二人ずつの書面インタビューが掲載された。男性の参加者は趙田孫、慶子、女性は沙莉、関露である。参加者の性別から見ても、雑誌社がこの事件に対して客観性の保持に努めていたことが分かる。

１）趙田孫「武大郎與詹雲影」（武大郎と詹雲影）は、蘇青が述べた「常に屈辱と抑圧を受けている人は永遠に心が残酷になる。それが長期にわたると、邪悪の気となり、天をも驚かす事件を発生させた」[531]という解釈は理解しがたく、蘇青の言うように長期的な抑圧により生じた「神経質」な病的な犯罪とは考えられないとした。

２）慶子「法理人情」（法理と人情）は、「このような残酷な犯人に対して、皆は絶対に許す余地はないと考え」、「また極刑に処すと論じないわけにもいかず、それをもって「痛快な気持ちになった」[532]という「世論」」に対して、作者の慶子は「みんなが落ち着いた後に、何人かの人は詹周氏という女性の出身があまりにも悲惨なものであると感じて、上告して死刑を免れることを希望した。この希望は刑法の上でも実現可能であり、刑の情状酌量は明文で加減することができる」[533]とし、犯罪の動機や目的、その時に受けた衝撃、或いは犯人の境遇や知識レベル等いくつか情状酌量の点があるとして、二審で減刑され死刑を免れることを希望した。

３）沙莉「我以為」（私が思うこと）は、「彼女が夫殺害の念を起こし、このような事件を起こしたのは、彼女が良好な教育を受けていなかったこと、過去の悲惨な生活や、夫からの虐待以外にも、目の前の生活に迫られたためであった」とした。[534]

また、「もしかしたらある人は、彼女は自分で生活を謀ればよく、なぜ夫に頼ったのか…というかもしれない…しかし、私たちは彼女が良好な教育を受けたことが

---

[531]惟有常受委屈與難堪的人才是永遠心懐狠毒的、久而久之、化為厲氣、才必須作出驚天動地的事來」趙田孫「武大郎與詹雲影」『雑誌』（十五卷四期、1945 年 7 月 10 日）

[532]原文「對於這樣一個血淋淋的兇手、大家都覺得絶無寛恕餘地」、「也不得不論處極刑、以「大快人心」」慶子「法理人情」『雑誌』（十五卷四期、1945 年 7 月 10 日）

[533]原文「大家冷靜下來、也就很有些人覺得詹周氏這女人的身世、也太淒涼了、希望上訴後能得到減刑處分、免其一死。這希望在刑法上是可能實現的、因刑之斟酌科及加減、律有明文」

[534]原文「以為她之所以會産生殺害親夫之念、和竟有這種行為發生、除了不曾受過良好的教育、過去遭過悲惨的生活、且又飽受丈夫虐待外、更是為目前的生活所促成。」沙莉「我以為」『雑誌』（十五卷四期、1945 年 7 月 10 日）

ない女性であり、一生の希望は夫にあったことを理解しなくてはならない。夫に対する絶望、そして生活の圧迫が、彼女を精神的におかしくし、遂には殺人の念が生まれた。よって、私はこの凶悪事件は生活に迫られたものだと思う。単純な夫婦間の感情の悪化ではない。厳しく言えば、これは社会全体の問題であり、この夫婦は現実生活の犠牲者であったといえる」[535]と、社会問題として捉えている。悲惨な生い立ちと結婚後の生活における女性に対する圧迫が、この事件を引き起こしたのであり、たとえどんなに悲惨でも結婚生活に頼るしかない女性の境遇に同情を示し、これは女性に経済的自立の道を与えず、教育の機会を与えなかった社会の責任であるとした。

また、殺人をしても自分の命を以て償う必要はないが、今回のケースは「少なくとも十数年は刑に服さなければならないだろう。だが、そのような値打ちがあるのだろうか。自分で彼に償うなんて」[536]と述べ、一つの逸話を紹介している。それによると、ある夫が北京へ試験を受けに行き、それに合格した後に、妻に手紙を出した。そこには彼が北京では世話をする者がいないので妾を取ったと書いてあった。妻は返信の中で、すると自分も一人の男の愛人になってしまったと記したという。この話は男女が感情の上でも平等であったことを記している。そして、詹周氏も夫に対して不満を持ちながら許してしまうべきではなかったし、「夫を殺さず、また夫を阻まず、更にはきっぱりと離婚をし自立すればよかった。彼のようにただ遊んでばかりで仕事もしなかったら、将来当然落ちぶれたであろう。彼に厳正な報いを受けさせれば爽快であっただろう」[537]とし、それができなかった詹周氏の夫殺害は「彼に得をさせ自分を困らせるだけのものだ」[538]として、詹周氏に同情を示している。

４）関露「詹周氏與潘金蓮」（詹周氏と潘金蓮）は、「詹周氏は凶暴な人間とは限らない。夫の殺害は確かに大きな罪であるが、その中にもどうしようもなかった事情がある」、「彼女が行ったのはまさに一種の生死をかけた闘争行為であった」[539]と指摘した。

---

[535]原文「也許有人會説大可以自己謀生、何苦仰靠丈夫……但是我們要體諒她是一個未受過良好教育的女子、一生所指望的就是丈夫、今對丈夫既絶望、且又受不了生活的壓榨、致使精神變態、遂生殺人之念、所以我認為這兇案乃是生活所促成、並非單純為了夫妻間情感的惡化、嚴重點説、未嘗不可説是整個社會的問題、換言之、這一對夫婦乃是現實生活下的犠牲者」

[536]原文「但最少也難免十數年的監禁、這是何苦呢？把自己去賠他？」

[537]原文「不殺害他、也不管他的阻擋、更爽脆的便是與他離婚、出外自食其力。他這樣的只顧玩樂不事生産、將來當然難免墮落、但時候讓他受些現世報、豈不快心？」

[538]原文「太便宜了他而難為了自己」

[539]原文「詹周氏這女人不一定是兄狠的人。殺死丈夫確是犯了大罪、然而其中也有不得已的冤情……可以

関露はまず、人々の間でよく知られている潘金蓮の前夫殺害事件を紹介し、「潘金蓮はなぜ夫の武大郎を殺害したのか。武大郎に殺されることを恐れたからだ。なぜ彼女は恐れたのか。なぜなら彼女は西門慶を愛したからだ。なぜ西門慶を愛したのか。なぜなら武大郎は人間らしくなく、彼女とは合わなかったからだ」[540]とし、潘金蓮が夫を殺害したのは、不幸な婚姻から抜け出して新しい愛情に生きようとした女性に対して、伝統的な婚姻制度の下では誰も彼女に理解と同情を示そうとしなかったからだとした。

また関露は「殺人犯の死」の法律意義について分析を加えた。「殺人者の死、とは正義と人権を保護することを根拠としており、正義を守るために殺人犯を処刑する。正義のためには、殺人がすべて犯罪というわけではない」[541]として、「正義のための殺人にはその罪を追究せず、自己防衛のための殺人には情状酌量の余地がある」[542]とした。このような理解の下に、関露は潘金蓮の夫殺害を「自己防衛の行為」とした。潘金蓮と西門慶の愛人関係は当時の婚姻制度に抵触したため、夫は妻に対してどんな手段を用いることも許されていた。潘金蓮は夫に殺害されるのを恐れて、先に夫を殺害した。これは自衛行為である。関露は、武大郎の弟の武松が潘金蓮を問い詰めた時に「ぜひ徹頭徹尾彼女の立場で考えて欲しかった」[543]と記している。

「詹周氏と潘金蓮の夫殺しは、事件性は異なっているが、いわれのない仕打ちを受けたという点では同じだ」[544]と、潘金蓮の事件を想起しながら詹周氏事件を分析して、以下の三点を挙げている。一つは、詹雲影を武大郎に比し、その妻の詹周氏の罪は潘金蓮よりも軽いとした。詹雲影は虐待をし、不貞を働き、「女性に無情で義のない男であり、社会にとっても無用の国民」[545]であり、婚姻、家庭そして国民としても詹雲影は失格者であるとした。二つ目に、旧思想の女性として、知識を持たなかった詹周氏が夫と離婚するという道を選ぶ能力を持っていなかったことに関

説她所幹的確是一種生死鬥爭的行為」関露「詹周氏與潘金蓮」『雑誌』(15 巻 4 期、1945 年 7 月 10 日)

[540]原文「潘金蓮為什麽要殺武大郎？因為怕武大郎殺她。為什麽怕武大郎殺她？因為她愛了西門慶。為什麽要愛西門慶？因為武大郎不像人、和她太不相配」関露「詹周氏與潘金蓮」『雑誌』(15 巻 4 期、1945 年 7 月 10 日)

[541]原文「「殺人者死」就是根據保護正義和人權來的。為了要保衛正義、所以要把殺人的人殺掉。也因為正義、殺人的並不全被認為是犯罪的」関露「詹周氏與潘金蓮」『雑誌』(15 巻 4 期、1945 年 7 月 10 日)

[542]原文「對於為正義的殺人不加追究、對於自衛的殺人按情究理」『雑誌』(15 巻 4 期、1945 年 7 月 10 日)

[543]原文「一定要從頭至尾替她思想一番」(関露「詹周氏與潘金蓮」『雑誌』(15 巻 4 期、1945 年 7 月 10 日)

[544]原文「詹周氏和潘金蓮的殺夫雖然案情不相同、但是冤屈都是一樣」

[545]原文「對女人是一個無情無義的男人、對社會是一個無功無用的國民。」

露は理解を示した。不幸な婚姻制度の下では、女性は生活に絶望したとき、ただ自殺しか道はなかったが、人間の生を求める本能によって、彼女は死にたくはなかった。ならば、「死の中に生を求め」るために「命を懸ける」しかなかったのである。そして、「私たちは、詹雲影を殺害したのは詹周氏ではなく、詹雲影が彼女にそうさせたのであり、現実生活が彼女に与えた黒闇と生きる道の上に立っていた「行き止まり」の看板がそうさせたのだと言うことができる」[546]と述べて、潘金蓮は伝統的な婚姻制度の下で生きるために夫を殺害し、詹周氏も同じく不幸な結婚制度の中で生きるために殺人を行ったのであるとした。三つ目に関露は、「法務官は殺人者の出身と人情を踏まえて多く議論するよう」希望し、また「悲惨な出身により殺人を犯した女性の死刑免除」[547]を希望した。

このように、書面インタビューの中では趙田孫「武大郎與詹雲影」を除き、三人の見解は蘇青のものとかなり近い。すると、この書面インタビューの目的は、事件に関する新たな解釈を求めたものというよりも、この事件を通して、もう一度女性の婚姻・家庭問題を考えようとしたようにも見える。

詹周氏事件は、日本占領時期の抑圧された時代に発生し、女性問題、社会問題として注目された。そして、蘇青と関露はともに女性の立場から詹周氏を弁護し、伝統的な婚姻制度の下で下層階級の女性がやむを得ず殺人を選ぶしかなかった現状を多方面から明らかにすることで、当時の上海の下層女性が抱える問題を広く社会に訴えたのだった。

5.7　小結

１、座談会の「好きな作家」という話題の中で、張愛玲や関露、潘柳黛は左翼作家の丁玲の名を挙げた。国民党の拘束から脱出して抗日を掲げる共産党地区の延安に華々しく姿をあらわした丁玲は当時は民族解放の女性闘士のイメージをもっていた。この座談会で彼女たちが丁玲の名を挙げたことは、暗に日本占領下の上海の文化状況に対する批判がこめられていたと考えられる。

２、「好きな外国人女性作家」を問われて、何人かがパール・バックを挙げたが、関露は不自然な形で話の流れを切った。その理由はパール・バックの中国農村

[546]原文「我們也可以説、殺死詹雲影的不是詹周氏、是詹雲影給她制造出來的、和現實生活給她的一片漆黑以及立在生活之道上的一塊「此路不通」的牌子」
[547]原文「執法官吏能夠在殺人者的身世和人情上多多加以探論」、希望「一個因身世淒苦而殺人的女人免於死刑」（関露「詹周氏與潘金蓮」『雑誌』（15 巻 4 期、1945 年 7 月 10 日）

女性の描き方に不満があったからだった。関露（『女聲』）は30年代の左翼作家の『大地』批評を継承する形で、階級論を用いて考察を加え、真の農村女性は体格もたくましく、反抗精神があり、貧困に甘んじることも、虚栄心もなく、屈服しないと反論を加え、民族解放の主体である農民が正しく描かれていないと批判したのである。こうしたやや教条的な批評態度は、女性解放をめぐる主張にも表れているのではないかと思わる。

３、「蘇青、張愛玲対談記」は、共産党地区延安で1943年以降顧みられなくなっていた女性の婚姻・家庭問題について、当時の上海でもっとも有名であった蘇青、張愛玲の間で行われた対談記事である。蘇青は良妻賢母を提唱した林語堂とは異なり、女性は結婚と育児という二重負担があったため、女性の負担を減らすために育児の社会化を提唱した。また、女性の職業について蘇青や張愛玲は「必ずするべき」とは限らないが「必要」であると考えていた。蘇青は家庭責任が軽減されない限り、二重負担は軽減されないと指摘し、女性の職業選択としてまず結婚を選ぶ権利があると主張した。その上で、結婚は恋愛、家事、育児という負担が増加するので、それを軽減するために育児の社会化は不可欠だと強く主張した。しかし、同時に現実には育児の社会化には困難があると、女性家庭における問題を提議したのであった。

『女聲』はこの「対談」に反論して、欧米の女性を例に挙げ、男女の間には性別による能力的な差はないことを指摘し、女性の社会進出を唱えた。

４、上海でセンセーショナルに報じられた「詹周氏夫殺害事件」は、抑圧された戦争という時代に発生し、女性問題、社会問題として注目された。そして、蘇青と関露の事件に対する分析の角度は異なっていたが、ともに女性の立場から詹周氏を弁護しており、伝説的な家庭生活下に置かれている下層階級の女性がやむを得ず殺人を選ぶしかなかったことを明らかにしていく中で、当時の上海の下層女性が抱える問題を広く社会に訴えたのだった。この事件に関する書面インタビューを通じて、それまでは女性の社会進出を主として訴えていた関露だが、こうして家庭における女性問題にも関心を寄せるようになっていたことがわかった。

第六章　結論

本研究では、1942 年から 1945 年まで日本占領時期の上海で刊行された中国語雑誌『女聲』を中心に、『女聲』が発信した女性解放思想の時代的特色を明らかにすると同時に、その周辺の雑誌や女性作家たちの動きも視野にいれて、当時の上海における女性をめぐる言説について多角的に検討を加えた。

本論の第二章「『女聲』創刊以前の佐藤俊子、関露の動き」では、まず佐藤俊子が1938年に渡中してから1942年に『女聲』が創刊されるまでの中国観を満州日日新聞に掲載された『支那趣味の魅力』を中心に読み取り、その変遷を辿った。

佐藤は中央公論社の特派員という身分で中国に渡りながらも、その執筆内容は、当時の日本政府が期待したような戦争の宣伝や士気を高めるというものではなく、女性問題や文化に注目するといった自身の思想立場を保ちながら、戦争勃発後の中国社会の現実を理解しようと試みていた。それは当時の日本政府が作家たちに期待していた戦争の宣揚とは大きなズレがあり、彼女は日本政府の期待をうまくかわし、戦争から焦点をずらしながら、自身が関心をもっていた女性問題に関する執筆を貫いたのである。そして中国人女性の間に何かの文化運動を起こしたいと言う佐藤の思いが『女聲』の発刊へとつながっていったのではないかと考えられた。

一方、共産党地下党員として1942年に女聲社に入社した関露は、詩作「太平洋上の歌声」（1936年）で文壇に登場した名の知られた作家でもあり、1940年の半自伝小説『新旧時代』では女性の自立の問題を扱い注目を集めていた。『女聲』の雑誌名については、女性問題に深い関心を持っていた関露が、女性解放運動を提唱していた劉王立明の『女聲』の名前を継承することを佐藤に提言した可能性があり、誌名からも『女聲』に込めた関露の思いを知ることができた。

第三章「『女聲』の体裁及びその中心思想について」では、誌面構成について分析を加えた。その結果、日本軍の出資でありながらも、その内容は日本の宣伝をほとんどせず、逆に大胆に帝国主義を風刺するような文章や中国共産党と通じる記事を掲載していたこと、また掲載記事を女性の問題に集中させずに、表面的にはバラエティに富んだ総合雑誌という戦略的な紙面構成をとることで、出資者である日本軍部とうまく折り合いをつけていたことを明らかにした。そして当時の女性をめぐる言説の大きな流れを整理し、『女聲』の主張の特色がどこにあるかを考察した。

第四章「『女聲』にみる女性解放の主張」では、『女聲』に掲載された記事の内容に分析を加え、『女聲』が主として女性の社会参加の側面から女性解放を主張していたことを明らかにした。ただし、『女聲』に掲載された「評論」や「読者の声」には、「女性は社会職業に従事し、経済的にも独立するべきである」、「女性は家庭でなく、社会の人である」という共産党地区の主張と呼応するものが多かったが、それと同時に、国民党統治区や日本統治区で主流であった良妻賢母主義を批判したものも掲載されていたことがわかった。また「文芸」欄では、そのほとんどが旧社会制度の下で起こった女性の悲劇を描くことを通して旧い風習・思想からの解放を求めたものだった。

第五章「日本占領時期（1941-1945）の上海における女性に関する多様な言説――関露、蘇青を中心に」では、『女聲』の「横のつながり」を検討することで、上海の女性をめぐる言説空間をより広くとらえようと試みた。そこで、当時の上海において女性の職業に関する議論では、単に女性が職業を持つことの可否だけではなく、すでに共産党地区延安では語られなくなっていた、女性の生産活動への参加にともなっておこる婚姻・家庭問題にまで関心が向けられており、このテーマをめぐって当時の上海ではかなり幅広く議論が行われていたことがわかった。

例えば座談会や書面による談話などで、女性の就労について議論した際、「女性は就労すべきかどうか」ではなく、「なぜ家庭領域から出られないのか」という問いを立てて、女性の就労を阻んでいるのが単に意識や意欲の問題ではないことを明らかにし、重い家庭責任を負わされ、良妻賢母の規範に縛られている女性たちの現実に目を向けることで、より深く女性の就労問題が議論されていることがわかった。また、今まで女性の社会進出の提唱一辺倒であったと考えられていた関露であるが、実際には下層の家庭の女性問題にも関心を寄せていたことがわかった。

以上、『女聲』に関しては、これまでは雑誌研究や出版研究の側面から論じられることが多かったが、本研究では『女聲』の女性解放にかかわる言説に重点を置き、その内容を明らかにすることを目的とした。

1930年代から40年代にかけての中国における女性をめぐる言説は、蒋介石の国民党地区では良妻賢母の主張が主流を占め、二度にわって「女は家に帰れ」論争が展開され、日本占領地区の北京でも同様に良妻賢母主義が強く宣伝されていた。

一方、延安の共産党統治区では、1943年に女性政策の方針を決めた『関於各抗日根拠地目前婦女工作方針的決定』（略称『四三年決定』）以降は、女性の生産活動

への参加が強調され、それまで議論されていた婚姻・家庭問題はほとんど触れられなくなっていた。

このような状況の中で、本研究で取り上げた日本占領時期の上海については、日本占領下で女性解放運動は不可能だという先入観から、ほとんど研究がなされてこなかった。また、『女聲』に関しては、日本資本で編集長が日本人だったために、その言説は日本色の濃いものであろうと言われたり、中国側の編集委員が共産党地下党員の関露であったために、その言説は共産党地区の延安の動きに呼応したものであろうとも考えられてきた。しかしながら、本研究で詳しく検討した結果、日本の宣伝に加担したものは極めて少なく、表面的にはバラエティに富んだ総合雑誌という戦略的な紙面構成をとることで、出資者である日本軍部とうまく折り合いをつけていたことが分かった。また女性解放運動については、確かに女性解放「運動」は難しかったものの、女性をめぐる言説空間は健在であり、『女聲』はその中心的存在であったことがわかった。その主張は共産党地区と同じように女性の経済的独立や生産活動への参加を重視するものが多数を占めていたが、さらに上海で活躍していた女性作家たちの議論に積極的に加わることで、共産党地区で軽視された女性の婚姻・家庭問題にも触れることができ、『女聲』が予想以上に幅広く女性の問題を議論していたことがわかった。

そして、本研究により日本占領下の上海における女性をめぐる言説を、基礎的な段階ではあるが、一定程度明らかにすることができ、中国女性史研究の空白を埋めることにも貢献できたと思われる。

参考文献

＜中華民国期の雑誌＞

関露（1939）「女作家印象記――女戦士丁玲」『上海婦女』

佐藤俊子（1941）「支那趣味的魅力」、『満州日日新聞』（日本語）

左俊芝、関露『女聲』（1942-1945）、女聲社

『雑誌』（1938.5-1939.7 1939.11-1941.4 1942.8-1945.8）、雑誌社

馮和儀『天地』（1943-1945）、上海天地出版社

＜日本語文献＞（あいうえお順）

会田綱雄（1972）「一つの回想」『現代詩手帖』15（10）、思潮社

秋山洋子など（1998）『中国の女性学　平等幻想の挑む』、頸草書房

秋山洋子、江上幸子、前山加奈子、田畑佐和子（2017）『丁玲探索』、人間出版社

東一夫（1992）『歴史を彩る中国の女性　近代化への脈動』、風響社

阿莉塔（2002）「周作人と与謝野晶子　―両者の貞操論をめぐって―」『九大日文』1号

江上幸子（1993）「抗戦期の辺区における中国共産党の女性運動とその方針転換―雑誌『中国婦女』を中心に」『中国の伝統社会と家族』、汲古書院

江上幸子（2003）「毛沢東の「新中国」における「人民・家庭・女性」―丁玲の「夜」再読」『ペンをとる女性たち』、翰林書房

江上幸子（2005）「中国の新良妻賢母思想と「モダンガール」―1930年代の「女は家に帰れ」論争から―」、『日本植民地支配と東アジア　―女性史・ジェンダー史の比較史的研究―』、平成14年度～16年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究報告書

岸陽子（2001）「日本占領下上海文学―――華文女性月刊誌『女声』をめぐって――」宇野重昭編集、『深まる侵略　屈折する抵抗　――一九三〇―四〇年代日・中のはざま』、研文出版

岸陽子（2004）『中国知識人の百年』、早稲田大学出版社

岸陽子（2005）「三つの『女聲』　戦時下上海に生きた女たちの軌跡」『俊子新論：今という時代の田村俊子』、至文堂

岸陽子（2007）「『女聲』創刊号に秘められたメッセージ」『植民地文化研究』植民地文化研究会６

黒澤亜里子、長谷川啓（2017）『田村俊子全集』第九巻、ゆまに書房
桑島由美子（1994）「『婦女雑誌』『民国日報・婦女評論』における沈雁冰(茅盾)の女性主義観(フェミニズム)」『言語文化論集』38、筑波大学
小平麻衣子（2014）「佐藤（田村）俊子「中支で私の観た部分（警備，治安，文化）」について」『研究紀要』第八十七号、日本大学文理学部人文科学研究所
呉佩珍（2002）「上海時代（一九四二――四五）の佐藤（田村）俊子と中国女性作家関露―中国語女性雑誌『女声』をめぐって」『比較文学』第 45 号、日本比較文学会
呉佩珍（2004）「太平洋を越える「新しい女」――田村（佐藤）俊子にみるジェンダー　人種　階級――」、筑波大学博士学位論文
桜庭ゆみ子（1996）「蘇青論序説『結婚十年』が書かれるまで」、東洋文化研究所紀要　東京大学東洋文化研究所　編
白水紀子（1991）「パール・バック『大地』の復活」『ユリイカ』9 月
白水紀子（1995）「『婦女雑誌』における新性道徳――エレン・ケイを中心に」『横浜国立大学人文紀要第二類』第 42 号
白水紀子（2001）『中国女性の 20 世紀　―近現代家父長制研究』、明石書店
白水紀子主編（2001）『中国現代文学珠玉選　女性作家選集』、二玄社
白水紀子（2003）「中国における「近代家族」の形成　―女性の国民化と二重役割の歴史―」『横浜国立大学人間科学部紀要 II（人文科学）』N.6
末次玲子（2009）『二〇世紀中国女性史』、青木書店
鈴木貞美、李政（2013）『上海一〇〇年』、勉誠出版
田村総（1990）『いきいき老青春』学習研究社
段毅琳（2017）「日本占領時期の「女聲」雑誌に見る女性観の研究 ： 普及活動の連携形態と課題」『常盤台人間文化論叢』3 号
張競（1991）「五四運動前後の中国における西洋文化の受容と日本　―与謝野晶子の「貞操論」をめぐってー」、『比較文学研究』第 60 号、恒文社
中国女性史研究会編（1984）『中国女性解放の先駆者たち』、日中出版
中国女性史研究会編（2004）『中国女性の一〇〇年』、青木書店
西槇偉（1993）「一九二〇年代中国における新性道徳論――『婦女雑誌』を中心に」『比較文学研究』第 64 号、東大文学会

羽田朝子（2006）「『婦女雑誌』の研究史をふりかえって-「『婦女雑誌』にみる近代中国女性」の意義-」『人間文化研究科年報』21 号、奈良女子大学

藤井敦子（2004）「日中戦争期延安における「婦女問題」：雑誌『中国婦女』を中心として」『史学』73 号、慶應義塾大学

藤井敦子（2006）「日中戦争延安における女性言説：雑誌『中国婦女』を中心に」『芸文研究』90 号、慶応義塾大学文学会

吉屋信子（1962）「上海から帰らぬ人　田村俊子と私」『自伝的女流文壇史』中央公論社

堀井弘一郎、木田隆文（2017）『戦時上海グレーゾーン溶融する「抵抗」と「協力」』、勉誠出版

前山加奈子（1990）「雑誌『女聲』と関露――フェミニズム的現地による再評価」『中国女性史研究』（3）中国女性史研究会

前山加奈子（1993）「林語堂と「婦女回家」論争――一九三〇年代に於ける女性論」『中国の伝統社会と家族』、汲古書院

前山加奈子、Wang Mi（1999）「日中両国間の女性論の伝播と受容--『婦女評論』における堺利彦〔付 『婦女評論』目録-期号順・欄名順・著者順〕」『中国女性史研究』 9 号

丸岡秀子（1977）『田村俊子とわたし』、ドスメ出版

宮入いずみ（1998）「蘇青論のための基礎的研究ノート（その１）」、『人文学報』1998-03、179-191、東京都立大学人文学部

村田雄二郎編（2005）『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』、研文出版社

山崎眞紀子著、周珊珊（訳）（2015）「田村（佐藤）俊子における『女声』――信箱「余声」を中心に（上）」『札幌大学総合研究』7 号

山崎眞紀子著、周珊珊（訳）（2016）「田村（佐藤）俊子における『女声』――信箱「余声」を中心に（下）」『札幌大学総合研究』8 号

山崎眞紀子（2016）「田村俊子から左俊芝へ―『女声』における信箱から見えてくるもの」日本上海史研究会、中日文化協会研究会主催、2016 年 5 月 7 日発表

山崎眞紀子、周珊珊（訳）（2017）「田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における信箱――「私たち」に声のゆくえ」、堀井弘一郎、木田隆文（2017）『戦時上海グレーゾーン』、勉誠出版

山本秀也（2015）「関露伝（上）」『世界』866 号、岩波書店

山本秀也（2015）「関露伝（下）」『世界』867 号、岩波書店
与謝野晶子（1911）『一隅より』、金尾文淵堂版出版
頼怡真（2012）「中国雑誌『女声』文芸欄をめぐって：宮沢賢治の「注文の多い料理店」を中心に」九州大学日本語文学会 20 号
頼怡真（2014）「中国雑誌『女声』文芸欄再論――上海で形成される宮沢賢治テクスト――」九州大学日本語文学会 24 号
渡辺澄子（1988）「田村俊子の『女声』について」『文学』56 号、岩波書店
渡辺澄子（1988）「資料紹介　佐藤（田村）俊子と『女声』」『昭和文学研究』第 17 集
渡辺澄子（1989）「資料紹介　続佐藤（田村）俊子と『女声』」『昭和文学研究』第 18 集
渡辺澄子（1998）『日本近代女性文学論　闇を拓く』、世界思想社
渡辺澄子（1989）「資料『女声』総目次」『大東文化大学紀要（人文科学）第二十七号』
（中国語版）
渡辺澄子　劉英順　訳（2004）「田村俊子主宰『女声』の総目次（翻訳）」（『国文目白』）（日本語版）
渡辺澄子（2005）『俊子新論：今という時代の田村俊子』、至文堂

＜中国語文献＞　発表年代順
蘇青（1945）『飲食男女』、天地出版社、使用テキストは 1997 年、上海書店出版社
蘇青（1948）『結婚十年 正續』、四海出版社
丁言昭（1989）『諜海才女』、北方婦女児童出版社
呂美頤、鄭永福（1990）『中国婦女運動』、河南人民出版社
呂芳上（1994）「抗戦時期的女権論辯」『近代中國婦女史研究』第２期
劉麗威（1995）「淺析近代中國 關於賢妻良母主義的爭論」『婦女研究論叢』５号
蘇青（1995）『蘇青散文精編』、浙江文芸出版社
中華全国婦女連合会編著、中国女性史研究会編訳（1995）『中国女性運動史　1919-49』、論創社
柯興（1999）『魂帰京都――関露傳』、群衆出版

呂美頤（2001）「抗日戦争時期華北淪陥区関于賢妻良母主義的論争」『殖民地時期女性史第二回研究会・報告原稿』東アジア近代女性史研究会 2001 年 3 月 13、14 日
劉麗威（2001）「関与賢妻良母主義的論争」『婦女研究論叢』第 3 期総第 40 期
丁言昭（2001）『関露啊関露』、人民文学出版社
歐陽和霞（2003）「回顧中國現代歴史上“婦女回家”的四次爭論」、『婦女研究』、2003 年第 5 期
夏榮（2004）「20 世界 30 年代中期關於“婦女回家”與“賢妻良母”的論爭」『華南師範大学学報（社会科学版）』第 6 期
塗曉華（2005）「上海淪陥時期『女聲』的歴史考察」『中國現代當代文學研究』第３号、中国現代文学館
呂美頤（2005）「關於近代中國“女國民”観念的歴史考察」，『日本植民地支配と東アジア　―女性史・ジェンダー史の比較史的研究―』、平成 14 年度～16 年度科学研究費補助金基盤研究（B）（1）研究報告書
李相銀（2006）「上海淪陥時期文学期刊研究」華東師範大学博士論文
（米）Edward M.Gunn 著　張泉訳（2006）『被冷落的繆斯　中国淪陥区文学史（1937-1945）』、新星出版社
虞萍（2006）「中国の良妻賢母論の諸相について―胡適の＜超良妻賢母＞論と冰心の＜新良妻賢母＞論を中心に」、『若手研究者研究成果報告論集：愛知大学 21 世紀 COE プログラム国際中国学研究センター』第１号 愛知大学国際中国学研究センター
劉軼（2007）「現代都市与日常生活的再発現　――1942 年～1945 年上海新市民小説研究」上海大学博士学位論文
韓春岫（2008）「蘇青与『天地』」、山東大学修士論文
鄭暁寧（2008）「上海四十年代知識女性的生存言説」、福建師範大学修士論文
李暁紅（2008）『女性的声音　民国時期上海知識女性与大衆伝媒』、学林出版社
鐘叔河編訂（2009）『周作人散文全集』、広西師範大学出版社
范輝（2009）「両種関照―周作人与蘇青女性観之比較」、『名作欣賞』14 号
李相銀（2009）『上海淪陥時期文学期刊研究』、上海三聯書店
［米］黄心村著、胡靜（訳）（2010）『亂世書寫　張愛玲與論陥時期上海文學通俗文化』、上海三聯書店

孟悦、戴錦華（2010）『浮出歴史地表—現代婦女文学研究』、中国人民大学出版社
石莎莎（2010）「蘇青の発現与再発現」、上海交通大学人文学院修士論文
楊佳嫻（2010）「太平洋戰爭時期 上海文學場域與女性寫作-從『天地』説起　1943-1945」『近代中國婦女史研究』第 18 期
徐暁丹（2011）「小天地中的大世界——上海淪陥時区『天地』研究」江西師範大学修士論文
範紅霞（2011）「20 世紀以來關於“婦女回家”的論爭」、『山西師大學報（社會科學版）』第 38 卷第 6 期
王一心（2011）『海上花開---民國上海四才女之蘇青傳』、安徽文藝出版社
［韓］申東順（2012）『在「説」与「不説」之間』、中国傳媒大学出版社
韓立群（2013）『現女性的精神歴程 从冰心到張愛玲』、中国人民大学出版社
林秀青（2013）『孤島女作家蘇青的文學生命史』、國立成功大學碩士在職專班論文
塗曉華（2013）『上海淪陥時期「女聲」雑誌研究』、中国傳媒大学出版社
徐靜波（2013）『近代日本文学人与上海（1923-1946）』、上海人民出版社
陳雁（2014）『性別与戦争　上海　1932～1945』、社会科学文献出版社
徐靜波（2015）「作家佐藤俊子的上海歳月」、復旦大学日本研究中心『日語学習與研究』第五期総 180 号
徐仲佳（2015）「西學與傳統之間的轉換 —周作人現代性愛思想探源」、『中國現代文論叢』第 1 期
張琰　劉軼（2016）「淪陥時期的『天地』雑誌与蘇青的人生悲劇」、『学海』2016 年 6 号
徐仲佳（2016）「西學與傳統之間的轉換——周作人現代性愛思想探源」、『中国現代、当代文学研究』1 月号
段毅琳（2019）「佐藤俊子的中国観」、『名作欣賞』（1 月号）掲載予定

附録

翻訳「蘇青、張愛玲対談記――女性、家庭、婚姻などの問題」

原題：「蘇青、張愛玲対談記――関於婦女、家庭、婚姻諸問題」

参加者：蘇青、張愛玲、『雑誌』記者

場所：張愛玲の自宅

日時：1945 年 2 月 27 日午後

掲載雑誌：『雑誌』第 14 巻第 6 期（1945 年 3 月 10 日）

（注：下線部は筆者）

女性の職業問題

記者：本日の対談テーマは範囲がとても広いです。まずは、女性の職業問題から始めたいと思います。蘇青女史はすでに家庭女性から職業女性となりました。また、蘇女史の文章にはしばしば職業女性はよく損をすると記しています。このように言うと、蘇女史はもしかして女性は家に帰れと主張しているのでしょうか？

蘇青：女性は就業するべきか、或いは家庭に戻るべきかについては、一概に論じられません。しかし現在の状況を見ると、職業女性は非常につらいものであり、家庭女性の快適さにはずっと及びません。私が嫁ぐ前、少女だった頃、いつも職業女性は神聖で、家庭にいるのは恥ずかしいことだと思っていました。そして、結婚してからも家にいることは辛いことであり、家庭での仕事は向上性のないことだと思っていました。今は数年間職業女性となり、今の職業は苦しいものとは言えませんが、総じてみると職業生活は家庭生活よりも更に苦しく、しかも現在の多くの職業女性は完全に自身を養うことができずにいます。家族は言うまでもなく、ただ家の生活費の補てんか小遣い程度になるくらいです。しかも外の世界の空気も変化しており（引き潮の時期といってもいい）、少しも神聖で尊重されていると感じられません。よって目下、私たちは職業女性が人に嫁いだというのは聞くが、嫁いだ女性が家庭を捨ててまで就職したという話は聞きません。これは職業女性の最大の悲哀です。

記者：職業女性の辛さというのは仕事の辛さですか？

職業女性の苦悶

蘇青：そうです。仕事の辛さはその一端であり、精神的にも苦痛です。職業女性は、毎日出かけて仕事をする以外にも、子どもを抱っこし、おしめを洗い、石炭で竈に火を起こす等の家事をしなければならず、男性のように仕事に出かけて家事をすべて妻に任せるというわけにはいきません。よって職業女性はとても辛いものです。更に、社会の人たちも職業女性に対しては、決して彼女たちが女性だからと言って許すことはありません。たとえば、女性が商売をしようとすれば、男性たちは様々な方法で彼女の金を稼ごうとし、彼女の利益を奪おうとする。考えるととても苦痛です。さらには家庭も顧みなければならず、確かにとても苦労があります。

張愛玲：しかし私は、社会の人たちの心は陰険で、もとよりこのようであると思います。また、それは真実です。たとえば、家庭の雰囲気が楽しく幸福で、比較的気持ちのいい小天地であったら、家庭は社会よりもいいといいます。これは少し現実逃避していると言えるのではないでしょうか。

蘇青：感情から言えば、家庭内で不愉快なことがあっても、それは大きな問題では無くすぐに回復します。しかし、社会で不愉快なことがあったら、心は非常に辛く、決して簡単には忘れることができません。

張愛玲：本当にその通りです。ある日、私は一人の女性が彼女の子どもを叩いているのを見ました。子どもが大声で泣くので、お母さんが「泣くな！」と言うと、子どもはしゃくり上げながらも徐々に静かになりました。母子の関係は、それが少しぎくしゃくしても、子供はゆっくりとさきほどの一幕を忘れ、「お母さん、お母さん」とあれこれ話し始め、先ほどの感情は水に流したようになります。肉親とは本当に他とは違うものです。

蘇青：どうしてかは知りませんが、家庭内で損をしたとしても、許すことができますが、社会で損をしたらそのことをずっと覚えています。

張愛玲：私はこのことだけを主張して、女性は社会に出るべきで家庭にいるべきではないと言っているのではありません。しかし私は、もしも社会の人々の心が険悪だからといって出て行けないというのでは、それは現実を受け入れていないことになると思います。

記者：あなたたちのいう「人の心が険悪」というのは、多分女性に関係した見方ですね。男性からしてみれば、彼らは必ず社会に出なければなりません。なぜなら

生活する必要があるからです。しかし女性は違います。彼女たちは家庭を隠れみのにすることができるからです。男性は家庭へと逃げ帰ることはできません。女性はまだ家庭に帰ることができますから、人の心があまりにも険悪だと感じるのです。実際には社会の人々の心が険悪だとえば、以前からそうであり、男性はすでにそれらに慣れてしまっています。職業女性が損をするのは、社会が女性を軽視してしるからだと考えられますが、女性もあまい汁を吸っているところがあります。……私が一つお聞きしたいのは、女性は就業をするべきかどうかについてです。

蘇青：私が思うに、必ずしも「しなければならない」というのではありませんが、確実に「する必要があります」。しかし、問題は、職業女性は外で仕事をする以外に家事をしなければならず、男性職員の仕事のように単純ではないということです。家事は特に時間を浪費します。私は三人の食事を作るのと一人の食事を作るのでは、仕事はそれほど変わらないと思います。しかし、各家庭がそれぞれ料理をすれば、多くの女性の時間と精神がここで浪費されることになります。だから私は職業女性の家事を減少する方法を考えるべきだと主張します。例えば子どもの管理問題を解決するためには託児所を組織してもいいし、洗濯も例えば廉価でいい仕事をする洗濯屋があれば、どうして自分で手を動かして洗濯をする必要があるのでしょうか。同様に、炊事も必ずしも自分で手を動かす必要は無く、食事をするには公共の食堂に行けばそれでいいのではないでしょうか。当然、たまには自分で料理をすることもありますがそれは嫌ではありません。私は家庭では無駄に浪費する時間が多すぎると思います。野菜市場で値段の掛け合いをしたり、満員電車に乗ったりと。もしも、商店もすべて値段が同じであれば、女性は行ったり来たりして商品を選んだり、至るところで値段の掛け合いをする必要が無くなり、それもすっきりします。

張愛玲：私は、現在女性が職業を持つべきか、持つべきでないかという問題ではないと思います。生活レベルがこのように高まっている今、多くの男性たちは家庭を養うに足る稼ぎがありません、女性が完全に家庭に入るというのは、事実上不可能なことで、多少なりとも副業をして、家にお金を入れる必要があります。

蘇青：私がいう職業女性の辛さは、総じてみると、第一に家庭も顧みなければならず、第二に子どもを預けられる託児所がないことです。そして第三に男性はあまり職業女性がすきではなく、化粧の上手い女性が好きだということです。職業女性は

終日苦労して働き、その結果往々にして夫は化粧に時間をかけている女性に奪われてしまいます。これは本当に不当な仕打ちです。

張愛玲：しかしあなたも私に話したことがありますが、しばしばある種のおばさんを見かけます。それは賢くなく、魅力もなく、化粧もしない人です。なぜなら自身の地位が安泰だと考え、努力して自分の夫を捕まえておく必要がないと思っているからです。このような女性と比べると、やはり社会にいる職業女性の方が可愛いものです。社会との関わりが多くなると、いつも服装と人との接し方に自然と注意を払い、ほかの事は言いませんが、ただ話のネタに限っても多く面白いです。

記者：職業女性も化粧に凝ることができますよ。

張愛玲：それはあまりにも大変です。家の管理、仕事、そして化粧。職業女性は同時に家の管理もします。だから、もしも彼女が比較的軽い仕事だけできて、稼ぎが男性より少なかったとしても、彼女を見下してはいけません。男女には同等の能力がなく、男女平等に希望はないといった話です。私が言う比較的軽い仕事の意味は、比較的時間が短く体力をあまり使わないものです。ある職業などはあまり苦労はありませんが、一日中そこにいなければなりません。そうすると家庭での仕事の邪魔になります。

蘇青：確かに。女性使用人の仕事時間は合理的ではありません。私の家の女性使用人は三年間一度も家に帰っておらず、夫婦の道もありません。そして彼女には私生活さえもありません。

記者：張さんの家の女性使用人はどうですか。

張愛玲：私たちの使用人は朝来て午後に帰ります。私たちは彼女に食事と住まいを提供していません。しかし彼女は買ってきたものをこの家で作ることができます。私は使用人が朝から晩まで目の前にいたり、食事のときにそばに立ってお椀を盛るというのが好きではありません。

蘇青：ある時、私は友人宅で食事をしました。食事を盛る使用人は子どもで、彼は私だけを直視しており、私は本当に気まずかったです。

張愛玲：特に残り物です。もし使用人に与えるなら、多く残すように注意しなければならず、食べていていい気分にはなりません。

夫の金銭を用いるのは一種の快楽

記者：今職業女性が稼いだお金は、小遣い程度のものを買うか、家に補てんするくらいしかないのですか？

張愛玲：そうです。今の状況では、ただそうするしかありません。

記者：一人の女性として、自分で稼いだお金を使うのが楽しいですか、それとも他人のお金を使うことが楽しいですか。

蘇青：それは言うまでもなく、他人のお金を使ったほうが楽しいです。

記者：なぜですか。

蘇青：母や息子が苦労して稼いだお金を使うのは楽しいとはいえません。しかし夫のお金を使うのは、当たり前のことだと思います。なぜなら私たちの多くは育児という仕事を担っているからです。よって、女性が就業するのは決して夫のお金を使うべきではないと言うのではなく、夫のお金が足りないか彼女のために使ってくれないかというときに、彼女は他の方法を考えるか、国家に対して保護を求めなければなりません。

張愛玲：他人のお金を使うのは、たとえ父母の遺産であっても、自分で稼いだお金のように自由に使うことはできません。自分で稼いだお金を使うことは気持ちの上でも非常に痛快です。しかし、夫のお金を使うのは、もし彼を愛しているのであれば、それは一種の快楽となります。自分は彼のお金で食事をし、彼のお金で買った服を身に着けたいと思います。それは女性の伝統的な権利であり、たとえ女性が職があったとしても、それを放棄することはできません。

蘇青：女性が職を持つことに、もう一ついいことがあります。それは離婚や夫を亡くした時に、子どもは保障があるということです。たとえば、私は子どもの時から父がおらず、母もまた職がありませんでした。よって生活は豊かではありませんでした。もしも、母が当時職業女性であったら、生活はずっと良かったと思います。

職業女性の感じる脅威―夫が他人に奪われる

記者：私がみるにあなたたちはいつも化粧ばかりしている女性たちが職業女性の脅威であると考えているようです。その実、将来的にはこの社会の空気も変わり、普通の人はみな職業女性を重視し、化粧ばかりしている女性は流行しなくなるかもしれません。

張愛玲：しかし男性の天性はいつもそう早く変化するわけではありません。

蘇青：私はある雑誌でこのような記事を見ました（当然それが信頼できるとは限らないが、総じてみると面白い風刺である）。モスクワのある会議で、女性の化粧の問題について討論がされたそうです。その結果女性は化粧することを主張せず、男性はこぞって化粧を歓迎したということです。また、ある時聞いたのは商店で化粧品が発売された時、店員が大声で、女性たちは自ら堕落しないようにと呼びかけましたが、女工たちは争って購入し、後に紅軍が出て来てようやく秩序を取り戻したとということです。

張愛玲：ある女性たちは愛を職業としています。

蘇青：彼女たちはプロです。普通の職業女性たちは彼女たちと争っても勝てません。

記者：「愛」を職業にした女性たちは少人数ですね。

張愛玲：少なくはありません。

蘇青：一般の女性が辛く苦しい仕事をしているときに、愛を職業にしている女性たちは容易に彼女たちの夫を横取りします。これは社会で働いている女性にとってはあまりにも損な話です。それから売春制度もなくなりません。男性は独身でも性生活を解決できますが、それは結果的に女性の結婚問題に影響しています。

張愛玲：家庭女性の中であるものはただ化粧だけを知っています。これは売春婦と何も変わりありません。

蘇青：売春婦は本当に甘い汁を吸う職業です。それは武力で他人が苦労して得た財産を奪うようなものです。

記者：どのようにすればこの制度を失くすことができますか。

蘇青：これはとても難しいです。

科学的な育児法

記者：蘇青女史はどこかの文章で、科学的な育児法と書いていたことがありますが、科学的な育児法とは何でしょうか。

蘇青：私は母が子どもを管理することには欠点がないということはないと思います。仮に、子どもが胃腸の病気で泣いているとき、母親は子どもに何か食べさせようとします。しかし、もし子どもを他人に預けたなら科学的な管理ができ、食事を与えることはありません。一般的な母親は常識がありません。つまり私が言いたい

のは、幼い時から彼女たちは私に豆酥糖を与えたため、今私の歯はとても悪いということです。もしも科学的な管理をしていたら、こうはならなかったでしょう。

記者：女性はしばしば、男性は頼りないと言いますが、あなたたちはどう思いますか。

蘇青：私はそのような偏見はありません。現在の社会ではすべてが頼りなく、ただ金銭と子どもだけが堅実だといえます。

抑圧された快楽

記者：蘇女史は男女がすべて完全に平等であるべきだと思いますか？

蘇青：仮に女性が職業や経済の上で男性とあまりにも平等であったら、彼女たちは抑圧された快楽を失ってしまうと思います。これは陰陽が互いに補う道を失うことになります。たとえば性心理を例にすれば、男性は勇敢であり、女性は軟弱です。これはより一層愉快であるといえます。もしも男女が同じように勇敢であったら、すべての面白みが無くなってしまいます。わたしはこのように思います。

もしも男性と一緒に出掛けて、支払いを私がするとすれば、私はそれを驕りに感じますが、同時に少し悲哀もあります。なぜなら保護される権利を失ったからです。これは女性自身に負けん気がないのではなく、男女の天然（生理的な）不平等からであり、女性にたいしては不平等を補足するべきです。、私にご馳走させるというのは女性としての悲哀です。仮に私に夫がいるならば、私は夫がしばしば人にご馳走することを期待します。

張愛玲：普通の人はいつも女性のレベルが高くなることを恐れます。レベルが上がれば女性は男性を見下すからです。しかし、実際にはそのような心配は必要がありません。もしも男女の知識程度が同じくらい高ければ（純正で清教徒式の知識ではなく）、女性は男性の前ではやはり謙虚でいるものです。なぜなら女性の本質は男性を崇拝することが快楽であり、男性は崇拝されることが快楽であるからです。

蘇青：仮に女性の程度があまりにも高くなり、男性が低くなったら、それもやはり女性の悲哀といえます。私は一人で女帝にはなりたくないし、もしも女帝になったとしても誰が私の配偶者となるのでしょうか。

張愛玲：二日ほど前に新聞でフィリピンのある島でのことを読みました。とても女性の権力が強く、すべてのことを女性が行い、男性は完全に養われ、怠け者で、

ただ闘鶏や賭博をしているだけというものでした。あのような女権を私は少しもうらやましいとは思わない。

蘇青：私はただ男女が同じことをしたら同じように尊重されるべきだと言いたいです。行った事柄の軽重を争う必要はありません。男性が海軍で軍艦を造営するからといって、女性タイピストより高貴だとは言えません。つまり子どもの世話をして家事を行う女性も同じように労力を出しているのです。しかしこれも保証がなければならず、法律で明文化されるべきです。男女の職業は異なっていますが、職業の地位は平等です。現在ある人は「家を管理することは職業」だと言っていますが、一般の職業は解任することができますが、女性の職業は一生のものです。もしも夫が途中で心変わりしたら、どうすればいいのでしょうか。

女性が最も恐れるのは「嫁ぎ損ねること」

記者：では再び婚姻問題に移りましょう。目下、上海の女性の結婚スタイルはどのようなものでしょうか。

蘇青：目下、結婚のスタイルは一律ではありません。新式もあれば、旧式もあり、半新半旧もあります。多くは紹介されて友人となりそれから婚約します。

記者：『雑誌』本号には「女性は年がいったら嫁がない」（女大不嫁）という文章があります。現在、女性が配偶者を選ぶことは難しくなっています。以前は女子中学生は大学生に、大学生は留学生に嫁ぎたいと考えていました。現在では戦争が発生し、留学生も無くなったため、女子大学生は恋人を探すのが難しくなりました。たとえば、商売人の家で大学を卒業した女性を娶るというのはあまり相応しいように思えないのです。

蘇青：十年前、革命の気配が濃厚であったとき、皆は総じて新式の妻を娶ることが良いと考えていました。しかし今は停滞の時期であり、旧式の妻を娶るほうが却ってよいと考えられるようになり、新式の女性はただ愛人にするだけとなりました。よって知識女性はより損をしています。

記者：仮にあなたに妹がいて、彼女に夫を探すとしたらどのような条件を出しますか？

蘇青：女性は「嫁ぐことができない」ことを最も恐ろしいと考えます。時期を逃して嫁げなければ生理的な変化の危機が発生するからです。知識が浅い女性は容易に嫁ぐことができるが、知識の高い女性はすぐに正式な配偶者を探すことはできま

せん。そこで、仕方のない時の取り繕いの方法として、これを言えば恐らく罵られるでしょうが、私はやはり愛人を探して取り繕うのがいいと思います。総じて人の正式な妾になるよりはいいと思います。夫は例え探せなくとも、適当に選んでしまうのではなく、無価値な一人（全て）を得るよりは、価値が半分あるいは三分の一でもあったほうがいいです。しかしこのようにすると、社会は私生児に対してその地位を認めなければなりません。こう言うとあまりにも男性にいい目を見させるように見えますが、しかし現在（現在だけだと希望するが）の実情からいえば、男性にも彼の困難があります。よって、習慣や人情からも彼の最初の妻（彼女が自立出来ず、再婚もできないと仮定して）を犠牲にすることはできません。しかし、知識女性は生活の能力があるので、わずかに他人の感情を占めるだけで、他人の生活の権利を奪うことはしません。自然に他人の生活を絶対に侵さないことがより良いことになります。しかし現代の男性の多くは早くに結婚し、職業女性は往々にして晩婚です。これは過渡期のしかたのない方法といえます。

（中略）

記者：現在の婚姻制度は合理的とは言えないのではないでしょうか。離婚も実質的にはとても困難ですし……

蘇青：離婚することは大した問題ではありません。しかし子どもに関して言えば、もっとも理想的なのは父親が金銭を負担し、母親が養育するというものです。仮に夫がお金を出さなければ、子供を連れて「拖油瓶」（再婚後の夫の家）に行けばいいです。范文正は再婚後の夫の家から出ました。彼の義父の姓は（筆者注：明朝皇帝の姓である）朱でしたが、後世、名前のことで彼を軽んじる人はいませんでした。義父は子どもとの接触も多くなく、実に彼らを嫌う理由もない……

張愛玲：半分、男性もメンツがあるからです。

蘇青：しかしだんだんとよくなっていくでしょう。私は子どもと母親の関係がより密接だと思います、それは男性を妨害するものではありません。しかし、継母が前妻の子を養うのはよくありません、なぜなら彼らはいつも接触があるからで、容易に矛盾が起こります。

張愛玲：離婚後の子どもも一般の人が想像するほど辛くはありません。

記者：一夫一妻制度は本当に合理的ですか？

蘇青：比較的合理的ですが、厳しく執行することはできません。その間には伸び縮みの余地があります。例えば、戦後はまた多妻が隆盛となると考えています（法

律的には認められていませんが、厳しく禁じられてもいません）。その原因は戦死者が多いというだけでなく、多くの男性が生きていても金銭的に妻を娶ることができなくなるからです。将来的に、生活能力のない女性は必ず人の妾となろうとし、生活力のある女性はただ非正式に他人に愛情を分けるしか道はなくなります（以下略）

記者：現在の社会では、早婚はとても流行していますが……

張愛玲：早婚に必ずしも反対はしません。状況をみる必要があります。ある女性はとくに長所もなく、年をとったからと言って彼女の才能や見識が上昇することはありません。しかも美しくもありません。しかし、若い時には彼女にも新鮮な可愛さがあります。よって、そのような女性はやはり早く嫁いだ方がいいです。なぜなら若いので、彼女は比較的多くの適応する機会があるからです。夫の生活についていき、発展することができます。男性の早婚は例外なくよくありません。若い人は容易に感情が衝動的になり、選択の目もありません。たとえその時にふたりが非常にお似合いであっても、男性はその後も発展し、女性はむしろ停滞するので、少しずつ距離が離れていきます。しかも若いうちに経済的に独立できる人はとても少ないです。早婚は嫁はかならず父母の援助を受けるため、依頼心が生まれ、将来の前途の障碍となります。

大家庭と小家庭

記者：家庭制度について二人は、小さな家庭制度がいいと思いますか、それとも旧式の大家族がいいと思いますか。

蘇青：小さな家庭も苦しく孤独です。私に言わせれば実家の両親と同居することが最も相応しいです。母と義理の息子は必ずいい関係になります。しかし、嫁と姑では姑は母親としてあまりにももの悲しくなるので、嫁に嫉妬をします。

張愛玲：この方法は本当にいいです。私は考えたことがありませんでした。

同居の問題

蘇青：それから夫婦の同居の義務について、私は自由な方がいいと思います。長期間にわたる同居生活は、実にとても恐ろしいものです。同居するかしないか、一方が必要を感じたとき、相手に要求できます。しかし法律の規定で義務付け強制的に行う必要はありません。外国人はベッドや寝室を分けるのが比較的いいとされて

います。しかしもっともいいのは友人のように、行き来をし、一人ひとりが結婚をしているからと言ってプライバシーが無いというほどでもないのがよいです。女性の再婚は初婚より難しいです。それはつまりかつての籠の中の生活を考えると恐ろしくなるからです。さらには社会の世論も男女の問題についてあまり興味を持つ必要はありません。夫婦が毎日同居、或いは毎晩同じベッドで寝るかどうかは彼らが自分たちで決めることです。なぜなら、別居は他人の妨げになることもなく、同居も他人に何かを与えるということにはならないからです。

記者：男女は結婚したほうが節約できますか、未婚の方が節約できるますか。

張愛玲：かつて英語で「Two can live as cheaply as one」という言葉がありました。つまり、以前、結婚すれば比較的に節約できると考えられていましたが、現在では違います。独身の生活は単純だと思われており、人が家に来た時に食事をしないで帰ってもおかしなことではありませんが、結婚した人は多くの断れない他人との交流があります。

誰が標準的な夫か

記者：女性から見て、標準的な夫はどのような条件がありますか。

蘇青：第一に本性が忠実であり、第二に学識や財産が女性より高く、一等高いとさらに理想的です。第三に体格が強壮であり、男性の気概があり、顔は憎たらしくも、小心者のようでもないといいです。第四に、生活には趣があり、つまらないことは言わないというものです。第五に、年齢は女性よりも五歳から十歳上が望ましいです。

張愛玲：しばしばどのような人に嫁ぐべきかという話を聞くが、嫁いだ後で、彼女の理想に合っていた、或いは理想と近かったということは一度もありません。しかし彼女たちは満足しているようです。だから私は決して多くの理論は必要ないと思う。蘇青が提出した条件は、気持ちにおいてはすべて理解でき、女性はだれでもそれに納得できるでしょう。ただ、私がずっと考えているのは、男性の年齢は十歳或いは十歳以上年上であるべきだと思います。女性はやや天真爛漫であり、夫は経験があるべきだと思うからです。

謝　　辞

この度、博士課程の論文審査を無事に通過となりましたことにつきまして、指導教員の白水紀子教授をはじめ、多くの御世話になった方々に対し、深く感謝の意を表します。

本研究において、研究活動全般にわたり御指導と御高配を賜りました横浜国立大学都市イノベーション学府、都市地域社会専攻の白水紀子教授に甚大なる謝意を表します。私が曲がりなりにも 4 年半で博士論文をまとめることができたのは、先生が常に研究者としてのやりがいと面白さを私に示してくださり、論文の執筆にあたっても、必要かつ十分な研究手法、そして研究資料などを御提示頂くことができたからでした。白水紀子研修室での経験を心の糧に、今後も研究者として社会、学校教育に貢献していく所存です。

貴重なご教示を賜りました横浜国立大学都市イノベーション学府・研究院の都市地域社会専攻の小宮正安教授、齊藤麻人教授、松本尚之教授、四方田（垂水）千恵教授（国際戦略推進機構所属）に心より感謝申し上げます。本論文の審査過程において、先生方の御助言により、論文の構造に関しても全般に改善することができ、本論文の完成度が高まりました。ありがとうございました。

学生生活においては、幸いにも多数の友人たちとの出会いに恵まれ、多くの刺激と笑いを分かち合うことができました。

研究活動費用においては、中国政府の国家留学基金委員会からの御支援を賜りましたこと、心より感謝しております。

最後になりましたが、博士課程に進学する機会を与えてくださり、ありとあらゆる場面でも私を暖かく見守り続けてくれている両親に深く感謝いたします。これから少しずつ時間をかけて恩返しをさせてください。

本研究の成果が皆々様のご期待に沿うものかどうか甚だ疑問ではありますが、ここに重ねて厚く謝意を表し、謝辞とさせて頂きます。